
『天と地』

堂神瞬一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『天と地』

【Nコード】

N6156D

【作者名】

堂神瞬一

【あらすじ】

人間世界に住む少年エルフの天満。だがある日、異世界『オルテナ』から一人のエルフが現れる。そのエルフとの出会いで、強い信念に突き動かされ異世界へと歩む。頼もしい仲間達とともに、人間界、異世界を守るために戦う。

第一劇 『初動』

母「今日は早く帰ってこれるの？」

天満「ごめん、今日も部活があるから…。」

母「そう…くれぐれも『アレ』には気を付けてね。」

天満「大丈夫だよ。俺は『アイツ』とは違うから…。じゃあ行ってくるね。」

母「…行つてらっしゃい。」

天満の語り「ここは、俺が住んでいる町『白咲町』だ。三歳の時に引越してきて、それからずっと住んでいる町だ。だけど…俺はあまり好きじゃない町なんだ。いや、どこに行っても、好きにはなれないだろう。『アイツ』がいる限り…。」

？「天くん！」

天満「ん…ああ…『真雪』か…おはよう。」

真雪「なあに？幼なじみに会ったのに、もっと元気に挨拶できないの？」

天満「ごめん…今日はちょっと…。」

真雪「も、もしかして…『あの人』が…？」

天満「ああ、気を抜けない日になりそうだよ…。」

真雪「…ねえ？」

天満「何？」

真雪「天くんのこと…『琴花』達に…。」

？「大変だっ！」

天満「な、なんだ？どうしたんだよ『剣斗』？」

剣斗「と、とにかく大変なんだよ！校舎が…！」

天満「校舎？」

真雪「校舎がどうかしたの？」

剣斗「とにかく、その目で確認してくれ！」

（走って学校に行く）

天満「はあはあはあ…！こ、これは…！」

真雪「何これ？どういことなの？木？」

剣斗「そうなんだよ！校舎と木が合体してんだよ！何が起こってんのか、サッパリ分からない！」

？「真雪！」

真雪「『琴花』！いたいどうしたの？」

琴花「分からないよ！朝練で学校に来たら、こうなってる。」

？「待っていたぞ…早く来い…お前達を待っていた…。」

天満「はっ！声が…どこから？」

琴花「どうかした？扇くん…？」

天満「今声がしなかったか？」

剣斗「そりゃさっきから先生が大声で生徒を鎮圧してるからなあ。」

天満「違う！もっと歳のとった、じいさんみたいな声が聞こえただろ？」

剣斗「何言ってるんだ？どこに歳のとったじいさんがいるんだよ？」

真雪「天くん…？」

天満「俺しか聞こえてない？だけど、お前達って言って……はっ！」

（天満は走って声のする方に行く）

真雪「天くん！どこに行くの！」

（真雪は追う）

剣斗「どうしたんだよアイツ……？」

琴花「さあ……？私達も行く？」

剣斗「しょうがねえな。」

（剣斗、琴花も後を追う）

天満「はあはあはあ……ど、どこだ……？」

？「こつちだ……早く来い……。」

天満「くそっ！」

（ふと、一軒の駄菓子屋に目がいく）

天満「こんなところに駄菓子屋なんてあったわけ？」

？「やあ……。」

天満「はっ！誰だっ！」

？「ふふ…私か？」

天満「その声…！」

？「そう、私が君達を呼んでいたのだよ。」

天満「じいさん…じゃないな…人間でもない…のか？ま、まさか…？」

？「そう…君と同じだよ。いや、正確には君と似た存在とも言っておこうか。私は純粹だからな。」

天満「エ…『エルフ』…！」

？「ふ…私は『天のエルフ』の『水鏡司郎』という。」

天満「母さんを…狩りに来たのか？」

水鏡「そうだとしたら？」

天満「絶対に阻止する！あんたを殺してでも！」

水鏡「今の君は私と同じ天のエルフじゃないのか？それとも…『地のエルフ』を守るつもりなのかい？」

天満「やっぱり俺のことを知ってたんだな？」

水鏡「『俺』じゃないだろ？『俺達』じゃないのかい？」

天満「う…。」

水鏡「ぜひ『地の君』とも話をしたいな。」

天満「なっ！なぜそんなに詳しく知ってるんだ？『アイツ』のことは…。」

真雪「天くん？」

天満「真雪！」

水鏡「ほう、この駄菓子屋が見えるのですかな。どうやら『法術』の素質がある娘みたいだ。」

真雪「何してるの？早く学校に戻らなきゃ。」

天満「エルフ！あんたに母さんは狩らせない！」

真雪「えっ！」

水鏡「止めておきなさい。私の力は君を遥かに上まっているよ。まあ…『もう一人の君』なら話しは別だがね…。」

真雪「天くん、この人もしかして…？」

天満「ああ、『アイツ』を…『地門』を知ってる！」

真雪「嘘…なんで？」

水鏡「なぜ、そのお嬢ちゃんが知っているのかが気になるが、まあいいだろう。」

天満「くっ!」

水鏡「そう構えなくてもいい。私は君達にある事を伝えに來ただけなのだよ。」

天満「ある事?」

水鏡「今我々の世界で天と地のエルフによる、戦争が始まろうとしている。幸い、まだ小さな争いしかしてないが、いつ大戦が勃発してもおかしくはないのだよ。」

天満「そんなの、俺達には関係ないだろ!」

水鏡「校舎:。」

天満「あっ!」

水鏡「こつちの世界にも影響が出る。エルフの世界と人間の世界は表裏一体。一方が傷つけば、もう一方も傷つく。」

真雪「そんな...でもそつちの世界が勝手に争ってるだけでしょう? 私達の世界まで巻き込まないで下さい!」

天満「真雪:。」

水鏡「お嬢ちゃん、言わなかったかな? 一方が傷つけば、もう一方も傷つくと。」

真雪「だから、私達……あっ！」

天満「そっだ…こつちの世界でも人間同士の戦争は起きてる。ということは…。」

真雪「う、うん…。」

水鏡「だから戦争を止めたいのだよ。そのために君達に会いに来た。力を貸してもらったためにな。」

天満「…母さんをどうするつもりだ？」

水鏡「君達が力を貸してくれば、我々も君達の母上を全力で守らせてもらうよ。もちろん、天のエルフは君達の母上から手を引く。」

天満「…分かった。」

真雪「天くん！」

水鏡「今日の0時に出発する。」

天満「ああ…分かった。行こう真雪。」

真雪「う、うん…。」

水鏡「ふふ…なるほど……どことなく面影があるな…。」

（駄菓子屋から出て家に帰るところ）

真雪「天くん！本当に信じるの？あのおじいさんが言ってたこと！」

天満「真雪、お前は気にするな。母さんは、俺が守るんだ！」

真雪「天くん…でも…私は…。」

天満「俺はこの町は好きでもない。だけどそれでも、母さんと10年以上過ごした町だ。だから守る…。それに…真雪もいるし…」

（ボソ）

真雪「えっ？」

天満「な、何でも無いよ！アハハハ…じ、じゃあ元気だな！」

（天満、家まで走る）

真雪「あっ！天くん！」

剣斗「おおーい！真雪ー！」

真雪「剣ちゃん…。」

琴花「あれ？扇くんは？」

真雪「…うん…………あ…あのね、実は…。」

（天満、家に到着）

天満「ただいま…。」

母「あら、どうしたの？学校は？」

天満「え？あ…き、今日は創立記念日だったんだよ！忘れてたよ、アハハ！」

母「そうだったの？本当にドジな子ね。」

天満「今日は部屋でゲームでもするよ。」

母「はいはい。」

（部屋に行く）

天満「ふう……あのエルフ……。そういや、この部屋ともしばらくお別れか…。俺がいきなり居なくなったら母さん、驚くだろうな…。一応…手紙書いところ。母さん…勝手に決めてごめんね…。」

（時間が過ぎ夕方になり、夕飯を食べる）

天満「うん！美味しいよ！おかわり！」

母「今日は部活もしてないのに、何？その食べっぷり！」

天満「だって…。」

母「天満？」

天満「だって美味しいからね！忘れたくないし！」

母「え？毎日食べてるでしょう。おかしな子ね。」

天満「…ねえ、母さん。」

母「何？」

天満「父さんは…母さんを守れて言って……あの時…。」

母「よしなさい……たとえ禁じられた出会いだったとしても、母さんはあの人を誇りに思うし、後悔なんて全くしてないわ。あの人のお陰で私の世界は広がったもの。」

天満「母さん…。」

母「それに母さんは、あなたを授かって、すごく良かったと思うてる…。」

天満「ありがとう…母さんは俺が絶対守るから。父さんの変わりにね！」

母「ありがとう。そのためにも、いっぱい食べなきゃいけないわね。」

」

天満「うん！」

母「…天満？」

天満「何？」

母「あなたは…。」

天満「ん？」

母「……………」。

天満「母さん？」

母「ううん、なんでもないわ。」

天満「…そう。……………」ごちそうさま！さて、宿題しなきゃ。」

（部屋に行く）

母「天満…ごめんね…。」

（そして、11時30分）

天満「そろそろ行くか…。母さんも寝たみたいだし…。…じゃあ行ってきます、母さん。…ん？これは…？」

（靴箱の上に手紙）

手紙「何を悩んでいるのかは分からないけれど、天満ならきっと、良い答えを見つけれられると思うわ。大いに悩み考えなさい。そして、お父さんのように強くなりなさい。あなたには、強い星と月が味方になっていることを忘れないで。私の愛する天満へ。母より。」

天満「か、母さん…。これは…バンダナ？…ありがたく貰っとくよ母さん。強くなるよ…誰よりも。じゃ、行ってくるね…。」

（家から出る、そして残された母）

母「天満…行つてらっしゃい…。守ってあげて下さいね、あなた…。」

（駄菓子屋に到着）

水鏡「ほう…良い目になったな。」

天満「さっさと行こう！」

剣斗「俺達を置いてか？」

天満「えっ！剣斗！お、お前ら！なんで？」

剣斗「真雪に全部聞いたよ。」

天満「なっ！真雪っ！」

真雪「何も言わないで。私も一緒に戦う。」

天満「はあ？遊びじゃないんだぞ！ふざけてる場合じゃ…！」

琴花「分かってないなあ。これだからニブチンは困るよねえ。」

天満「琴花まで…。」

琴花「へへ！」

水鏡「ほう、三人も『法術』の素質があるとはな。」

天満「あんたは黙ってる！ダメだ！危険過ぎる！向こうは俺達の世界と違って、死ぬことだってあるんだぞ！」

剣斗「お前、俺達が面白半分で首を突っ込んできてると思ってるのか？」

天満「でも…。」

琴花「私達の世界は私達自身を守る。当たり前のことじゃない！」

剣斗「そういうこった！」

天満「いい…のか…？」

真雪「一緒に行こう！天くん！」

天満「…ありがとう…。」

水鏡「では、行こうか。さあ、この鏡の前に立ちなさい。」

天満「一つだけ約束してくれ。『地門』が出てきたら、どんな手を使ってもいいから俺を気絶させてくれ。いいな！」

水鏡「承知した。」

天満「じゃあ行こう！エルフの世界『オルテナ』へ！」

皆「おう！」

次回に続く

第二劇『異界』

水鏡「さあ、着いたぞ。ここが、エルフの世界であり、我々同盟軍『エデン』の里である『マドラド』なのだよ。」

真雪「ここが…エルフの世界『オルテナ』なの？」

琴花「きれい！見たこともない花や生物がいっぱいいるじゃん！アハ、あの生き物はナニナニ？」

水鏡「あれは、君達の世界でいうと馬のような生物だな。ここでは狩りの対象だがね。」

真雪「食べちゃうんですか？」

水鏡「こっちでは主に狩猟をして生活しているのだよ。」

剣斗「どうした？天満？」

天満「いや…ここは確か…。」

水鏡「ほう、覚えているのかな？」

天満「ハッキリとは思いつけないけど、どこか懐かしい気分だ。」

水鏡「ふふ…そうそう、ここでは、私のことは『シャウト』と呼んでもらおうか。」

真雪「どういふことですか？」

天満「ここでは、『エルフネーム』を使う。俺もエルフとしての名前がしっかりある。」

剣斗・琴花「エルフツ!？」

天満「え?真雪に聞いたんだろ?」

剣斗「いや、話は聞いてたけど、天満の口から聞くと、やっぱり驚くよなあ。」

天満「ごめんな…今まで黙ってて…。話そうとは思ってはいただけど……怖かったんだ…。剣斗は親友なのに…。」

剣斗「気にすんなって!それにお前がお前であることには変わりはないんだからな!」

琴花「そうだよ!私達が知ってる扇くんは、天然だけど、剣道部のエースで、学校の成績超々悪いけど、優しい人だって!」

天満「褒めてんだか、けなしてんだか…。」

真雪「アハハハハ!」

天満「笑いすぎだつつうの!」

剣斗「でも、シャウトみたいに耳が長くないよな?エルフはみんなこんなじゃないのか?」

シャウト「彼は少々『特別』だからね。」

剣斗「『特別』？」

シャウト「その内分かる。」

剣斗「ふん。」

天満「そっいゃ…何で俺の耳はエルフっぽくないんだろ…？（ボソ）」

シャウト「さあ、里の入り口に着いたぞ！」

真雪「へえ、綺麗な里ですね。」

天満「…『結界』をかけてるな。」

水鏡「気がついたのかね。さすが『ディーノ』だな。」

天満「な、何故知ってるんだっ！俺のエルフネームは親しか…？」

シャウト「君達が人間世界に行ったことが大問題になったからな。ほとんどのエルフは知っている。君にはその理由が分かるはずだが？」

天満「…っ！」

シャウト「天と地のエルフ達が君の親、特に母上に激怒した。」

天満「止める…。」

シャウト「なにせ君の母上は地のエルフの…。」

天満「やめろおおおおっつ！」

皆「…っ！」

シャウト「失言だったね。だが、この世界に来た以上、覚悟はしておきなさい。君自身が決めたことだ。」

天満「あんたに言われなくても、分かってるさ！」

真雪「天くん…。」

剣斗「こつちの世界もいろいろあるんだな。」

琴花「ちょっと剣斗、何他人事のフリしてるのさ！」

剣斗「スマンスマン。」

シャウト「この先が作戦会議室だ。そして、あの方が我々同盟軍隊長『ソリッド』様だ。」

ソリッド「シャウト！帰ってきたのか？ん？この子達は…？」

シャウト「はい。」

天満「…天満です。」

真雪「神谷真雪です。」

剣斗「俺は剣斗だ。」

琴花「相田琴花です。」

ソリッド「やはりそうか！なるほど…どこことなく面影があるな。」

天満「えっ！まさか、俺の親のこと…！」

ソリッド「ああ、よく知ってるよ！君の親父さんには随分鍛えられたからね。」

天満「そうでしたか…。」

ソリッド「…親父さんは？」

天満「……………」

ソリッド「そうか…もう一度稽古してもらいたかったんだがね。」

天満「すみません…。」

ソリッド「君が謝る必要なんてないさ。…よしっ！君達には早速だが、ある人の所に行ってもらいたい。」

真雪「どこにですか？」

ソリッド「我が『エデン』の『戦術師ララ』の所にだ。そこで、今の現状と力を授かりなさい。」

天満「力？俺は親からある程度聞いてるし、エルフだからいいけど、

真雪達は人間ですよ？」

ソリッド「行けば分かる。このエルフの世界では想いの強さが力に変わる。それだけは覚えておきなさい。」

シャウト「では、私についてきなさい。」

（混乱しながらもついていく）

ソリッド「天満！」

天満「…っ！」

ソリッド「君達は強くなる！君達がここに来ることを決めた時のことを思い出せ！どんな想いでここに来たのか！」

皆「…！」

ソリッド「『オルフェリア』の導きが共にあらんことを。」

天満「ありがとうございました！」

真雪と剣斗と琴花「ありがとうございました！」

（『ラリア』の元に向かう）

真雪「天くん、さっきの『オルフェリア』って何？」

天満「ん？ああ…昔…今のうちに争いが起こってしまつて、最初
は小さな争いだったけど、とうとう大戦が勃発して、多くのエルフ
が死んだ。」

琴花「分かったあ！その大戦で勝利した国のエルフの名前だ！つま
り、英雄！」

天満「ハズレ。」

琴花「えっ！」

剣斗「くくく…馬鹿丸出し…。」

琴花「鼻折るよっ！」

剣斗「んんっ！」

真雪「それで？」

天満「大戦がますます激しくなつた時、空から眩い光を放ち、舞い
降りてきた生物がいた。そして大地からも、激しい揺れとともに、
漆黒の光を放ち踊り出てきた生物がいた。」

真雪「何なの？その生物…？」

シャウト「その二匹の生物が次第に融合していった。それはかつて
言い伝えられてきた、伝説の『双頭の霊鳥』、エルフネームで『オ
ルフェリア』だった。」

天満「『オルフェリア』は全てを見ている。そして、大戦を止めた。昔から、平和のシンボルとして扱われてきたわけなんだ。まあ、いい伝えだから、本当かどうか分からないけどな。」

シャウト「……………」

真雪「へえ〜。」

剣斗「見てみてえな〜。」

琴花「アンタは食べられたりして…。」

剣斗「その時は琴花を盾にして逃げてやるよ！あ、琴花なんか食べたら腹壊すか？アハハ！」

琴花「な、何だとーっ！っ！」

真雪「まあまあ。」

シャウト「着いたぞ。あそこの小屋に『ララア』がいる。ここに紹介状がある。これを渡しなさい。」

天満「シャウトは来ないのか？」

シャウト「い、いや…………今はちょっとな…。黙って出て来ちゃったからなあ。（ボソ）」

天満「…よく分からないけど、会いに行けばいいんだな？」

シャウト「ゴホン！そのとおり！」

真雪「案内ありがとうございます。また会えますよね？」

シャウト「ああ、きっと。『オルフェリア』の導きがあれば必ず。」

天満「ああ。」

シャウト「天満…お前達なら…。」

（小屋に入る）

天満「…すみません。お邪魔しま…す…。」

？「テヤアアツ！」

剣斗「いつてええええ！」

天満「このっ！」

（取り押さえようとする）

？「う…『ファイアボール』！」

天満「なっ！『錬術』！？」

（天満避ける）

剣斗「ええっ！ま、また俺かよ！ア、アツチイイ！」

？「『ミリア』、いい加減にしないで！よく見なさいっ！人違いよ！」

ミリア「えっ！あ！」

天満「人違い？」

？「ごめんなさい。そそかしい子で。ある人と間違えてしまっ

て」

剣斗「…人違いで死ぬかと思っただぞ…！」

ミリア「ごめんなさいっ！シャウトと間違えたの！」

天満「シャウトの奴…だから来なかったのか。」

？「あの人だったら、この子に『錬術』を教える約束をすっぱかしたものですから。」

琴花「私達はここに行けと言われて来たんですけど…」

（紹介状を渡す）

？「なるほど…あなた達が…。わかりました。」

天満「それで、『ララア』さんは？」

？「私が『ララア』です。」

天満「そうだったんですか！俺は天満です。こっちから、真雪、琴花、剣斗です。」

ララア「そう、あなたが天満くん。なるほど、本当に魂が二つある。まるで『オルフェリア』みたいに。」

天満「そんなことより！」

ララア「ああ、そうでしたね。では早速説明します。今、天と地のエルフが争っているのは知っていますね。天のエルフの国である『エーテル』と地のエルフの国である『ラフォール』が争っています。そして、それを止めるために結成されたのが、天と地の同盟軍『エデン』なのです。」

真雪「それじゃあ、この里には、天と地のエルフがいるんですか？」

ララア「そうです。天と地が和平するために、各国から同志を募りました。」

真雪「そうだったんですか。」

ララア「今分かってることは、二つの国は一触即発。領土問題もあります。今はどちらの方がより優れているのか、というくだらな

い理由を戦機として、いつ大戦になってもおかしくない状況なのです。そこで、あなた達にして頂きたいのは、まず力を得ること。そして、私達と一緒に争いを止めて欲しいのです。」

剣斗「力って何？」

ララア「これから人間のあなた達には、『水鏡の試練』を受けてもらいます。そこで、『錬術』（『法錬術』ともいいます）を体得してもらいます。」

天満「俺は？」

ララア「あなたは生粋のエルフなので、『錬術』を使えなくても今はいいです。それよりも、あなたには『錬刀術』と呼ばれる剣術を身につけてもらいます。」

天満「知ってます。少しなら使えるし。そうじゃなくて、俺は試練を受けなくていいんですか？」

ララア「先程も言いましたが今はいいです。それにこの『水鏡の試練』は人間がエルフと同じ力を得るための洗礼儀式です。このミラアのように。」

天満「じ、じゃあ…。」

ララア「そう、この子は人間です。」

天満「な、なんで？」

ララア「この子は以前、この『オルテナ』に迷い込んだ夫婦が、こ

ここで暮らして産んだ子なんです。」

天満「そうか…どこかでこっちに通じる穴が生じた時に…」

ララア「そうです。そして、この子の両親は病気で他界しました。」

ミリア「でも私はちつとも寂しくなんて無いけどね。ララアには名前を貰ったし、もう一人のお母さんなんだもん。」

琴花「ミリアちゃん…。」

剣斗「さっきは殺されかけたけど、許してやるよ…。」

琴花「あんた泣いてんの？」

剣斗「これは、涙なんかじゃないさ。心の汗さ…！」

琴花「言つてて恥ずかしくない？」

剣斗「…………。」

ララア「さて、それでは皆さん、この鏡の中にお入り下さい。」

天満「みんな…気を付けてな。」

剣斗「任せろつて！強くなつてくつからよ！」

琴花「腹筋とか割れたりしないよね…？」

剣斗「そんなときゃ、ボディビルダーにでもなつたら？お似合いだよ

！アハハハハ！」

琴花「あの世へ行けっ！」

剣斗「んあっ！」

天満「真雪…。」

真雪「天くんも、頑張つてね。」

天満「ああ…分かったよ！俺も強くなるよ！みんなも強くなれよ！」

皆「おう！」

ララア「いいチームね。」

ミラア「いいなあ…。」

（三人は鏡の中へ）

天満「それじゃ俺も！」

ララア「私が稽古してさしあげます。さあ、この剣を。」

天満「ララアさんが？」

ララア「あら、ご不満ですか？」

天満「い、いや……でも……」。

ララア「……『飛燕斬』っ！」

天満「うわっ！き、木が…真っ二つに！？」

ミリア「こう見えても、ララアは同盟軍の『戦術指南役』であり、元隊長だったんだよ！」

ララア「見た目で判断することは、戦いでは死を意味することだと認識しておきなさい。」

天満「す、すいませんでした…！」

ララア「ふふ、分かって頂ければよいのです。それでは行きますよっ！」

天満「はいっ！お願いしますっ！」

ミリア「天満…なかなかカッコイイじゃん！」

天満「みんな、頑張ろうな！俺も頑張るから！」

次回へ続く

第三劇『試練』

剣斗「ここが、鏡の中なのか…？ここでどんな試練するんだろうな、二人とも？」

（シーンとする）

剣斗「あれ？琴花？真雪？はくん、アイツらもしかして、迷子か？いい年こいて恥ずかしいっいたらありやしない！……俺がはぐれたのか？」

？「お前、頭悪そうだな。こんなのが授錬者か？泣けてくるな…。」

剣斗「な、なんだ？だ、誰お前？」

？「俺は『雷のギルティ』だ。」

剣斗「え…と？」

ギルティ「なんだ？何も聞かされてねえのか？しょうがねえな、説明してやるからよく聞けよ？いいか、人間にはエルフみてえな力はねえ。そこで自然の力が具現化した俺のような『霊神』を装備化することで、力を得るわけだ。ま、エルフの中でも霊神の力を持つてる奴もいるけどな。」

剣斗「へえ…じゃあ俺の力になってくれるのか？」

ギルティ「断る！何で俺みたいな高貴な霊神が、バカ面のお前の武具にならなきゃならないんだよ！」

剣斗「バ、バカって、下手に出てりゃつけ上がりやがってっ！俺だつてな、お前みたいな犬か猫か分からん生物なんてな、こっちから願い下げだつつうの！」

ギルティ「て、てめえ！燃やしてやるっ！」

剣斗「やれるもんならやつてみやがれ！お前なんか頼らなくてもな、力くらい身につけてやるよっ！」

（その頃琴花は）

琴花「それで、フーちゃんは、どうしたら武具として、私の力になつてくれるの？」

？「そのフーちゃんというのは、止めてくれないかな？僕には『風のフーディン』という立派な名前があるんだけどな……。」

琴花「かわいいじゃん！女の子にモテモテになるよ？もう超ウハウハだつて！」

フーディン「そ、そうかな？」

琴花「私を信じなさい！」

フーディン「う、うん……。」

琴花「ところで、装備化は？」

フリーデイン「ああ、そうだったね。ゴホン！君の想いの強さを見せて欲しい。」

琴花「想いの強さ？何の？」

フリーデイン「君が何のために力を得たいのか、君の想いを見せて欲しい。」

琴花「うん…そんな難しいこと聞かれても分かんないや。はつきり言って別にエルフ達を救うなんて、強く思っただけだしな…。」

フリーデイン「……………」

琴花「でもね…。」

フリーデイン「！」

琴花「私が住んでる町には、大好きな友達がたくさんいる。その人達が泣いたりするのは絶対嫌だ！エルフの世界が傷つけば私達の世界も傷ついて、友達も傷つくかもしれない！そんなことにならないために力が必要なら力が欲しい！それだけだよ！」

フリーデイン「なるほどね。君の想い、確かに感じたよ。その気持ち、大事にするんだよ。それでは、汝琴花…。」

琴花「うん。」

フリーディン「我は汝の力となり、共に歩む証となる。」

（フリーディンは鍵になった）

フリーディン「鍵を握りしめて、力が欲しいと想ってごらん。君の頭に言葉が浮かんでくるよ。」

琴花「……………な…何か言葉が浮かんできたよ…。エア……『エアシヨット』…。」

フリーディン「そう、それが君の想いの力だよ。さあ、試練は終わつたよ！出口はあつちだよ。これからよろしくね。」

琴花「こちらこそよろしくね、フリーちゃん！」

（その頃真雪は）

真雪「『シルフィア』さんは、私の何を知りたいんですか？」

シルフィア「私は、貴方の想いの強さ、何のために力が欲しいのかを知りたいのです。私『水のシルフィア』の主にふさわしいかどうかを見極めるために。」

真雪「私は…争いが嫌いです。本当は力なんて欲しくないのかもしれないかもしれません。」

シルフィア「では、何故この世界に？」

真雪「ある人が、自分の大切な人を守るために自分を犠牲にしようとしています。私はそれを止めたいです。たとえ何かを守るためでも、自分が犠牲になるなんて間違ってるから！だから、その人が無茶をしないように、私が支えてあげたい。戦うための力じゃなく、支えるための力が欲しいんです！側に居て、その人を守る力が、今の私には必要なんです！」

シルフィア「戦うための力ではなく、支えるため…。貴方の尊き想い、確かに感じました。それでは、汝真雪…。」

真雪「はい。」

シルフィア「我が主として、ここに契約を結び、主と共に歩む証となる。」

（シルフィアは杖になった）

シルフィア「杖に力が欲しいと祈りなさい。そうすれば貴方の頭に言葉が浮かんできます。」

真雪「……………あ…これは。ブルー…『ブルーシールド』…。」

シルフィア「それが、貴方の守りの力です。さあ、試練は終わりました。あちらが出口です。これからよろしくお願いします。」

真雪「こちらこそよろしくお願いします。」

(その頃剣斗は)

剣斗「はあはあはあ……な……なかなかやるじゃねえか……チビのくせして……。」

ギルティ「へっ、人間ごときに負けるかよ!」

剣斗「くそっ!」

ギルティ「……お前なんでそんなに意地になるんだ? エルフの世界がどうなろうと、お前には関係無いだろ?」

剣斗「バカ言え……こっちが傷つけば、あっちも傷つくんだろ?」

ギルティ「それだけか?」

剣斗「……正直に言うと、理由はそれだけじゃねえ……天満の力になりたいんだよ。俺はアイツに……天満に救われたんだ。俺は……今でこそこんなふうに見えるようになったけどな、昔は……俺はな、昔イジメられてたんだ……。」

ギルティ「……。」

剣斗「病気がちでさ、体も華奢だったからな……。いつもイジメられてて、クラスの奴も見て見ぬフリしてたのに、違うクラスの天満だけが、俺を助けてくれたんだ。一緒に殴られたりもした。それでも天満は俺を守ってくれた。アイツと過ごす時間は心から笑えたんだ。

俺は天満に恩返しをしたい。だから俺は強くなるって決めた！必死に体鍛えて、今度は俺が天満を守ってやるって！アイツが何かに悩んでいたら、俺も一緒に悩んで、解決策を考えてやるうと思った！そして、今アイツは、母親を守るために必死に戦おうとしてる。そんなアイツの力になりたい！アイツの道を一緒に歩きたい！俺に出来ることは、天満の隣にいてやることだ！アイツが強くなるなら、俺も強くなる！だから俺には力があるんだ！アイツと共に歩む力になっ！」

ギルティ「ふ……ただのバカだと思ってたけどな。男好きの水モバ力だったか。」

剣斗「何だっ！」

ギルティ「面白えじゃねえか……お前が本当に自分の信念を貫き徹すか見届けてやるよ！」

剣斗「えっ、じゃあ！」

ギルティ「しょうがねえから、力貸してやるよ。」

剣斗「あは……あはは……よっしやあああ！」

ギルティ「ただしな、お前の信念が少しでも揺らぐようなことがあれば、俺は速攻で手を引くぜ。分かったな？」

剣斗「ああ、分かった。」

ギルティ「よし！それじゃ、汝剣斗……。」

剣斗「おう！」

ギルティ「我が力を与えるにふさわしい魂と認め、汝と共に歩む証となる。」

（ギルティは弓矢になる）

ギルティ「お前はなかなかの『錬』を持つてるみたいだな。頭に浮かんできた言葉を矢に乗せて放て。」

剣斗「……これが…俺の…。ら…『雷牙』…。」

ギルティ「俺の力を上手く引き出し使いこなせよ！さあ、試練は終了だぜ！そっちが出口だ。まあよろしく頼むぜ！」

剣斗「ああ、任せろっ！」

（皆が鏡から出てくる）

琴花「二人とも！どうだった？『錬術』手に入れた？」

剣斗「バツチリだぜ！」

真雪「なんとかね。それより、天くんの方はどうだろう？」

ミリア「あ、みんな！帰ってきたんだね。」

真雪「ミリアちゃん。天くんは？」

ミリア「天満なら、四日前にラアと一緒に『究の回廊』に出かけたよ。もうすぐ帰ってくると思うよ！」

琴花「四日っ！？私達が鏡の中に居たのって、一時間くらいだよ？なのに四日って…？」

ミリア「ああ、鏡の中は異空間だからだよ。鏡の中での一時間は、こっちでは、約七日だよ。だから、皆が鏡の中に入ってから今日で七日目だよ。」

琴花「ほええ。」

剣斗「エルフの世界って、何もかもスケールが違えよな。」

天満「お〜〜い！みんな〜〜！」

真雪「あ、天くん！」

天満「久しぶりだなあみんな！」

剣斗「久しぶり…なんだよな…天満の場合は…。」

天満「みんなの成果はどうだった？」

真雪「みんなバッチリだよ！天くんは？」

天満「きつかったよ…。ラアさん、手加減無しだからね。」

琴花「ララアさんで強かったんだ…。」

天満「でも、お陰で剣の扱いには慣れてきたよ。」

ララア「ミリア、お留守番ありがとう。」

ミリア「チヨロイチヨロイ。ところで天満は強くなったの、ララア？」

ララア「ええ、恐るべき成長速度に驚きました。まるで渴いた砂に、水をやる心境でしたね。」

天満「ほ、褒め過ぎですよ…。」

ララア「ふふ、さて皆さん。」

皆「はいっ!」

ララア「これから皆さんには、ソリッド隊長の指揮の元、動いて頂きます。」

ミリア「……………」

ララア「それでは皆さん。お互いの武運に祈りを…。」

天満「…ララアさん。俺は…。」

ララア「あなたには強い意思があります。もう一人のあなたにも…。
お互いが信じあえるように、祈っています。」

天満「『アイツ』と分かりあえるなんて思えないですよ。俺は、俺の信じる道を進むだけです。」

ララア「あなたらしいですね。どうかお気を付けて…。シャウトにもよろしく伝えて下さい。」

天満「分かりました。どうか、体には気を付けて下さい。」

ララア「ありがとう。」

天満「それでは行きます。色々ありがとうございました。」

真雪「ララアさん。ミリアちゃん。ありがとうございました。」

琴花「バイバイ、ミリア！ありがとうございましたララアさん。」

剣斗「じゃあな、おてんば娘！」

（ソリッドの元に向かう）

ララア「いいの？」

ミリア「…何が？」

ララア「一緒に行きたいんでしょう？」

ミリア「私は…。」

ララア「あなたの力を貸してあげなさい。私は大丈夫だから。そう
だ！世界が平和になったら、また『虹色蝶』を見に行きましょう。
今度は天満くん達も一緒にね。それまで天満くん達の力になってあ
げなさい。」

ミリア「ララア……ありがとう。必ず……必ず平和にして帰ってくるか
らね。い、行ってきました！お……お母さん……。」

ララア「行つてらっしゃい。気をつけて……私の愛しいミリア。」

（ミリアは天満を追う）

ララア「天満……私の娘を頼みます。」

（ガサッと音がする）

ミリア「ん？………気のせいかしら？」

？「ふう……危ない危ない。さすがは『戦術師』ですね。なるほど、
さっきのが『ディーノ』ですか。なかなか楽しめそうですね。」

（天満達がソリッドの元に到着）

天満「ソリッドさん！」

ソリッド「おお、天満！そうか、力を手にしたんだね。目に力を感じる。」

天満「はい。ラレアさんに力を頂きました。」

ソリッド「うむ。それでは早速君達にはある任務をしてもらいたい。」

琴花「任務？」

ソリッド「この報告書がある所に届けてほしい。」

真雪「どこにですか？」

ソリッド「この里から東に行った所にある『ラグミア』という町にいる『ニル』というエルフに渡してほしい。」

天満「『ニル』？誰ですか？」

ソリッド「我が『エデン』の参謀だよ。それとだ…彼は人間嫌いだからな。会つのは天満だけにした方がいい。」

天満「はあ…。」

ソリッド「では頼んだよ！『オルフェリア』の導きが共にあらんことを。」

天満「分かりました。じゃ行こうかみんな。」

皆「おう！」

（里から出る）

？「ふふ…お手並み拝見ですね。『ディーノ』に『ジラス』……か
…。」

次回に続く

第四劇『怪事』

天満「そうだ。みんなに言っておくけど、『オルテナ』には狂暴な『邪霊』がいるから気を付けてな。」

真雪「じゃれい？何それ？」

天満「『邪道の霊神』のことだよ。そいつらが、この世界にはウヨウヨいるんだ。」

琴花「え？霊神は力を与えてくれるんじゃないの？」

天満「確かに霊神は自然の力が具現化したモノ。その力を利用するエルフ達もいる。だけど理性を持つてる霊神は少ないんだ。そして強い力を持つてる霊神を『真霊神』と言うんだけど、ほとんどは野生化し、動物達のように生息してる。その中でも好戦的な霊神を『邪霊』って言うんだよ。」

剣斗「へえ、本当にこの世界は変わってんのな。まあ、エルフ達は、これが普通なんだろうけど。」

？「そのとおりです。ほらほら、噂をすればなんとやらですよ？」

（邪霊が二体現れる）

天満「はっ！みんな、あれが『邪霊』だ！どうやら向こうは敵意丸出しみたいだな。みんな、戦闘開始だ！」

皆「おう！」

剣斗「まずは俺からだ！ギルティ、いくぞ！くらえっ！『雷牙』っ！」

邪霊「ギヤアアア！」

琴花「やるじゃん！よし、私だって！力を貸してねフーちゃん。
『エアシヨット』ッ！」

剣斗「やるう！一匹吹っ飛ばしたぜ！」

邪霊「グガアアア！」

真雪「危ない剣ちゃんっ！お願いシルフィア……………『ブルーシールド』！」

邪霊「ガ？グガ？」

剣斗「み、水が…すげえ…！」

天満「はは…皆スゴいじゃん！よしっ！こいつでトドメだ！『飛燕斬』っっ！」

邪霊「ギヤアアア……………グ……………ガ……………」

皆「ヤッターー！」

？「ほう…これはなかなか。どうやら霊神の武具を持ってるみたい

ですね。彼らをどう見ます？『レイダー』？」

レイダー「さあな……。」

？「おや、興味ないんですか？それとも、彼らと戦いたくてウズウズしてるんですか？『氷の霊神』さん？」

レイダー「それはお前だろ？あのガキと戦いたい……そんな目をしてるぞ。だがいいのか？尾行なんて指令出てないだろ？さっさと消せよ、あんなやつら。お前なら簡単だろうが。なんせ『瞬迅のゼロ』なんだからよ。」

ゼロ「まあ、いいじゃないですか。しばらくは様子見で。『あの方』だって許して下さいますよ。」

レイダー「はあ……とことん暇な奴。」

剣斗「天満もスゲエよ。霊神の力を借りてるわけでもねえのに。」

天満「はは、ララアさんに稽古してもらったからね。でも霊神がいなきゃ、属性攻撃はできないけどね。見たところ、真雪は『水』、剣斗は『雷』、琴花は『風』のようだね。」

剣斗「そうか。天満は霊神の武器を持ってないのか。」

天満「まあね。エルフは霊神がなくても戦えるからね。」

琴花「それじゃあ、エルフが霊神の力を借りたら、メチャメツチャ強くなるんじゃないの？」

天満「確かに普段の力に霊神の力がプラスされるからね。」

真雪「じゃあ、そんなエルフが現れて、戦うことになったら勝てないんじゃない?」

天満「…………でも、俺達は一人じゃない。俺達が力を合わせれば、きっと乗り越えられるよ。」

真雪「う、うん。そうだよな。」

天満「さあ、『ラグミア』はもうすぐだ。みんな、頑張ろう!」

皆「おう!」

(『ラグミア』に到着)

剣斗「ここが『ラグミア』…。」

天満「そう…みたい。少なくとも、地図上では…。」

琴花「で、でも。町が無いじゃん!」

真雪「家が壊されてる…!ひどい…………。」

?「う、うわあああ!」

皆「!」

天満「あっちだ！」

(声のする方に行き、そして到着)

天満「あ、あれは！ド、『ドーム』…！」

真雪「『ドーム』って？」

天満「聞いた話じゃ、邪霊の中でも、特に気性が激しく、一度暴れだしたら、気が済むまで周りを破壊しつくす。俺も見たのは初めてだよ。でも、普段は森の中で暮らしていて、町に来ることは滅多にないのに。何でだ？」

剣斗「そ、そんなことよりどうするんだ？このままにしておいたら、町が全壊してしまうぞ！」

天満「分かってる！でも、今の俺達に勝てるか分からない。それほど強いんだ。それに……剣斗、属性攻撃してみてくれ！」

剣斗「え？あ、ああ！くらえっ！『雷牙』っ！」

ドーム「……………」

剣斗「き、効いてない？どうしてだ？」

天満「やっぱり…ドームに効くのは『火』だけなんだ。他の攻撃は、ほとんど効果無いんだ。」

剣斗「な、何だって！じゃ、どうすれば…？」

ドーム「『ダストブレイク』！」

天満「や、やばい！」

皆「うわあああ！」

ゼロ「おやおや、いけないですねこれは。しょうがない、ん？」

？「『ファイアボール』！」

ドーム「グガアア！」

皆「！」

？「何やってんの！だらしないよ！」

真雪「『ミリア』ちゃん！」

ミリア「イエーイ！後はアタシに任せといて！『ファイアボール』！」

ゼロ「ほう…運がいい。『火』の霊神の使い手ですか。面白くなってきましたね。」

レイダー「暇人だな…完全に。」

ドーム「ググ…『ダストブレイク』！」

真雪「ミリアちゃん！『ブルーシールド』！」

ミリア「助かったよ真雪！それにしても『ファイアボール』じゃキリがないなあ……それなら……天満！アイツを足止めしといて！」

天満「え？でも……？」

ミリア「大丈夫！普通の攻撃なら多少は効くから！」

天満「わ、分かった！剣斗っ！」

剣斗「任せろっ！せいっ！はっ！たあっ！」

天満「はああああ！『クウヒレンザン空飛連斬』っ！」

ドーム「グギアアア！」

ミリア「ありがとう二人とも。覚悟してねドームちゃん！トドメだよ！『フレイムストライク』！」

ドーム「ギガアアア……グ……」

天満「はあはあはあ……。や、やった……！」

皆「やったーっっ！」

ミリア「エヘヘ！ミリアちゃんスッゴイ！」

琴花「ホントだよ！」

真雪「でも、何でミリアちゃんが？」

(ミリアはラリアとのやりとりを説明した)

天満「そうか…。でも危険だよ？本当にいいのかい？」

ミリア「当たり前だよ！アタシも皆と一緒に戦うよ！」

天満「分かったよ。これからよろしく。」

真雪「よろしくねミリアちゃん。」

ミリア「ミリアでいいってば！友達でしょ！あ、それとこの子も紹介しておくね。」

剣斗「筆？ま、まさかそれ…？」

ミリア「そう、この子は『火の霊神チエア』だよ。」

チエア「…ねえ…ミリア…。チエア…は…恥ずかしいよ…。うう…もう戻って…いい？」

ミリア「相変わらずシャイだねチエアは！」

？「アンタらはいったい？」

琴花「あ、さっき叫んでた人？」

真雪「怪我はありませんか？」

？「ああ、ありがとう。私はこの『ラグミア』に住んでる『ニル』という。」

天満「あなたが！無事で良かった。ソリッドさんからこれを…。」

（報告書を渡す）

ニル「なるほど、君達が…。わざわざありがとう。人間にもなかなかできる奴がいるんだな。」

天満「ニルさん…。」

ニル「とりあえず、今返書を書く。少し待っててくれ。」

天満「はい。」

ゼロ「なかなか面白かったですね。さて、どうしましょうか？」

レイダー「消すんじゃないのか？」

ゼロ「いえいえ。それよりもっと近くで観察したくなりました。どうでしょう、あの人達の仲間になるというのは？」

レイダー「正気か？何を企んでいる？」

ゼロ「企むだなんて……僕はただ面白いモノが見たいだけなのです

から。ふふふ…。」

レイダー「はあ…一体何を考えてることやら……。」

ゼロ「ふふ…。」

ニル「これが返書だ。よろしく頼む。」

天満「分かりました。それでは。」

ニル「本当に感謝する。ありがとう。」

天満「いえ。絶対戦争をくい止めましょうね。」

ニル「もちろんだ。帰りの道中気を付けて。」

（町から出る）

天満「それにしても、何でドームが町にいたんだろ？」

ミリア「分からない。でも最近、邪霊の力が強くなったり、おとなしい霊神が邪霊化したり、変なことばかり起きてるの。」

天満「それも、戦争と何か関係があるのかな？」

ミリア「とにかくソリッドにも、『ラグニア』での出来事を話そう。」

「

天満「そうだね。ところで、さっきは本当にありがとうねミリア。」

ミリア「て、照れるじゃない！そんな何度も言わなくていいよ！」

天満「アハハ！ゴメンゴメン。」

真雪「……………」

琴花「あんなに楽しそうにして……天くんのバカ……って顔してるよ。」

真雪「こ、琴花！な、何言ってるのよ！」

琴花「隠してもダメだって！でも扇くんは真雪の気持ちに気付いてるのかなあ？」

真雪「だからさっきから何言ってるのよ！こ、琴花だって、剣ちゃんどどうなのよ？」

琴花「あ、あんなバカと私がどうにかなるわけじゃない！私はもっと優しくてカッコイイ人をゲットするのだよ！オホホホ！」

剣斗「ひ、暇だ……」

ミリア「これからどうするんだろ？具体的にどうすれば、戦争を回避できるのかな？」

天満「確かに……。だけど戦争を起こさせないって思ってる人が集まって考え動いてるんだ。必ず争いは止まるさ。俺が、俺達が起こさせない！」

ゼロ「いやあ、さすがは『ディーノ』さん。あなたのお考えに感服致しました。」

皆「！」

天満「誰だ？」

ゼロ「初めまして。僕は『トール地方』の『バルガレア宮殿』に仕える『神官』です。人は僕のことを……」

皆「……ゴク。」

ゼロ「……『おちゃめなゼロちゃん』て言います！」

皆「……………」

ゼロ「おや……ハズしましたかね？」

レイダー「馬鹿……」

天満「ん？それは……？」

ゼロ「ああ、この短剣は『氷の霊神レイダー』です。」

天満「え……と、それで何か用ですか？」

ゼロ「実は私も皆さんの力になりたいと思い、声をかけたんです。」

ミリア「でも、何で神官さんが？」

ゼロ「もちろん戦争を起こさたくないからです。神に仕える僕にとって、争いは敵ですからね。それで、同盟軍に僕も入りたいと思い、ここまで来たのです。」

皆「……………」

レイダー「ほ、本当に仲間になろうとしてやがる。（ボソ）」

ゼロ「どうでしょうか？」

天満「俺達では決められないから、とりあえず、ソリッドさんに会って下さい。」

ゼロ「ソリッド？」

天満「同盟軍『エデン』の隊長です。」

ゼロ「へえ……………分かりました。」

天満「それでは行こうか。」

ゼロ「はい。」

（『マドラド』に到着）

皆「あっ！」

天満「また、ドームだって！何で？」

ミリア「考えるのは後だよ天満！」

天満「あ、ああ。」

ゼロ「皆さん。ここは僕に任せて下さい。」

天満「え？」

真雪「一人じゃ危険です！」

ゼロ「まあ、見てて下さい。………とこしえの蒼き霜氷よ、^{そらひやまづ}我の力となり、さらなる修羅を討ち滅ぼせ……『ラストフリージング』！」

ドーム「ガ？グギヤアアア！」

皆「！」

天満「い、一発……。しかも『氷属性』で……！」

ミリア「強力過ぎだからだよ！ドームの耐性を遥かに上まったんだよ！」

天満「い、一体何者なんだ？本当に神官なのか？それに、この威力……！」

ゼロ「ふふ……。」

次回に続く

第五劇『虚説』

ソリッド「君達――！」

天満「ソ、ソリッドさん……。」

ソリッド「今のは君達がやったのか？助かったよ！」

天満「いや、倒したのは彼です。」

ソリッド「彼は？」

ゼロ「お初にお目にかかります。僕は神官ゼロといいます。」

（天満はこれまでの経緯を話した）

ソリッド「なるほど。まさか『ラグミア』までが……。実は各地で邪霊が現れ、町や村などを襲っているという情報が入ったんだ。」

天満「本当ですか？一体何が……？」

ソリッド「それに、もう一つ重大な事実が分かった。実は……。」

天満「どうしたんですか？」

ソリッド「もう戦争は……起きない。」

天満「ど、どういうことですか？戦争が起きないって！天と地のエルフが和解したんですか？」

ゼロ「天と地の双方の国が潰された。つまり、天の『エーテル国』と地の『ラファール国』が死んだ…ということですか？」

皆「！」

ソリッド「そのとおりだ。両国が何者かによって滅ぼされた。」

ミリア「誰が…何のために…？」

ソリッド「それぞれの国王の遺体には刀傷で、こう書かれていたそうだ。『天神地祇^{テンシンチギ}』と。天と地の神という意味だ。」

真雪「神？え？」

ゼロ「どうやら動き出したようですね。（ボソ）」

レイダー「どうするんだ？このまま同行する気か？」

ゼロ「言っただでしょう。しばらくは様子見だと。それに、両国を落としたのは僕も知らなかったですからね。もしかしたら『あの方』が直接なさったのかも。」

ソリッド「とにかく、この世界に何が起こってるのかを調べる必要がある。」

天満「俺達はどうすれば？」

ソリッド「そうだな…ゼロと言ったね。君の入軍を認める。むしろこっちからお願いたいくらいだよ。君ほどの力があれば、きっとみんなの役に立てるよ。」

ゼロ「ありがとうございます。」

ソリッド「そして君達六人には、滅ばされた『エーテル国』に行ってもらいたい。そこで現状を把握した後、『ラフォル国』にも行ってもらいたい。それぞれを詳しく調査してきてくれ。」

天満「わかりました。それじゃ早速。」

ソリッド「くれぐれも気をつけて。『オルフェリア』の導きが共にあらんことを。」

(『マドラド』から出る)

天満「ゼロさん。」

ゼロ「ゼロでいいですよ。これからは仲間なんですから。気軽にタメグチでいきましょう。まあ、僕は性格上こんなですから、皆さんにタメグチはきかないですが。」

天満「じゃあゼロ…君は何者なんだ？その力、霊神だけのモノじゃない。」

ゼロ「それは、この『タリスマン』のお蔭です。これは力を増幅してくれるんですよ。しかしさすがは『ディーノ』さんですね。それ

に気づくなんて!」

レイダー「『タリスマン』ねえ…。」

天満「悪いけど、その名前で呼ばないでくれ。今の俺は天満だ。」

ゼロ「分かりました。」

ミリア「それにしても、戦争が起こらないって聞いた時は安心したなあ。伝説みたいに『オルフェリア』が止めてくれたのかと思っちゃったよ。」

ゼロ「少し違いますね。」

ミリア「え?何が?」

ゼロ「『オルフェリア』が止めたというところです。」

琴花「戦争を止めたんじゃないの?」

ゼロ「おや?知らなかったのですね。正しくは、止めたのではなく止まったんです。」

剣斗「どういうことだ?」

ゼロ「確かに『オルフェリア』が現れたのは本当です。ただし、実は『オルフェリア』と『ある霊獣』が戦ったせいで、空が裂け、大地が割れ、海が渴れ、エルフ達は戦争どころではなくなっただけです。この二体の争いを止めなければ、『オルテナ』が崩壊する。そのため、戦争は一時凍結され、天と地のエルフが共闘し、『霊獣』

の方を封印することに成功した。まあ後にも先にも全てのエルフが、共に手を合わせたのはこの時だけでしょうね。」

琴花「ある『靈獣』って?」

ゼロ「『オルフェリア』が現れる前に、空から一体、大地から一体生物が現れ、次第に融合していった。それは『双頭の靈獣』でした。そしてエルフネームで『ドリューマ』と言います。『オルフェリア』は『ドリューマ』を止めるために現れたと言われています。」

天満「ホントかゼロ? だったらなんで今まで真実がねじ曲がって伝えられてたんだ?」

ゼロ「簡単ですよ。誰かが隠蔽したんですよ。」

天満「何のために?」

ゼロ「封印する時、ある一人の少女を『人身御供(ヒトミゴクウ)』として利用しました。その少女の名前は『アーミア』、エルフネームで『平和』を意味します。」

天満「そうか……だから隠蔽したのか…。」

琴花「どういうこと?」

剣斗「バカちゃん…。」

琴花「な、何よーっ! アンタは分かんのか?」

剣斗「ええ…え…と…と、とにかく続きを聞こうじゃないか! 琴花

くん！あははは…！」

琴花「指折るよ！」

剣斗「いいっ！」

ゼロ「お二人のために説明しましょうか。隠蔽した理由…それは、今の天地の国王達（殺されましたが）、後世に悪い印象を残したくなかったからです。国王ともあるう者が、『人身御供』をしてまで、自分の国を守りたい、そんな事実を残したくなかったのです。だから、国王達は真実を知ってる者を……殺した。戦争を口実にしてね。エルフは長生きですからね。真実を伝えられる者を生かしたくなかったのです。」

真雪「ひどい！ひどすぎるよ！じゃあ今までの戦争は何なの！」

天満「ただのガス抜きか…。新鮮な空気だけを残すために、戦争を起こし、真実を闇の中に葬ったのか。」

剣斗「じゃあゼロ、アンタが戦争を起こさせたくないっていうのは…！」

ゼロ「そうです。最初の戦争はともかく、それ以降の戦争は、間違はなく隠蔽工作です。今度の戦争も両国が仕掛けた、『知る者』を一掃するための茶番です。こんな愚かな行為を許してはいけない、そう思ったからです。」

天満「それにしても、ゼロは何故そんなに詳しく知ってるんだ？」

ゼロ「…僕には母がいました。母は……『アーミア』と友達でし

た。」

皆「！」

ゼロ「母は亡くなるまで、『アーミア』の名前を呼んでいました。そして、言葉にはしませんでした。が、国王達を憎んでたはずですよ。」

天満「そうだったのか…。ゴメン、辛いことを思い出させて。」

ゼロ「いいですよ。」

真雪「あ、それじゃあ国王達を……国を滅ぼしたのは！」

ゼロ「ええ、間違いなく真実を知ってる者の仕業でしょうね。」

レイダー「おい、いいのか？そこまで教える必要がどこにある！」

ゼロ「これで彼等がどう動くのかが見たいですよ。」

レイダー「観察の次は演出かよ…。」

天満「ありがとうゼロ。真実が分かって良かったよ。その話を聞いて、もう一つ確かめなきゃいけないこともできたし。」

真雪「何を？」

天満「俺の母さんも真実を知ってるから、命を狙われてるのかもしれない。母さんは父さんとの絆が原因だって言ってたけど、もしかしたら…。」

ゼロ「ま、それだけが原因じゃないですけどね。（ボソ）」

天満「とりあえず、『エーテル国』に急ごう。」

（『エーテル国』に到着）

真雪「城があつたはずなのに、跡形もない…。」

天満「ん？そこにいるのは誰だっ！」

？「ツフモノドモ兵供が夢の跡。まさにだな。」

天満「まさか、お前がやったのかっ！」

？「お前達こそ何者だ？人間もいるようだが。」

天満「質問してるのはこっちだ！お前がやったのかっ！」

？「だとしたらどうする？」

天満「ここで捕える！『シツクウジン疾空刃』っ！」

？「ふ…。」

剣斗「効いてないぞ！」

？「お返した。『レッセンカ烈千華』っ！」

天満「な、はやいっ！うわああ！」

剣斗「天満っ！」

？「弱いな…落城とは無関係か…？」

天満「ま…待て…お前は…？」

？「…………『アイズ』。」

天満「ぐ…。」

真雪「天くん！」

アイズ「…そいつの名は？」

真雪「え？て、天満…くん。」

アイズ「覚えておく。」

剣斗「あ、待てーっ！くそっ！行っちゃった！」

ゼロ「さーて、何者でしょうね彼は…。」

真雪「きゃ！」

琴花「どうしたの真雪？」

真雪「天くんが…。」

剣斗「天満がどうしたって？」

天満「う……うつ。」

ミリア「天満？どうしたの？」

真雪「ダメっ！ミリア！」

天満「うおおーっ！っ！」

ミリア「きゃあああっ！」

ゼロ「もしかして……出てくるのか？」

剣斗「お、おい。大丈夫か天満？」

？「触るな！」

（剣斗を吹っ飛ばす）

剣斗「うわぁ！」

琴花「剣斗！ちょっと扇くん、何やってんのさ？」

ミリア「天満……？一体全体何がどうしたっていうの？」

？「天満だと？俺をあんな弱虫と間違えんな！」

ミリア「え？は？」

？「ふうふう」やっと出られたな。ん？おお、真雪じゃねえか！久しぶりだな。」

真雪「『地門』くん…。」

剣斗「何だって！じゃああれが、もう一人の天満か？」

地門「おい、言葉に気をつけな。何がお前の最後の言葉になるかわからないぜ。」

剣斗「…っ！これが本当にあの天満なのか？べ、別人じゃねえか…。」

地門「言葉に気をつけろって言ってんだろがっ！『地雷撃^{ジライゲキ}』っ！」

剣斗「うわあああっ！」

琴花「きやあああっ！」

ゼロ「くっ！」

地門「へえ、俺の攻撃を受け止めるとはな。なかなかやるじゃねえか。」

ゼロ「まさか、霊神も持たずにこの威力だとは…！どうやら、身体能力は『ジラス』さんの方が上みたいですな。」

地門「！」

琴花「じあす?」

地門「てめえ…天満はともかく、俺のエルフネームを知ってるとは、何者だ?」

ゼロ「お気になさらないで下さい。ただの神官ですから。」

地門「嘘つくな!ただの神官なわけねえだろうが!……ふ……まあいいか、吐く気がないなら、痛めつけて吐かせてやるよ!」

ゼロ「しょうがないですね。皆さん、援護をお願いします。」

皆「はいっ!」

地門「『ソウシュウレンゲキ双蹴連撃』っ!ツオラアア!」

真雪「『ブルーシールド』!」

琴花「『エアショット』ッ!」

ミリア「アタシも!ファイアボ……。」

地門「うっとうしいっ!」

ゼロと剣斗以外「きゃあああ!」

剣斗「頼むギルティ!アイツを止める力をくれ!頼む!アイツを止めたいんだ。……あ、頭ん中に言葉が……。」

ゼロ「これはマズイですね。術詠唱の時間は邪魔されるでしょうし、
かといって、この方達を守りながらというところ。」

地門「そろそろあの世に送ってやるよ！『葬送舞撃』っ！」
ソウソウブゲキ

ゼロ「仕方ないですね！ここで皆さんを殺させるわけには！」

剣斗「どけっ！」

ゼロ「！」

剣斗「目を覚ませ！天満ああっ！『雷襲牙』っ！」
ライシュウガ

地門「へっ！こんなもの！くっ…ぐわああ！」

ゼロ「お、お見事！それにしても、恐るべき成長速度ですね。」

剣斗「はあはあはあ…や…やったのか…？」

琴花「剣斗…。」

剣斗「大丈夫か琴花？」

琴花「何とかね…。ところで、扇くん大丈夫かな？死んじゃってないよね？」

剣斗「バカ！殺すかつ！だけど、直撃したからな。早く手当てしてやんねえと…。」

真雪「う…うつ…天くん？」

ミリア「大丈夫真雪？」

真雪「ミリアちゃんこそ…。」

地門「ぐうああああっ！てめえええらああっつ！」

皆「！」

ミリア「ま、まだ？」

地門「真雪いつ！テメエも覚悟しろよっ！」

剣斗「くそっ！」

ゼロ「ん？」

？「はあっ！」

地門「痛っ！な…何…？お、お前…くっ！」

剣斗「シャウト！」

シャウト「地門が現れたら、気絶させる。そういう約束だったな天満よ。」

次回に続く

第六劇『戦意』

剣斗「何つゝグッドタイミング！」

シャウト「どうやら、危機一髪だったようだな。」

琴花「どうしてここに？」

シャウト「それは…。」

ミリア「何その格好…？」

シャウト「ん？な、なな、何でミリアがいるんだっつ！」

ミリア「さつさと気味の悪い髭と髪の毛をとりなさいよ！ついでにその帽子もっ！」

剣斗と琴花「え？」

シャウト「はは……ふう……しょうがないな。」

剣斗「へ、変装してたのか？何でだよ？」

シャウト「いやあゝ。」

ミリア「シャウトは仕事柄、変装術が必要な。今じゃ趣味と化してるみたいだね。ただの変態よ！」

シャウト「あのなあ！変装してたのはあくまでも仕事をやりやすく

するためだ。決して趣味などではないぞ！」

剣斗「だからって、俺達にまで変装を使わなくてもな…。」

真雪「天くん！大丈夫！」

シャウト「おおっと、いけないな。とりあえず、向こうに空き家がある。話しはそこでしょう。」

（空き家に到着）

シャウト「ところで、これで全員か？さっき青年がいなかったか？」

剣斗「ゼロのことか？ゼロなら……あれ？ゼロは？」

琴花「知らないよ。」

シャウト「ゼロ…？」

ゼロ「やれやれ、危なかったですね。まさかこんなところでお目にかかるとはねえ。それにしても彼らが知り合いだったとは…。あの『鏡のシャウト』と。」

剣斗「まあいいや。シャウトは何故ここに来たんだ？」

シャウト「ソリッド様に『エーテル国』に行ったと聞いたんだ。」

剣斗「それで追いかけてきたのか。」

天満「う、うつ。。」

真雪「天くん！」

天満「真…雪？そうか、俺はまた…。」

シャウト「久しぶりだな天満。」

天満「……誰？」

シャウト「はは…私だよシャウトだよ！」

天満「そうか…！やっぱりいいさんじゃなかったんだな。」

シャウト「気付いてたのか？」

天満「なんとなく…ね。そうか、シャウトが止めてくれたのか？」

シャウト「約束だっただろ？」

天満「ありがとうな。それと、皆…ごめん。」

剣斗「『オルテナ』に来る前、真雪に聞いてたけど……。あれが、もう一人のお前か？」

天満「もう一人の俺なんかじゃない…。俺の中に別の人物がいる。そんな感じだよ…。」

剣斗「ラレアさんも言ってたけど、一人の人間に二人の魂があるっ

てことか。でもなんでだ？なんでそんな…？」

天満「分からない。ただ幼い頃から記憶が度々消えることがあった。それが何なのか理解させられたのは、真雪に初めて会った日だったな。真雪は俺の中に二つの魂があることを見抜いたんだ。五歳の時だったよ。」

ゼロ「！」

琴花「真雪が！本当に？」

シャウト「……………」

真雪「み、見抜いたっていうわけじゃないわよ！ただ会った時、天くんと地門くんが重なって見えてたから。なんで二人いるのって聞いただけなの。そ、それに…何となく声も聞こえたの…誰かの…」

天満「最初はこの子は何言ってるんだろって思ってたけど、俺はすぐ気絶させられた。だけどその時、声が聞こえたんだ。『それじゃあ何も守れねえな！約束もな！』って。目覚めた時、ハンターは息絶えていたよ。そしてその後母さんに地門のことを聞いたよ。俺の中にいるバケモノのことを。」

剣斗「いったい地門は何者なんだ？」

天満「アイツは…地のエルフでもあり、『地の霊神』でもあるそうだ。」

剣斗「霊神？でも見た目は人間だったぞ！まるきり天満とは姿も違

った人間だつたし。」

シャウト「霊神は自然の力が具現化したモノ。獣型もありエルフ型もあり人間型もある。もちろん魂だけの霊神もいるがな。つまり地門は『人間型の霊神』ということだな。」

真雪「それは知らなかった。私も地門くんに会ったのは数回だし。地門くんが出てきても、暴れた後にすぐ戻ったし。」

天満「…アイツは、俺が精神的や肉体的に弱ってる時に出てくるらしいんだ。そして、10分くらいたったら、眠りにつくんだ。」

剣斗「一生そのままなのか？一人になることはできないのか？」

天満「……………」

シャウト「どちらかの魂を消すしか無いのかもしれないな。」

剣斗「そんなの地門の魂の方を消すに決まってるだろ！あんな狂暴な奴！いない方がいいに決まってる！」

皆「……………」

琴花「でもどうやって消すのさ？」

シャウト「それは…分からない。」

天満「…大丈夫さ。絶対にアイツに体は譲らない！でも皆にはまた迷惑をかけるかもしれない…。」

剣斗「なあに！次は俺が地門を止めてやるよ！さつきは格好悪かったからな。」

天満「剣斗…ありがとう。本当にありがとう。」

ゼロ「ふむふむ。そんな過去があつたんですねえ。でも真雪さんの力…少し興味深いですね。まさかとは思いますが…。」

シャウト「とりあえず、これから『ラフォール』に行くのдар？天満大丈夫か？」

天満「大丈夫だ。過去の真実を知つたんだ。これからの真実も知りたいから。」

シャウト「真実？」

（ゼロから聞いたコトを教える）

シャウト「そうか。知つたのか。」

ミリア「シャウトは知つてたの？何故話してくれなかったの？」

シャウト「知れば危険がある。だから知ってるのは、『マドラド』でもラリアだけだよ。」

ミリア「そうなんだ…。」

シャウト「でも隠してて悪かった。」

ミリア「ううん。二人はアタシのためを思って黙ってたんだもん。
感謝感謝だよ！ありがとう…シャウト。」

ゼロ「とりあえず、シャウトさんがいるなら、僕は供に行動できないですね。『あの方』にも、色々報告したいコトもありますし、戻りますか。では皆さんご機嫌よう。」

(『ラフオール』に行く)

シャウト「そういえば、ゼロという者は何者なんだ？真実も知っているようだし。」

(ゼロのコトを教える)

シャウト「神官？『バルガレア宮殿』は確かにあるが…。神官が戦う？それにゼロという名前…。」

天満「どうしたんだシャウト？」

シャウト「い、いや…気のせいだろ…。霊神を持つてる神官もいないことは無いしな。だが、あの『アーミア』の知り合いなのか…？」

(『ラフオール』に到着)

琴花「やつぱりここも跡形もないや。」

剣斗「まるで何も無かったみたいだな。」

シャウト「これでは調査の仕様がないな。」

琴花「でもさ、国王の遺体はあつたんでしょ？」

シャウト「ああ、ちょうど城があつた中心に遺体があつた。見せしめのためか…。もちろん城に住んでいる者はすべて……消えた。」

天満「本当に誰がこんなことを…？ん？これは…。指輪……か？文字が……『フィアン』……。」

シャウト「とりあえず、一度『マドラド』に戻るか。いいな、天満。」

天満「あ、ああ。」

(『マドラド』に向かう)

ゼロ「というわけです。なかなか面白い方達でしたよ。」

？「君がそんなに執着する『ディーノ』と『ジラス』、僕も間近で見たくなったよ。でも、それよりも気になるね。その真雪って女の子。」

ゼロ「ええ、もしかしたら探しておられた『神代』^{カミシロ} かもしれません。」

？「ふふ……確かめなきゃね。ゼロに引き続き任せたいけど、他にやってほしいことがあるからね。僕は動けないし……そうだ！もうすぐ彼が帰ってくるから、彼にその女の子をさらってきてもらおうかな？」

ゼロ「彼というと『アスフォート』さんのことですか？」

？「ふふ……彼は紳士だから、女の子を傷付けないと思うしね。」

ゼロ「なるほど。それはそうと、私にやってもらいたいこととは？」

？「君には『天地海』に行つて、『クリアソウル』を探してきてほしいんだ。」

ゼロ「『クリアソウル』ですか……？では、いよいよなんですな。」

？「うん。奴ら国王の死がオープニングを飾ってくれたからね。いよいよ始まるんだ。復讐の旋律が。まずは『ドリューマ』の封印を解く。ふふふふふ……あははははは！」

(『マドラド』に到着)

剣斗「結局ゼロの奴、姿を見せなかったな。どこに行つたんだろうな？」

天満「ゼロのことだ。宮殿に戻ったのかも。神官だし。」

ミラア「でも黙って行くことないのになあ」

シャウト「早速報告だ。ソリッド様に会いにいくぞ。」

ソリッド「お前は何者だ！」

？「これから死ぬ者に教えるのは無意味だと思うが？」

ソリッド「何だと！」

皆「！」

シャウト「ソリッド様！」

ソリッド「シャウト！それに天満達も！」

？「ほう…君達が人間世界から来た者達か。」

天満「誰だ！」

？「ふむ…仕方がないな。私は『アスフォート』。ここに真雪という女性がいるな？」

真雪「え！」

アスフォート「そうか、君か…。悪いが私と一緒に来てもらおう。」

天満「はあ？何言ってる！ふざけてるのか！」

アスフォート「ふざける？私が女性をお誘いするのに、下手な小細工をするように見えるのか？」

天満「くっ…。」

アスフォート「私の『主』が彼女に会いたがっているのだよ。」

天満「『主』？誰だそいつは？」

アスフォート「これ以上語る必要は無い。渡さないと云うのなら、不本意ではあるが、力づくで連れて行く。」

天満「真雪は絶対渡さないっ！逆にお前を倒して、力づくで聞いてやるっ！」

アスフォート「見たところ、君はエルフのようだが…。お手並を見せてもらおう。」

天満「いくぞっ！」

剣斗「みんな！天満を援護だ！」

アスフォート「さすがに全員を相手にするのは面倒だからな。それっ！」

剣斗「な、邪霊！とんでもない数だ！」

琴花「ちよっとちよっとーっ！こんなのアリーー！」

シャウト「とりあえず片っ端から倒すしかない！」

剣斗「でも天満が！」

真雪「私が行くわ！」

シャウト「待てっ！アイツの狙いは君なんだぞ！」

邪霊「ガアアアア！」

シャウト「くっ…！天満…気をつけろ！」

天満「はっ！たあっ！てやあっ！」

アスフォート「ふふふ…。」

天満「くそっ！当たらないっ！」

アスフォート「そうそう、紹介しておこう。この本は『影の霊神ゲイジユ』だ。」

天満「霊神使い！」

アスフォート「君は違うのか。つまらん…霊神使いじゃないとは…。がっかりだな！」

天満「くっ！『クウハキザン空破鬼斬』っ！」

アスフォート「動きはまあまあだな。じゃあこれはどうかな？『シヤドウスピア』！」

天満「数が多い！ぐうわああ！」

アスフォート「そんな攻撃も避けられないのか。面白くない。相手をするだけ無駄のようだ。最後だ！消える『バニッシュバルーン』」

天満「く、くそ……くそっ！」

真雪「ブルーシールド！」

アスフォート「！」

天満「ま、真雪！」

真雪「天くん！大丈夫！」

天満「バカッ！何故来たっ！早く逃げろっ！」

アスフォート「ほう。これは手間が省けたな。」

天満「くそっ！させるかよっ！」ヒエンシツプワジン『飛燕疾風刃』つつ！」

アスフォート「な、早い！ぐう……！」

天満「はあはあはあ、真雪は……渡さないっ！」

真雪「天くん……。」

アスフォート「ふ、驚いたな。速さが増した。だが、今は君よりも

彼女だ！『シャドウシックル』！」

天満「ぐうわあああ！」

真雪「天くん！て…ん……。」

アスフォート「では彼女は頂く。」

天満「待てっ！はあはあはあ…真雪を返せ…。殺すぞ！」

アスフォート「ん？瞳の色が緑に変わった…？………君とはまた近い内会うだろうな。それまで、せいぜい強くなっておくことだな。それではまた会おう。」

天満「ま、待てっ！」

真雪「天………くん……。」

天満「真雪い……………つつっ……！」

次回に続く

第七劇『敗残』

剣斗「天満——！」

琴花「扇くん！真雪は無事？」

天満「う……くっ……！」

琴花「ま、まさか……？さらわれた……の？」

天満「俺は……また……守れなかった……また……俺は……何も……」

剣斗「天満……。」

シャウト「……とりあえず、部屋で話そう。」

剣斗「ほら……天満。行くぞ……。」

天満「あ、ああ……。」

（その頃、真雪は）

真雪「う……うっ……こ……ここは？」

？「あら、目が覚めましたか。」

真雪「はっ！あ、あなたは？」

？「私は『フィアン』と申します。ここがどこなのかは、私にも分からないですわ。私も気がつくところにはいたものですから。」

真雪「そうですか。私は真雪と言います。私はアスフォートという人にさらわれて来たんだと…思います。」

フィアン「真雪さんは何故さらわれたのか、ご存じなのですか？」

真雪「分かりません。それに私は『オルテナ』に来たばかりの人間なんです。初めて来たのに……。」

フィアン「そうでしたの…人間でしたのね。どのような理由で『オルテナ』に来られたのですか？」

（真雪は今までのことを話した）

フィアン「そうですか、戦争を止めに…。ですが、この戦争の真意は……。」

真雪「もしかして…フィアンさんも知ってるんですか？この戦争は真実を隠すための嘘だっということ。」

フィアン「真雪さんもお存じだったのですか！本当に愚かしい事実です。その事実を知ったのは父が殺された時なのですから、私自身も愚かですわ。」

真雪「父？もしかして…？」

フィアン「はい。『地のラフォール国王』は私の父ですわ。」

真雪「！」

（その頃为天満は）

ソリッド「何故、真雪さんが連れていかれたのか、それに『主』とは誰なのか。そして、両国が滅ぶという事実。分からないことだらけだな。」

シャウト「これからどうするか…。」

天満「そんなの決まってるだろう！真雪を取り戻すんだ！そうだろう！」

皆「……………」

天満「なんで黙ってるんだよ！」

シャウト「とにかく落ち着くんだ。」

天満「落ち着けるかつ！俺のせいで真雪は…俺が『オルテナ』に連れて来たせいであんなことになったんだぞっ！もしかしたら、真雪は今苦しい目にあってるかもしれないんだぞ…。それに、泣いてたんだ……守るって……悲しい思いはさせないって誓ったのに……。」

シャウト「勘違いするな！」

天満「え…！」

シャウト「悔しい思いをしてるのは、お前だけじゃない。あの時、誰一人として、アスフォートの行いを止めることが出来なかった。皆悔しいんだ！だから必死でどうすればいいか考えているんだ！悔やむより今はすることがあるだろ！」

天満「シャウト…皆…。」

剣斗「真雪は必ず救い出す！」

琴花「そう！今度はアイツをギャフンと言わすよ！」

ミリア「天満を悲しませる奴は、このミリアちゃんがやってあげるよ！」

シャウト「お前が過去に何があつたのかは、詳しくは知らない。だが今は一人じゃないだろ？お前の周りには信じあえる仲間がこんなにもいる。」

天満「皆……ありがとう……ありがとう…。」

剣斗「だけどそのためには。」

シャウト「ああ…今奴の居場所を突き止めても、返りうちにあう確率が高い。それほど、奴は強い。」

天満「何だってやるさ！真雪を取り戻すのに力が必要なら、必ず手

に入れて真雪を救い出すんだ！」

皆「うん！」

琴花「でもさ、実際どうすればいいの？そんな短時間で強くなれるの？」

天満「アスフォート……アイツが言ってた。霊神を持ってないのはつまらないって。」

シャウト「確かに霊神を味方につければ、戦闘力は確実に上がる。」

剣斗「でも俺達は霊神持つてるけど、ドームにすら歯が立たなかったぞ！」

シャウト「お前達三人は人間だからな。やはり身体的にはエルフより劣る。」

ミリア「じゃあ、どうすればいいのよ！これ以上強くなれないの？」

シャウト「一つだけある。だがこの方法は……。」

剣斗「あるなら言ってくれ！危険があるかもしれないってのは分かってる！」

天満「そんなの駄目だ！危険があるって……。」

剣斗「天満、俺はお前の力になる。そう決めたんだ。あの時……お前が俺を救ってくれた時に。」

天満「でも…。」

剣斗「俺はお前に会わなかったら、死んでたと思う。でっけえ借りだ……返す時は今なんだ！俺に返させてくれよ！そして今度は、お前が持つてる荷物を、少し俺に貸せよ。親友だろ？」

天満「剣…斗…。」

琴花「はいはいはい、男同士の熱い愛情はいいんだけどさ。」

剣斗「愛情じゃねえ！友情だ友情！」

琴花「とにかく、私だって降りないからね。私にもここに来た理由がしっかりある！それをクリアしないで帰るなんてできないからさ。中途半端はもう卒業だかね！しっかり最後までやり通す！今の私に迷いはないよ！」

ミリア「アタシだって！」

シャウト「ミリア…。」

ミリア「ラリアにも約束したんだもん。必ず平和にして、皆で『虹色蝶』を見に行くって！誰一人欠けたってダメなんだからね！アタシも平和を取り戻すために頑張っちゃうよ！」

シャウト「ふ…大きくなったもんだな。あの泣き虫ミリアが…。（ボソ）」

天満「俺は母さんを守るため。全ての真実を知るため。そして、真雪を取り戻す！どんなことをするにしたって力がある。だったら俺

は強くなる！譲れないモノがある！それを守るために！」

ソリッド「この子達…人間とは思議だな。エルフと違って寿命が短い、だから必死で守るんだろうな。大切なモノを…。」

シャウト「お前達の覚悟、確かに見極めた！よしっ！人間のお前達には、私が自ら修業を課す。」

天満「俺は？」

シャウト「天満には、『究の回廊』に行ってもらっ。」

天満「そこなら、ララアさんで行ったぞ。」

シャウト「知っている。だが『極の宝塔』には辿り着いてはいないだろ？」

天満「あ！そういえばララアさんが、この先はまだ早いつて言ってたな。」

シャウト「そこには、霊神や邪霊がウヨウヨいる。そして、頂上に辿り着いた者はいないとまで言われている。いい伝えでは、『霊神王』の降り立つ場所だと言われている。」

天満「いい伝えか…。」

シャウト「だが、何かしら強くなるヒントを得られるかもしれない行ってみる価値はあるぞ！」

天満「そうだな、分かった！」

剣斗「ちよつと待ってくれよ！そんなに危険だったら皆で行けばいいだろ？」

シャウト「そんな時間はない。それに、『究の回廊』はエルフしか入れない。もちろん霊神は入れるがな。人間の体では耐えられない場所なんだ。」

剣斗「……っ！」

天満「剣斗、俺を信じてくれ。俺は一人じゃないんだろ？」

剣斗「天満…分かった。気を付けろよ！そして…強くなれよ！」

天満「剣斗もな！それに、琴花もミリアも、頑張れっ！」

琴花「な～んか、取って付けたような言い方だけど、扇くんも頑張って！」

ミリア「絶対真雪を助けようね！ライバルがないのはつまらないしね！」

天満「え！あ、あの…！」

シャウト「アハハ！お前達なら必ずやれる！自分達の可能性と絆を信じる！じゃあ早速天満は『究の回廊』へ。これは途中までの地図だ。」

天満「ああ、ありがとう！皆っ！行ってくる！頑張ろうな！」

皆「おうっ！」

（天満は『究の回廊』に到着）

天満「着いた。はぁ~~~~ふう~~~~。よしっ！ん？邪霊か！」

？「シャアアア！」

天満「か、数が多い！しかもこいつは、毒の『アウトビート』じゃないか！どうする…！」

アウトビート「『ポイズンバイト』！」

天満「くっ！」

？「『烈千華』っ！」

アウトビート「ギアアアア！」

天満「お、お前は！」

？「相変わらず弱いな。天満とやら…。」

天満「確かあの時の…？『アイズ』…だったな。」

アイズ「ふ…覚えてたのか。」

天満「忘れるか！」

アイズ「とにかく今はお前なんかに関わってる暇はない。危ないところを助けてやったんだ。早く帰りなよ。」

天満「助けてくれたことには礼を言う。だけど、まだしっかり答えてもらってはいない！」

アイズ「何をだ？」

天満「お前は何者なんだ？」

アイズ「答える義務は無い！」

天満「だったら一つだけでいい。ここに来た理由は何だ？」

アイズ「……探しものだ。」

天満「探しもの？『究の回廊』にか？」

アイズ「ああそうだ。ここに導かれた。」

天満「導かれた？何に？」

アイズ「そこまで答える義務は無い。」

天満「…お前は国を滅ぼした奴じゃないんだな？」

アイズ「質問は一つだろ？」

天満「……………」

アイズ「まあいいか。僕はお前達が城を滅ぼした奴だと思った。こ
う言えばわかるな？」

天満「…そうか…良かった。」

アイズ「変な奴だな。怒ったかと思えば、今度は笑いか。」

天満「まあいいだろ？それより、俺もここに用があつて来たんだ。
強くなるために。」

アイズ「お前の腕じゃ命を落とすぞ。」

天満「俺はまだ死ねない。大切な人がいるから。守りたい人を救い
出さなきゃならない。だから、しがみついても生きて力を得るん
だ！」

アイズ「………勝手にするんだな。本当に死んでも知らないぞ。」

天満「俺は負けない！真雪、待っててくれよ！」

（その頃ゼロは）

ゼロ「素直に渡して頂けませんか？あなた方を傷つけたくはありません。
今では数少なくなつた『海のエルフ』族を。」

海のエルフ族の長「お主が何と言おうと渡せん！お主は忌まわしき
過去を繰り返す気かつ！」

ゼロ「嫌ですねえ。『クリアソウル』を欲しているのは僕じゃないですよ！欲しているのは僕のいわゆる上司って方です。ですから持って帰らないと叱られちゃうんですよ。」

海のエルフ族の長「立ち去れい！」

ゼロ「話し合いには応じてくれないんですか？」

海のエルフ達「帰れ！帰れ！帰れ！」

ゼロ「ん～なら、話し合い以外の手になりますね。残念です……な～んで、実はもう手に入れたんですけどね！」

海のエルフ族の長「なっ！なんじゃとっ！……なんじゃ……まだあるではないか。」

ゼロ「ふむふむ、なるほどなるほど。あの柱の球がそうなんですか。」

海のエルフ族の長「し、しもつた！皆の者、こやつを取り抑えろ！」

ゼロ「はあ～素直に渡して頂ければ良かったのに。まったく……仕方が無いですね！」

海のエルフ達「うわあああああ！」

ゼロ「いやいや、随分手間取りましたが、『クリアソウル』頂きましたよ。では皆さん、ご機嫌よう……。」

海のエルフ族の長「あ、悪魔じゃ……一瞬で皆を……！」

（ゼロ帰還）

ゼロ「なかなか苦労させられましたよ。」

？「海族は頑固だからねえ。でもゼロならやってくれると思ってたよ。これで、あと二つだね。ところで、捕えてきた女の子達にそろそろ会ってみようと思うんだけど……。」

ゼロ「分かりました。お嬢さん方は『空の間』にいらっしやいます。」

（その頃真雪は）

真雪「フィアンさんのお父さんが真実を消そうとしていたって本当なんですか？」

フィアン「ええ、父は亡くなる寸前に、この『メモリーキューブ』を私に。これは、記憶を残すことができるのですわ。この中には父と『エーテル王』が密会してるところが残されていました。」

真雪「それでフィアンさんは知ったんですね。」

（誰かがドアをノックする）

二人「！」

？「初めまして。僕は『ネオス』……。」

次回に続く

第八劇『覚醒』

真雪「え？だ、誰？子供？」

ネオス「失礼だなあ。それでも君の何十倍も生きてるのに。ま、それはそうと君達に少し聞きたいことがあるんだよ。」

真雪「聞きたいこと？そ、その前にあなたは誰なの？」

ネオス「この言葉を言うと分かるかな？『天神地祇』と…。」

真雪「まさかつ！」

ネオス「ふふ…そっちの女の子は僕とは初めてじゃないよね？」

フィアン「あの時は顔を隠されておられたので、気がつきませんでしたけれど、そのお声は…。」

ネオス「そう、君の父親を殺したのは僕だよ。」

真雪「えっ！？な、何故そんなことを？」

ネオス「何故…？君達は許せるのかい？奴らの行ってきた醜い茶番を…。奴らのせいで、どれだけのエルフが死んだと思う？」

フィアン「……。」

真雪「フィアンさん…。で、でも何も殺すことないじゃない！確かに絶対許せることじゃないけど、城ごと破壊したりなんて……。」

ネオス「そうか…君は知らないんだね。あの両国の城に住んでる奴らは連帯責任だよ。見て見ぬ振りをしてたんだからね。」

真雪「でも全員が知ってたわけじゃないでしょ？知らない人もいたはずよ！」

ネオス「まあ、あの城に仕えてたのが不運だったね。」

真雪「不運…？あなたは一体何様なのっ？何がしたいのっ？」

ネオス「ふ…僕はこの世界を浄化するものだよ。汚いものは全て排除するんだ。そのために君達にここに来てもらっただけだからね。」

二人「！」

（その頃天満は）

天満「とりあえず『極の宝塔』を目指さなきゃな。」

アイズ「『極の宝塔』？お前、死にたいのか？あそこは危険なんてもんじゃないぞ！」

天満「らしいな。でも強くなるためなんだ！」

アイズ「だが、あそこは霊神を持ってない奴が行くところじゃない。」

天満「アイズは持つてるのか？」

アイズ「当たり前だ。でなければ、こんな所に来ない。」

天満「……………」

アイズ「分かったら早く帰れ！」

天満「ありがとうな。」

アイズ「な、何言ってる！」

天満「でも引くわけには行かないんだ。待つてる人がいるから。」

アイズ「お前は…死ぬことが怖くないのか？」

天満「怖いに決まってるだろう？ だけど、何もできないのが一番怖いから…。アイツ…地門にも負けない強さが欲しいんだ。体も心も。」

アイズ「地門？ 誰だ？」

天満「バケモノだよ。俺の中にいるもう一人のな。『ジ阿斯』ともいうんだけど…。」

アイズ「『ジ阿斯』だと！ お、お前、まさか…？ 『ディーノ』か…？」

天満「やっぱシャウトが言ってたとおり、こっちじゃ有名なんだな。
(ボソ)」

アイズ「あの『マーティア』さんの？」

天満「母さんを知ってるのか？」

アイズ「そりゃ知ってるさ。僕は……『ラフォール国の騎士団長』だからな。」

天満「え？見た目は俺より年下に見えるのに……強いはずだな。」

アイズ「何言ってる。僕は十四歳だぞ。」

天満「へ？そ、そうなのか？」

アイズ「団長の座だって、前団長に討ち勝って得たものだ。」

天満「じゃあなおさらだ。俺も、負けてられない！」

アイズ「そうか……あの方の息子だったのか……。」

天満「でもなんでアイズは殺されなかったんだ？城に居たんじゃなかったのか？」

アイズ「居たさ……お前は、この戦争の真意を知ってるか？」

天満「……ああ。」

アイズ「僕は……姉さんに助けられたんだ。その時、真実を知った。」

天満「姉さん？」

アイズ「ふう…無駄話はここまでだ。着いたぞ…ここが『極の宝塔』の入口だな。」

天満「え？あ、ああ。…よしっ！」

アイズ「ここに、手がかりが…。」

天満「不思議な感覚だな。色々な霊神がいるんだな。だけど、『真霊神』じゃないんだな。」

アイズ「上に登る度に霊神の強さが増しているな。同時に狂暴な邪霊も増えてるな。ん？噂をすれば…。」

邪霊「ギギギイイイイ！」

天満「機械の邪霊？」

アイズ「こんな邪霊もいるのか？」

天満「邪魔するなら、蹴散らすっ！！」

アイズ「ほう…あの時よりは動きがよくなってるな。」

天満「ハアッ！『断双飛燕斬』っ！」

邪霊「ギギギイイイイ！『ボルトレーザー』！」

天満「な！うわあああ！」

アイズ「早い！やはり強いな！仕方ない……くらえっ！『羅千華』」

っ！」

邪霊「ギギ？」

アイズ「効いてない？なるほど、霊神の力しか通じないのか。なら、
久々にだすか。……『センコウカ閃光華』っ！」

天満「は、早い……。」

アイズ「どうだ？何も感じなかっただろ？僕の光は全てを瞬時に裁く！」

天満「す、すげえ……！」

アイズ「先に行くぞ。」

天満「……………」

アイズ「どうした？」

天満「アイズがいなきゃ、俺はやられていた……。」

アイズ「だから言っただろ。霊神を持ってない奴がくる所じゃないと。属性攻撃しか効かない奴がいるんだ。」

天満「じゃあなんでシャウトがここに来させたんだ？シャウトならそんなこと知ってるはずなのに……。」

アイズ「シャウトって……。お前、シャウトと知り合いなのか？」

天満「あ、ああ。」

アイズ「霊神の中の霊神『鏡のシャウト』と知り合いだったとはな。」

天満「え…？ええー！っ！」

アイズ「知らなかったのか？奴は『三霊神』の一人だぞ！」

天満「『三霊神』？聞いたことないな。」

アイズ「これだから無知は困る。『三霊神』とは、『オルテナ』を守護する『真霊神』のことだ。他の霊神とは違って、人にもエルフにも獣にも変化できるし、力も絶大だ。」

天満「あのシャウトが…？」

アイズ「そんな奴まで現れたとなると、本当に『オルテナ』に危機が訪れてるみたいだな。」

天満「だったらなおさらだ！なんでこんなとこに来させたんだ？」

アイズ「大方、先読みしたんだろう。僕がここに来ること。そしてお前と一緒に『極の宝塔』に行くことをな。奴は未来を垣間見ることができると聞いて聞かからな。」

天満「は、はあ…。」

アイズ「ちっ、僕はまんまと利用されたってわけだ。だがあのシャウトがコイツを強くするために…。『オルテナ』を救うために天満

が必要ということか……？だが僕がここに来たのは、『これ』に導かれてきたんだ。ここに手がかりがあるんじゃないのか……？」

天満「…アイズ…俺に力を貸して欲しい。」

アイズ「え？」

天満「悔しいけど、俺一人じゃ上まで行けない。頼む！」

アイズ「……………僕は頂上に用がある。ついてくるのは構わない。」

天満「あ、ありがとう。」

アイズ「れ、礼なんてよせ！ほ、ほら、さっさと行くぞ！」

天満「ああ。もうすぐ頂上だ。」

（しばらく歩く）

アイズ「ここを登れば、頂上か……？」

？「何者だ？」

二人「！」

？「何しに来た？」

天満「誰だ？」

？「私はこの『守人テントウ』だ。この先に通すわけにはいかない。」

天満「俺はこの上に用があるんだ！邪魔するなっ！」

アイズ「なるほどな。守人までいるとは、『霊神王』の降り立つ場所というのも、あながち嘘じゃないかもな。」

テントウ「貴様らが何の目的でここに来たのかは知らないが、わが主のため、ここを通すわけにはいかない！」

天満「じゃあお前を倒して、押し通る！」

テントウ「できるものならやってみるがいい！」

天満「行くぞっ！『飛燕斬』っ！」

テントウ「あまいっ！『真・飛燕斬』っ！」

天満「ぐわあああ！」

アイズ「天満！このっ！」

天満「待ってくれ！」

アイズ「な！」

天満「ここは俺に、俺一人でやらせてくれ…。」

アイズ「アイツとお前じゃ實力は段違いだぞ！」

天満「頼む！これくらい乗り越えなきゃダメなんだ。だから、頼む！」

テントウ「……。」

アイズ「天満：分かった。勝手にしろ。」

天満「サンキュー。行くぞっ、テントウ！」

テントウ「……何故だ？何故お前はそこまで力を欲する。」

天満「そんなの、強くなりたからに決まってるだろ？」

テントウ「……。」

天満「強くならなきゃダメなんだ。」

テントウ「！」

天満「大切な人を守るために、何にしたって強さが必要なんだ！早く強くなって助け出してやりたい。こんなとこで、足踏みしてる暇は、俺には無いんだ！」

テントウ「そうか、お前も誰かを守るために戦うんだな。……ならば、どちらの想いが強いか、勝負だっ！」

天満「望むところだっ！」

テントウ「こちらから行くぞっ！『真・飛燕斬』っ！」

天満「くっ！あれだ！俺の『飛燕斬』よりも数倍強い！くそっ！うわああ！」

テントウ「どうやら、私の守る想いの方が強いみたいだな！」

天満「はあはあ……俺……はここまでなのか……真雪……。」

（その頃真雪は）

真雪「天くん……？」

ネオス「ん？」

フィアン「どうかなされましたか？」

真雪「天くんの声が聞こえる。天くん……。」

フィアン「真雪さんのお体が……？」

ネオス「これは『伝心の光』！はは……見つけたよ！『神代』！」

真雪「天くん……。」

（その頃天満は）

天満「はっ！ま、真雪！感じるよ……そうだな。お前が待って
てくれてんだもん。こんなところで……こんなところで負けてられるか
よっ！うおおおーっ！っ！」

テントウ「何？ま、まさか……あの瞳の色……『翡翠眼』！バ、バ
カな！」

天満「行くぞ、テントウ！『真・飛燕斬』っ！」

テントウ「な！それは私の……？くっ！『真・飛燕斬』っ！」

アイズ「何だ！何が起こったんだ？いきなり天満が奴の技を！」

天満「俺はもう負けない……負けられないんだっ！『爆燕斬』っ！」
バクエンザン

テントウ「う、受けきれ……ぐわあああっっ！」

アイズ「アイツ、『飛燕斬』を進化させたのか？」

天満「はあはあ……お……俺の……想いの力……の……勝ちだ。」

テントウ「ふ……そのようだな。お前の想い……確かに強かった……。さ
あ……トドメをさせ……。」

天満「え？」

テントウ「私を殺さなければ、ここは通さない。」

天満「……できない。」

テントウ「な、何故だ？力が欲しいのではないのか？」

天満「欲しいさ。でも、俺が欲しいのは誰かを殺す力じゃない。大切な人を守る力が欲しいんだ！」

テントウ「……お前の名は？」

天満「天満だ…。」

テントウ「天満か…あまい奴だな…。」

？「気に入ったよ！」

天満「え？」

テントウ「『シンセーテン』様！」

アイズ「『シンセーテン』だと？」

天満「え？知ってるのか？」

アイズ「さっき言った『三霊神』の一角だ。まさかここに…。」

シンセーテン「上までおいでよ。君の話が聞きたい。」

テントウ「我が主が気に入るとはな。ついてこい天満！」

天満「アイズもいいか？」

テントウ「……いいだろう。」

アイズ「天満……？」

天満「アイズのお陰でここまで来れたんだ！当然だろ？」

アイズ「……………」

テントウ「さっさと来るんだ。行くぞ。」

（頂上に到着）

シンセーテン「やあ、さっきの戦いは凄かったねえ。」

天満「え…と。」

シンセーテン「ああ、紹介が遅れたね。僕は『天のシンセーテン』だよ！この主をやってるんだ。」

天満「へ、へえ……。 （随分小さいんだな） 」

シンセーテン「今小さいって思っただろ？」

天満「え？あ、あははは……。 」

シンセーテン「まあいいや。やっと会えたね、『天駆ける者』……。 」

天満「え？」

次回に続く

第九劇『悪華』

アイズ「『天駆ける者』だって！」

天満「え？『天駆ける者』って？」

シンセーテン「ふゝむふむ。まだ完全に覚醒したわけじゃないんだねえ。」

テントウ「では、やはり…。」

シンセーテン「そうだねえ、あの瞳の色は間違いなく『天駆ける者』の証だろうね。」

天満「ち、ちょっと待ってくれ！いきなりなんなんだ？詳しく説明してくれよ！」

アイズ「まさか、天満が…？」

シンセーテン「じゃあ僕が説明してあげるね。遙か昔、この『オルテナ』に、まだエルフが存在してなかった時代。そう、霊神だけが存在していた時代。ある一つの生命体が『オルテナ』に降り立った。そして、その生命体から一人のエルフが誕生した。」

アイズ「聞いたことがある。そのエルフの名前は確か…。」

テントウ「『始まりのエルフ』。」

アイズ「そうだ！エルフネームで『アオス』だ！」

シンセーテン「そう。そして、その『アオス』は霊神を統べる、心優しい『オルテナ』の王になっていった。だが『アオス』は、ある時思った。『退屈だ』と。その時から『アオス』は変わった。霊神を蹂躪していった。ある時は霊神を虐殺したり、ある時は霊神に邪悪な心を植え付けたりもした。」

天満「そうか！そうやって生まれたのが『邪霊』なんだな！」

シンセーテン「そのとおりだよ。だけど、『アオス』の蹂躪時代に幕が降りる時がきたんだよ。ある時、『アオス』を創造した生命体とは別の生命体が現れたんだよ。そして、その生命体から生まれた者が『アオス』を封印した。」

天満「そいつが『天駆ける者』なのか？」

シンセーテン「その者は白美の翼を纏い、手には『神剣』を持ち、瞳の色は翡翠……。その者の名前は『デイク』。そして、『デイク』は言っただよ。『我が翡翠眼は天の証。無双の証。』と。」

天満「で、でも、俺の瞳は黒だよ！」

テントウ「おそらくは、感情が高ぶった時に力の片鱗として『翡翠眼』になるのであろう。」

天満「俺が……天駆ける者」？」

シンセーテン「まあ、唐突過ぎて分からないよねえ。でも君は真実を知るために『オルテナ』に来たんでしょ？だったら、真実には目を背けちゃダメだよ。」

天満「何で知ってるんだ？」

シンセーテン「シャウトから聞いてるよ。アイツがここに来るように言ったんでしょ？まったく！アイツは強引だからねえ。久々に苦労させられそうだよ。」

天満「シャウトが？」

シンセーテン「そうそう。突然やって来たと思ったら、『ここに辿り着く者に力を貸してやってくれ！きつとお前も気に入る男だから！』って言って、さっさと帰るんだもの。あれでも『三霊神』の一角なのかねえ。」

テントウ「シンセーテン様。お約束通り、私は本気で相手をしました。」

シンセーテン「うん。さて、天満。君の得たい力とは何？」

天満「それは……守る力だ！大切な人を悲しませたくない！だけど今、その人が辛い目にあってるかもしれない。だから、救い出し守るための力が俺には必要なんだ！」

シンセーテン「ふふふ…期待通りの答えが返ってきたねえ。今のエルフにも、君みたいなものもあるんだね。気に入ったよ！僕はこれから君と共に歩もう！君が選んだ道の答えを僕も見なくなつたよ！」

天満「シンセーテン…。」

シンセーテン「テントウ、留守をしっかりと頼むね。」

テントウ「はっ！どうかお気を付けて。」

シンセーテン「それじゃ、これからよろしくね天満！」

（シンセーテンは剣になった。）

天満「よろしくな！シンセーテン。」

テントウ「では、入り口まで飛ばすぞ。」

天満「と、飛ばす？」

アイス「安心しろ。ワープの一種だ。」

天満「そ、そうなのか…。」

テントウ「ではまた会おう。シンセーテン様をよろしく頼む！はっ！」

（入り口に到着）

天満「ほ、本当に一瞬だったな。す、凄い…！」

アイス「天満。」

天満「どうした？」

アイズ「平気……か？」

天満「え？あ、ああ。さすがに動揺してるよ。でも、俺が何だろうと、今することは一つだけだ。真雪を救い出す！」

アイズ「お前は強いな……。」

天満「何だよ急に？俺より強いくせに……。」

アイズ「ふ……ああ……天満には負けないぞ。」

天満「一緒に来ないか？」

アイズ「え？」

天満「アイズが何を探してるのか知らないけど、俺にも何か手伝えることがあるかもしれない。もちろん、真雪を救い出した後で良かったらだけど。」

アイズ「天満……あ、当たり前だ！僕はお前に山程貸しがあるんだ。それを返してもらっまで、ついていかせてもらっ！」

シンセーテン「ふゝむふむ。仲良きことは美しきかな。」

（その頃真雪は）

真雪「はあはあはあ……て……天く……」

フィアン「真雪さんっ！」

ネオス「ふふふ……まさか本当に『神代』だったなんてね。」

フィアン「『神代』……？」

真雪「う……うつ……」

フィアン「真雪さん！ご無事ですか？」

真雪「は、はい……。私はいつたい……？」

ネオス「『神代』だけが扱える『伝心の光』。それを君が使ったんだよ。」

真雪「え……？『神代』？」

ネオス「生け贄だよ。」

真雪「生け贄……？」

ネオス「そう、そのために君達を連れて来たんだよ。」

フィアン「では私も『神代』なのですか？」

ネオス「うつん。『神代』は一人だけだよ。それぞれ天の国と地の国と海の国が『神器』を一つずつ持つてるんだけど、神の復活のためにはその『神器』が必要なんだよ。今僕の手元には、海の国『メ

イルーン』にある『クリアソウル』だけあるんだけど、残り二つの国の『神器』が見つからないんだよ。だから、地の国の王女である君に来てもらったんだよフィアン姫。君なら地の国の『神器』の居場所知ってるよね？」

フィアン「存じ上げません。」

ネオス「しらを切るのかい？」

フィアン「本当に存じ上げません。」

ネオス「……まあいいや。先にもう一つの方、天の国の『レアブレード』を手に入れるとしよう。じゃあまた来るからね。それまでには、本当のことを言う気になるかもね。力づくは本意じゃないからね。」

フィアン「……。」

真雪「天くん……。」

ネオス「ゼロ。」

ゼロ「ここに。」

ネオス「『レアブレード』の情報は？」

ゼロ「それがさっぱりです。天の国にも捕虜として捕えていた方に聞いたのですが、本当に知らなかったみたいです。『ツアビデル』が尋問というか拷問したので間違い無いかと。」

ネオス「そう、とりあえず集合してくれる？」

ゼロ「はい。」

ネオス「やあ、こうやって皆が揃うのは久しぶりだね。ああそうだ
アスフォート、彼女を連れて来てくれてありがとうね。」

アスフォート「いえ。」

？「けっ、相変わらずの紳士気取りか？」

アスフォート「……。」

？「今度はダンマリか？気に食わない野郎だ！」

？「そのへんにするさ」『ツアビデル』。ネオス様の御前さ。」

ツアビデル「そういうテメエこそ、イライラする喋り方するな『ラー
ハイド』！」

ラーハイド「僕はこれが普通さ」。はあ、自分の話し方に酔うさ
」。」

？「そろそろ、本当に静かにしなさい。ネオスが話されます。」

ラーハイド「ゴメンさ」。でも君だってネオス様を呼び捨てはいけ
ないさ。」

ネオス「アハハ！いいよラーハイド。『シェイリア』だけじゃなく、
他の皆も好きに呼べばいいよ。」

ゼロ「ではネオス様。」

ネオス「うん、そうだね。君達に集まってもらったのは他でもないよ。手分けして、『レアブレード』を見つけて欲しいんだ。」

ラーハイド「だけどさ、まだ『アイツ』が来てないさ。」

ネオス「彼なら心配いらないよ。大方、どこかで昼寝でもしてるんじゃないかな？では皆、頼むね。」

ゼロ以外「はっ！」

ネオス「ふふふ…君達『五真将』ならすぐ見つけてくれるだろう。今こそ『天神地祇』の雄志の旗を掲げ、世界を浄化する。あははは…！」

（その頃天満は）

天満「そついや、最初のエルフを生み出した生命体ってなんだ？」

アイズ「分からないが、想像はつく。おそらく…『霊鳥オルフェリア』と『霊獣ドリユーマ』じゃないか？」

シンセーテン「そのとおりだよ。『始まりのエルフ・アオス』を『ドリユーマ』が、『天駆ける者・ディーク』を『オルフェリア』が創造したんだよ。そして、『アオス』を封印した後、『オルフェリア』と『ドリユーマ』は次々とエルフを生み出したんだよ。」

天満「そうか！『オルフェリア』に対抗して、『ドリューマ』もエルフを生み出したんだな。」

シンセーテン「そう。『オルフェリア』は天のエルフを、『ドリューマ』は地のエルフをそれぞれ生み出したんだよ。今でこそ純エルフ、つまり純粋な天や地のエルフは少なくなっちゃったけどね。天と地のエルフが交配すると純粋な血を持つエルフは生まれえないからね。だけど、天満のお母さんみたいな人もいるんだよね。」

天満「な！」

アイズ「『マーティア』さんと、あの男のことだな。」

天満「母さんは…母さんは悪くないんだ。父さんだって…。」

シンセーテン「確かに本来は当人同士の問題なんだろうけど、君のお母さんについては問題があったんだよね。」

天満「く……！」

アイズ「『マーティア』さんは…いや、『マーティア』様は地の国の王女だったからな。しかも、好きになった相手が『霊神』なんだ。騒ぎにならないことが不思議だからな。」

天満「母さんだって、そんなこと分かってたはずさ…。でも、それでも母さんは父さんを選んだんだ！」

シンセーテン「そして、人間界に逃げようとしたが、ハンターがやってきて、君達を殺そうとした。」

天満「ああ…その時父さんが守ってくれたんだ。命を懸けてな。」

シンセーテン「でもね、そんなことで王女を殺すと思う？確かに問題はあるけど、本当に殺されるようなことかい？」

天満「じゃあやっぱり！」

シンセーテン「戦争の真実を知ってたんだよ。」

天満「やっぱり…。」

シンセーテン「後は君のバンダナのせいだよ。」

天満「え？どういうことだ？このバンダナは、『オルテナ』に来る前に母さんに貰ったものだぞ！」

シンセーテン「君が知らないのも無理はないよね。そのバンダナはね、元々天の国に納めてあった『神器』なんだよ。」

アイズ「まさか、このバンダナが『レアブレード』なのか？」

シンセーテン「そのとおりだよ。おそらく、君の父親『星の霊神ダイン』が盗んだんだろうね。」

天満「父さんが…？」

シンセーテン「僕も実際にこの目で、そのバンダナを見なければ分からないかったよ。間違いなく、そのバンダナは『神器レアブレード』だね。」

アイズ「天満、それを『マーティア』様から渡されたって言ったよな？」

天満「ああ…。」

アイズ「ならお前は託されたんだよ。『オルテナ』と人間界の未来を。それに『マーティア』様だって戦ってるはずだ！それにお前の父親も。」

天満「…ああ、ずっと見守ってくれていたんだね。父さん……母さん…。」

シンセーテン「一つの真実が分かって良かったね天満。さあ、もうすぐで『マドラド』に到着するよ！」

天満「ああ。二人とも、ありがとう。」

(『マドラド』に到着)

天満「ソリッドさんっ！」

ソリッド「天満！帰ってきたのか！」

天満「はい。あの…剣斗達は？」

ソリッド「邪霊退治だよ。」

天満「邪霊退治？」

ソリッド「それぞれの地方に行ってもらってるよ。」

天満「修業は…？」

ソリッド「終わったみたいだよ。ふふ、彼らに会つと驚くよ！」

（物陰にゼロ）

ゼロ「おや？天満くん？あの剣は…霊神？へえ、またまた楽しみが増えましたね。」

次回に続く

第十劇『真力』

ソリッド「剣斗は『ルーバル地方』に、琴花は『ハウマン地方』に、ミリアは『トール地方』の、それぞれ各地に現れた邪霊を退治しに行ってもらった。」

天満「シャウトは？」

ソリッド「シャウトには情報収集に行ってもらっている。真雪を拐った者のことや、落城についてのことを、色々調べてもらっている。私もこれから情報収集に動くつもりだ。」

天満「分かりました。取り敢えず皆に会いに行きます。」

ソリッド「ああ、そうしたまえ。」

天満「はい。『オルフェリア』の導きが共にあらんことを。」

ソリッド「アハハ！先に言われてしまったな。では気を付けてな。真雪の居場所が分かれば、すぐ知らせるよ。」

天満「はいっ！」

ゼロ「ほう。シャウトさんはいらっしやらないんですか。なるほどなるほど。」

レイダー「おい。お前もしかしてまた…。」

天満「ここから一番近いのは……『ハウマン地方』だな。確か琴花

が行ったんだよな。」

アイズ「『ハウマン』というと、『風車村』がある。」

天満「行ったことがあるのか？」

アイズ「一度だけな。あそこは『風まんじゅう』が美味い。」

天満「……へえ。」

（『ハウマン』地方に到着）

アイズ「各地方には一つずつ町や村や城がある。『エーテル地方』には『エーテル城』、『マドラド地方』には『ラグミア』、『ハウマン地方』には『風車村』という具合にな。」

天満「なるほど…。でも、ここが『風車村』なのか？」

アイズ「そのようだが…これは…？」

ゼロ「どうやら、邪霊に襲われたようですね。」

二人「！」

天満「ゼロ！」

ゼロ「お久しぶりです天満くん。」

アイス「誰だ？」

天満「俺達の仲間だよ。神官のゼロって言うんだ。それにしても、突然居なくなっただうしたんだよ？」

ゼロ「いやあ、ちょっと宮殿に用があつて、戻ってたんですよ。」

天満「やっぱり戻ってたのか。でも黙って行くことないだろ？」

ゼロ「すみません。ちょっと急いでたんで。」

天満「皆にも謝りなよ？心配してたから。」

ゼロ「はい。それで、そちらの方は？」

アイス「……アイスだ。」

ゼロ「どちらのアイス様で……？」

アイス「お前には関係ない！」

ゼロ「おお怖い。」

天満「まあまあ、それよりゼロはどうしてここに？」

ゼロ「いえね、ここには僕の好物の一つ『風まんじゅう』を食べに来たんですよ。」

アイス「…………。」

天満「アハハ…。」

ゼロ「ですが、どうやらその望みは叶わないようですね。これほど村が壊されては。」

天満「琴花は、ここには居ないのかな？」

アイズ「あのゼロとかいう奴、気配がまるで無かった。何者だ…？
(ボソ)」

天満「どうしたアイズ？」

アイズ「いや…。」

ゼロ「……………」

天満「とにかくこの『風車村』を見て回ろう。」

アイズ「これは酷いな…。爆破されたみたいに家が吹き飛んでる。エルフ達も殺されたのか？この村にいないようだ。」

ゼロ「この感じは……天満くん。」

天満「ん？」

ゼロ「僕はあっちの方を探してみますね。手分けして手がかりを見つけた方がいいでしょうから。」

天満「あ、ああ。」

アイズ「……。」

天満「ん？この音は？」

アイズ「音？……聞こえる。確かに聞こえるな。」

天満「あっちからだ！」

アイズ「あれは！邪霊か！」

邪霊「まだおったのか？グフフフ、破壊だ、破壊させろ！」

天満「コイツが村を！？」

アイズ「貴様のせいで『風まんじゅう』が味わえなくなった。その罪、死で償え！」

天満「そ、相当怒ってるな……。」

アイズ「『センカシケレ千華時雨』っ！」

邪霊「グフッ！やるな……おめえだ……おめえを破壊させろ！」

ゼロ「やはり、あの邪霊は……。」

邪霊「『バーンクラッシュ』！」

アイズ「くっ！……おかしい。今までの邪霊とは何か違う。力も大きさも違う！」

邪霊「その程度か！グフフフ…。」

アイズ「その程度かだと？ふ…後悔するなよ。まあ、もっとも後悔してる暇なんて与えないがな！」

邪霊とゼロ「！」

天満「あれは…アイズの霊神か？」

アイズ「貴様に特別に見せてやるよ。これから貴様を葬る霊神をな。」

ゼロ「ま、まさか…：…霊神の中でも極めて属性力が強い…：『光』の霊神。」

アイズ「さあ、久々にお前自身を奴にぶつけるぞ『レイゼクス』！」

レイゼクス「久方ぶりですね。任されました。」

アイズ「いけっ！レイゼクスッ！」

邪霊「な、何い！グウウウ！左腕が…！」

アイズ「ほう、避けたか。」

天満「すげえ…：奴の左腕が消えた…！」

ゼロ「どうやら『光』に吸収されたようですね。それにしても、『光』の霊神を完全に使いこなせている。驚きですね。」

邪霊「グッ…。」

？「そのへんにしておくさ。」

アイズ「誰だ！」

ゼロ「やはり『ラーハイド』の気配でしたか。」

ラーハイド「んゝ君に勝ち目は無いさ。」

邪霊「し、しかし……まだ戦えます！」

ラーハイド「はあゝ僕は君を心配しているのにさ。そんなに死にたいのさ？」

邪霊「大丈夫です！こんな奴など！」

ラーハイド「ふふ……『エクスプロード』。」

邪霊「グハアアアア！」

アイズ「！」

ラーハイド「やはり美しいさ。華やかに散る…何て美しいさ。」

アイズ「貴様は何者だ！」

ラーハイド「んゝ僕は『美の貴公子ラーハイド』さ。」

天満「さっきの『錬術』…。お前が村を破壊したのか！」

ラーハイド「イエース、そのとおりさ。だってこの村には僕様の探し物が無かったのさ。」

アイズ「それだけの理由で破壊したのか！」

ラーハイド「んー一番の理由は、この村があまりに美しくないからさ。見てみたまえ、あの風車なんてさ、形がとても不細工さ。」

天満「ふざけるなっ！」

アイズ「さっきの邪霊はなんだ？」

ラーハイド「ただの使い捨てのゴミさ。」

天満「ゴ、ゴミ…？…ここに居たエルフ達はどうした？」

ラーハイド「…華やかに散ったさ。花火みたいに美しかったさ。」

アイズ「許さん！行くぞ天満！」

天満「ああ！」

ラーハイド「困ったさ。僕はこれでも忙しい身なのにさ。」

アイズ「くらえっ！」

ラーハイド「僕様にとって近距離は美しくないさ。だから遠距離

で片をつけるさ。『エクスプロード』。」「

アイズ「ちいっ！くそっ、近付けない！」

ラーハイド「んふふ。」「

？「わあ〜ん！おつかあ〜どこ〜？」

天満「子供っ！？」「

ラーハイド「ああ〜美しくない泣き方さ。『ネイルバースト』。」「

天満「まずいつ！」「

アイズ「く、くそっ！間に合わな…。」「

？「『ストルムウォール』ッ！」「

ラーハイド「！」「

？「こんな小さな子供にまで手を出すなんて！アンタ、ぶっとばすよ！」「

天満「『琴花』！」「

ゼロ「これはこれは。」「

琴花「扇くん？お久だね！ところで何でここにいの？」「

天満「琴花を探してたんだよ！」

琴花「あ、そうなの。でも話は後。今はコイツを！」

ラーハイド「う、美しい…。」

三人「へ？」

ラーハイド「なんて美しいさ〜！この僕様の美の攻撃を防いだ手際、それに、あの容姿！」

アイズ「何だコイツ？」

ゼロ「おやおや。」

ラーハイド「君の名前は何か？」

琴花「何コイツ？私は琴花よ！何か文句ある！」

ラーハイド「こ・と・か…。な、名前まで美しいさ。ああ〜君と
もつと話したいけど、そろそろ時間さ。ああ〜この胸の痛み…。
これは、いわゆる恋なのさ〜？」

天満「こ、琴花…：よ…良かったな…。なかなかハンサム…じゃん。
」

琴花「いやあああ…：…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！
やあああ…：…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！
」

ラーハイド「んふふ〜そんなに照れないさ〜、マイハニー。」

琴花「き、気持ち悪いのよっ！『ハリケーンカッター』ッ！」

ラーハイド「おおっと。んゝ君の熱い愛の告白、しっかり受けとったさ。もう僕様達の愛はラブラブハリケーンさ。それじゃまたいつか会いにくるさゝマイハニ。」

琴花「あ、待てー！っ！こ、この、待ちやがれー！っ！」

アイズ「一体何だったんだアイツは？」

ゼロ「やれやれ。」

天満「こ、琴花？」

琴花「はあはあはあ……何っ！」

天満「う……。」

琴花「ああ、ごめん。ん？アンタは？……ア、アイズッ！」

アイズ「うるさい女だ。本当は男なんじゃないのか？」

琴花「な、何いー！っ！」

天満「まあまあ。ところで琴花、強くなつたよなあ。」

琴花「当たり前だよ！やつと強さを手に入れることができたからね。色々話したいこともあるけど、その前にあの子を母親の元に送ってあげなきゃ。」

天満「え？で、でも…。」

琴花「大丈夫！ここのエルフ達は私が助けたから。逃げ遅れたエルフは残念だけど…。」

天満「そうか…ところで助けたエルフ達はどこに？」

琴花「あっちの洞穴にいるよ。」

ゼロ「では僕がこの子連れて行きますよ。」

琴花「ゼロ！アンタ何で！」

ゼロ「お久しぶりです琴花さん。心配かけてすみませんでした。」

琴花「え、まあ無事なら良かったけど。」

ゼロ「では行ってきますね。さあ、行きますよ。」

子供「う、うん…。ありがとうお姉ちゃん。」

琴花「うん。気を付けてね。」

天満「それで、琴花…。」

琴花「ああうん。私達は…。」

（天満と分かれた時）

シャウト「さっきも言ったが、このやり方は極めて危険だ。」

剣斗「だから分かってるって!」

シャウト「…分かった。じゃあ霊神具を出してくれ。」

三人「…?」

ミリア「出したけど、どうするの?」

シャウト「今からする修業は霊神の力を使わない。」

琴花「どういうこと?」

シャウト「人間のお前達にはエルフ程の身体能力は無い。だが人間には特別な力を持っている者がいる。」

剣斗「俺達にそんな力が?」

シャウト「初めて会った時に、私はこう言っただけだ。君達には『法術』の素質があると。」

剣斗と琴花「あ!」

ミリア「?」

シャウト「『法術』というのは、あらゆるモノを強化する術だ。人間だけが使える術だ。ラリアに聞いたと思うが、『法錬術』の真の

意味とは、『法術』と『錬術』が融合した術のことなんだ。」

ミリア「そうだったんだ。アタシ達が使ってるのは、ただの『錬術』だったんだ。だからエルフ達は『法錬術』じゃなくて、『錬術』って呼ぶんだ。じゃあエルフは『法錬術』を使えないの？」

シャウト「ああ、そのはずだ。さて、それでは始めようか。」

剣斗「一体どんなことをするんだ？」

シャウト「以前『水鏡の試練』を受けただろう？今度は『明鏡の試練』を受けてもらう。」

ミリア「『明鏡の試練』？初めて聞いたよ。」

シャウト「だが、この試練は本当に危険なんだ。出てこれないかもしれない……。かつて一人だけ……。一人だけがこの試練を受けて、試練に耐え抜き、出てきた。」

剣斗「一人だけ……。？というか俺達以外の人間が試練を受けたのか？」

シャウト「ああ……。じゃあさっそく入ってもらう。この鏡に入れ。ただし、私からお前達を出すことはできない。自力で出てくしかないんだ。」

剣斗「分かってるよ！じゃあ行ってくる！そりゃー！」

琴花「私も！えいっ！」

ミリア「じゃあ行ってくるねシャウト。」

シャウト「ああ、ミリア……気を付けてな。」

ミリア「大丈夫大丈夫！それっ！」

シャウト「……必ず……必ず帰ってこいよ。お前も見守っててやってくれ……」司郎『よ。』」

次回に続く

第十一劇『法術』

剣斗「ここが、鏡の中なのか？ん？あれは……琴花とミリア？おー
ーい！」

琴花「剣斗！」

剣斗「へえ、今度の試練はみんなでか。」

ミリア「そうみたいだけど、これからどうすればいいんだろ？」

？「ほっほっほ。」

三人「！」

？「お主らかい？シャウトの言っただ人間ちゅーのは。」

剣斗「へ？だ、誰？」

？「ワシは『アキュア』っちゅーババアだで。」

琴花「え……と、さっきシャウトって言っただけ……。」

アキュア「そうじゃったそうじゃった。お主らの案内をするのはワシだよ。」

ミリア「じゃあアキュアおばあちゃんが『法術』を覚えてくれるの？」

アキュア「いんや。」

剣斗「え？教えてくれないのか？」

アキュア「ワシは『鏡の思念』みたいなもので、『法術』は使えんわい。」

剣斗「だったら何を案内するんだ？」

アキュア「ほっほ。まあ、ついてきなされ。」

三人「……………」

(しばらく歩く)

剣斗「はあはあはあ…もう随分歩いたぞ。まだなのか？」

アキュア「ここだぞ。」

琴花「ふゝ疲れたゝ。ここ…って何もないじゃん！」

剣斗「どういことなんだ…？」

アキュア「まあ、見なさいな。『我が汝の縁^{エニシ}に従い、アキュアの名のもとに訪れ出でよ』！」

ミリア「何？地震？」

（一つの大鏡が現れる）

アキュア「この鏡に手を当ててみなされ。」

剣斗「当てると…どうなるんだ？」

アキュア「当てれば分かるだで。」

（三人顔を見回して、手を当てる）

アキュア「ほっほ。」

剣斗「な！光が！うわあああ！」

琴花とミリア「きゃああああ！」

アキュア「闇にうち勝つんじゃ。己の闇にのう。」

剣斗「こ、ここは…？何も見えない？なんなんだ、ここは？琴花っ！ミリアッ！」

琴花「何なの？体が震えてくる！寒いっ！寒いよ…。」

ミリア「独りぼっちは嫌…。怖い…助けて……ラリア。」

剣斗「う……もう……何も考えられない……動くのも考えるのもめんど

くさい……はは……ここで死ぬのか……？いいや……どうせ生きてた
ってしょうがない……何もやる気しない……」

琴花「そうよ……どうせ生きて帰ったって……つまらない人生になる
んだから……適当に就職して……何も考えずただ働いて……もう……ど
うでもいいや……」

ミリア「所詮アタシはラアラの本当の子供じゃない……アタシは独り
なのよ……お母さんやお父さんもいない……ずっと独りぼっちなん
だ……そんな辛い思いをするなら死んだ方が……」

（その頃シャウトは）

シャウト「今頃は闇の中か……。あの闇は自分の触れられたくない過
去に触れられ、無理矢理思い出させ、悩ませる。この試練は、生半
可な精神力じゃ生きて帰れない。それこそ、何事にも負けない、強
靱な心が必要なんだ。だが……心というものは傷つきやすい。それ
に……一度負った傷は、治りにくい。あの子らも過去に深い傷を持
っている。……ダメかもしれない。だが……願ってしまう。それでも、
人の心は強いのだと……。お前がそうだったようにな……『司郎』。」

（再び剣斗達へ）

剣斗「あれは……俺？」

偽剣斗「もういいじゃねえか。お前は十分戦ったさ。それに、これ

以上生きていても、むなしいだけだぜ。お前は弱いんだからな。」

剣斗「ああ……俺は……弱い……。」

偽琴花「アンタはこれから、ずっと中途半端なのよ。何も真剣になれるものがなく、ただただ生きてるだけ。友達にも愛想付き合い。アンタが生きていても無意味と思わない？」

琴花「そう……私は何をやるにも中途半端……もう……どうでもいいかな……。」

偽ミリア「あなたは独りよ。周りはエルフばかり。ラリアだって本当は迷惑してるのよ。人間のあなたといることを！」

ミリア「そうだよね……アタシには両親なんていないし……これ以上ラリアに迷惑がかかるんだったら……死のうかな……？死ねば本当のお母さんとお父さんに会えるもんね……。」

アキュア「どうやらここまでみたいだな。『司郎』が特別過ぎたのかもしれない。残念じゃがこれ以上は！」

シャウト「待ってくれ！」

アキュア「シャウト！」

シャウト「いきなりすまない。もう少し、もう少しだけ待ってやってくれ！」

アキュア「手遅れになるやもしれんのか？」

シャウト「あの子達なら…あの子達なら越えられるかもしれないんだ。アイツと…『司郎』と同じ高みに行けるかもしれないんだ。」

アキュア「根拠は!」

シャウト「ない…。ただ私はあの子達を…信じてる!」

アキュア「……好きにせい。バカモンが…。」

シャウト「ありがとう、ばあちゃん。」

偽剣斗「さあ、もうすぐで楽になれる。」

剣斗「へへ…楽に…。」

偽琴花「アンタの人生も、もう終わりよ。」

琴花「終わりが…。」

偽ミリア「早くお父さんとお母さんに会いに行こう。」

ミリア「会いに…行こう。」

シャウト「お前達の信念は、所詮その程度だったのか!」

三人「!」

シャウト「お前達の強さはこの程度なのか?」

剣斗「もう…いいんだよ。俺はあの頃と同じ……イジメられてた

時と同じ…弱い人間さ。」

琴花「何をやるにも中途半端な私なんか……生きてても仕方ないよ…。」

ミリア「邪魔しないで…お母さんとお父さんに会いに行くんだから。」

シャウト「確かにお前達は弱いつ！だが、強くなるためにここまできたんだろっ！剣斗！」

剣斗「…………。」

シャウト「いつまでも過去に縛られてどうする！昔の自分が嫌で、無価値な自分が嫌で強くなろうとしたのではないのか？お前をそんな闇の中から救ってくれた者の思いを踏みにじる気かっ！」

剣斗「はっ！て、天満…。」

シャウト「お前はいつたい誰のために強さを求めたんだ！思いだせっ！新垣剣斗！」

剣斗「俺は…。」

偽剣斗「耳を貸すことはない。お前はここで死ぬ。」

剣斗「黙れ…。」

偽剣斗「弱いお前なんて誰も見てくれないさ。」

剣斗「黙れっつ！」

偽剣斗「！」

剣斗「俺は何をしてたんだ。こんな闇なんかには負けそうになって。昔の闇に比べれば、どうってことないのによ。はは…こんなところにくすぶってちゃ、天満に置いてかれるぜ。」

偽剣斗「お前は弱いんだぞ！」

剣斗「ああ、弱いさ！だから強くなるためにここまで来た！俺はもう迷わない！闇なんかには絶対負けねえっ！消えやがれ、俺の闇いっ！」

偽剣斗「うわあああっ！」

剣斗「体が光って…？これが『法術』なのか？」

シャウト「琴花よ…中途半端はそんなに嫌か？」

琴花「当たり前じゃない。まともに一つもやり遂げてないんだよ。」

シャウト「では一つの信念を貫いてみたらどうだ？」

琴花「信念？」

シャウト「ああ。お前に大切な何かはないのか？」

琴花「い…る。大切な友達が。」

偽琴花「でも上っ面だけの付き合いでしょ。」

琴花「確かに私は心のどこかで距離を置いてしまっ。」

シャウト「大丈夫だ。お前は友達がいる世界を守るためにここまで来た。その思いは本物だ。だったら何を貫いたらいいか分かるな？あの時の思いが嘘ではないことを証明してみせろっ！相田琴花っ！」

琴花「嘘…じゃない。」

偽琴花「嘘よ。」

琴花「違う。」

偽琴花「アンタは嘘つきよ。」

琴花「違うっっ！」

偽琴花「！」

琴花「確かに私は今まで中途半端に生きてきた。だけど…ここに来ることを決めた時に、私だって何かを守れる。そう思ったから…。こんな私と友達になつてくれた人達を守りたい。そう思ったからここまで来たんだよ！だから私は今日ここで、完全に卒業するんだ！中途半端な私と決別するんだ！あの時の思いに偽りはないんだからっ！だから消えろっ、過去の私っ！」

偽琴花「きゃあああっ！」

琴花「え？この光は…？なんか、凄く優しい光…。」

シャウト「ミリア…死にたいのか？」

ミリア「そうすれば、お母さんとお父さんに…。」

シャウト「死んでも会えないぞ。」

ミリア「会えるもん。死ねばきつと…。」

シャウト「そんなことをすれば、完全に嫌われるな。」

ミリア「シャウトに何が分かるのよ!」

シャウト「分かるさ。俺は…お前の父親…『水鏡司郎』の親友であり、霊神だったんだからな。」

ミリア「え!? 嘘…シャウトが霊神…?」

シャウト「嘘じゃない。」

ミリア「…………。」

シャウト「そして、この試練に耐えぬいた人間が、お前の父親だ。」

ミリア「お父さんが…。」

シャウト「アイツはお前達を守るため、必死でこの試練を乗り越えた。時には自分に負けそうになりながらも、心を強く持ち耐えた。なぜなら、こんなところで死ぬわけにはいかなかったからだ。愛するお前と母親の想いを守るために。」

ミリア「あ…あ。」

シャウト「そんなアイツが、今のミリアを見たらどう思うだろうって？」

ミリア「アタシは…。」

偽ミリア「大丈夫だって。頑張ったミリアを褒めてくれるよ！」

ミリア「…ない。」

偽ミリア「え？」

ミリア「そんなわけないっ！」

偽ミリア「！」

ミリア「アタシどうかしてた。死がどんなに悲しいことが知ってるはずなのに！アタシを残して死んでいったお母さんとお父さんが憎くて…。でも、本当に悲しいのはただ死ぬことじゃなく、大好きな人を残して死ぬことだって！そんなこと…分かってたはずなのに…。辛いのはアタシだけと思ってた…。でも、お母さんとお父さんも、それにシャウトだって辛いんだよね。」

偽ミリア「だから会いに行くんじゃない。」

ミリア「うるさいっ！」

偽ミリア「！」

ミリア「アタシは独りなんかじゃない！アタシにはラリアやシャウトがいる。そして、一緒に戦う仲間がいる！みんなごめん……そうだよ、死ぬなんて言葉、使っちゃダメだよ。必死に生きることだけ考えなくちゃ。じゃなきゃ、お父さんに怒られちゃうね。……アタシは生きる！もう死ぬなんて言わない思わない！前だけ見てミラアちゃん街道まっしぐらだよ！アタシの弱い心なんて邪魔だよ！いなくなっちゃえっ！」

偽ミリア「きゃあああっ！」

ミリア「感じるよ……温かい光……。これが『法術』の光……。」

シャウト「よくやった……みんな！」

（皆が鏡から出てくる）

アキュア「どうやら危機一髪のようだで。」

ミリア「アキュアばあちゃん。」

アキュア「うんうん。よく無事に帰ってきたのう。」

剣斗「かなり際どかったけどな。」

琴花「私も……でもいろんな意味で強くなれた気がする。」

ミリア「うん。アタシも強くなれた気がするよ。うんとねっ！」

アキュア「ふむ。それでは説明するだで。もう分かっていると思う
だでが、その光が『法術』の光だで。」

剣斗「やっぱな。」

アキュア「その光はお主らの想いの光。じゃが詳しく説明するまで
もなく、こういうものか自然に頭に流れてくるじゃろ?」

琴花「うん。この光が教えてくれたよ。」

アキュア「あとは実戦で学んでいくだけだで。」

ミリア「そうだよね!」

アキュア「ワシに出来ることはここまでだで。それにしても、本当
によう耐えたのう。お主らの強い想いなら、きつと乗り越えられる
はずだで。しっかりの。」

三人「ありがとうございますたつつつ!」

アキュア「それじゃ、さらばだで。」

(三人は鏡から出ていく)

アキュア「あの子達なら止められるやもしれん……『黒い波紋』を
…。ほほ…シャウトが氣にいるわけだでな。」

シャウト「ばあちゃん。ありがとな。」

「
アキュア「シャウト……しっかりな。あの子達を守ってやりなさい。」

シャウト「分かってる。」

アキュア「アンタも死ぬんじゃないよ。」

シャウト「難しい注文だな。だけど、承知しました。」

アキュア「これで思い残すことは無いの……。気を付けるんじゃないぞ……
若い戦士たちよ……世界を……頼んだで……。」

次回に続く

第十二劇『不穩』

琴花「というわけだよ。」

天満「そうか…三人とも無事だったか。良かった…。」

アイズ「それで、どう強くなったんだ？」

琴花「ふふ〜ん。見せて欲しい？」

アイズ「エルフには無い力なんだろう？ だったら少し興味はある。」

琴花「アンタは素直に見せて下さいと言えんのか…？」

天満「まあまあ。見せてくれよ琴花。琴花が手に入れた新しい力を。」

琴花「扇くんがそこまで言うなら見せてあげなくもないよ。」

アイズ「さっさとやれ。」

琴花「……………まあいいや。じゃあいくよ！はっ！」

天満「体が光ってる。」

琴花「これが『法術』の光。これだけでも、身体能力はかなりアップしてるんだ。そしてこの光を私の『錬術』と融合させて発動させれば『法錬術』になるんだよ。私の術が今までより数段強力になるんだよ。見ててね。『エアシヨット』ッ！」

天満「す、すげえ！岩が粉々だ！」

琴花「ふう〜今までの『エアショット』は対象物を吹き飛ばす程度だったんだけど、それに破壊力がついたんだよ。」

アイズ「なるほどな。」

琴花「へへ〜ん！少しは見直したか？」

アイズ「調子に乗るな男女。」

琴花「お、お、男女……！こ、このやろつ。エアショ……！」

天満「わあわあわあわあ！ダメだって琴花！」

琴花「離して扇くん！アイツをぶつとばせと私の心が言っている！」

天満「お、落ち着けて！アイズも素直に淒いって認めるよ！」

アイズ「ああ、淒いな。」

琴花「え……！」

アイズ「その怒った時の不細工な顔。」

天満「あちゃあ……。」

琴花「し、死んでしまえ……っ！」

(その頃剣斗は)

剣斗「ふう……よし、あらかたかたずいたか。それにしても、邪霊の強さが増してるような気がするな。ま、でも今の俺にとって、こいつらはもう敵じゃねえな。」

？「本当にありがとうございました。」

剣斗「いやいや。困った時はお互い様でしょうよ。」

？「我々『ミングル』の住人は戦う術を持ってないんです。ここ『ルーバル地方』は長い間、海の国『メイルーン』の近くにあるせいか、邪霊が寄ってこないんです。ですから戦う必要なんてないのです。」

剣斗「ああ、さっき聞いたな。なんか神秘的な力で守られてるんだってな、その海の国は。」

ミングルの住人「はい。ですが…。」

剣斗「確か、その海の国が何者かに破壊されたんだよね。それで、神秘的な力が無くなり、邪霊が寄って来るようになった。」

ミングルの住人「はい。一体誰がそんなことを…？」

剣斗「確かこっちの方向だったよね？『テンチカイ天地海』は。」

ミングルの住人「そうですが、何か？」

剣斗「『メイルーン』に行ってみる。この目で何が起きたのか見てみるよ。それにもうすぐで『エデン』の人達が来るので安心してくれていい。ここら辺の邪霊は俺がかたずけておいたんで。しばらくは大丈夫だと思う。」

ミユングルの住人「本当に本当にありがとうございました。どうか気を付けて下さい。」

剣斗「サンキュ。それじゃ。」

（剣斗は天地海へ）

剣斗「ここが『天地海』か……天の国と地の国を分け隔てる境界線でも、それにしても綺麗な海だなあ。きらきら光ってるし、なんか力が湧いてくる感じがするな。」

？「もし？そこのお方？」

剣斗「え？だ、誰…だ？」

？「やはり、人間……やっと見つけた！」

剣斗「なんだ……コイツ？顔まで隠して、忍者みたいになかつこしやがつて？」

？「私は『ユズキ』。貴方を殺す者です。」

剣斗「はあ？」

ユズキ「覚悟！『イズナ手裏剣』っ！」

剣斗「な！くっ！あ、危ねえ……！てめえ、一体何のつもりだ？」

ユズキ「とぼけても無駄です。貴方がこの海の国を滅ぼした者でしょう？私は貴方を絶対許すわけにはいきません！」

剣斗「ち、ちよつと待って……！」

ユズキ「貴方のせいで、私の家族が……さあ、知らばくれてないで戦いなさい！『氷の悪魔』！」

剣斗「こ、『氷』？な、何のことだ？」

ユズキ「『イズナ手裏剣』っ！」

剣斗「やべっ！仕方ねえ！はっ！」

ユズキ「その光……長に聞いたとおり。やはり、貴方だったようですね。」

剣斗「悪いけど、勘違いで殺されるわけにはいかないんだよ！はっ！はっ！はっ！」

ユズキ「くっ！……さすがは悪魔です。矢の三連射とは。ではこちらにも本気を出します。行きますよ『シズマ』。」

シズマ「あいよ！」

ユズキ「『木の葉イタチ吹雪』。」

剣斗「な！ぐうわあああ！」

ユズキ「どうです私の相棒の力は？」

シズマ「へっへ！オレツチは『木の霊神シズマ』。よろしくな！」

ユズキ「シズマ、とどめです。」

シズマ「あいよ！」

剣斗「はあはあはあ……はっ！」

ユズキ「今更無駄です！『タイジュナダレ大樹雪崩』っ！」

剣斗「うおおおおつつ！『ライデンソウロウガ雷電爪狼牙』つつっ！」

ユズキと剣斗「うおおおおつつっ！」

？「止めいっ！」

二人「！」

？「この神聖な場所で争うとは何事じゃ！」

ユズキ「あ……お……長……。」

海の国の長「このバカモノがつ！それでも次期長かつ！」

ユズキ「すみませんっ！で、ですが、この者は…。」

海の国の長「人違いじゃバカモノ！その者の霊具を見てみよ！『雷』の属性じやろうが！」

ユズキ「え？あ、ああ…。」

海の国の長「それにじゃ、あの『氷の悪魔』とは似ても似つかぬじや。あの氷のように冷たい目で国を破壊しおった。じゃがこの者は違う。目を見れば分かるじやろ！」

ユズキ「す、すみません！」

海の国の長「ワシに謝ってどうする！」

ユズキ「はい！あの…すみませんでした！どうか許して下さい！」

剣斗「はは…なんか前にも勘違いで死ぬ思いを経験したような…。」

「

海の国の長「本当に失礼なことをした。ワシからも、どうかこのとおりじゃ。」

剣斗「え、あ、いや、いいっていいって。勘違いだったんなら。俺もろくな説明もせずに戦っちゃったし。」

海の国の長「おお、許して下さいるか。なんと心の広いお方じゃ。これユズキ、顔を隠してないで素顔でもう一度謝罪しなさい。」

ユズキ「はい。」

剣斗「う、うわぁ……………すげえ美人…だ…。」

ユズキ「本当に失礼しました。」

剣斗「え？ああ、いいですよ！全然気にしてませんし！」

ユズキ「ありがとうございます。」

海の国の長「ところでお主はここで何を？」

（剣斗は説明した）

海の国の長「そうじゃったか。エルフのために邪霊退治を…。それなのにコヤツは。」

ユズキ「申し訳ありませんでした…。」

剣斗「はは…ところで『氷の悪魔』っていうのは？」

ユズキ「私達の国である『メイルーン』を破壊して、『神器』を奪った人間です。」

剣斗「人間？俺達以外の人間がいるのか…。」

ユズキ「貴方みたいに体を光らせて、『氷』の『錬術』で攻撃をしてきたんです。」

剣斗「『法術』の光だな。ということは、やっぱり人間か。『氷』……『氷』か……。」

ユズキ「私はその人間を必ず倒して、皆の仇を討ちます。」

海の国の長「じゃが、本当はユズキが戦うことは許してないんじゃないかな。」

ユズキ「長っ！私には力があります。皆を傷つけた悪魔を、私は許すことはできません！次期長として！」

海の国の長「確かに海の国のエルフは戦う術は備えておらん。お前だけが霊神に認められ契約し、戦うことができる。しかし……。」

ユズキ「私に今できることがしたいのです。だから……。」

剣斗「ユズキさん……。え……と、長さんだっけ。ユズキさんに何を言ってもダメだと思うな。」

海の国の長「ぬ？」

剣斗「ユズキさんは本気だよ。そうじゃなきゃ、涙なんて流せないな。」

ユズキ「は……！」

海の国の長「ユズキ………分かった。」

ユズキ「長……。」

海の国の長「お前は海のエルフの希望じゃ。そして柱じゃ。お前が
そう決めたのなら、ワシ達もお前についていくわい。」

？「そうだぜユズキ！」

ユズキ「みんな…。」

海の国のエルフ1「ユズキは次期長なんだから、ユズキが決めた道
なら俺達はどこまでもついていくぞ！」

剣斗「へへ…。」

海の国のエルフ2「あの悪魔を追うんだろ！ユズキなら絶対悪魔を
倒せるって！」

海の国のエルフ3「ユズキ姉ちゃん、気を付けてね。また遊んでね。
」

ユズキ「う、うん。ありがとう……みんな。」

海の国の長「これが皆の意思じゃ。」

剣斗「ユズキさん。いいエルフ達ですね。」

ユズキ「はい。私の大切な……家族ですから。」

剣斗「俺にもいい仲間がいる。ユズキさんの家族にも負けない仲間
が。」

ユズキ「そうなんですか。それは会ってみたいですね。」

海の国の長「じゃがユズキよ。これからどうするつもりじゃ?」

ユズキ「それは...。」

剣斗「『エデン』に来ればいい。きっと『氷の悪魔』の情報も入ってくるはずです。俺が案内するから。」

ユズキ「あ、ありがとうございます。え...と?」

剣斗「俺は剣斗って言うんですよ。」

ユズキ「剣斗さん、ありがとうございます。」

海の国の長「剣斗とやら、ユズキを...ワシ達の希望をよろしく頼む。」

剣斗「任せてくれ。それじゃ、行こうかユズキさん。」

ユズキ「はい。よろしくお願いします。では皆、行ってきます。」

海の国のエルフ達「俺達も頑張るよ!ユズキも頑張れ!」

ユズキ「みんな...、行ってきます!」

剣斗「はは...天満、俺達人間も負けてられないぜ。」

(『マドラド』に向かう)

ユズキ「……………」

剣斗「大丈夫ですよ。必ず見つけましょう。」

ユズキ「はい。ところで剣斗さん。貴方はなぜ『オルテナ』へ来られたのですか？」

剣斗「大切な友達を助けたいからですよ。今『オルテナ』に起こっている変な出来事とかも気になりますし。」

ユズキ「そうですか。何だか安心しました。」

剣斗「何がです？」

ユズキ「人間というモノが怖かったですから。」

剣斗「まあ、仕方ないですね。自分の国を破壊されちゃ。」

ユズキ「ですが、剣斗さんみたいな人間もいるのだと知って安堵してます。」

剣斗「それは良かった。これから会う奴らも皆いい奴らばかりですよ。この世界を救うために命を懸けてる連中ですから。」

ユズキ「それは楽しみです。ん？」

剣斗「どうかしたんですか？」

ユズキ「この音…。」

剣斗「音？聞こえないけど…？」

ユズキ「こっちです。」

剣斗「あ、ユズキさん！」

（音のする方へ）

ユズキ「あれは！」

剣斗「はあはあはあ。ユズキさん、一体何が…。ああっ！」

ユズキ「邪霊ですね。」

剣斗「あの橋は？」

ユズキ「あの橋は『アレスナル地方』へ行く三つの橋の一つです。」

剣斗「あいつ、壊してないか？」

ユズキ「止めなければ。剣斗さん、行きましょう！」

剣斗「は、はい！」

ユズキ「止めなさいっ！」

邪霊「ん？何だ貴様らは？」

剣斗「てめえ！何で橋を壊しやがる？」

邪霊「貴様らには関係ないことだ。邪魔するなら死ぬぞ。」

剣斗「てめえがな！」

ユズキ「行きますっ！」

邪霊「グフフ。。」

ユズキ「は！剣斗さん待って！」

剣斗「どうしたんですか？」

ユズキ「す、すごい力を感じます。」

剣斗「え？」

ユズキ「あの者の後です！」

？「なかなか鋭い奴だな。あと一歩気付くのが遅かったら殺せたんだがな。」

剣斗「誰だ！」

邪霊「グフフ…もう終わったのですか『ツァビデル』様。」

ツァビデル「ああ。ここで最後だ。」

ユズキ「ま、まさか残りの橋を！」

剣斗「てめえ！なんてことしやがる！」

ツアビデル「やかましいな。なんだ…クソ虫か。」

次回に続く

第十三劇『禁忌』

剣斗「ク、クソ虫だと…！」

邪霊「ツアビデル様、ここは任せて下さい。あんな虫程度、ワタシで十分です。」

ツアビデル「ふむ、そうだな、そろそろ時間だからな。では任せたぞ。」

邪霊「はっ！」

剣斗「てめえっ、待ちやがれ！」

ツアビデル「ちっ、うっとおしい虫が！」「ゴウデッオウフ剛鉄殴武」！

剣斗「ぐはっ！」

ユズキ「剣斗さんっ！」

ツアビデル「後は任せたぞ。虫は殺せ。」

邪霊「かしこまりました。」

ユズキ「剣斗さんっ！大丈夫ですか？」

剣斗「げほっげほっげほっ！な、なんつゝ馬鹿力…。」

邪霊「ほう、ツアビデル様の攻撃を受けて、まだ生きてるとはな。」

少しはやるようだな。」

ユズキ「剣斗さんは休んで下さい。」

剣斗「ユズキさん…！」

ユズキ「この橋を壊させるわけにはいきません。あの者を倒します。」

邪霊「さつさと死ね。『トコウレツショウ怒豪裂掌』！」

ユズキ「『コウジュ紅樹クモ縛り』！」

邪霊「なっ！う、動けん…！」

ユズキ「貴方の方こそ、小さい虫のように弱小のようですね。」

邪霊「グフフ…弱小だと？なら見せてやる。後悔というやつをな！
グガアアアア！」

ユズキ「なっ！う、嘘…？」

邪霊「グフウ…待たせたな。これが『チヨウレイカ超霊化』だ。」

ユズキ「『超霊化』？」

邪霊「死ね！」

ユズキ「くっ！速いつ！な…岩が粉々に…！」

邪霊「これが我々を統べる神の御力だ。」

ユズキ「神？」

邪霊「これ以上知る必要は無い。知っても無意味だからな！」

ユズキ「一体何が起こつて…？」

邪霊「グハハ！死ねっ！『ド「ウハッパ怒豪発波』っ！」

ユズキ「よ、避けられない！」

邪霊「グハ…！」

ユズキ「え？」

剣斗「後ろから失礼。」

ユズキ「剣斗さん。」

邪霊「く、こ、このクソ虫が……。」

剣斗「へへ…トドメだ。『ライホウレンガ雷崩連牙』！」

邪霊「ぐはあああ！く、くそ……手に入れた力が……。」

剣斗「橋は守ったよユズキさん。」

ユズキ「剣斗さん。」

邪霊「ま、まだだ…。」

二人「！」

邪霊「任務は……遂行…する。」

剣斗「何だ！奴の体が光って！？」

ユズキ「はっ！剣斗さん危ないっ！」

剣斗「え？」

邪霊「ネオス様に栄光あれーーーーーっ！」

剣斗「じ、自爆！うわあああっっ！」

ユズキ「剣斗さんっ！」

剣斗「……………あ…え？無事…なのか…？こ、これは？」

ユズキ「ま、間に合った…。」

剣斗「ユズキさん。」

ユズキ「とっさにシズマの力を開放したのですが、間に合って良かったです。」

剣斗「ありがとうございます。本当に助かりました。」

ユズキ「いえ。御無事で何よりです。」

剣斗「でも、橋が…。」

ユズキ「仕方ないです。まさか自爆するなんて。」

剣斗「アイツ、自爆する時にネオス様って言ってた。そいつが奴の言う神なのかな？」

ユズキ「ネオス…。」

剣斗「とりあえず『エデン』に報告しなきゃな。でも一体何が起こってるんだ？」

ユズキ「ネオスですか…。」

(二人は『マドラド』に向かう。その頃ツアビデルは)

ツアビデル「ん？」

ネオス「どうしたんだいツアビデル？」

ツアビデル「部下が…部下がやられました…。」

ネオス「へえ。」

ツアビデル「まさかあのクソ虫共が？」

ネオス「橋はどうだい？」

ツアビデル「それは大丈夫です。三つとも破壊したようです。」

ネオス「そう。部下が死んだのは残念だったけど、任務は完遂したようだね。」

ツアビデル「はい。だがアイツがやられるとはな。少し侮ったか。」

（その頃ミリアは）

ミリア「はあゝ何でアタシが一番遠い『トール地方』なのよ！今頃みんなどうしてるかな？天満は強くなったかな？ま、天満なら大丈夫だね。アタシが見込んだ男の子だもん！それにしてもラアアからは『バルガレア』は宮殿だけって聞いてたけど、町ができてる。ちっちゃい町だけど。確か宮殿はゼロがいるところだね。ちよつと行ってみようかな。」

（『バルガレア宮殿』に行く）

ミリア「ほえゝ結構大きいんだ。」

？「ん？あの子は…？」

ミリア「来たのはいいけど、勝手に入っているのかな？」

？「あの…君？」

ミリア「え？」

？「人間？……珍しいお客様ですね。」

ミリア「え…と…？」

？「ああごめんなさい。僕は『ノア』。一応神官…かな。」

ミリア「ノア…さん。」

ノア「ノアでいいですよ。ところでここへは何をしに？」

（ミリアは来た理由を説明した）

ノア「なるほどね。でも君みたいな女の子が戦うなんて危険ですよ！それにエルフの為だなんて…。」

？「これノア、そこで何をしてるのじゃ？」

ノア「あ、『サンゼバル』様！」

ミリア「誰？」

ノア「こ、こら！頭を下げて！」

ミリア「何で？」

ノア「この方は大神官様ですよ！」

ミリア「へえ〜。」

サンゼバル「よいよい、気にしなくとも。」

ノア「はい！この子は…。」

（ノアは説明した）

サンゼバル「ほう…まだ若いのにお。お前とは正反対じゃな、ノアよ。」

ノア「……………」

サンゼバル「……………」

ミリア「何か気まずい…。あ、そういえば自己紹介してなかったね。私はミリアって言います！」

サンゼバル「ほっほ。元気な子じゃて。」

ノア「サンゼバル様、僕は用事がありますので。」

サンゼバル「これノア！全く…逃げることはかり考えおって。」

ミリア「逃げる？何から？」

サンゼバル「あ奴はな……『禁忌種』なのじゃよ。」

ミリア「『禁忌種』！もしかしてノアは……『ハーフエルフ』なの？」

サンゼバル「そうじゃ。」

ミリア「天満と一緒になんだ…。」

サンゼバル「天満とは？」

ミリア「友達だよ！確かエルフと霊神の…。」

サンゼバル「そうか。ノアはの、エルフと人間との間に生まれた『禁忌種』じゃよ。そのせいで幼い頃から侮蔑され、非難され続けてきた。両親は早くに亡くなり、ノアは独りで生きてきた。そんなノアをみかねてワシが引き取り神官として育てていったのじゃが、エルフを憎んでるノアにとってエルフのために働く神官など、どうでもいい仕事じゃろうて。」

ミリア「両親いないんだ…。」

サンゼバル「ところでミリアとやら、宮殿を好きなように見回るといい。」

ミリア「ありがとう！あ、そういえばゼロは居る？」

サンゼバル「ゼロ？はて？新しく入った神官か誰かかの？」

ミリア「え？ゼロは神官のはずだけど…。」

サンゼバル「ふうむ。では『ウエルカ』に聞いてみることで。あやつなら宮殿の者全てを把握しておるからの。」

ミリア「…分かった。ゼロって有名じゃないんだ。あんなに強いのに…。」

（宮殿を歩く）

ミリア「あ、あの人に聞いてみよう。ねえ『ウエルカ』さんですか？」

神官1「え？違うけど。」

ミリア「どこに居るか知ってますか？」

神官1「『ウエルカ』さんなら『天書の部屋』にいらっしやると思うけど。あつちの階段をひたすら上るとあるよ。」

ミリア「ありがとう。」

（階段を上る）

ミリア「はあはあはあ……や……や……や……と着いた……。あのう……『ウエルカ』さんは？」

神官2「『ウエルカ』さんなら、先程『地書の部屋』に行かれたよ。」

ミリア「ええ〜！……どっちにあるの？」

神官2「その部屋を抜けて右にある階段をひたすら降りるとあるよ。」

ミリア「ありがとね。」

（階段を降りる）

ミリア「はあはあはあ……上るよりマシだけど……キツイって……
……やっと着いた……あの……『ウエルカ』さんは……？」

神官3「『ウエルカ』さんなら、『大庭^{オオニロ}』の方に行くとおっしゃってただけ。」

ミリア「またあ……。」

神官3「え？」

ミリア「そ、それで……どこにあるの？」

神官3「入口の方だけど……。」

ミリア「どうもね。」

（入口に行く）

ミリア「はあはあはあ……か弱き乙女なのに……こんなに歩かせて……。もう次で最後にしてよね。ふう〜着いた……。あ、服装が皆と違う！もしかして偉い人！ウエルカさん！あの、ウエルカさんですよ？」

神官4「違います。」

ミリア「ガン！……そうですね。『ウエルカ』さんは……どこに居るんですかね……？」

神官4「そこにいらつしやるじゃないですか。」

ミリア「へ？足元？……これって……亀じゃ……？」

神官4「し、失礼じゃないですか！この方は『土の霊神ウエルカ』さんですよ！」

ミリア「ええー……っ！ウエルカさんって……霊神……だったの？きやつ！」

ウエルカ「ほほう。五年後が楽しみな子じゃ。ほっほっほ。」

ミリア「きゃあああ！オシリを触るなっ！」

ウエルカ「ほっほっほ。よい尻じゃよい尻。」

ミリア「あ、あなたがウエルカさんなの？」

ウエルカ「いかにも！」

ミリア「ただのエッチなじいちゃんじゃなくて…。」

ウエルカ「ほっほっほっ。ところでワシに何か用かの？」

ミリア「あ、そうそう。ゼロって知ってる？」

ウエルカ「ゼロ？うゝゝむ。」

ミリア「本当に大丈夫なの…かな？」

ウエルカ「名前だけじゃピンとこぬな。どんな人物なんじゃ？」

（ゼロの特徴を説明する）

ウエルカ「そのような者はおらんぞ。ワシは宮殿にいる者全てを把握しておるからの。それに神官は霊神を持つことは禁じられておるからの。神官に争いは御法度じゃからの。」

ミリア「そ、そうなんだ…。じゃあゼロは一体何者なんだろう…？あれ？じゃあ何でウエルカがいるの？霊神は御法度なんでしょう？」

ウエルカ「この宮殿はの、サンゼバルが建てた物なのじゃよ。それを手伝ったのが、ワシなのじゃよ。あやつとはまあ、酒飲み仲間というやつじゃよ。ほっほっほっ。」

ミリア「友達だから特別ってこと？じゃあウエルカは誰かの霊神でわけじゃないんだ。」

ウエルカ「まあ…の。お嬢ちゃんは『火』を持ってるみたいじゃない？」

ミリア「よく分かるね。」

ウエルカ「ほっほっほっ。ワシは博識じゃからの！しかし、お嬢ちゃんの瞳は強い光を放っておるの。何か強い意思の光を感じるの。人間にしては超越した力を持っておるみたいじゃない？」

ミリア「す、凄い…！ただのエッチなじいちゃんじゃなかったんだね。」

ウエルカ「『法術』…かの？良かったら見せてくれんか？」

ミリア「別にいいけど。はっ！」

ウエルカ「ほう。それほどの力を手に入れた理由は何じゃ？何がしたいんじゃない？」

（ミリアはこれまでの経緯を説明する）

ウエルカ「なるほどの。しばらく外に出てない内にそんなことがあったのか…。天地両方の城が滅んだのは知っておったが…。まあ、あれは自業自得のような感じはするがの。」

ミリア「じゃあウエルカは真実を知ってるんだね。」

ウエルカ「うむ。そうか、お嬢ちゃんは強いのだ…。ノアにも、守りたいモノがあればいいんじゃないかの…。」

ミリア「でもアタシは…ノアの気持ち…分かるよ。アタシも…独り…だったから…。」

神官4「うわあああつ！」

二人「！」

ウエルカ「どうしたんじゃ！」

神官4「そ、そそ外に邪霊の大群が！町が…町が…女が…。」

ウエルカ「何じゃと！一体どういうことじゃ！分からんぞ！」

ミリア「とりあえず宮殿を出よう！」

（外に行く）

ミリア「町が！」

ウエルカ「何ということじゃ！せっかく皆で造った町を…。」

？「さあ、偽りは消えなさい。」

ミリア「アンタ！何やってんのよ！一体誰よアンタ！」

？「ん？私ですか？私は『シェイリア』。この世界の神と意思を同じくする者です。」

次回に続く

第十四劇『遺志』

ミラア「はあ？神？何のこと？」

シェイリア「答える必要ありません。」

ミラア「だ、だったらここで何してるのよっ！」

シェイリア「ただ偽りを消しているのです。」

ミラア「偽りい？何でこの町が偽りなのよ？」

シェイリア「……………」

邪霊「シェイリア様、ここは私に任せて頂きたい。」

シェイリア「…分かりました。」

ミラア「ちょ、ちょっと！どこ行くのよ！答えなさい！」

邪霊「行かせん！はっ！」

ウエルカ「危ないお嬢ちゃんっ！」

ミラア「え？」

邪霊「フ…シェイリア様、お急ぎ下さい。」

シェイリア「……………！」

ミリア「けほ、けほ、けほ…。え？ぶ…無事？」

邪霊「な、何故だ？確かに攻撃が当たったはずだ！」

ミリア「こ、これは……槍？」

シェイリア「…この力。」

ウエルカ「何とか間に合ったようじゃの。」

ミリア「槍が喋った！あ、ウエルカなの？」

ウエルカ「ほっほっほ。怪我は無いようじゃの。それにしても、
この邪霊よ！女性を後ろから攻撃するとは、見下げ果てた奴よのお。」

邪霊「ちっ、霊神ごときに邪魔されるとは。」

ウエルカ「お主も元は霊神じゃろっが。」

邪霊「ふざけるな。私は霊神を超えた存在になったのだ。一緒にするな。」

ウエルカ「まさかお主…！」

邪霊「フッフ…見せてやる。甘美なる力を！ガアアアツツ！」

ウエルカ「や、やはり…『超霊化』！」

邪霊「フウ……さあ、死ぬか？」

ウエルカ「なるほどのお。久々に帰ってきたと思えば、町の破壊、神官達を傷付け、あげくに『超霊化』の邪霊付き…か。そこまでお主の闇は深かったのか？『イリス』よっ！」

ミリア「ええっ！？し、知り合いなの？」

シェイリア「お久しぶりですね、ウエルカ。しかし…『イリス』という名前はあの時に捨て去りました。今の私の名前はシェイリアです。」

ウエルカ「やはり、まだエルフを恨むか…。ノアと同じじゃな。」

シェイリア「ノアは生きているのですか？」

（その頃ノアは）

ノア「騒がしいですね。一体何が…？」

サンゼバル「怪我人を優先させて避難するのじゃっ！いいか、『マ―ケルト』まで行けば、ひとまず安心じゃ！」

ノア「サンゼバル様！何があつたのですか？」

サンゼバル「ノア！ここで何をしておる！さっさと避難するのじゃっ！」

ノア「え？何故ですか？」

サンゼバル「邪霊が攻めて来たんじゃ！すでに町は……壊された。」

ノア「何ですって！一体何故？」

サンゼバル「分からん！とにかく避難するのじゃっ！」

ノア「サンゼバル様は？」

サンゼバル「ワシはこの宮殿と神官達を守る義務がある。邪霊の侵攻を止めねばならん。」

ノア「そ、そんな危険です！」

サンゼバル「ワシはワシに出来ることをするだけじゃ！この宮殿と宮殿にいる者達を守る義務がワシにはある！お前も早く避難しなさい！」

ノア「な、何故……？何故そこまでエルフを守るんですか！知ってるでしょ！エルフ達がどれだけ醜い生き物か！あなたになら分かるはずです！同じ『禁忌種』の子供を持つあなたなら！」

サンゼバル「し、知っておったのか！」

ノア「……以前ウェルカが酒に酔った時に話してくれたんです。」

サンゼバル「あのバカ者が……。」

ノア「エルフ達にイジメられ、自殺まで追い込んだ！そんな種族を

助けようとするなんて……見捨てればいい！エルフなんて皆いなくなればいいんです！」

（サンゼバルがノアの頬を叩く）

ノア「サ…サンゼバル…様…！」

サンゼバル「そんな悲しいことを言うではない。……確かにの、『禁忌』を認めようとしないうエルフ達がほとんどじゃ。じゃがの、分かっておるじやろ。そんなエルフばかりじゃないと。」

ノア「あなたは分かってない！僕達『禁忌種』が一体どんな思いをして生きてきたか…。」

サンゼバル「そうじゃな。ワシには『禁忌種』と呼ばれる者の気持ちとは分かってないのかもしれん。」

ノア「……。」

サンゼバル「じゃがの…。」

ノア「！」

サンゼバル「ワシ達『禁忌』を犯した者の気持ちも、ノアには分かるまい。」

ノア「え…？」

サンゼバル「ワシ達は『禁忌種』が否認であることを知り、理解した上で子供を授かったんじゃない。」

ノア「な、何故…？」

サンゼバル「愛したからじゃよ。」

ノア「え？」

サンゼバル「この世のどんな者よりも、その相手を愛してしまっただけからじゃよ。特に人間はエルフと違い寿命が短い。じゃが、理屈じゃないんじゃない。守りたいものが出来てしまうと、その絆を命を懸けて、必死に紡ぐようになるんじゃないよ。例え生まれてくる子供が『禁忌種』と呼ばれたとしても、その相手との…大切な絆じゃからの。じゃから、一緒に生きて幸せになつて欲しいと。」

ノア「で、でも…。」

サンゼバル「お前の愛した母がエルフじゃったようにな。」

ノア「う…ぐ…。」

サンゼバル「お前がどうしてもエルフを守らないと言うのならそれでもよい。じゃがな、お前の母『メイスン』は死ぬ最期まで、エルフと人と霊神、そしてお前の幸せを願い、笑顔で最期を迎えとったぞ。それだけは覚えておいてやっておくれ。それにあやつはの…。」

（サンゼバル回想）

サンゼバル「元気な子じゃな。」

メイスン「サンゼバルさん。私は負けませんよ。この子は、あのひととの絆。そして何よりも、幸せになつて欲しいから。幸せになる義務があるから。『禁忌種』なんて関係なく、ノアが強く育つて欲しいんです。」

サンゼバル「メイスン…。」

メイスン「ああ！何て顔してるんですかあ！大丈夫ですよ！この子ならきつと、私達の…いえ、生きゆく者全ての幸せを紡ぐことができますよ！私にはもう時間は無いですから、手伝えないのが残念ですけどね。」

サンゼバル「『禁忌種』を生んだ女性は早くに死ぬ…か。これは罰なのかの…。」

メイスン「だから、何て顔してるんですか！いいじゃないですか！この子のような素晴らしい恵みを授かったんですから。それに…それにいつかこの子が見つけてくれますよ！私達が長生き出来る方法を！だって、ノアには無限の可能性ありますから！それになんたって私の子ですからね！」

サンゼバル「自分で言うのか！」

メイスン「アハハ！ノアならきつと…皆が幸せになるために…。まあ、私の子ですからね！」

サンゼバル「じゃから自分で言うな。」

メイスン「アハハ！」

（回想終わり）

ノア「母さんは…僕を生んだから寿命が縮まった…？」

サンゼバル「ワシの愛した人もそうじゃったよ。」

ノア「そ、それなのに…ぼ…僕は…うつ…。僕は…何も知らなかった。エルフを恨むことしかできなかった。ごめん母さん…。」

サンゼバル「今まで話さなかったすまんだノアよ。メイスンに時がきたら話してくれと頼まれておった。お前が成長し、この話を理解できるその日までの…お前の母は素晴らしいエルフじゃったよ。」

ノア「……は…はい。なんたって僕の、僕の母ですから。」

サンゼバル「ほほ。自分で言うな。」

ノア「へへ。サンゼバル様、僕闘います。母が望んだ強い男になるために。でも…まだエルフを許せないけど、僕に託された想いを紡ぐために！」

サンゼバル「…そうか。では行こう！ウェルカが待つとる！」

ノア「はい！」

（再びウエルカ）

ウエルカ「ノアのこと、覚えておったのか。」

シェイリア「もうエルフ達に殺されたものと思ってました。殺されてなくとも、自害しているものと。まあそれでもエルフが殺したも同然ですけどね。」

ウエルカ「分かってないの。ノアはお主のように弱くはないぞ。のう、『イリス』よ。」

シェイリア「……。」

邪霊「貴様っ！シェイリア様に何ということをして！」

ウエルカ「黙つとれ！今は小物を相手してる暇はないんじや。」

ミリア「うわぁ…キツイ。」

邪霊「き、貴様ああっつ！」

シェイリア「止めておきなさい。貴方では勝ち目はありません。それに、当初の目的はもう終わりました。」

邪霊「すみませんシェイリア様。このジジイだけは許せません！」

シェイリア「……勝手になさい。巻き込まれても知りませんよ。」

邪霊「大丈夫です。三分もかかりません。喰らいやがれ！」
『シュー
トホーン』！」

ウエルカ「……………」

ミラア「ウエルカ！」

邪霊「フッフ……………な、何！」

ウエルカ「おそかったのお、ノアよ。」

サンゼバル「ワシは呼びじゃないのか？」

ウエルカ「ほっほっほ。年寄りには引ッ込んでおれ。」

サンゼバル「ジジイはお前もじゃろ。」

ウエルカ「それで……………ほっ……………いい顔になったの、ノアよ。」

ノア「ごめんウエルカ。長い間待たせて。」

ウエルカ「なぐに、人生の千分の一にも満たない時間じゃったよ。」

サンゼバル「ノアには全てを話したぞ。」

ウエルカ「承知した。我が意思との絆を認め、契約を為す。」

（ウエルカは槍になる）

ノア「行くよ、ウエルカ。」

邪霊「死ねえええっ！」

ノア「悪いけど、君には負ける気がしない。町を破壊した罪に懺悔してもらおうよ！」
『ドソウトツバ土槍突破』っ！」

邪霊「グガアアア！」

ノア「自然に体が動く。ウエルカが導いてくれる。『シュンソウレットバ瞬槍烈破』！」

サンゼバル「ノアよ……メイスンは槍の名手じゃった。その血を受け継いだお前じゃ、お前は強い。」

ノア「最後です！」
『ドホウセンクウソウ土崩旋空槍』！」

邪霊「ぐ……が……っ……強い……。」

ノア「ふう……ありがとうウエルカ。」

ウエルカ「まあまあじゃったな。」

ミリア「何かさっきから忘れられてるような……。」

ウエルカ「それで、お主はただ見てるだけかの、『イリス』よ！」

サンゼバル「な、何じゃと！？ウエルカ、今何と？」

ウエルカ「後ろを見てみい。町を破壊した張本人がおる。」

サンゼバル「え？あ……ああ……イ……『イリス』……。」

ノア「『イリス』って？」

ウエルカ「サンゼバルのもう一人の娘……と言えいいかの。」

シェイリア「お久しぶりですサンゼバル様。」

サンゼバル「お前が何故ここに？いや、それよりもあの娘が死んだ時に、この宮殿から出て行ったのは何故じゃ？」

シェイリア「話すことは何ありません。」

サンゼバル「イ……『イリス』。」

ウエルカ「あやつはの、サンゼバルが養子として引き取った娘なんじゃよ。ノア、お主のようにの。『イリス』はの、サンゼバルの実の娘『プリミア』を本当の妹のように可愛がっていたんじゃよ。本当に……本当に仲の良い義姉妹じゃったよ。『プリミア』が死ぬまではの。」

ノア「そうか。その娘が、自殺したっていう、サンゼバル様の……。」

サンゼバル「お前が何故こんなことを？あんなに優しくったお前が何故じゃ？『イリス』！」

シェイリア「全てを浄化するためです。あの宮殿のように。『デッドサウンド・壊の旋律』。」

（宮殿が崩れていく）

サンゼバル「な、何ということを！」

ウエルカ「サンゼバル！破片が飛んでくるぞ！」

サンゼバル「な、ああっ！」

ミリア「『フレイムレジスト』！」

皆「！」

ミリア「やっと活躍だね！」

ノア「君はさっきの！？」

ミリア「どう？アタシだって戦えるんだよ！ミリアちゃんは強いんだから！」

サンゼバル「た、助かったわい。しかし驚いた。ふふ…時代は変えられるかもしれん。メイスンが言ったとおり、この子達なら…」

シェイリア「…良かった。（ボソ）」

サンゼバル「『イリス』…？」

シェイリア「そ、そろそろ時間ですね。それでは皆さん、さような

ら。」

サンゼバル「待つとくれ！『イリス』！」

シェイリア「すみません義父様…。私は私の道を行います。」

サンゼバル「『イリス』…。」

ミリア「一体何が起こってるのかな？とりあえず『マドリード』にも
どうだろうか？」

（その頃シェイリア）

ネオス「元気無いねシェイリア？」

シェイリア「いえ、大丈夫です。」

ネオス「そう、ふふ…これでは『神器』だけだね。ふふ…。」

次回に続く

第十五劇『集結』

ネオス「おや？全員揃ってないね。」

シェイリア「すみません。アスフォートは『センディザン泉帝山』に行っています。」

ネオス「へえ…また修業かい？」

シェイリア「そのようです。」

ネオス「本当に彼は強さに貪欲だよなぁ。」

ツアビデル「へっ、弱いから修業してやがるんですよ。相変わらず気に入らねぇ。」

ネオス「ふふ…ところで彼は？」

シェイリア「あ…あの…ひ……昼寝の時間らしくて……寝てます。」

ネオス「アハハ！」

ツアビデル「笑い事じゃないですぜ。」

ネオス「まあまあ、彼は仕事はキッチリしてくれたからいいんだよ。」

ツアビデル「は？ということとは…もう『カルディナ』を落としてきたのですか？」

ネオス「うん。君達よりも早くね。」

ラーハイド「さすがさ。あの軍事要塞の『カルディナ』を一人で落とすなんてさ。しかもこの短期間でさ。さすがは『闇狼のサ
イガ』さ。」

ツアビデル「く……。」

シェイリア「ですが、ゼロの行方がまだ。」

ネオス「ああ、ゼロなら仕事中だよ。だから気にしなくて大丈夫。」

（その頃サイガは）

サイガ「へ…へっ…へつくしよいつつ！ああ…この部屋冷房効き過ぎやで。うっ…寒っ！あかん、鼻水出てきよった。これぞ水もしたたるええ男ってか！水は水でも鼻水はちやうやろっ！………寒っ！」

（その頃ミリアは）

ミリア「ところで、ノアも戦えたんだね。」

ノア「うん。でも驚いたよ。君があんなに強いなんてね。サンゼバル様を助けてくれて、ありがとう。」

ミリア「いやあゝ照れるじゃん！」

ウエルカ「ほっほっほ。さすがワシが見込んだ、いいお尻の持ち主じゃな。」

ミリア「それを言うなあっ！」

サンゼバル「……………」

ノア「サンゼバル様…。だ…大丈夫ですか？」

サンゼバル「……………」

ノア「サンゼバル様？」

サンゼバル「ん！ああ…大丈夫じゃよ。」

ウエルカ「強がるな。」

サンゼバル「う…！…のう…ウエルカよ。」

ウエルカ「何じゃ？」

サンゼバル「一体何が起ころうとしてるんじゃ？」

ウエルカ「さあ…の？ただ言えることは、『イリス』を止めなきゃならないってことじゃの。」

サンゼバル「そうじゃな…この老いぼれた体でどこまでできるか分からんが、『イリス』の育ての親として、ワシが果たさなければい

けないの。」

ウエルカ「何を言っておる。お主には神官達を導く義務があるじゃろうが。」

サンゼバル「しかし、ワシは！」

ノア「僕が止めます。」

サンゼバル「ノ、ノア……？」

ノア「僕は『イリス』さんが、どんな人なのかは知りません。ですが、『イリス』さんは僕の姉でもあるみたいです。ですから、弟である僕が姉を止めます。」

ウエルカ「サンゼバル……いい息子を持ったの。」

サンゼバル「ノア……『イリス』と……姉と戦うことになるかもしれないんじゃないじゃぞ？そのような辛い役を任せ……。」

ノア「サンゼバル様！僕は負けません！確かに……戦うことになるかもしれませんが。ですが、僕は戦うことから、もう逃げません！姉のすることを止めるのも、家族の義務でしょう？」

サンゼバル「……『イリス』はエルフじゃぞ？」

ノア「サンゼバル様もエルフでしょう？」

サンゼバル「ノア……。」

ノア「何て顔してるんですか！大神官ともあるう方が！…僕に任せて下さい。」

サンゼバル「ワシはワシの……ノアはノアの……それぞれ出来ることをする…か。任せて…よいのか？」

ノア「当たり前じゃないですか！」

ウエルカ「それでは、ワシも、ワシに出来ることをしようかの。」

サンゼバル「ウエルカ……息子達を頼む。」

ウエルカ「任せておけ。」

サンゼバル「だがこれからどうするんじゃ？」

ミリア「それは大丈夫だよ！『エデン』なら、きっといい情報があるよ。」

ウエルカ「ふむ…もしかしたら、全ての出来事は一つに繋がってるのかもしれないのぉ。」

ノア「案内してくれるかい？え…と、ミリア？」

ミリア「うん。ミリアちゃんに任せなさい！」

ノア「ありがとう。」

（旅の支度をして入口に集まる）

ノア「では、行って参ります。」

サンゼバル「うむ。気を付けてな。ウエルカ、頼んだぞ。」

ウエルカ「お主もしっかりの。」

ミラア「じゃ行こう！」

サンゼバル「ノア！」

ノア「はい…？」

サンゼバル「これを持って行きなさい。」

ウエルカ「…あれは！」

ノア「これは？」

サンゼバル「ただの『ネックレス』じゃよ。」

ノア「え？」

ウエルカ「受け取っておきなさい。」

ノア「あ、うん。ありがとうございます。」

サンゼバル「うむ…。」

ノア「じゃあ行つて参ります。…………父さ…サンゼバル様。」

サンゼバル「ノア…。」

ウエルカ「それでは行くかの。」

(三人は『マドラド』へ)

サンゼバル「『プリミア』…………お前の家族を見守つてやつてくれ。」

(その頃天満は)

天満「これからどうしようか？剣斗とミリアに会いに行こうか？」

琴花「うゝん、もしかしたら『エデン』に新しい情報が入ってるかも…。」

天満「うゝん…。」

ゼロ「皆さんよろしいですか？」

天満「どうしたんだゼロ？」

ゼロ「先程村の方に聞いたのですが、僕達が来る前に剣斗君らしい方が『マドラド』の方に向かったらしいんです。」

琴花「剣斗が？」

ゼロ「あ、ちなみに綺麗な女性と一緒にだったみたいです。」

琴花「は？」

ゼロ「何やら、かなり親密だったみたいです。」

琴花「へ、へえ……。」

天満「一体誰だろ？」

琴花「知るわけないじゃんっ！」

天満「ご、ごめん！」

アイズ「何を怒っているんだ？」

琴花「怒ってないっ！」

ゼロ「ふふふ……。」「

アイズ「まあ、とにかく『マドラド』に戻るか？さっきの奴らの情報もあるかもしれない。」

天満「そ、そうだな。」

琴花「決めたんなら、さっさと行くよ！」

アイズ「騒々しい奴だ。」

琴花「待つてなさいよ……剣斗……！」

ゼロ「これはこれは！楽しみな展開ですね。」

アイズ「ところで貴様、あの子供をしっかりと送ったんだろうな？」

ゼロ「ええ。他のエルフ達も一緒に近くの町まで送り届けましたよ。」

アイズ「……ならいい。」

ゼロ「ふふ……。」

天満「それじゃ、『マドラド』に戻るか。」

（『マドラド』に行く）

天満「もうすぐで『マドラド』だな。」

ゼロ「ふむ、シャウトさんがいたらどうしましょうか？」

アイズ「何か言ったか？」

ゼロ「いえ！ところでこれ…食べます？。」

アイズ「な、それはっ！『風まんじゅう』じゃないか！」

ゼロ「はい！村の方に頂いたんです。お礼だと言って。」

アイズ「貴様、まさか独り占めするつもりだったのではないだろうな？」

ゼロ「嫌ですねえ。こうして出してるじゃないですか。」

アイズ「ふん、まあいい。一つよこせ。」

琴花「あ、私も頂戴！……うん、甘くて美味しい！あれ？扇君は食べないの？」

天満「へ？いや…俺は…甘いモノはちょっと……。」

ゼロ「皆さん、これは許せませんよねえ。せ…つかく、エルフ達が丹精こめて作ったモノなのにねえ。」

天満「へ？いや、だから…。」

琴花「そうだよねえ。これはこれは、無理矢理にでも味わっていただかないとねえ。」

天満「いや、だから…ね…？」

アイズ「ふむ、一理ある。」

天満「ア、アイズまで？」

ゼロ「さ…て、では皆さん、参りましょうか！」

天満「ちょ、ちょっとおおおつつ！うぐ……ぐむむ……し……死ぬ！」

ゼロ「いやあ、それにしても意外でしたねえ。まさか天満君が甘いモノが苦手だなんてね。」

琴花「私は知ってたけど。面白そうだからノリました。」

天満「あ、あのなあ……。」

アイズ「こんなところで時間を潰してる暇なんてないぞ！ほら、遊んでないで行くぞ天満！」

天満「お……お前……なあ……。」

(『マドラド』に到着)

天満「うええ、口の中が甘ったるい。」

琴花「ん？あれは剣斗じゃん！よしっ！」

剣斗「ん？ようっ！天……ぐわあ！」

琴花「あんたこんな大変な状況なのに、女と仲良くしてるなんていい度胸じゃないの！」

剣斗「な……何のこと……だ……。」

琴花「とぼけるなんてホントにいい度胸じゃない！ネタはあがつてんだよ！」

天満「まあまあ、やあ、剣斗。久しぶりだな…。」

剣斗「もっと早く助けてくれい…。…んん？どうした？元気ないぞ？」

天満「はは…。…ちょっと地獄を見てね…。」

剣斗「ふ〜ん、まあよく分かんねえけど、こっちはこっちで大変だったぞ！」

天満「どういうことだ？」

剣斗「もうすぐミリアも到着するらしいから、詳しいことはその時話すよ。」

天満「ああ。え…と、そっちの人は？」

剣斗「ああ、この人は…。」

ミリア「やつほー！みんなー！」

天満「ミリア！」

ミリア「良かったー！みんな『マドラド』に居たんだね。というか知らない人がいっぱいだー！」

天満「あ、そうだね…。一応自己紹介しておこうか。」

（自己紹介をする）

ユズキ「というわけで『エデン』の方々の力をお借りしたいと思い、ここまで来たのです。」

剣斗「だからみんな、力になってあげてくれ！頼むっ！」

天満「もちろんだよ！」

琴花「何よ、剣斗の奴…あんなにムキになっちゃってさ。」

天満「はは…。」

（ノアが自己紹介）

ノア「それで、ここに来ました。」

ウエルカ「よろしくの。特にこの……。」

琴花「きやああああっ！何すんだっ！このスケベ亀！」

ミリア「またやってるし。」

ウエルカ「ほっほっほ。いい尻じゃのお。胸は無いようじゃが。ミリアと同じくの。」

ミリアと琴花「何だとおおおっつ！」

天満「まあまあ。」

ノア「君が天満ですね。」

天満「え？ああ…。」

ノア「よろしくね。」

天満「ああ、こちらこそ。」

（自己紹介続く）

アイズ「最後は僕だな。名前はアイズ、天満に貸しがあるからついでにきているだけだ。」

ノア「それだけ？」

アイズ「エルフ嫌いなんだろう？だったらエルフである僕のことなんて、知る必要無いだろ？なあ、エルフ嫌い君？」

ノア「む…！」

天満「まあまあ。アイズもそこまでね。はあ…前途多難だ…。」

琴花「あれ？一人忘れてない？」

天満「そっぴや、ゼロは？またいなくなつてゐる…。」

ミリア「ええ！ゼロに聞きたいことあつたのに…。」

（建物の陰にいるゼロ）

ゼロ「ふう…危ない危ない。まさか海の国の者までいらつしやるとは。これはもう一緒に行動出来ませんね。仕方ありません。…天満君…次に会つた時はおそらく…。ふふ…また会いましょう。それでは皆さん、ご機嫌よう…。」

（再び天満）

天満「ゼロに聞きたいことつて？」

ミリア「んとね…。」

？「ほう。大人数だな。」

天満「『シャウト』！」

シャウト「久しぶりだな天満。」

天満「ああ、霊神も身に付けたよ。」

シンセーテン「やあ、自分勝手なシャウト君、久しぶりだねえ。」

シャウト「シ、シンセーテン……あはは……。と、ところで天満、分かったぞ。」

天満「え？ま…まさか…？」

シャウト「ああ、真雪の居場所を掴めた。」

天満「本当かつ！一体どこに！」

シャウト「ここから遙か北にある、山に囲まれている城に軟禁されている。」

アイズ「おいおいそこって…！」

ユズキ「確か、唯一どこの大陸とも繋がっていない大陸ですよね。」

アイズ「大陸というより、浮島だな。」

天満「一体どういうところなんだ？」

シャウト「エルフ達の間では、こう呼ばれている。『ムゲン島^{トウ}』…。

」

次回に続く

第十六劇『驚倒』

天満「『ムゲン島』？」

シャウト「ああ、そこに真雪がいる。」

天満「どうやったらそこに行けるんだ？」

シャウト「それなんだが……上陸するのが難しいんだ。」

天満「え？何でだ？シャウトはその島に入って調べてたんじゃないのか？」

シャウト「いや、入ってはいない。ただ……」

アイズ「見えたんだろ？」

シャウト「！」

天満「どういうことだ？」

アイズ「天満には言っただろ？シャウトは未来を見ることができるって。」

天満「あっ！」

シャウト「……まあ、見えると言っても、遠い未来ではなく、近い未来を刹那的に知ることができるだけだな。」

天満「じゃあ、その力で真雪の未来を見たわけか？」

シャウト「まあ、そんなとこだ。」

剣斗「でも、一体どうやって行けばいいんだ？」

シャウト「たった一つだけ方法がある………舟だ。」

アイズ「何を言ってる。あの島の周囲は多数の渦潮があり、とてもじゃないが海上を進むことなんて出来ないぞ！」

シャウト「確かに海上からは無理だ。だが空からならどうだ？」

アイズ「は？意味が分らん。」

シンセーテン「…もしかして、『ディークの箱舟』のこと言ってる？」

シャウト「…ああ。」

天満「『ディーク』って確か…。」

シンセーテン「そう、『天駆ける者』だよ。その昔、『アオス』が起こした大洪水から、霊神達を守った舟だよ。その時の舟が『ディーク』が造ったと言われる空を自由に飛び回る舟『ディークの箱舟』なんだよ。」

シャウト「そのとおりだ。」

シンセーテン「シャウト…分かっているのかい？その舟は…。」

シャウト「もちろんだ。」

シンセーテン「『アイツ』が力を貸してくれるとは思えないよ?」

シャウト「……………」

琴花「な〜んか、話が飛躍し過ぎてついていけない…。」

天満「そんな舟があるなら、さっそく!」

シンセーテン「…無理だね。」

天満「え?」

剣斗「何でだよ!」

シンセーテン「理由は二つ。まず一つ、『デイクの箱舟』がどこにあるか分からない。二つ目は、例え見つけたとしても動かせない。」

天満「動かせない? ということだ?」

シャウト「実はな天満…それを動かせるのは『三霊神』だけなんだ。」

天満「だ、だったら大丈夫じゃないか! ここには『三霊神』が二人もいるんだから!」

シャウト「いや、二人だけじゃ駄目なんだ。確かに動かすのは一人

でもできる。だがエネルギーを送って起動させなければならない。」

シンセーテン「おそらく今の状態は、エネルギーが空の眠っている状態だからね。再び動かすには僕達『三霊神』の『天地鏡』のエネルギーが必要なんだよね。」

天満「じゃあ早く三人目を見つけて!」

シンセーテン「今ヒント言ったよね。『天地鏡』って…。」

天満「え?」

シャウト「『天』はシンセーテン、『鏡』はこのシャウト、そして…。」

天満「『地』だろ?」

シンセーテン「まだ、分からない?」

天満「ん?……は!ま……まさか…?」

シンセーテン「そう…君の最も知ってる者であり、最も嫌いな者でもある彼だよ。」

天満「地…門…なの……か?」

皆「!」

シャウト「ああそつだ。かつて『ディーク』と共に戦い、『アオス』を封印した、『オルテナ』を守護する『三霊神』の一人、『地のジ

アス』だ。」

剣斗「嘘だろ…？」

琴花「何で…？」

ユズキとノア「？」

アイズ「……………」

天満「じ、じゃあアイツが力を貸してくれないと、舟は動かせない
……のか？」

シンセーテン「だから無理だって言っただけ。アイツが力を貸してく
れるわけがない。それ以前に、こっちに襲いかかる可能性の方が、
極めて高いよね。」

シャウト「だがもうこれしか…。」

天満「く…………真雪い…。」

剣斗「天満…。」

天満「少し…考えさせてくれ…。」

（天満が皆から離れる）

シンセーテン「ふゝむ…。」

シャウト「なあ、シンセーテン。『ジラス』の力だけを抽出することとは出来ないのか？」

シンセーテン「難しいだろうね。今の会話だって、聞いてるだろうし、アイツ。」

シャウト「だが『ジラス』があんなことになったのは私達にも責任がある。」

シンセーテン「まあ、言い換えれば『愛情』の裏返しだからね。」

シャウト「そう…だな。言ってみれば、私達は兄弟なんだからな。」

シンセーテン「全然似てないけどね。」

シャウト「そう…だな。」

（その頃天満は）

天満「く…！」

アイズ「情けない奴だな。」

天満「アイズ！」

アイズ「何を怖がっている。」

天満「べ、別に怖がつてなんか！」

アイズ「嘘をつけ。短い付き合いだが、顔を見ればそれくらい分かる。」

（その頃剣斗は）

剣斗「あ、天満！おゝいて…。」

琴花「しっ！」

剣斗「こ、琴花！」

琴花「いいから！皆もいい！」

剣斗「え？ユ、ユズキさんに…ノアまで！」

ミリア「アタシもいるんだけど。」

剣斗「うわ！いたんかい！」

琴花「静かにしなよ！」

剣斗とミリア「ごめんなさい…。」

（再び天満）

アイズ「弱虫だなお前は。」

天満「な！アイズに何が分かるんだよ！アイツのこと、何も知らないくせに！」

アイズ「ああ知らない。だから何だ？」

天満「く…！もう一人にしてくれっ！」

アイズ「天満、僕に言ったこと、もう忘れたのか？」

天満「え？」

アイズ「大切な人を守りたい。その人を救う力が欲しい。確かそんなことを言ってたな。」

天満「だ、だから何だ？」

アイズ「ふ…お前の信念は所詮その程度だったんだな。守る守ると口にはしているものの、いざ行動を起こそうとして壁にあたると、くじける。大した信念だな！」

天満「あ……う…。」

アイズ「…僕にも…。」

天満「ん……。」

アイズ「僕にも救いたい人がいる。守ってあげたい人がいる。」

天満「アイズ…。」

アイズ「僕には、姉さんがいるんだ。あの時、落城の時に姉さんは僕を助けてくれた。」

天満「じゃあ…その人はもう…。」

アイズ「大丈夫。姉さんは生きてる。僕には分かるんだ。だから必死になって探してるんだ。」

天満「どんな人なんだ？」

アイズ「……地の国の…お姫様さ。名前はフィアン…。」

天満「と、ということは、アイズは王子なのか？騎士団長なのに？」

アイズ「……まあ…な。僕は王子って柄じゃないからな、皆の反對を押し切って騎士団長の任に就いたんだ。」

天満「ん？フィアン？……確か…？」

アイズ「どうした？」

天満「こ、これ…。」

アイズ「ん？なっ！これはっ！何でお前が姉さんの指輪を？」

天満「やっぱりアイズのお姉さんのだったのか。これさ、『ラフォール城跡』で拾ったんだ。」

アイズ「そ、そうか……だから…天満と会ったんだな。」

天満「どういうこと？」

アイズ「僕も指輪を持ってるんだ。ほら…この指輪は三つで一つなんだ。だからお互いが引き合うんだ。あの時、『究の回廊』で会った時も、この指輪に導かれたからなんだ。」

天満「三つ…？」

アイズ「ふう……どうやら元気が出たようだな。」

天満「え？」

アイズ「ふ…お前が何を怖がっているのかは分からないが、少しは頼れ。」

天満「アイズ…。」

アイズ「指輪を拾ってもらった礼だ。とことん付き合ってやるよ。」

天満「で、でも…。」

アイズ「僕は姉さんを必ず探し出す！それが僕の信念だ！それに、怖い時は…大切な人のことを思い浮かべてみればいい。そして、今自分の立っている場所を見据えるんだ。そうすれば色々見えてくる。」

（アイズ去る）

天満「自分の立っている場所…。」

（剣斗達は）

剣斗「アイズの奴、なかなかやるな。」

ノア「エルフか…。」

琴花「とりあえず戻ろうか？」

ユズキ「そうですね。」

ミリア「天満…ガンバ！」

（シャウトの元に戻る）

シャウト「どうだった？」

剣斗「天満次第…だな。」

シャウト「そうか…。」

アイズ「ふん。こそこそせずつに出てくれば良かったろうが。」

剣斗「き、気付いてたのか？」

アイズ「当たり前だ。」

剣斗「アイズには敵わねえなあ。」

アイズ「ところで、舟の搜索はどうする？」

シャウト「そうだな…。」

アイズ「何か手がかりは無いのか？」

シャウト「無いことも無いんだがな。」

アイズ「趣味の悪い答え方をするな。早く言え。」

シャウト「『センチザン泉帝山』だ。」

アイズ「あんなとどこにか？」

剣斗「どついうとこなんだ？」

シンセーテン「『泉帝山』はね、この『オルテナ』で一番高い山であり、一番神聖な場所だよ。」

剣斗「神聖？」

シンセーテン「うん。なんたって『ディーク』が降り立った所だからね。」

アイズ「なるほどな。主が造ったモノは、主の元に戻る…か。行ってみる価値はあるか。」

シャウト「ああ。早速行ってみるか。」

剣斗「天満は？」

シャウト「まだ舟があると決まったわけじゃない。それに…天満にも時間が必要だろ？」

剣斗「…………。」

天満「行くよ。」

剣斗「天満！」

天満「俺も行く。」

アイズ「足手まといはごめんだぞ。」

天満「俺は……今自分の意思でここに立ってる！」

アイズ「ふ……。」

シャウト「…………いいんだな？」

天満「ああ！行こう！」

シャウト「よし！」

(『泉帝山』に向かう準備をする)

ソリッド「ああ、分かった。気を付けてな。それと、先程渡した情報、あの子達に役立ててやってくれ。」

シャウト「はい。」

ミリア「シャウトーっ！っ！」

シャウト「では、行つて参ります。」

ソリッド「ああ、『オルフェリア』の導きが共にあらんことを…。」

ミリア「それで、その山はどこにあるの？」

シャウト「『アレスナル地方』だ。」

ユズキ「ですが…。」

シャウト「ああ、君達に聞いたとおり、橋は壊されていた。他にも各地の主要施設が次々と壊されている。一体誰が何のために、そんなことをしているのかは分からないが、邪霊の『超霊化』や、邪霊達が神と呼ぶ者。おそらく今までの出来事は全て関係しているだろう。そんな感じがする。」

天満「それでどうする？橋が無ければ渡れないんだろう？」

シャウト「それは大丈夫だ。行ってみれば分かる。」

皆「？」

（橋があつた所に到着）

天満「か、かなり遠いぞ…。本当に大丈夫なのか？」

シャウト「まあ、見てれば分かる。」

琴花「見てれば分かるって……………あっ！」

ノア「す、凄い！」

天満「これは？霊…神？」

シャウト「そのとおり！」

アイズ「そうか。大気に漂っている形を成してない霊神を集めて、密度を高めて具現化しているのか。」

シャウト「これでも一応『三霊神』と呼ばれてるからな。これくらいは出来る。」

ユズキ「で、でもまさか橋を造ってしまうなんて…！」

天満「シ、シンセーテンも出来るのか？」

シンセーテン「まあね。僕も一応『三霊神』だからね。」

シャウト「さあ、行くぞ。」

琴花「ほええ……いよいよもって、スケールが違っよねえ……！」

ミリア「ホ、ホントだよ……。シ、シャウトって、こんなに凄かったんだね……。」

（『泉帝山』に到着）

ミリア「ほわぁ〜！ たっか〜！ 雲がかかってるよ！」

シャウト「最も高い山だからな。だが気を付けろよ。古来から、神聖な場所には守り神がいるというからな。それに、この感じ……邪霊もいるみたいだな。」

天満「よし！ じゃあ行こう！」

（『泉帝山』の何処か）

？「ん？ 誰か入って来たな……。まあいい。……私は貴方に届きましたか？ 『デイク』よ……。」

次回に続く

第十七劇『後継』

天満「……………」

剣斗「…怖いかな？」

天満「え？こ、怖く…なんて…」

剣斗「確かに怖いよな。自分の中にもう一人の人格があつて、しかもそいつは破壊衝動満開の奴。それにもかしたら奴に体を乗つけられるかもしれない。」

天満「う……………」

剣斗「その恐怖は俺達には分からない。分かりたくてもない。けど、お前の力になることはできる。」

天満「剣斗……………」

剣斗「俺が必ず助けてやる！一人で悩むな！俺がお前を支えてやる！あの時、天満が俺を支えてくれてたように、今度は俺が天満を支えてやる！」

天満「…剣斗…ありがとう。少し、勇気が湧いてきたよ。ありがとうな。」

剣斗「ああ。」

ミリア「何か異常なくらい仲良いよね。」

琴花「あの二人はね、お互いが特別なんだよ。」

ミリア「ま、まさか…?」

琴花「そう……ホ…。」

剣斗「ホモじゃないぞ!」

琴花「うわぁお!いきなり何さ!」

剣斗「全く、何を話してるのかと思ったら…。」

ミリア「ホモじゃないの?」

剣斗「違うっつうの!」

シャウト「コラ!遠足じゃないんだぞ!」

三人「はい。」

シャウト「ふう…そろそろ『第一景』だ。」

ノア「何ですかそれ?」

シャウト「ああそうか、説明してなかったな。この『泉帝山』はな、三つの山が複合されてできている。その一つ目の山を『第一景』と言っんだ。続いて二つ目を『第二景』、三つ目を『第三景』という。」

ノア「そうなんですか。さすがは『三霊神』ですね。何でもご存知ですね。」

シャウト「はは、まあ初めてじゃないからな。昔、『デイク』に連れられて来たからな。」

ノア「そうだったんですか。」

シャウト「その後に、『アオス』と戦って、アイツがあんなことになったのだったな…。」

ノア「あの…一つ聞いてもよろしいですか？」

シャウト「ん？」

ノア「あなた方の言う『地門』という方のことを教えてもらえませんか？一体何故天満の中にいるのか。何故こちらに敵意があるのかを。」

シャウト「ふむ…いいだろう。皆も聞くといい。天満には辛いコトにはなるがな…。」

天満「大丈夫。話してくれ、シャウト。」

シャウト「…分かった。まずは私達が一体どうして生まれたのかを話さなければな…。」

（シャウト達の過去）

ディーク「『天剣』、『地玉』、『鏡楯』、さあ私の子供達…私と共に生き、力を貸してくれ！」

（人間、エルフ、獣型の者たち現れる）

ディーク「やあ、おはよう。そしてよろしく。」

（『アオス』との決戦）

シャウト「くそっ！追い込まれた！」

シンセーテン「どうするの『ディーク』！『アオス』の奴、よりもよって『アイツ』を呼び出すなんて！」

ディーク「まだだ！まだ諦めるな！確かに力の差はあるかもしれない。だが奴は独りだ！私達はそうじゃない！きっと希望がある！」

ジース「…俺が『アイツ』を抑える。その隙に『アオス』を倒せ。」

ディーク「ジース…。」

シャウト「そうか…それしかないか…。ディーク、行ってくれ！」

シンセーテン「そうそう。僕達はディークを守るためにここにいるんだ。『アイツ』は命を懸けてでも足止めするよ。」

ジラス「別に足手まといのお前らなんか必要ない！俺一人で十分だ！だからとつととディークと行きやがれ！」

シンセーテン「なにっ！」

ディーク「ジラス…ありがとう。私だけでなくシャウトやシンセーテンの心配までしてくれて。本当に優しい子だよ君は。」

ジラス「か、勘違いするなっ！お前らがいたんじゃ、かえって邪魔なだけだ！」

ディーク「ふふ、ありがとう。じゃあ行こう二人とも。」

シャウト「やっぱり私達も残った方が…。」

ディーク「ジラスはね。本当に優しい子だよ。お前達三人でも『アイツ』は倒せない。おそらく返り討ちにあって死ぬ。それほど強い…。」

シャウト「だったらなおさらっ！」

ディーク「死んで欲しくないんだよ。私にも…そして…お前達にも。あの子は死ぬかもしれない。でも、あの子なら何とかしてくれる。そんな気もする。私は、あの子の強さを信じたい。」

シンセーテン「なんだい！カッコつけちゃってさ！」

シャウト「ジラス…。」

ディーク「私達には私達の、今出来るコトをしよう！」

シンセーテン「うん！」

シャウト「『アオス』を倒す！」

ディーク「ああ、行こう！」

（再びジラス）

ジラス「クソ…強え…。このままじゃ…マジでヤベエかな…へへ…でもな…ここを通りたきゃ…俺を倒してから行きやがれっ！アイツラの背中を任せられてんだ！そう簡単に殺れると思うなよっつ！このクソ野郎おおっつっ！ん？何だ？動きが止まりやがった…。そ、そうか！あいつら『アオス』を倒したのか！よしっ！」

（ジラスはディークの元へ）

ジラス「はあはあはあ…ここだな…。おい、お前…ら…！」

シャウト「ぐ……。」

シンセーテン「ダメ……だよ…ディーク…。」

ジラス「何だよ…一体何してんだよ！ディーク！」

デーク「ジ…ジアスカ…。悪い…な…『アオス』を…倒せ…
な…った。だが…安心…しろ…。」

シンセーテン「やめてよ！そんなことしたら、デークが死んじゃ
うよ！」

ジ阿斯「何だつて！」

シャウト「デークは…『アオス』を封印するつもりだ。命を…懸
けて…。」

ジ阿斯「ふ、ふざけんなよ…そんなことさせるかよっ！」

デーク「す…すまない…だが…お前達…と…この…世…
界は…守る…から。」

ジ阿斯「許さねえっ！俺が『アオス』を倒してやる！ぐう…何し
やがる！離せっ！」

シャウト「駄目だ！今デークに近づくと巻き込まれるぞ！」

ジ阿斯「うるせえっ！離せよ！離しやがれっ！」

デーク「『アオス』を…この…地に…封印する。」

シンセーテン「ダメだっ！デーク！」

デーク「シャウト…シンセー…テン…そして…ジ阿斯
…。今…まで…ありが…とう…一緒に…生き…！」

ジラス「ああ……あ……ああ……ディイイイイクウウウウツツツ！」

シンセーテン「う……そ……。」

シャウト「デーク……。」

ジラス「うう……ああああ……。」

シャウト「ジラス……。」

ジラス「く……うう……。」

シャウト「ん？あれは何だ？」

シンセーテン「羽？まさかデークの！」

ジラス「！」

シャウト「確かにこれは……。うわっ！羽から光がつ！」

シンセーテン「デーク……デーク……？」

ジラス「え？デーク！生きてたのか！はは……そ、そうだよな！お前みたいなしぶとい奴が死ぬわけないもん！アハハハハ！」

デーク「シャウト、シンセーテン、ジラス……聞いてくれ。」

ジラス「よしっ！帰ろうぜ！腹減ったしな！」

ディーク「ジ阿斯、聞きなさい。」

ジ阿斯「今日は俺がメシを作ってやるよ！味は保証しないけどな！
アハハハハ！」

ディーク「ジ阿斯ッ！」

ジ阿斯「許さねえぞ！」

ディーク「！」

ジ阿斯「お前は死んでねえ！これからも生きて、俺を楽しめんだ
！そうじゃねえと許さねえ！」

ディーク「すまないジ阿斯。もう私は…。」

ジ阿斯「生きるって！」

ディーク「え？」

ジ阿斯「俺達を創った時、一緒に生きて力を貸してくれって言った
だろ！あれは嘘だったのかよっ！」

ディーク「嘘じゃない。嘘なわけあるはずがないだろ？」

ジ阿斯「だったら最後まで責任もてよ！俺達を、世界を導けよ！」

ディーク「もう私には時間が無い。だから私の血を遺す。私の後継
者として。その者にどうか力を貸してやってくれ。」

ジラス「ふざっけんなっ！」

シャウト「ディーク…私達はディークのために生まれた存在だ。他の者に力を貸す気は無い。」

シンセーテン「そうだよ！僕達の主はディークだけだよ！」

ディーク「力を貸すか否か、それはお前達の判断に任せるしかない。ただ『アオス』の脅威が完全に絶たれたわけじゃない。この世界のためにも、私の血が必要なんだ。」

ジラス「てめえがやればいいだろ！自分だけ死んで楽になって、後は後継者どもに任せますだと！」

ディーク「本当にすまない。私の血は『星の者』に預けた。お前達で見極めてくれ。その子が必要かどうかを。短い間だったがありがとう。」

ジラス「知らねえっ！」

シャウト「ジラスッ！」

ディーク「いいんだ……それと一つお願いがある。私の最後のわがままだ。二人で……。」

（ジラスは）

ジラス「あんな奴、とつとと死ねばいいんだ！約束一つ守りやがら

ねえ！」

シャウト「ジラス。」

ジラス「ん？何だよ？…ディークは…逝ったのか？」

シャウト「ああ。」

ジラス「ち……くそつたれ！」

シンセーテン「ジラスによろしくだつてさ。」

シャウト「手のかかる子だそうだ。」

ジラス「…ふん。」

シャウト「それともう一つ…。」

ジラス「あ？なっ！何しやがる！離せシンセーテン！」

シャウト「ディークの羽よ、その名の下に、かの者の魂を移し給へ。」

ジラス「何しやがる！お前らまで俺を……。」

シャウト「これで本当にいいんだなディーク。」

（現在へ）

剣斗「じゃあ天満に地門を移したのはデイクの意思だったのか？」

シャウト「ああ。デイクは言った。ジ阿斯には私のもっとも近くに居て欲しいと。」

ノア「でもジ阿斯はデイクの意思を知らない。ただシャウト達が自分を裏切り、天満の体に一種の封印として扱った。そう思ったんですね。」

シャウト「そうだ。アイツは頑固だからな。意思を伝えても、素直に従うとは思えなかったんだ。」

剣斗「でもちよつと待ってくれよ！天満の意思は無視なのかよ！そのせいで天満はどれだけ苦しんだと思う！」

シャウト「ああ…だから天満には申し訳なく思ってる。全てが終わったら、私を好きにしてくれ。」

天満「……ありがとう。」

シャウト「え？」

天満「話してくれて。今までは、ただこんな体に生まれたことを憎むしかなかった。だけど、理由を知ってるのと知らないのでは全然違う。アイツの…地門のコトも知ることができたし。ありがとう。」

シャウト「天満…だが…。」

天満「ああ……俺は母さんの実の子供でも無いんだろ？『星の者』」

…父さんにディークが俺を預けた。そして、母さんが育ててくれた。」

シャウト「ああ…そうだ。」

天満「真実が、分かって良かった。これで本当に自分の意思で立つことができる。……帰ったら母さんに謝らないとな。」

剣斗「何でだ？」

天満「俺を必死に守り育ててくれた母さんと父さんの想いを無視して、生きることを諦めたことがあったからさ。」

剣斗「天満…。」

天満「俺は生きるよ！そして、母さんの元に帰る！」

シャウト「ディーク…私達が見極めなくても、『ディーノ』にはお前の翼が生えているみたいだ。」

シンセーテン「アイツはどう思ったかな？ディークの意思を知って…。」

天満「さあ行こう！シャウト、シンセーテン、みんな！」

アイズ「どうやら、完全に立ち直ったみたいだな。」

シャウト「もうすぐ『第一景』の頂上だ。」

シンセーテン「うん。ねえシャウト？」

シャウト「何だ？」

シンセーテン「やっぱ居るよね？」

シャウト「……ああ……そうだろうな。」

？「おおつと！ちょっとお待ち！」

天満「何だ？」

シンセーテン「はは……出た……。」

？「まゝさかアチキを無視して進もうと思ってないわよねん？」

シャウト「はあ……。」

剣斗「誰だてめえ！」

？「むふふん……アチキは『守人バラード』なのよん。」

天満「守人？」

バラード「この先行きたければ、アチキをどうにかすることねん！
アンダスターンド？」

次回に続く

第十八劇『疾風』

シンセーテン「な〜にが、アングスタ〜ンド？だよ！」

バラード「あらん！そのキューティなお声はん！」

シンセーテン「久しぶりだねバラード。」

バラード「やっぱりシンセーテン様ん！」

シャウト「相変わらずのようだな。」

バラード「その渋いお声はん？シャウト様ん！お二人揃ってどうしましたねん？」

シャウト「実はだな……。」

（理由を説明）

バラード「なるほどねん。ディーク様のお舟を……。わかりましたわん。ですがその者達を通す訳にはいきませんわん。」

剣斗「何でだよ！」

バラード「好みじゃないからだわん。特にアナタはねん。」

剣斗「な、関係ないだろ！このクネクネオカマ！」

シンセーテン「ああ！その言葉は駄目…。」

バラード「オ…カマ？」

剣斗「な、何だよ！」

バラード「今、オカマったか？お？」

剣斗「へ…？く、口調が…？」

バラード「ふざけんなよコラア！あ？お？俺のどこがオカマなんだよ？調子に乗ってんなよ？は？お？死なすぞお？このクサレブタが！あの世に行くか？ああ？」

剣斗「ふ、普通に喋れんだったら、そうしろよ！」

バラード「うるせえな！テメエに何か迷惑かけたかあ？お？え？殺すぞお？？」

剣斗「す、すいませんした…。」

シンセーテン「はあ…。」

ノア「何ですかアレ？」

シャウト「この山の守人だ。いわゆる門番みたいなものだ。」

ノア「そうなんですか。それにしても…凄い方ですね。」

シンセーテン「バラードはね、オカマ呼ばわりされたら、スイッチが入ってしまうんだよ。普段はただウルサイだけの奴なんだけど、一度スイッチが入るとああなる……。」

天満「バラードさん。」

バラード「ああ？……！ディーク様ん！何故ディーク様が！？」

シンセーテン「違うよバラード。よく見てみなよ。彼は『ディーノ』だよ。」

バラード「え？……似ている……わん。そうですかねん……。お会いしとつございました『ディーノ』様ん。」

天満「バラードさん、どうかここを通して欲しいんだ。」

バラード「バラードとお呼び下さいねん。もちろん『ディーノ』様なら、お止めする理由はありませんわん。ですがこの神聖な場所に、どこの誰とも分からぬ者達を通す訳には参りませんわん。」

天満「どうしても？」

バラード「ディーク様の意思を守るのが、私の役目でございますわん。」

シンセーテン「ディークの意思がここを通せと言ってる言ったら？」

バラード「そうなのですかねん？」

天満「俺の意思がディークの意思なのかは分からない。だけど、俺達はどうしても舟がいるんだ。頼むバラード！通してくれ！」

バラード「了解しましたわん。ただし一つ条件がございますわん。」

天満「条件？」

バラード「あの者達を試させて下さいねん。」

天満「え？」

バラード「あの者達を見極めさせて頂きたいですわん。」

天満「で、でも…。」

剣斗「いいぜ！」

天満「剣斗！」

琴花「何するか分からないけど、いいよ！」

ミリア「アタシだって！」

アイズ「試されるのは気に入らないが、面白そうだ。」

ノア「そうですね。」

ユズキ「私もです。」

天満「みんな…。」

シンセーテン「それで、どうするのバラード？」

バラード「むふふん、簡単ですわん。それはん……。」

アイズ「戦いか？」

剣斗「それとも、また鏡の試練みたいなのか？」

ミリア「どちらにしろ、覚悟がいるよね。」

バラード「鬼ゴツコねええん！」

皆「へ……。」

剣斗「お、鬼ゴツコお？」

アイズ「く、くだらん。」

ミリア「そんなのでいいの？」

バラード「とにかくアチキを捕まえてみなさいねん。どんな手を使ってもいいわよん。もちろんアチキを殺すつもりでもいいわよん。」

剣斗「な、何か拍子抜けだけど、まあいいや。とにかく、すぐ終わらせてやる。」

アイズ「ん？ちよつと待てよ…。アイツ…。」

バラード「むふふん。では始めるわよん。時間は一時間よん。それ

では、始めねんっ！」

剣斗「さっさと終わらせてやる！はっ！」

バラード「へえ」『法術』ですわねん。少くしはできるみたいですわねん。」

剣斗「もらったあ！」

バラード「むふふん。」

ノア「な、バラードが増えた！」

バラード「すぐ終わらせてみなさいねん。できるものならねん。」

天満「す、凄い！一体何だ？」

シンセーテン「ただ単に早く動いてるだけだよ。」

天満「ということは、これって残像なのか？」

剣斗「はあはあはあ…くそ…どれが本体か分からない…。」

琴花「はあはあはあ…速すぎ…。」

ミリア「はあはあはあ…『法術』使ってもついていけないなんて…。」

ノア「はあはあはあ…何か…手はないか…？」

ユズキ「はあはあはあ…さすがは守人ですね…。」

バラード「ほらほらん、あと三十分しかないわよん。」

アイズ「『^{ハヤテマル}疾風丸』か…。」

バラード「へえ…懐かしい名前だわねん。よくご存知ねん。」

アイズ「暗殺者が守人だとはな。」

剣斗「どうということだ？」

アイズ「言葉のとおりだ。昔はバラードと呼ばれてはいなかった。金を出せば、どんな奴も殺す、名も無き暗殺者。その手際があまりにも刹那的で、神速をもって仕事をこなすことから、『疾風丸』と呼ばれたんだ。」

バラード「詳しいのねん。そうよん、アチキは元暗殺者よん。ディーク様に会ってアチキは暗殺者をやめたけどねん。」

アイズ「何故やめたんだ？」

バラード「あの方に名前を頂いたのよん。昔のアチキは名前なんて無かったのよん。知ってる…名前の無い地獄を…。そんな地獄からディーク様は救ってくれたのよん。だからアチキはあの方のために生きるって決めたのよん。ああそうそう、ディーク様はアチキを簡単に捕まえたわよん。」

天満「！」

バラード「さあ、時間が無いわよん。」

天満「俺もやる!」

バラード「『ディーノ』様? アナタはこんなことをなさらなくても
よろしいんですわよん?」

天満「いや、俺もやる! ディークには出来たんだろ? だったら俺も
負けてられないよ!」

バラード「ですが...。」

天満「捕まえてやるよ! 君の足は俺が止めてやる!」

バラード「ふ、不可能ですわよん...。」

天満「だったら、可能に変えてやるさ。」

(バラードの過去)

疾風丸「アンタにアチキは止められないわよん。 アンタだけじゃない、誰もアチキを...。」

ディーク「何て悲しい目なんだろう。 君の闇には光は無いのかい?」

疾風丸「黙りなさい! 殺すわよん!」

ディーク「君の名前は何て言うんだい?」

疾風丸「ふん。知ってアチキに会いにきたんじゃないの？アチキは『疾風丸』よん。」

ディーク「私が聞きたいのは君の名前だ。」

疾風丸「……！アンタに教える義務なんてないわよん！」

ディーク「無いのか。」

疾風丸「か、勝手に決めないでよん！アチキは……アチキは……。」

ディーク「辛いだろうな。名前が無い地獄はとても辛いよな。」

疾風丸「な、何泣いてるのよん？アンタには関係無いじゃない……。」

ディーク「すまない。」

疾風丸「もういいわん！アンタといるとおかしくなるわん！行くわよん！」

ディーク「君の足は私が止める。」

疾風丸「不可能よんっ！」

ディーク「だったら、可能に変えてみるさ。」

（数分後）

疾風丸「そ、そんな…こんな簡単に。」

ディーク「バラード…。」

疾風丸「え？」

ディーク「君の名前だよ。どうか？」

疾風丸「な、何勝手なことやってんのよん！」

ディーク「バラード…意味は…『暖かな光』。」

疾風丸「バラード…。」

ディーク「私についてきてほしい。君は…光に生きるんだ。」

疾風丸「アンタ…。」

（現在へ）

バラード「あの時と同じですわねん。行きますわよん『ディーン』様ん！」

天満「ああ！」

剣斗「天満！」

バラード「さすがは『ディーノ』様ん！早いわねん！ですが！」

天満「うわぁ！」

アイズ「天満！」

天満「痛つつう…大丈夫大丈夫。それより皆、耳を貸してくれ。いいコト思いついちった。」

皆「？」

天満「……………」

アイズ「なるほどな。なかなか面白そうだ。」

ミリア「さすが天満だね！」

バラード「話しててよろしいんですかね？あと五分ですわよん。」

天満「行くぞみんな！」

皆「おう！」

バラード「バゝカ正直に来ても駄目ですわよん。」

天満「今だっ！剣斗！」

剣斗「ああ！こっちだ！クネクネオカマーーーーーっ！」

バラード「な、何だとゴルアアアアツツ！またテメエかあああ
ああつつつ！」

剣斗「うわあ来た来た！今だノア！」

ノア「はい！こつちです！変態オカマさんっ！」

バラード「はあ？ちよつと顔がいいからつて調子に乗んなよ！オル
アアアアアツツ！」

ミリアとユズキ「こつちこつちバカオカマ！」

バラード「お、女だからつて許さんからなあっ！ツオルアアアア
アツツ！」

アイズ「オカマオカマオカマオカマオカマオカマオカマダメオカマ。
」

バラード「な、な、何度も言うんじゃねえっ！ガキイイイイツツ
ッ！」

アイズ「ふ…今だ！光よ！」

バラード「ぐ！眩しい！」

天満「へへ、カツとなると周りが見えなくなる。君の弱点だよ！バ
ラード、チェックメイトだよ！」

バラード「しまっ……っ！」

皆「やったーーーーっ！」

シャウト「お見事。バラードを怒らせ、逃げ道の無い場所へ誘導して捕まえる。バラードの負けだな。」

天満「時間ピッタシだよな？バラード？」

バラード「あ……ふふ……あははは！やられましたわん『ディーノ』様ん！」

天満「あは！それじゃあ！」

バラード「ええ。認めますわん。見事なチームワークでしたわよん。」

天満「よし！やったーーーーっ！」

バラード「まゝさか本当に捕まるとは思わなかったですわん。シャウト様達が連れてくるはずですわねん。」

シャウト「では通ってもいいんだな？」

バラード「はい…『ディーノ』様ん？」

天満「何？」

バラード「アチキの力が必要でしたら、いつでもお声をかけて下さいねん。命をもって、駆けつけますわん。」

天満「ありがとう。でも、一ついいかな？」

バラード「何でしょうかねん？」

天満「『デイーノ』って呼ばないでくれるかな？今の俺は天満だから。そう呼んでほしい。」

バラード「かしこまりました天満様ん。」

シャウト「では行こうか。」

バラード「あの天満様ん！」

天満「ん？」

バラード「どうか気を付けて下さいねん。どうやら侵入者がいるみたいなんですわん。」

天満「侵入者？」

バラード「何者かは分かりませんが、アチキに気配を悟られることなく、上に行ったもようなんですわん。私はここから動けませんから、どうか気を付けて下さいねん。」

天満「ありがとうバラード。助けが必要な時は、力を貸してくれ！」

バラード「はい！お待ちしておりますわん！」

（天満達は『第二景』へ）

アイズ「霧？いや、雲か？」

天満「さすが一番高い山だな。まだ半分も行っていないのに…。」

シャウト「…………。」

シンセーテン「侵入者のこと、考えてるでしょ？」

シャウト「ああ…。バードに気付かれない程のてだれ。一体何のためにここへ来たのか…。」

シンセーテン「まあ、いくら考えても分からないよ。会って直接聞けばいいんじゃないかな？」

シャウト「そうだな。敵でなければいいが…。」

（山の何処か）

？「段々近付いて来てるな。かなりの人数だが、何故だ？この感じ……知ってる感じがする。……まさかな。」

次回に続く

第十九劇『闘士』

シャウト「そろそろ山の中腹ってところか。」

剣斗「あのさあ、もしかしてまた守人がいたりするの？」

シャウト「いや、守人はバードだけだ。」

剣斗「よかったあゝ。まゝたあんな訳の分からない奴が出てくるんだったら、さすがにしんどいからな…。」

シャウト「あはは！そんなこと言うとバードにどやされるぞ。それに、バードは『ハットウシ^{ハットウシ}八闘士』の生き残りなんだ。強さもズバ抜けるんだぞ。」

剣斗「『八闘士』って？」

シャウト「ディークの下に集った、八人の闘士達さ。」

天満「生き残りって言うこと…。」

シャウト「ああ、ほとんどが『アオス』との戦いで命を落とした。今生きている者は、バードと同じく守人として、ディークの意思を引き継いでいる。」

シンセーテン「テントウを覚えているかい？彼も『八闘士』の一人だよ。」

天満「そうだったのか…。」

シャウト「お前の父もそうだったのだぞ。」

天満「父さんが！」

シャウト「『八闘士』の中でも、一番の実力者で、実質リーダー的存在。それが『星の霊神ダイン』だ。『アオス』との戦いの時は、残念ながら一緒に戦えなかったがな。もし、『ダイン』がいたら、デークは死なずにすんだかもしれない。」

天満「何で父さんは一緒に戦えなかったんだ？」

シャウト「人間界を守ってたからさ。」

天満「え？」

シンセーテン「『アオス』はね、エルフ界と人間界両方を破壊しようとしてたんだよ。それを知ったデークは、『ダイン』やバラード達に人間界を守らせたんだよ。」

天満「……………」

剣斗「でも何でデークは三霊神にじゃなく『ダイン』に天満を預けたんだ？」

シンセーテン「僕達はデークに創られた存在だからね。デークが死ぬと極端に力が劣る。そのため、力を蓄えるために眠る必要があったんだよ。『デーク』…つまりデークの力を受け継いだ天満が、力に目覚めるまではね。だから、力もあり信頼に厚い『ダイン』に天満を任せただよ。幸い『ダイン』には恋人がいたからね。」

母親の役目にも欠かさなかった。」

天満「それが母さんか……。何か俺……。何も知らなかったんだな。父さんや母さん、地門や自分のことまで……。」

アイズ「知らなかったのなら、これから知っていけばいいだろ。お前の時間はこれからなんだからな。」

天満「アイズ……。ああ……。ありがとう。」

シャウト「さあで、喋ってる間に『第二景』の終着だ。」

？「君達は誰だにゅ〜？」

皆「！」

琴花「え？何？うわ！可愛い〜！」

？「こんなトコで何してるにゅ〜？」

剣斗「何だ〜？このちっちゃいクマみたいな奴は？」

？「にゅ〜っ！ちっちゃい言うなにゅ〜っ！」

天満「ごめんな。え〜と、俺は天満、俺達はこの山に探し物に来たんだ。君はどうしてここに？」

？「ココに住んでるにゅ〜。家族で住んでるにゅ〜。」

シャウト「まさかお前は『妖精ポンコロ』じゃないか？」

？「にゅゝ！そうにゅゝ！にゅうは『ポンコロ』の『にゅう』だにゅゝ！」

天満「何？『妖精ポンコロ』？」

シンセーテン「へえゝ僕も初めて見たよ！神聖な場所にしか住まない種族『妖精』。その中でも極めて数が少なく、人の言葉を理解する『幻の妖精ポンコロ』。噂では『ポンコロ』は不思議な力を持つてらしいけど。」

天満「不思議な力って何？」

シャウト「私の聞いた話じゃ、癒しの力だとか…。」

ミリア「というか本人に聞いたらいいんじゃないの？」

シャウト「そ、そうだな。」

天満「ねえ、にゅう？」

にゅう「何だにゅゝ？」

天満「にゅう達『ポンコロ』にはどんな力があるんだい？」

にゅう「にゅゝ？力にゅゝ？何のことにゅゝ？」

天満「じゃ、じゃあにゅうの得意なことは何？」

にゅう「直すにゅゝ！」

天満「へ？直す？」

にゆう「そうだにゅー！直すにゅー！」

剣斗「何を直すんだ？」

にゆう「何でも直すにゅー！今も直してるにゅー！」

天満「今も？何を直してるんだい？」

にゆう「よく分からないにゅー！」

アイズ「イライラしてくるぞ…。」

天満「まあまあ。何で分からないの？」

にゆう「最近見つけた物にゅー！家みたいにゅー！大きな羽が付いてる家にゅー！」

シャウトとシンセーテン「！」

天満「家？こんな山の中にかい？」

シャウト「ちよつといいか天満。」

天満「どうしたんだ？」

シャウト「にゆうに聞きたいことがあるんだ。にゆう、その家に
ついて聞いてもいいか？」

にゆう「いいにゆう！何でも答えるにゆう！」

シャウト「その家に羽が付いてると言っただな？その羽は何枚付いてた？」

にゆう「にゆう……十二枚だにゆう！」

シャウト「…その家…形が変わったりしないか？」

にゆう「よく知ってるにゆう！変わるにゆう！変わるにゆう！おっきいお舟になるにゆう！」

シャウト「やはり…。」

シンセーテン「間違い無いみたいだね。」

天満「二人とも？一体何だ？」

シャウト「『ディークの箱舟』だ。」

皆「ええっ！」

シンセーテン「どうやら『泉帝山』に来て正解だったみたいだね。」

天満「じゃあにゆうが直してる家が！」

シャウト「ああ、私達が探している舟だ。」

天満「やったーーーーっ！これで真雪を助けられる！」

剣斗「ああ、やったな天満！」

琴花「にゆうにそこへ案内してもらおうよ！」

天満「ああ！にゆう、その家があるところに案内してくれるかい？
その家が俺達が探している物らしいんだよ！」

にゆう「分かったにゆう！ついてくるにゆう！」

シャウト「舟は見つかった。あとは…。」

シンセーテン「うん…。」

(にゆうについていく)

にゆう「ここだにゆう！にゆう！」

天満「これは！」

ノア「ひどい…。」

にゆう「にゆう！みんなどうしたにゆう！」

天満「ダメだ、にゆうっ！」

にゆう「どうして止めるにゆう？」

天満「誰か…いる。」

？「ほう……やはり知っている感じがしたのは、勘違いでは無かったみたいだな。」

天満「お前は！」

？「久しぶりだな。少しは強くなっ たみたいだが。」

天満「アスフォートツッ！」

シンセーテン「え？アスフォート？」

アスフォート「ほう、懐かしい顔もあるな。」

シャウト「久しぶりだなアスフォート。真雪をお前が拐った時は、自分の目を疑ったぞ。」

シンセーテン「嘘だろ…？シャウト、君は知ってたのかい？」

シャウト「ああ…。」

シンセーテン「どうして教えてくれなかったのさ！」

シャウト「すまない。本当に、あのアスフォートなのか確たる証拠を掴むまで、お前には言わなかった。だが…残念なことに、あのアスフォートのようだ。」

剣斗「一体何なんだよ！二人とも、アイツを知ってんのか？」

シンセーテン「アイツは…。」

アスフォート「言いくいかシンセーテン。だったら私が自分の口で答えてやろう。私はかつて、その二人と共に世界の危機を救った者の一人だ。」

剣斗「え？どういうことだ？」

アイズ「少しは頭を使ったらどうだ？」

剣斗「何だよ！」

ノア「『八闘士』……じゃないですか？」

剣斗「んなバカなっ！だったら何で俺達の敵なんだよ！」

天満「そんなこと、どうでもいい。」

剣斗「天満…？」

天満「にゅう、危険だから隠れてな。」

にゅう「にゅう？」

天満「大丈夫だよ。だから…ね。」

にゅう「にゅう！」

天満「『ポンコロ』達を傷付けたのはお前か？」

アスフォート「邪魔だったのな。」

天満「真雪を悲しませ、次は『ポンコロ』達か？」

アスフォート「この者達は舟を直そうとしていた。この舟を直されると、少々やかいなのでな。我が主の命により、舟を破壊する。」

天満「何の罪もない『ポンコロ』を……にゆうの大切な家族を……よくも……。」

アスフォート「弱き者はそれだけで罪だ。」

天満「人の大切なモノを奪う権利が、お前にあるのかつつ！」

アスフォート「弱き者の大切なモノなど、ゴミクズに等しい。」

天満「貴様あああつつつ！」

アスフォート「ふ……少々退屈してたところだ。遊んでやろう、かってこい。」

天満「シンセーテン、行くぞ！力を貸してくれっ！」

シンセーテン「待って天満！」

天満「え？どうして？」

アスフォート「……………」

シンセーテン「何故なのアスフォート？」

アスフォート「シンセーテン…。」

シンセーテン「ディークに一番慕っていた君が何故なの！」

アスフォート「私も若かった。ただそれだけだ。」

シンセーテン「何だよそれ…。」

アスフォート「ディークは弱かったから死んだ。そして『アオス』は強かったから生存している。私は弱き者に興味は無い。ただただ強き道を歩むだけだ。」

シンセーテン「まさか……お前の主っていうのは……？」

アスフォート「そうだ……『アオス』の後継者だよ。」

皆「！」

アイズ「バカなっ！」

ノア「また繰り返すのか？」

ユズキ「闇の時代を…！」

ミリア「嘘でしょう！」

シャウト「やはりそうだったのか。」

アスフォート「さすがはシャウトだな。まあ、知ったところで何も

することはできないぞ。お前達弱き者がいくらあがこうが、所詮は闇の強さには勝てない。どんな色も黒に勝てないようにな。」

シンセーテン「この世界を滅ぼす気なのかつ！」

アスフォート「滅びではない。新たな世界を創るためだ。強き者だけが住む新世界をな。」

天満「ふざけるなっ！じゃあ真雪を拐ったのは何故だ！」

アスフォート「知らなかったのか…。あの女性は鍵なのだよ。」

天満「鍵？」

シャウト「まさか！真雪が……『アーミア』の後継者なのか？」

アスフォート「そういうことだ。」

ノア「『アーミア』って確か……国王達に殺された…？」

シャウト「そうか…真雪を使い復活させるつもりか！」

アスフォート「そのとおりだ。悪夢だろ？」

シャウト「お前は本当にそんなことを許すつもりかつ！またあの悲劇を繰り返すつもりかつ！」

天満「ちよつと待てよ！真雪を使うつて何だよ…？」

アスフォート「生け贄だ。」

天満「イケニエ……だと……？」

アスフォート「あの女性の命を犠牲にし、神を復活させるのだよ。」

天満「何だつて……そ……そんなこと絶対させるかよっつ！真雪を返せっつ！」

アスフォート「ふ……もう遅い……。計画は着々と進んでいる。」

天満「許さないぞっ！アスフォートツツッ！」

アスフォート「許さない……か。ではどうする？ディークのように犬死にでもするか？」

天満「ディークは大切なモノを守るために死んだ。それが犬死にだつて言うのかっ！」

アスフォート「言ったであろう。弱き者の想いはゴミクスだと。」

天満「な！」

アスフォート「ディークはゴミクスを守るために死んだ。意味の無い犬死にだ。」

？「許さねえ……！」

天満「え？」

？「アイツを悪く言う奴は許さねえっ！」

天満「こ、これは！うっ……！」

アスフォート「弱き者は消えろっ！『シャドウシックル』！」

剣斗「天満！」

アスフォート「所詮はこの程度か。ディークの足元にも及ばない。期待した私が馬鹿だったな。」

？「よう……久しぶりだなアスフォート。」

アスフォート「お、お前はっ！」

シャウト「アスフォートは怒らせてはいけない奴を怒らせたな。ジ
アス……。」

ジアス「一つ…教えてやる。ディークの悪口を言ってもいいのは俺
だけだ！それ以外は認めねえっ！死ぬかつ！アスフォートツッ！」

次回に続く

第二十劇『黒幕』

アスフォート「そうか…ジアスか…。その姿で会うのは初めてだな。」

ジアス「ああ、まさかテメエがディークを裏切るとはな。」

シャウト「ジアスッ！」

ジアス「……ふん。言つとくけどな、俺はお前らを許した訳じゃねえ。天満を助けるために出てきた訳でもねえ。ただ単にコイツにムカつたから出てきただけだからな！」

シンセーテン「そんな分かりやすい言い訳一々しなくても…。」

ジアス「何か言ったかシンセーテン？」

シンセーテン「何でもないよ…。」

アスフォート「ムカついたか……では君が私の相手をしてくれるのか？」

ジアス「ああ、退屈はさせないぜ！」

ノア「あれがジアス…。」

剣斗「また出てきやがった！」

琴花「でも今回は頼もしいかも。あのバカ強いアスフォートが相手

なんだもん。」

ミリア「そうだね。」

ジラス「行くぜ、アスフォート…。テメエらは手え出すなよ。」

アスフォート「私をあの時と同じに考えているなら一瞬で終わるぞ。」

ジラス「ふん、影使いのアスフォート、しっかり記憶に残ってるぜ！」

アスフォート「ふふ…。」

ジラス「ふふ…。」

アスフォート「来い…。」

ジラス「はあっ！」

アスフォート「『シャドウウォール』！」

ジラス「あまいぜアスフォート！こっちだ！」

アスフォート「ぬ！」

ジラス「『ジダンシャゲキ地弾沙撃』っ！」

アスフォート「ぐっ！」

剣斗「っ、強え…！」

琴花「あのアスフォートを吹っ飛ばしたあっ！」

シャウト「さすがジ阿斯だな。だが…。」

ジ阿斯「どうしたあ？そんなもんかアスフォートさんよ？」

アスフォート「ふふふふ…。」

ジ阿斯「何がおかしい…？」

アスフォート「これが…あのディークが生み出し、霊神の中の霊神と呼ばれたジアスの力か…。」

ジ阿斯「ふん、今更分かったのか？自分との差を。」

アスフォート「ああ、どうやら天と地程の大差があったようだな。」

ジ阿斯「ふ…。」

アスフォート「どうやら私は強くなりすぎたようだ。」

ジ阿斯「何っ！」

アスフォート「聞こえなかったか？ではもう一度言ってやろう。今の君では私には勝てない。」

ジ阿斯「強がりもそこまでいくと笑えるな。」

アスフォート「なら見せてやろう。本当の私をな。」

ジ阿斯「はあ？」

アスフォート「これに…見覚えはあるか？」

ジ阿斯「ん？」

シャウト「な、あれは！」

アスフォート「ふふ…そうだ。」

シャウト「『血の霊神』…。」

ジ阿斯「バカなっ！それはディークが！」

アスフォート「そう、ディークが封印した霊神『血のサクリファイス』だ。」

ジ阿斯「なぜデメエがそいつを！」

ノア「何てまがましい『鍊』なんだ…。一体何なんですかあれは？」

シンセーテン「あれはね、ディークが封印した霊神なんだよ。」

ノア「封印？そんなに危険なんですか？」

シンセーテン「普通霊神は霊神の持つ力を持ち主に与え、持ち主はその力を装備化して強さを得る。だけどあれは…。」

剣斗「一体何なんだよ！」

シャウト「あの霊神は持ち主の『生命力』と『血』を犠牲にして持ち主の武器となる。」

ミリア「血って…?」

シャウト「そうだ…使い続けると…死ぬ。」

剣斗「そうか…だからディークは封印したのか。」

シャウト「ああ…それにあの霊神は…。」

サクリファイス「ヒィーヒッヒッヒッ！久々に血をすすれるぜえ！ヒャーハッハッハッ！血だ！早く血をよこせえっ！」

アスフォート「ああ、好きなだけすすれ…。」

ミリア「うわ…気持ち悪い…！アスフォートに噛みついてる…！」

シャウト「そうまでして力を得たいかアスフォート！」

アスフォート「くく…負ける気がしない。」

ジアス「くっ！」

アスフォート「ではコイツの力、見せてやる。」

ジアス「ちい、何て『鍊』だ！」

アスフォート「ディークの遺産もろとも消える！『旋血じ…』。」

？「はい、ストップ。」

皆「！」

？「それはまだ早いよアスフォート。」

アスフォート「ネ、『ネオス』様…！」

剣斗「ネオス？」

シャウト「アイツがそうか！」

シンセーテン「ようやく黒幕登場だね。」

アスフォート「なぜここに？」

ネオス「サクリファイスの気配を感じてね。アスフォートが使おうとしてるんじゃないかと思ってね。それはまだ使っちゃ駄目だって言っただよね？」

アスフォート「も、申し訳ありません！」

ネオス「君ならここににいる者達程度、『影』だけで倒せるはずだよね？」

アスフォート「すみません…。」

ネオス「まあいいよ。それより計画は最終段階に移行したよ。弱者に構ってる暇はないよ。さあ、戻るよ。」

ジ阿斯「待ちやがれ！テメエが『アオス』の後継者か？」

ネオス「そうだよ、ジ阿斯くん。」

ジ阿斯「なら今ここでテメエを倒せば、全てが終わるよなっ！」

ネオス「うーん、まあそうかな。」

ジ阿斯「ならディークに代わってここで倒すっ！『^{ボウガブゲキ}暴雅舞撃』！」

ネオス「ふふ…神の力をを見せてあげる。『カオスエンド』…。」

ジ阿斯「何だと！ぐわあああつつ！」

シンセーテン「ジ阿斯ッ！」

ネオス「かなり手加減したんだけどね。この程度なら計画に支障は無いか…。」

ジ阿斯「ぐっ……野郎…。」

ネオス「では行こうかアスフオート。」

シャウト「待てっ！お前達は…？」

ネオス「ふふ…全てを知りたければ、来てみなよ。我が『^{コクオウジョウ}黒皇城』へ。あ、そうそう、君達の友達もいるからね。」

剣斗「真雪か！」

ネオス「ふふ…アイズくん…君の大事な人もね。」

アイズ「何だと！貴様、今何て！」

ネオス「ふふ…ではまた会えたら会おうね。」

アイズ「待てっ！」

シャウト「アイツがネオスか…。確かに『アオス』に似てはいたが…。」

アイズ「姉さん…やっと見つけた。待ってて、姉さん。必ず僕が助ける！」

剣斗「アイズ…。ところでシャウト、これからどうする？舟はアスフォートにボロボロにされたし。」

シンセーテン「まずはそんなことより、しなきゃいけないことがあるよ！」

剣斗「ジアスカ…！」

ジアス「ちい、アスフォートの野郎…。いつつ…久しぶりだなテメエら。特にシャウトにシンセーテンよう。」

シャウト「ああ、そうだな。」

ジラス「あの時俺を気絶させたのはお前だなシャウト。」

シャウト「天満に頼まれていたからな。」

ジラス「ふん……んで、俺に何か用かよ？」

シャウト「とぼけるな……天満の中で聞いていたはずだ。」

ジラス「ふん……あのボロ舟を動かさせてか？嫌だね。」

シンセーテン「そう言うと思った。」

シャウト「どうしてもか？」

ジラス「やる意味が無い。」

シャウト「意味ならある。ディークの意思を知ったお前なら分かるはずだ。」

ジラス「……気に入らねえ。」

シャウト「え？」

ジラス「気に入らねえんだよ！どいつもこいつも！それにお前らの話、完全に信じたわけでもないしな！」

シャウト「だったら力ずくでも協力してもらっぞ！」

ジラス「面白い……やってみやがれ。」

シンセーテン「やめなよ二人とも！二人が争って何になるんだよ！」

ジース「気絶の借り返してやるぜ！」

シャウト「やってみろ！この分からずやめ！」

シンセーテン「二人ともっ！」

皆「！」

アイズ「舟が光って！」

？「…久しぶりだなお前達。」

三霊神達「デーク！」

アイズ「何だって！じゃあアイツが…！」

ジース「テメエ…何で？」

デーク「何故現れたか分からないか？」

ジース「だから何だよ？」

デーク「本当に分からないのか？」

ジース「う…。」

デーク「頭のいいお前なら、もう全て分かっているはずだろ？」

ジラス「うるせえっ！お前に……先に逝きやがったテメエに俺の気持ちがあつてたまるかつ！」

ディーク「すまない。だが……」

ジラス「見くびんなっ！」

ディーク「ジラス……」

ジラス「お前が……お前達が俺を裏切るわけなんてねえっ！そんなこと分かってんだよっ！天満の中に俺を閉じ込めたのだって、自分の側にいてほしいわけじゃない……本当はあの時の戦いで力を使い過ぎた俺を……守るためだっていうこともな。」

シャウト「そうか、天満はディークの生まれ代わりだ。その天満の中にいれば、一番回復できる。」

ディーク「……………」

ジラス「テメエは卑怯だ！自分では何も語りやがらねえ！俺ばっか空回りして……………くそっ！」

ディーク「ジラス……ありがとう。今まで天満を……『ディーン』を守り続けてくれて。」

ジラス「だから卑怯だつてんだ！」

ディーク「お前は少しも変わってないな。あの頃の、優しいジラスだ。」

ジラス「くそディーク…。」

ディーク「ふふ…他の二人も久しぶりだな。シャウト、シンセーテン。」

シャウト「ああ…。」

シンセーテン「ディーク…。」

ディーク「ジラス…。」

ジラス「…何だよ？」

ディーク「私の最後のわがまま、聞いてくれるかい？」

ジラス「ちい、テメエには何回最後のわがままがあんだよ！」

ディーク「頼む…ジラス。」

ジラス「ちい…これが…最後だからな。」

ディーク「ありがとう…皆で幸せに生きてくれ。お前…いや、お前達ならできるはずだ。」

ジラス「本当に勝手だな…！」

シンセーテン「ジラス！ディークは！」

ディーク「いいんだシンセーテン。大丈夫、ジラスは分かってくれてるよ。」

ジラス「ふん…。」

ディーク「ありがとうジラス。」

ジラス「…分かったからさっさといけよ！用はすんだんだろ！」

ディーク「幸せに生きてくれ……私の愛する子供達…。そして…聞
いてるね『ディーノ』。君に全てを押し付けてすまない。だが君な
ら、天満ならできると信じてる。私の愛する子供達をよろしく頼む。
」

ジラス「ディーク！」

ディーク「！」

ジラス「あとは……任せろ…。」

ディーク「…ありがとうジラス。この世界を頼む…。」

ジラス「分かったよ……親父…。（ボソ）」

シャウト「ディーク…。」

シンセーテン「ディークの意思是、僕達が引き継ぐよ。」

ジラス「ふう…。」

シャウト「ジラス…。」

ジラス「分かってるよ。アイツの本当に最後のわがまま…聞いてやるよ。」

シンセーテン「ジラス！」

ジラス「だけどこの舟はどうすんだ？ボロボロだぞ。」

にゅう「にゅう達に任せるにゅ〜！」

ジラス「はあ？お前みたいなチビに任せられるかよ！」

にゅう「そんなことないにゅ〜。初めて見つけた時の方が酷かったにゅ〜。だから任せるにゅ〜！にゅう達守ってくれたお礼だにゅ〜！」

ジラス「ほう…じゃあやってみるよ！できなかったら焼いて食うかなっ！」

にゅう「にゅ〜つつ！」

シャウト「からかうなジラス！頼めるか、にゅう？」

にゅう「みんなで頑張るにゅ〜！」

ジラス「じゃあ俺は戻るぜ。シャウト、シンセーテン、あとは頼む。」

シャウト「ああ。」

天満「うっ…。」

剣斗「天満！」

天満「少し…疲れた…。」

剣斗「ああ、ゆつくり休め。」

にゆう「さあ！頑張るにゆ〜っ！」

ポンコロ達「にゆ〜〜〜！」

（三日経った）

にゆう「完成だにゆ〜っ！頑張ったにゆ〜っ！」

剣斗「これが『ディークの箱舟』…。」

天満「う…。」

剣斗「起きたか天満！」

天満「出来たんだな。…待ってるよ真雪。」

（その頃真雪は）

ネオス「さあ、始めよう。」

真雪「……………」

次回に続く

第二十一劇『起動』

邪霊「ネオス様、用意できました。」

ネオス「よし。」

真雪「う……。」

ネオス「やあ、気づいたかい？」

真雪「ここ…は？」

ネオス「これから君の力を覚醒させるんだよ。この『セイレンドウキ醒錬導機』と呼ばれる機械の中に入ってもらってね。」

真雪「覚醒…？」

ネオス「話したよね。君の力のことを。」

真雪「勝手なこと言わないで！離してよ！嫌！」

ネオス「無駄だよ…。僕の理想のために使ってもらうよ…。君の命をね。『アーミア』のようにね。」

真雪「嫌っ！嫌っ！嫌っ！天くーんっ！」

ネオス「黙らせて。」

邪霊「はい。」

真雪「うつ！て……天く……ん……。」

ネオス「……似ている……狂おしいくらいに……。」

邪霊「ネオス様……？」

ネオス「何でもない。連れて行つて。」

邪霊「え？あの……。」

ネオス「何度も言わすなっ！さっさと連れて行けっ！」

邪霊「は、はいっ！」

？「いつになく荒れてますね。」

ネオス「『ゼロ』か？」

ゼロ「彼女を思い出してたのですか？」

ネオス「……………」

ゼロ「『レアブレード』の所在が分かりました。」

ネオス「そう……。」

ゼロ「珍しくあの方が動きましたよ。」

ネオス「じゃあ安心だね。ところでどこにあったんだい？」

ゼロ「『ディーノ』さんのところに…。」

ネオス「……ゼロ…。」

ゼロ「何でしょうか？」

ネオス「君は最初から知ってたんじゃないのかい？『レアブレード』が『ディーノ』のところにあると。」

ゼロ「…何のことですか？」

ネオス「…まあいい。あとは任せるね。」

ゼロ「はい。それでは…。」

ネオス「……『アーミア』……もうすぐだよ…。」

（その頃天満は）

シャウト「見事だ！これほど完璧に修復してしまつとは！」

天満「にゆう達、本当にありがとう！」

にゆう「お礼を言うのはこっちだにゆう！にゆうの大切な家族を守ってくれてありがとうにゆう！」

シャウト「よしっ！それでは起動させるか！天満、今ならジラスと

連絡取れるはずだ……頼む。」

天満「分かった……。地門……いや……ジラス……答えてくれ……。」

（天満の精神の中）

天満「……君が……ジラスか？」

ジラス「ああそうだ。」

天満「こうして面と向かって話すのは初めてだよな……。」

ジラス「お前に一つ、聞いておきたいことがある。」

天満「？」

ジラス「ディークを……ディークを恨んでいるか？」

天満「……どうだろう……？」

ジラス「分らないのか？」

天満「確かにディークは俺を生み出し、自分の役目を俺に押し付けた。いや、俺だけじゃない……シャウトやシンセーテン、それに君に役目を押し付けて自分は死んだ。勝手だと思った。何で俺なんだとも思った……。」

ジラス「ああ……そうだろうな。」

天満「だけど……俺は……この世界に来て……たくさんを知った。自分のことや、母さんと父さん、そして君……ジアスのこと……。他にも色々なことを見て聞いて、触って感じて、思ったことが山程ある。」

ジアス「……。」

天満「今は……感謝してるよ。死んでないんだデイクは……俺の中で生きてる。そして導いてくれる。デイクの血が、俺……『デイク』を！」

ジアス「天満………一番最初に俺の声を聞いた時……覚えてるか？」

天満「ああ……あの時は、君に何も守れない……約束もな………そう言われたよな。」

ジアス「今はどうだ……？」

天満「守るよ。俺はこの世界に来て、大切なモノをいっぱい貰った。それを守りたい！譲れないモノがある限り、それを奪おうとする奴にはもう負けない！約束だジアス！俺は俺の全身でここに立つ！」

ジアス「瞳の色が変わりやがった……。その言葉、忘れるんじゃないぞ！」

天満「ああ、もちろんさ！」

ジアス「デイク……お前の翼は色濃く受け継がれてるみたいだな……。大した奴だよ、お前も……コイツもな……。」

（現実）

ジラス「よしっ！やるぜっ！」

シャウト「ああ！」

シンセーテン「うん！じゃあ始めるよ！…我が名はシンセーテン。
『天』を司る者なり。」

ジラス「我が名はジラス。『地』を司る者なり。」

シャウト「我が名はシャウト。『鏡』を司る者なり。」

ジラス「我が主ディークの名のもとに『天』『地』『鏡』を開放せ
り…。」

シャウト「眠りしその偉大なる御力よ…ここに集いし…。」

シンセーテン「開かれし我らが力により…永き眠りから…。」

三霊神達「覚醒せよっ！」

剣斗「うわっ！眩しいっ！」

にゅう「眩しいにゅ〜！」

シャウト「頼む！起動してくれっ！」

シンセーテン「くっ……くっ……！」

ジラス「根性みせやがれ！このボロ舟がつ！」

ノア「駄目なのか！」

ユズキ「お願いします！動いて下さい！」

ジラス「く……くそがつ！」

シャウト「げ……限界だ！」

シンセーテン「デーク……力を……貸して……。」

ミリア「頑張ってシャウト！」

琴花「頑張れ！頑張れ！頑張れ！頑張れ！」

シャウト「ん？この力は！」

シンセーテン「デーク！デークなの！どこから？……ジラス？」

ジラス「デーク……じゃねえ……『デイナー』……天満っ！」

天満「俺も力を出す！行くぞみんなっ！」

ジラス「へへ……やるぜえっ！」

シンセーテン「さすが天満！行くよっ！」

シャウト「ふふ……みんなっ！全てを出せっ！」

アイズ「頑張れ…天満！」

天満「うおおおつつっ！目覚めろっ！天駆ける舟えっ！」

剣斗「や……やったのか？」

ユズキ「皆さん、大丈夫ですか？」

シャウト「はあはあはあ……無事か……。」

シンセーテン「はあはあはあ……うん……うん。」

ジラス「はあはあはあ……へへ……。」

天満「はあはあはあ……み……みんな……。」

天満と三霊神達「やったぞー……っつつ！」

剣斗「アイツやりやがったぜ！」

ユズキ「はい！」

シャウト「どうやら……成功したようだな……。」

シンセーテン「つつかれたあゝ！でもやったね、みんな！」

天満「ああ……。」

シンセーテン「天満！ジースは？」

天満「俺の中に戻ったよ。あとは任せた、俺は疲れたから休むだつてさ。」

シャウト「ふ…アイツらしいな。」

シンセーテン「全くだね。」

剣斗「大丈夫か天満！」

にゆう「にゅ〜？」

天満「うん。かなり疲れたけどね。ありがとう二人とも。」

シャウト「よし！じゃあ舟に行こう！」

皆「おう！」

にゆう「さよならにゅ…。」

天満「にゆう……また会いにくるよ。」

にゆう「ホントにゅ〜？」

天満「ああ約束する。」

にゆう「でも今度はにゆうが会いに行くにゅ〜！天満の力になりたいにゅ〜！」

天満「にゆう……ありがとう。」

にゆう「にゅ……天満……。」

？「行けばいい、にゆうよ。」

にゆう「長老！」

長老「天満殿の側にいたいじゃろ？ワシ達も力になりたいが、傷付いた者がほとんどじゃ。残念ながら足手まといにはなっても、役には立たないじゃろうからな。」

天満「そんなことないよ！この舟だって、『ポンコロ』達がいなきゃ、使えなかったんだから！」

長老「ありがとう天満殿。しかし、今は傷を癒さなければ、それこそ本当にただの足手まといになってしまう。」

天満「長老……。」

長老「じゃがにゆうは特別じゃ。我ら『ポンコロ』族の中でも、突出した『レストレピア聖鍊金』の使い手ですぞ。」

天満「レス……？そうか……舟を直した力のことだね。」

長老「ですから必ず皆さんのお役に立てると思いますじゃ。」

天満「にゆう……一緒に来るかい？」

にゆう「いいにゆう？」

天満「俺達の旅は危険だよ？それでも来るかい？」

にゆう「天満についていくにゆう！」

天満「分かったよ。これからよろしくな！」

にゆう「にゆう！」

天満「ではにゆうをお借りします。」

長老「ワシ達の力が必要になったら、いつでも声をかけて下され。」

天満「ありがとうございます。じゃあにゆう、行くよ！」

にゆう「にゆう！」

長老「にゆうを頼みましたぞ天満殿。」

シャウト「みんな、用意はいいか？」

天満「ああ、待ってる真雪！」

剣斗「いつでもいいぜ！」

琴花「真雪……今行くからね。」

ミリア「何か緊張してきちゃったよ。」

アイズ「姉さん、もうすぐ行くからな！」

ユズキ「『氷の悪魔』……もしかしたらアソコに……。」

ノア「この人達についていけば、何か手がかりがあるかもしれない。
『禁忌』を救う何かが……。それに……『イリス』さん……。」

シンセーテン「いよいよだね。」

にゆう「出発進行だにゅー！」

天満「行こう！『ムゲン島』へ！」

（舟は浮かび『ムゲン島』へ）

剣斗「スツゲエ！ホントに空飛んでやがる！」

アイズ「ああ、驚かされるな。」

剣斗「ちつとも驚いてる顔しないで言うなよ……。」

シャウト「島に入った！このまま一気にネオスがいる『黒皇城』に
向かうぞ！」

シンセーテン「シャウト！上から何か来る！」

シャウト「何だと！」

皆「うわあああー！」

シャウト「くっ……右の羽が損傷したか！」

シンセーテン「このままじゃ墜落するよっ！」

シャウト「やむを得ない！この下に着陸させる！」

（島のどこかに着陸）

シャウト「みんな、無事か？」

天満「いてて…一体何があったんだ？」

シンセーテン「分からない…。上から急に黒い物体が飛んできて…。」

ノア「ん？そこにいるのは誰です！」

？「あちゃあゝえらいすまんかったのう。どうも射的っちゅうのは苦手なんや。ほんまはマストだけを折るつもりやってんけど。」

アイズ「アイツは！」

？「一応自己紹介しとこか？ワイは…。」

アイズ「『サイガ』あああつつつ！」

天満「アイズ！」

サイガ「おおっと、危なっ！ん？お、アイズやないか！」

アイズ「どの面下げて僕の前に現れている！」

サイガ「何や何や、久しぶりに会った思たらいきなり攻撃しよるなんて。」

アイズ「何故お前がここにいる！」

サイガ「頭のええお前や。とつくに理解しとるやる？」

天満「どうしたんだアイズ？アイツと知り合いなのか？」

アイズ「サイガあああつつつ！」

サイガ「おお怖っ！せやけど今はお前に構ってる暇無いねん。」

アイズ「ふざけるなっ！『リュウコウハツカ柳光白華』！」

サイガ「暇無いっちゅうてんねんけどな。しゃあないわ。『リュウアンコ柳闇黒華』！」

アイズ「ちいっ！」

サイガ「あん時より大分マシになってるやんけ。」

アイズ「貴様だけは許さん！」

天満「アイズ…一体…？」

シャウト「サイガ……確か『天の国の騎士団長』だった奴だ。」

サイガ「へえ、知ってはる人もおんねや。そうや、ワイは『元天の国の騎士団長』やで。」

天満「でも、何でアイズがあんなに怒ってるんだ？」

シャウト「それは…。」

サイガ「簡単やで。ワイがアイズに恨まれとるからや。」

アイズ「相変わらずのお喋り好きだな。」

サイガ「まだ根に持つとるんか？ちっちゃい男やなあ。」

アイズ「貴様！」

サイガ「せやけど、しばらく見んうちに、でかくなつたもんやなあ。
…ここまで来たっちゆうことは、フィアンがここにおることを、知
ってるわけやな。」

アイズ「貴様…もしかして！」

サイガ「せや、フィアンを拐つたのは…ワイや。」

アイズ「貴様あああつつつ！」

サイガ「久しぶりに稽古つけたる。せやけどいくら弟でも手加減で

きんで？」

次回に続く

第二十二劇『誓願』

剣斗「弟おっ！」

天満「アイズ？」

アイズ「ちっ…。」

サイガ「なんやなんや、けつたいな顔しおつて。そない嫌か？ワイと兄弟っちゅうのは。」

アイズ「黙れっ！僕にるのは姉だけだ！」

サイガ「姉か……いつまでそない呼んどるんや？」

天満「いつまで？」

アイズ「黙れ…。」

サイガ「血も繋がってないんやで？」

アイズ「黙れっ！貴様に何が分かる！僕達を裏切り捨てた貴様につ
！」

サイガ「そのお陰で、望んどった騎士団長になれたやないか。ワイがおつたらアイズには無理やったんやからな。」

アイズ「見下すなっ！貴様など、すぐに追い抜けたんだ！」

サイガ「無理や。お前にワイは抜けへん。」

アイズ「くっ…そんなことはどうでもいい！答えろっ！姉さんは城のどこにいる？」

サイガ「言うことなすこと、全てズレとるわ。」

アイズ「何だと！」

サイガ「たとえフィアンの居場所を知ってもな、お前の力では助けられへん。何よりお前はワイに勝てへん。」

アイズ「試してみるか？」

サイガ「せやけど今は急いでんねん。用があんねんやったら城に来いや。」

アイズ「だったら何しに来た？」

サイガ「ああ、ワイの用はもう済んだわ。」

アイズ「……。」

サイガ「これや。」

剣斗「それは！天満のバンダナ！」

シャウト「しまった！奴の狙いは『レアブレード』か！」

天満「いつのまに…？」

サイガ「何や気付かへんかったんか…。アイズ…お前はどうか？」

アイズ「くっ…。」

サイガ「これが今のワイとお前の差や。ま、それでもフィアンを助けに来るんやったら城に来たらええ。けどや…覚悟しいや。なめとつたら…死ぬで…。」

アイズ「待てっ！」

サイガ「……………早く来いや…。待つとつたるさかい。」

アイズ「くそっ！」

天満「アイズッ！」

アイズ「離せ天満っ！離してくれっ！くそっ！待てっ！サイガッ！」

シャウト「落ち着けっ！」

アイズ「うるさいっ！お前らに何が分かる！何も知らないくせに、僕に指図するなっ！」

天満「うん、知らない。だから話してくれ。アイズ……………君が言ってくれたんだ。俺は一人じゃないって。俺は…俺達はアイズの仲間だ。だから話してほしい。」

アイズ「天満……………お前達…。」

剣斗「そついうこつた！」

アイズ「……ああ、分かった。教えてやる。アイツと僕……そしてフ
ィアン姉さん……三人の運命が決定した時のことを……」

（アイズの過去）

アイズ「はあはあはあ……に……兄さん……」

サイガ「もうすぐや、我慢しい。あの孤児院に戻りたいんか？」

アイズ「嫌だ！もうあそこは嫌だ！」

サイガ「ワイかて嫌や。あないなトコおつたら腐つてまう。ワイ達
を見捨てた親を見返すんや。幸せになるんや！自分の力で！」

アイズ「うん……」

サイガ「着いたで。ここが幸せへの第一歩や！」

アイズの語り「僕達は小さい頃、親に捨てられ、ある孤児院で育つ
た。僕が生まれてまもなく捨てられた。サイガとはかなり年も離れ
ていた。孤児院にいる頃は、体の弱かった僕は、いつもイジメの対
象にされていた。さらに、そこにいる先生までも僕達を邪険に扱っ
ていた。ただ……地のエルフというだけで。そう、その孤児院は天の
エルフしかいなかった。ある日、サイガがその孤児院の先生を殺し
た……。それがキッカケとなり、孤児院を出て、地のエルフの国を目
指した。そして、『ラフォール城』に着いた僕達は、兵士として雇

ってもらった。そこでサイガは、驚くべき速さで力をつけ、わずか一年で騎士団長まで登りつめた。そして、まだ幼かった僕は、ある一人の少女の世話役兼遊び相手として城に仕えた。その少女がフィアン姫…姉さん。その時、僕は八歳だった。何事も無く年月が過ぎていった。僕が十歳になった頃、それは起きた。」

アイズ「くそっ！当たらない！」

サイガ「まだまだだな。お前の剣は直線的過ぎやねん。」

アイズ「はあはあはあ……兄さんが強すぎなんだよ！こっに見えても城の剣術大会で三位だったんだよ！」

サイガ「そないなもんでもええ。所詮大会なんて遊びや。本物は命を懸けた戦いでしか生まれへん。それに三位なんてドベと一緒にアイズ…常に一番を目指しい。」

アイズ「でも…兄さんがいるから一番は無理だよ…。」

フィアン「あら、こちらでしたの。アイズ！ボロボロではありませんか！」

アイズ「姫！」

フィアン「アイズ、姫と呼ぶのは止めてと言っているでしょう。」

アイズ「ごめん…姉さん。」

フィアン「ふふ。」

アイズの語り「サイガは兄として、男として、壁として、そして憧れとして存在した。何よりも強く、何よりも高く、何よりも遠い存在だった。そして、フィアン姉さんの婚約者としてサイガは選ばれた。」

ラファール王「我が家臣達も一致相違無い。フィアンを…この国を任せたぞ。」

サイガ「はい…。」

アイズの語り「最初は反論はやはりあった。孤児院で暮らしていた経歴。身分も最下層。だが、サイガは自分の力だけで登りつめた。身分じゃ雲の上の存在の奴らを、自分の力で認めさせた。そんなサイガに、当然フィアン姉さんも惹かれていった。」

フィアン「貴方は何でもお出来になるのですね。」

サイガ「そんなことあらへん。ただ必死なだけや。」

フィアン「私は、そんな貴方…好きですわ。」

サイガ「ワイは…。」

アイズ「兄さん！」

サイガ「アイズ！」

アイズ「これ見て！」

フィアン「まあ、これは『誓い石』チカイセキではありませんか！どちらでこ

れを？」

アイズ「旅の商人から貰ったんだよ！」

フィアン「まあ。」

アイズ「この石に書こうよ！誓いの言葉を！」

フィアン「いいですね。」

サイガ「お前の誓いはなんなんや？」

アイズ「ずっと三人一緒にいられますように！だよ！あと強くなつて姉さんを守るんだ！」

フィアン「ありがとうアイズ。では私はお二人の幸せを願って。」

アイズ「へへ…兄さんは？」

サイガ「よっしゃ！ワイの誓いは、お前らを命を懸けて守る！そしてフィアン…君を幸せにする。」

フィアン「サイガ…嬉しい…。アイズも…ありがとう。」

アイズの語り「そうして僕達は誓い合った。永遠の誓いだと思った。けど…。」

アイズ「何で兄さん！今更何で天の国に行くんだよ！」

サイガ「お前には関係あらへん。」

アイズ「ふざけないでよ！姉さんはどうするの？」

サイガ「お前がある。フィアンは任せるわ。」

アイズ「な、何言ってるんだよ！」

サイガ「ワイは天の国に行く。高みがワイを呼んどる。」

アイズ「どういうことなの？」

フィアン「サイガ！」

アイズ「姉さん！」

フィアン「何があつたのですか？」

サイガ「……………」

フィアン「お答えになって下さい！」

サイガ「この国に飽きたんや。フィアン…お前にもな。」

フィアン「そ…そんな…。」

アイズ「酷いよ兄さん！誓ったじゃないか！『誓い石』にずっと三人一緒に、幸せになるうって！」

サイガ「ああ、あれか。ほら、もういらんわ。捨てといてくれへん。」

アイズ「あ……ふ……ふざけんなよっ！おらあああっつ！」

サイガ「無駄や。」

アイズ「ぐっ……。」

サイガ「お前は弱い……ワイは強い。弱い奴の言葉は、ワイには届かへん。」

アイズ「く……兄……さん……何……で……。」

サイガ「アイズ……強うなれ。その時は……。フィアン……すまない……。」

アイズ「兄さんっ！」

フィアン「サイ……ガ……。」

アイズの語り「サイガの喪失……国は荒れた。姉さんはしばらく口もきけなかった。サイガが天の国へ行き、まもなく騎士団長になったと知らせが届いた。今城に攻めこめられると確実に落ちる。だが不思議なことに、戦争は起きなかった。それはやはり、両国の王達が繋がっていたからなのか……。僕が十三歳になった頃、現騎士団長を討ち負かし、僕が騎士団長としての任に就いた。姉さんもようやく口がきけるようになった。だけど姉さんは……。」

フィアン「サイガ……どうして……ど……うし……て……。」

アイズ「姉さん……。兄さん……。いや、サイガ！僕はアンタを絶対許さ

ないっ！必ず報いは受けさせるっ！」

（現実へ）

アイズ「というわけだ。」

琴花「何なのサイガって奴！最悪にも程があるって！」

ノア「種族の違いか…。」

ユズキ「自分を愛してくれてる人達を裏切り、傷付けるなんて…。」

にゆう「許せないにゅ〜！成敗だにゅ〜！」

天満「ああ、サイガを変えた理由は分からないけど、サイガがしたことは許せない！許しちゃいけない！アイズ、行こう！」

アイズ「天満…。」

天満「俺は絶対裏切らない！アイズは俺をいつも助けてくれた。今度は俺が返す番だよ！」

アイズ「本当に変わった奴だな。」

天満「え？」

アイズ「お前は天のエルフなのにな。」

天満「見損なうなよ！種族なんて小さいことにこだわるような育て方はされてないんだよ！アイズはアイズ！俺は俺！生きてることに変わりないだろ？」

アイズ「ふ…そうだな。お前の言うとおりだ。」

シャウト「よしっ！とりあえず城を目指すわけなんだが、真正面から全員行くのは危険だ。よって二手に別れる。城の裏口にも何人か行くことにする。上手くいけば、敵を分断できる。」

ノア「誰が裏口に行きますか？」

シャウト「そうだな……天満、君が決めてくれ。」

天満「え？俺が？」

シャウト「この中で天満はもうリーダーみたいなもんだ。頼む。」

剣斗「異議なし。」

ミリア「アタシは天満と一緒にがいいな。」

天満「いいのか？」

皆「ああ。」

天満「分かった。それじゃ、俺、シャウト、ミリア、アイズ、ノアは城の正面からだ。剣斗、琴花、ユズキさんは裏口を頼む。三人は敵に混乱を与えるよう動いてくれ。」

剣斗「任せときな！」

琴花「よし！」

ユズキ「行きましょう！」

天満「じゃあ行こう！」

皆「おう！」

（二手に別れる。天満達城に到着）

ノア「静かですね…。」

天満「待ってても始まらない。行こう！」

アイズ「ここは？」

？「やあ、やっぱり来たんだね。」

天満「『ネオス』！」

ネオス「ふふ…あの舟をどうやって直したのか知らないけど、よく来たねえ。」

天満「真雪はどこだ！」

ネオス「奪い返したければ我が『黒皇の間』まで来ればいい。我が

同志『五真将』を退けてね。では待つてるよ。あ、そうそう、アイズくんのお姉さんもいるからね。」

アイズ「サイガに伝えろ！首を洗って待つてろ！とな。」

ネオス「ふふ…。」

シャウト「行くぞ！」

天満「扉？ん？『紫音の間』…。開けるぞ。」

？「来ましたね。」

ノア「『イリス』さん！」

？「何度も言わせないで下さい。私は『シェイリア』です。」

ノア「ウエルカ…。」

ウエルカ「うむ。」

ノア「天満達は先に行つて下さい。」

天満「え？でも…。」

ノア「時間は待つてくれませんよ！ここは任せて下さい。」

アイズ「行くぞ天満。」

天満「え？アイズ！」

シェイリア「行かせません!」

ノア「アナタの相手はこの僕です。さあ、急いで下さい!」

天満「…わ…分かった。」

アイズ「エルフ嫌いくん。」

ノア「な、何ですかっ!」

アイズ「死んだら殺すからな。」

ノア「矛盾してますが、分かりましたよ!」

シェイリア「まあいいでしょう。ノア……覚悟は出来ていますね。」

ノア「ありますよ。アナタを止める覚悟が!」

次回に続く

第二十三劇『怨恨』

シェイリア「私を止める？面白いことを言いますね。」

ノア「そうですか？僕はいたって真面目ですよ。」

シェイリア「……いいでしょう。では、やりましょうか……。」

ノア「その前に一ついいですか？」

シェイリア「……何でしょう？」

ノア「アナタを変えたのは何ですか？自分を育ててくれたサンゼバル様を裏切り、生まれ育った宮殿まで壊して……。何が『イリス』さんをそこまで変えたんですか！」

シェイリア「貴方には関係ありません。」

ノア「僕は！僕は……アナタが町を破壊してた時、アナタが寂しい目をしてたこと知ってます。サンゼバル様が危険にさらされた時も、サンゼバル様の身を案じてたことも知ってます。」

シェイリア「……………」

ノア「お願いします。『イリス』さんの本当の心を教えて下さい！『イリス』さんの過去に何があったのか……。」

シェイリア「……仇を討つためです。」

ノア「仇？」

シェイリア「義姉弟のよしみです。教えて差し上げましょう。私の憎しみの全てを……。」

（シェイリアの過去）

サンゼバル「これから『イリス』もワシの娘じゃ。『プリミア』もよいな。『イリス』、仲良くしてやってくれ。」

イリス「……。」

プリミア「ミアね、お姉ちゃんが欲しかったの！ありがとう、お父さん！ね、お姉ちゃんて呼んでいい？イリスお姉ちゃん！」

ウエルカ「もう呼んどる呼んどる。」

プリミア「エヘヘ！」

イリス「……………」

イリスの語り「私は家が火事になり、両親が亡くなりました。親戚にも引き取り手がいなく、仕方なくサンゼバル様というか宮殿に引き取られたのです。そこでサンゼバル様がプリミアの遊び相手として引き取った。体裁のいい『娘』という肩書きを与え、実の娘のために玩具として私を引き取ったのだと、最初は思いました。ただ利用してただけだと。だから決して打ち解けようとは思わなかった。だけど……。」

プリミア「お姉ちゃん、これ見て！お姉ちゃんの絵書いたんだよ！
どうかな……上手く……書けたかな？」

イリス「……うん。」

プリミア「エヘヘ！お姉ちゃん大好き！」

サンゼバル「プリミアは本当にイリスのことが好きなんじゃなあ。
さてと、ほらイリス、プレゼントじゃ。」

イリス「え？」

サンゼバル「今日はイリスがワシの娘になって一年じゃ！」

ウエルカ「ほっほっほ。めでたいのお。」

イリス「……私は……。」

サンゼバル「さあ、開けてみるといい。」

イリス「はい……これは……！」

サンゼバル「いやあく探すのに骨がきしんだわい。」

プリミア「何なに？うわあ……綺麗な『ネックレス』……！」

イリス「何故これが……？母がいつもしてた……あの時家が火事になっ
て……。」

サンゼバル「ワシとウェルカでお前の家に行って探して来たんじゃない。」

イリス「あんな遠くまで……！」

サンゼバル「思い出の品というものは大事なものじゃ。心を支えてくれるかけがえのないのお。」

ウェルカ「お主がこの家に来た時、何にも持つとらんかった。火事じゃ……仕方ないとはいえ、支えが無いのは悲しいもんじゃ。じゃからイリス、お前の思い出を大切にしたりしたかった。」

イリス「う……く……うつ……うわああん！」

プリミア「どうしたのお姉ちゃん？泣かないで、どっか痛いのかな、泣か……ないで……うつ……うわああん！」

サンゼバル「プリミア！何でお前まで！」

プリミア「だ、だって……だって……ミア……うわああん！」

ウェルカ「ほっほ！イリスよ……この一年、心を閉ざしていたのは分かっている。じゃがもうワシらは家族じゃ。助け合って生きていくぞ。」

イリス「う……ヒック……あ……ありがと……ござ……います。」

イリスの語り「私は玩具じゃなかった。三人は、私を家族として見てくれていた。本当に嬉しかった。生きていていいのだと、いや、生きていきたいと思えた。家族と一緒に……いつまでも……。」

少年1「やゝいやゝい！泣き虫プリミア〜！」

プリミア「うえ……うつ。」

少年2「お前は可哀想な奴なんだってよ！泣き虫プリミア！」

イリス「コラアアツツ！」

プリミア「お…お姉ちゃん…。」

少年2「げっ！イリスだ！」

イリス「またミアをイジメたな！」

少年1「へーん！本当のこと言っただけだもんね！お母さんも言っ
てんもんね！プリミアは『禁忌』だって！」

少年2「意味は分からないけど、『禁忌』は可哀想だって言ってた
ぞ！」

イリス「うるさいっ！」

少年2「うわっ！逃げる逃げる！」

少年1「そうだそうだ！可哀想が移っちゃうもんね！」

イリス「いいかげんにしろっ！」

イリスの語り「プリミアはハーフェルフ『禁忌種』と呼ばれる存在

だったのです。昔から『禁忌種』は災いを招く者として恐れられていました。プリミアも例外なく、そのせいでエルフ達に嫌がらせを受けていました。時には石を投げられ、本当に酷い時には大勢の前で服を脱がされたりもしました。宮殿の中はまだ安全ですが、一歩外に出ると、中傷の雨でした。それが徐々にエスカレートしていき
ました。」

男1「おい、例のガキだぜ。まだ生きてんだな。」

男2「生きてる価値も無いんだから、さっさといなくなればいいの
にな。」

女1「やだ、災いが起こるじゃない!」

女2「死んでも誰も悲しまないのにねえ。」

イリス「いいかげんにして下さいっ!何の根拠があってそんなこと
言うんですかっ!いい大人が恥ずかしくないんですかっ!」

プリミア「もういいよお姉ちゃん…。もう…。」

イリス「ミア……行こう!」

男1「早く死ね!」

イリス「くっ…!」

プリミア「…お姉ちゃん…。」

イリス「どうしたの?」

プリミア「ミアって…いない子なの？」

イリス「そんなことないよ！あの人達が間違ってるのよ！ミアは私の大切な妹よ！私が守ってあげる！」

プリミア「お姉ちゃんは……ミアが死んだら悲しい？」

イリス「当たり前じゃない！大好きなミアが死ぬなんて考えられないよ！今遠征でいないけど、サンゼバル様もウェルカもミアのこと、大切に思ってるよ。」

プリミア「…ありがとうお姉ちゃん。」

イリス「あの人達は私が何とかしてあげる。それにミアはミア。ここで生きて動いてる。私と一緒に生きよう。私の夢はミアと幸せに生きること。それを私に与えてくれたのは貴方よミア。だから命を懸けてミアを守るから。約束よ！」

プリミア「うん！……ミアも…皆が幸せに生きるのが夢だよ！……ありがとうお姉ちゃん……。」

イリス「あ、そうだ！ミア、これかけてなさい。」

プリミア「え、でもこれ！お姉ちゃんのお母さんの形見……。」

イリス「それは『ハウルアワー』と言われる鉱石で出来ていて、『マモリノキセキ護の希石』とも言われているの。私よりミアが持っていた方がお母さんも喜ぶと思うの。」

プリミア「いい…の？」

イリス「うん。」

プリミア「お姉ちゃん、だーい好きっ！エへへ！」

イリスの語り「それが…私の見たプリミアの最後の笑顔でした。翌日、宮殿の中で冷たくなっているプリミアが発見されました。」

神官1「おい、プリミアちゃんだぞ！」

神官2「やっぱな、とうとう自殺しちゃったか。最近は特に酷かったからなあ。」

神官1「しかも飛び降り自殺かよ……サンゼバル様が帰られたら……」

イリス「どいて！どいて下さいっ！はあはあはあ……う……嘘……ミア……嘘でしょう……。どうして貴方が死ななければいけないの？何も悪いことしていないのに……。一緒に生きるって……約束したじゃない！ミア……こんなに冷たくなって……返事してよっ！ミアアアア……」

サンゼバル「はあはあはあ……プ……プリミア……！」

ウェルカ「ワシ達が遠征している間、何があったんじゃ？イリス……？」

イリス「許さない……。」

ウェルカ「え？」

イリス「自殺なんかじゃない……殺された……そうよ……許してはいけない……ミア……守る……」

サンゼバル「イリス？」

イリス「……ああ……遅かったのですねサンゼバル様……。無事に遠征終えられたんですね。良かった……」

サンゼバル「イ……イリス？」

イリス「……その子は誰ですか？」

サンゼバル「え？あ、ああ、この子はノア、ワシ達の新しい家族じやよ。プリミアと同じハーフェルフなんじゃ。」

イリス「そうですか……じゃあ……いつか殺されますね……」

サンゼバル「え？イリス！どこに行くんじゃ！」

イリス「……夢を叶えに……」

（現実へ）

シェイリア「そして、宮殿から出ました。」

ウェルカ「……イリス。」

ノア「僕と同じ……でも！アナタは！」

シェイリア「私はエルフを許さない！小さな粹でしか物事を見ず、判断できない！だから、全ての『回帰』を求めます！」

ノア「確かに！……確かに僕の見てきたエルフ達も酷いものでした。でも！母さんは……僕の母さんはそれでも皆の幸せを願っていました！寿命が縮むのも気にせず、僕を愛してくれました！それに……エルフ全部が悪いわけじゃない！」

シェイリア「分かっています。サンゼバル様もエルフ……私を愛してくれた両親もエルフ。それは分かっています。だけど……全部が全部割り切れる程、私は物分かり良くありません！ミアを救えなかった……そんな私に今出来ることは、悪の感情を消しさること！そのために私はネオスの行いに同心しました！」

ノア「その行いでサンゼバル様が死んだらどうするんですか！」

シェイリア「大丈夫です。サンゼバル様は傷付けさせません。新しい世界で生きてもらうんです。」

ウェルカ「イリス！お主本気で！」

シェイリア「ミアが死んでから……私には虚無感しか無かった。新しい世界を見届けたら……ミアのもとに行きます。」

二人「！」

シェイリア「今はただ夢を叶えるため……。それだけを考えます。」

ノア「駄目だ！」

シェイリア「……。」

ノア「…僕にも夢があります。絶対叶えたい夢が。それは…『禁忌』を全ての意味で救える方法を見つけることです！」

シェイリア「ですから悪を消しさえいいんです。」

ノア「違います！誰にだって悪の感情はあります。だけどそれと同じように正義の感情だってあります！心って難しいんだと思います。弱いし流されやすいし…傷付きやすい。悪に傾く者達も多いかもしれない。だけど生きてるから！それでも必死に生きてるんです！生きてたら人は変わるんです！プリミアさんも必死に生きた。必死に生きる！それが彼女の願いだったんじゃないんですか！僕と違って、彼女は一言だって、エルフを悪く言わなかったでしょう？」

シェイリア「あ…。」

ノア「信じてたんです。信じ続けてたんです！いつか誰もが幸せになれる日が来るって！僕の母さんのように！優しいプリミアさんの思い、アナタなら分かるでしょう！」

シェイリア「…それでも私は…。」

ノア「僕は必ず救います！僕達には未来があります！今『禁忌』を救うすが無いのなら、僕が創る！アナタのような『破壊』じゃなくて、新しい方法を僕が『創造』するんだ！」

ウェルカ「ほっほ。こやつ……ええ顔になったわい。本当にのお。」

シェイリア「分かりました。ミアと同じ『禁忌種』の貴方が言う『創造』の強さと、私の望んだ『回帰』という『破壊』の強さ。どちらが正しいのか、決着をつけましょう！」

ノア「どうしてもですか？」

シェイリア「戦わなければ見い出せない真実もあります。貴方が正しいというのなら、私を止めてみなさい！」

ノア「真実……分かりました。イリスさん、いや、シェイリアさん、プリミアさんと母さんの願い、僕が引き継ぎます！その願いを背負い、アナタの心を倒す！」

シェイリア「ミア………来なさい！」

ノア「シェイリアさん！世界は、これからですっ！」

次回に続く

第二十四劇『超霊』

ノア「『^{「サウンドレックバ}虎槍士烈破』！」

シェイリア「『デッドサウンド・縛の旋律』！」

ノア「か…体が…？」

シェイリア「紹介しましょう。私の霊神『音のキュアルト』です。」

キュアルト「我が音…様々な旋律を操る。その音を聞いた者は、我の思い通りになる。」

ノア「く、くそっ！」

シェイリア「無駄です。貴方とこれ以上争いたくない。ミアと同じ貴方を…だから…。」

ノア「だから…何ですか？言っただけです！僕はアナタを止めると！」

シェイリア「……残念です…本当に…。ではもう終わりにしましょう。私は私の道を行います。たとえそれがミアの意思に反することだとしてもっ！『デッドサウンド・壊の旋律』！」

ノア「あれは！宮殿を破壊した！あんなものをくらったらおしまいだ！ウェルカッ！」

ウェルカ「そうじゃな。あやつの目を覚まさせなければのう。『こ

の力』は錬術者自身にもリスクがある。使いとおはなかったが、そうもいかないようじゃ…。」

シェイリア「私の旋律からは逃げられません。最後です！一足先にミアのもとへ…私もすぐ…。」

キュアルト「我が音は不滅。ん？な…何だあれは！」

ウエルカ「ほっほっほ。よく覚えておけ小僧っ子！これが本物の『超霊化』じゃ！」

（舟を修理してた時）

天満「急に皆に話って何だいウエルカ？」

ウエルカ「うむ。実はの…『超霊化』について話さなければならん。」

剣斗「ああ…邪霊が強くなったやつか。」

ウエルカ「その邪霊はどうなった？」

剣斗「え…と…はは…えと…。」

ユズキ「確か体が大きくなり、『錬』の量が増えました。それもかなり…。あと、狂暴になり…そういえば倒した後は急激に体が小さくなっていました。元の体よりも…。」

剣斗「それで最後に自爆！迷惑な話だぜ！」

ウエルカ「霊神はの、元は自然にある様々なモノが凝縮して生まれた存在じゃ。故に自然の力を取り込めば究極に強くなっていく。じやがの、己の器を越える力を取り込めば、自我を失い、最後には消える。というより、元の自然の力に戻る。」

天満「じゃあシンセーテンや剣斗達の霊神も『超霊化』できるのかい？」

ウエルカ「そうじゃ…。」

剣斗「何だよ！じいさんも人が悪いなあ。もつと早く教えてくれりや良かったのに！これで鬼に金棒だぜ！」

ウエルカ「……。」

アイズ「これだから思慮の浅い奴は困る。少しは考えろ！」

剣斗「な！」

天満「剣斗、効きすぎる薬には必ず副作用があるように、この力も…。」

ウエルカ「そうじゃ。言ってみれば諸刃の剣なんじゃ。」

剣斗「どういうことだよ？」

ウエルカ「邪霊のは『間違った超霊化』なんじゃ。霊神は本来、錬術者と共にあり、装備具となり力を貸す。単身で『超霊化』をして

しまつと、強くはなるが、力を制御できず身を滅ぼす。」

剣斗「じゃあ錬術者がいればいいんじゃないか。」

ウエルカ「確かに、錬術者の力と霊神の力を混合させ、上手くバランスを取ることができれば、強大な力を維持できる。」

剣斗「でもさあ、本当の『超霊化』って具体的にどうなんだ？」

ウエルカ「進化するんじゃないよ。」

剣斗「進化？何かカツコイイじゃんか！」

ウエルカ「それにの、名前がつくんじゃよ。新たに進化した名前がの。」

剣斗「へえ。」

ウエルカ「舟が直るまでの時間、各々の霊神と話し合い、互いに信を置くことじゃの。覚えておくとええ。この世界は強き想いが力になるんじゃない。」

（現代へ）

ノア「これが僕達の新しい力です！この力『セントグングニル』でアナタを止める！」

キュアルト「何だ？この凄まじい『鍊』は？それにさっきの槍と形

も違うだと！」

シェイリア「ノア！『縛の旋律』も効かない！」

ノア「行きますよ。」

シェイリア「マズイツ！キュアルト！」

ノア「無駄です！」

シェイリア「きゃああああ！」

ノア「ぐっ…！」

ウエルカ「早くもきおったか！ノア、大丈夫か！」

ノア「うん…でも体中がこんなに痛むなんて…。ウエルカも…しっ
かり維持して下さいよ。あと少し…ですから…。」

ウエルカ「分かっとなるわい！」

シェイリア「ま、まだ私の意地は通しますっ！『デッドサウンド・
滅の旋律』！」

ウエルカ「いかん！あの力、完全に制御できておらん！」

シェイリア「キュアルト…『超霊化』です。」

キュアルト「了解。」

ウエルカ「駄目じゃ！そんな体で！しかも信を置いてない状態でその力は！」

ノア「シェイリアさん、何故ですか！もう分かってるでしょう、アナタなら！なのに何故！」

シェイリア「ふ…貴方は強いですね…私も最後まで信じたかった…エルフを…ミアを…。」

ウエルカ「いかん！力の暴走じゃ！」

ノア「くっ！死なせるかつ！」

ウエルカ「ノア！」

ノア「僕には信じられる人ができた。あの人も…まだ戻ることができる！あの人には心がある！かけがえのない優しい心が！僕は信じたい！あの人はまだ心から笑える！だから……生きなければいけないんだっ！」

ウエルカ「…ノア…分かったわい！全てを懸けるぞノアよ！」

シェイリア「もうすぐ……もうすぐそちに……ミア…私は…。」

ノア「はあああつつつ！『セントグングニル』開放！ぐう…！」

ウエルカ「むむうつ…！」

ノア「イ、イリスさんつつつ！」

シェイリア「…ノ…ア…？」

ノア「プリミアさんの想いと共に、アナタを救うんだっ！大開放
グングニル・リバイバー」ツツ！

キュアルト「な！我が力が…ぬおおおっつ！」

シェイリア「！」

ノア「へへ…つかまえた…。」

シェイリア「何故…何故死なせてくれないの…。」

ノア「それが…プリミアさんの意思だから…。」

シェイリア「ミア…の…。」

ノア「プリミアさんだけじゃないですね。サンゼバル様やウエルカ、
そして僕のです。」

シェイリア「私は…。」

キュアルト「お…おのれ…殺し…て…やるっ！役立たずのシェイ
リアと共に…！」

ウエルカ「は！ノア！」

ノア「危ないイリスさん！ぐうっ！」

シェイリア「ノア！」

キュアルト「ふふ…死ね…！」

ウエルカ「おのれっ！」

キュアルト「ぐわあああ！」

ノア「ぶ…無事です…か…イリス…さん…。」

シェイリア「何故私を…？」

ノア「家…族を…守…る…の…は…当た…り前…。」

ウエルカ「ノア！こりやいかん！は、イリス！」

シェイリア「私が何とかします。私の『鍊』をノアに…。」

ノア「……。」

シェイリア「ノア…私なんかのために…貴方は馬鹿です！」

ウエルカ「ノアはの、お主と同じじゃよ。『禁忌』に大切なモノをいくつも奪われ、エルフにも中傷されのう。じゃが、ノアには信じてくれる者ができた。ノアは簡単に死ぬわけにはいかなかったんじゃ。ノアはエルフを許していない。じゃがそれでも自分のために寿命を縮めた母親の意思を継ぐため、そしてサンゼバルの想いに答えるため、ノアは生きてるんじゃ。」

シェイリア「それでも！ミアは帰っては…来ない…。」

ウエルカ「じゃが死んでもいないじゃろ？」

シェイリア「え？」

ウエルカ「お主の中にプリミアはおるじゃろ？」

シェイリア「綺麗事です！」

ウエルカ「では今お主がしてることは何じゃ？」

シェイリア「これは…。」

ウエルカ「助けたいんじゃろ？自分を必死に信じてくれたノアを…
…プリミアと同じように信じてくれたの…。」

シェイリア「何故でしょうか…？何故こんなにも必死なのでしょう
か…？」

ウエルカ「死なせたくないんじゃろ。もう誰も…。お主は優しいか
らのう…。」

シェイリア「ごめんなさい…ごめんなさい…私は…。」

ウエルカ「ノアは最後までお主を信じとった。家族を…守る…との
う。」

シェイリア「ノア…お願い！目を開けて！貴方に謝りたいの！…
くっ…血が止まらない！もう駄目なの…！」

？「駄目じゃないよ！」

シェイリア「え？ミア……ミア！」

ウェルカ「サンゼバルが持たせた『ネックレス』…。」

プリミア「ノアはまだ大丈夫だよ！」

シェイリア「ミア…貴方…！」

プリミア「ミアは…悲しいよ…。」

シェイリア「え？」

プリミア「どうしてそんなに辛い顔してるの？」

シェイリア「貴方がエルフに……それで私は…。」

プリミア「ミアは殺されてもいないし、自殺してもいないよ？」

シェイリア「え？」

プリミア「あの時『ネックレス』を手に持ってて、転んだ時に窓から木に引っ掛かったの。それで、取ろうとして足が滑って…。」

シェイリア「嘘よ！」

ウェルカ「本当じゃよ。……確かに死因は頭を強打したことによるものじゃったが見ていた者がおった。」

シェイリア「だったら何故教えてくれないの！」

ウエルカ「信じたか？」

シェイリア「そ、それは……。」

ウエルカ「あの状況じゃ、お主が誤解するのも仕方ないからのう。」

プリミア「お姉ちゃん……。」

シェイリア「ミア……ウエルカ……ノア……ごめんなさい……。勝手に誤解し、ノアにも手をかけて、助けられず……。」

プリミア「大丈夫だよお姉ちゃん。お姉ちゃんのお母さんの形見の『護の希石』が力を貸してくれる。ミアの想いもお姉ちゃんに託すから……。」

シェイリア「ミア……。」

プリミア「ミア達はいつも一緒だよ！さあ、ミア達の大事な弟を助けよう。大切な家族を……。」

シェイリア「うん。ミア……ありがとう。そして……ごめんね。」

プリミア「ミアの想いが護るから。だって……ミアの大好きなお姉ちゃんだもん！ずっと一緒だよ！お姉ちゃん、だ〜い好きっ！」

シェイリア「ありがとう……ミア……。」

ノア「う……う……イリ……シェイリア……さん……？」

シェイリア「違います。私の名前はイリス……プレミアの姉のイリスです。」

ノア「良かった……やっぱり笑顔が一番ですね。」

イリス「ありがとう。」

ウエルカ「体は大丈夫か？」

ノア「当分は駄目……『超霊化』の反動ですね……それよりウエルカは大丈夫ですか？」

ウエルカ「まだまだ若いもんには負けんわい！」

ノア「はは……。」

イリス「ノア……ごめんなさい……。」

ノア「弟が姉を助けるのは当たり前でしょう。……う……少し……眠い……。」

ウエルカ「少し休めノア。あとは天満達に任せての。」

ノア「う……ん。笑えて……良かったね……イ……リス……姉……さん。」

イリス「ノア……ありがとう。」

ウエルカ「『ネックレス』はよいのか？」

イリス「いいんです。ノアに持ってもらいたいです。」

ウェルカ「これからどうするんじゃ？」

イリス「この子と一緒に見つけたいと思います。『禁忌』を救える何かを。」

ウェルカ「そうか。天満よ…すまんのう…ワシ達はここでリタイアじゃ。」

(剣斗達は)

剣斗「さつきから邪霊ばつか！」

ユズキ「ん？ここは……『ソウデッ蒼鉄の間』？」

剣斗「とりあえず入ってみるか。お前は！」

？「ほう…どつかで見た虫だな。」

ユズキ「あの者は確か…『ツアビデル』。」

ツアビデル「クソ虫が相手か…がっかりだ！」

剣斗「琴花、ユズキさん、先に行ってくれ！コイツは俺が叩く！」

琴花「何言ってるのよ！アンタ一人じゃ！」

剣斗「信じてくれないのか？」

琴花「でも…。」

剣斗「すぐ追いつくよ！だから頼む！」

琴花「剣斗……分かった。死なないで…剣斗。」

剣斗「ああ、約束だ！」

ユズキ「信じてもいいですね？」

剣斗「はい。」

ユズキ「行きましよう琴花さん！」

琴花「う…うん。剣…。」

ツアビデル「さあて、茶番は終わりか？」

剣斗「お前の命もな。」

次回に続く

第二十五劇『全力』

ツアビデル「はあ…何故俺様の相手がキサマのようなクソ虫なんだ？」

剣斗「クソ虫クソ虫、それしか言えねえのかよ！頭悪いんじゃないか？」

ツアビデル「何だとキサマ！どうやら本当に死にてえらしいな？グチャグチャにしてやる！」

剣斗「へ、世界をムチャクチャにするネオスの悪巧みに何も感じない頭じゃ、仕方ねえか？」

ツアビデル「グフフ…。」

剣斗「何がおかしいんだよ？」

ツアビデル「俺様にとってこの世界なんてどうでもいいんだよ！」

剣斗「じゃあテメエは何がしてえんだよ？」

ツアビデル「支配だ！この世界にいるクソ虫を俺様の手で思い通りに操り、服従させる！逆らう虫は全て踏み潰す！グハハハハ！」

剣斗「一生懸命に生きてる奴らのこと、テメエは殺し、何も感じないのか！」

ツアビデル「愚問だな。テメエらは家畜だ！ご主人様に逆らわず、

死ねばいい！」

剣斗「テメエが言う虫の力を見せてやる！テメエは必ず倒す！この俺が、死を持ってテメエを断じてやる！」

ツアビデル「威勢のいいクソ虫が！」

剣斗「『^{ライコウガ}雷較牙』！」

ツアビデル「グフフ……当たるわけなかるうが！」

剣斗「ちい！余裕だな。霊神くらい出したらどうだよ？」

ツアビデル「グフフ…『^{ゴウテツオウキヤク}剛鉄欧脚』！」

剣斗「ヤバイッ！この破壊力……まさかテメエ！」

ツアビデル「気付いたか？そうだ、俺様自身が霊神だ！」

剣斗「やつぱり。」

ツアビデル「キサマみたいに群れなきや強くなれないクソ虫と違うんでな。俺様は一人で十分なんだよ！」

剣斗「ギルティ…。」

ギルティ「ああ、悲しい野郎だな。孤独が強いと思つてやがる。」

剣斗「俺達で教えてやろうぜ！信頼が生む強さをな！」

ギルティ「へ、少しは言うようになったじゃねえかよ！ほら、来るぜ！」

ツアビデル「クソ虫がああああつつつ！」

剣斗「まだだ……『あの力』はまだ使えねえ！だけど奴だけは許さねえ！想いを踏みにじる奴だけは絶対！」

ギルティ「落ち着け！『鍊』が乱れてるぞ！」

剣斗「分かってるよ！」

ギルティ「分かってねえから言ってるんだ！」

ツアビデル「ちっ！虫だけに素早さだけはあるな！ブンブンうつとおしい！しょうがねえ……八方に飛び散れ、我が力よ！『鉄散解』テッサンカイ！」

ギルティ「気を付けろ！ただの鉄じゃねえ！」

剣斗「この野郎！」

ツアビデル「『鉄のツアビデル』の力……とくと味わえ！『鉄溶解』テッヨウカイ！」

剣斗「鉄が溶け出した！くっ、足に！」

ツアビデル「ガハハ、動けまい。これで体中を覆ってやる。窒息して死ね！『鉄封陣』テフウジン！」

剣斗「く、くそっ！う…うっ。」

ツアビデル「鉄人形の出来上がりだ！ふん、やはりクソ虫だな。さて、女を追うか。」

（その頃琴花は）

琴花「は！」

ユズキ「どうされました？」

琴花「剣斗…。」

ユズキ「…羨ましいですね。」

琴花「え？」

ユズキ「あなた方は本当に強い絆で結ばれています。だから羨ましいです。」

琴花「ち、違う違う！あのバカのことだから、またすぐ頭に血がのぼってんじゃないかなあって！あはは…！」

ユズキ「ふふ。やはり羨ましいです。剣斗さんなら大丈夫ですよ。

琴花さんを悲しませたりしないですよ！」

琴花「ユズキさん…ありがとう。剣斗…お願い…アンタは強いんだから…。」

(剣斗は)

剣斗「ギルティ…。」

ギルティ「すぐカッとなりやがって！あれだけ冷静になれと言ったろうが！」

剣斗「わ、悪い……へへ…琴花にもそう言われそうだな。ふう……
…ギルティ……やるぞ！」

ギルティ「ふん、最初からそういう顔してりゃいいんだよ！だけどな、無理はするなよ！」

剣斗「俺に言うセリフじゃねえな！」

ギルティ「ふ、違いねえ！」

ツアビデル「ん？何！鉄にヒビが！うわっ！な、何だと！」

剣斗「どこに行くんだ？言っただけ！テメエは俺が倒すと！」

ツアビデル「この『鍊』…面白い！なら俺様も本気を出してやる！グチャグチャにしてやるぞ！グオオオオオツツ！フウ……俺様の『超霊化』……手におえんぞ！」

剣斗「悲しい『鍊』だ…。俺は…俺達は違う。俺には仲間がいる。支えてくれる奴、信じてくれる奴、共に戦ってくれる奴、そいつら

の思いがある限り、テメエには負けねえ！この『ライジングイーグル』でテメエを倒す！」

ツアビデル「ほざけえつつ！『ソウテツダンオウブ蒼鉄弾殴武』！」

剣斗「そんな寂しい力じゃ、俺達には勝てない！はああああ……『九龍クリユウノハクスチの白雷』！」

ツアビデル「グオオオオツツ！」

剣斗「おらあああつつつ！」

ツアビデル「バカなっ！クソ虫ごときがあ、クソ虫ごときがあっ！」

剣斗「ギルテイ！」

ギルテイ「ああ！」

二人「うおらあああああつつつ！」

ツアビデル「俺様の……服従が……ちくしょうがあああつつつ……！」

剣斗「はあはあはあ……ぐはっ！」

ギルテイ「剣斗！」

剣斗「はあはあはあ……へへ……さ……さすがに……キツツイわ……。……」

ギルティ「へ、まあまあやるようになったじゃねえか！かくいう俺も……体中が……痛えや。」

ツアビデル「クソ……虫……が……し……死ね……ば……いい……んだ……。」

剣斗「何だ！この『鍊』は！ツアビデル！」

ツアビデル「グフフ……グチャグチャ……に……ガアアアツツ！」

ギルティ「自爆だっ！嘘だろっ！」

剣斗「くそっ！……天満………琴花………！」

二人「うわあああああつつっ！」

剣斗「……………」

ギルティ「……………」

？「……貴方はよくやりました。今は休みなさい。」

（天満は）

天満「ノアは大丈夫かな？それに剣斗達も。」

ミリア「ノアは強いよ！ミリアちゃんが保証しちゃっよー！」

シャウト「ノアにはウェルカがいる。無茶はしないだろう。剣斗達のことも信じてやろう!」

アイズ「ノアは強いさ。」

天満「珍しいな、アイズが褒めるなんて!」

アイズ「僕よりは弱いかな。」

天満「はは…アイズらしいや。ん? 扉か… 『^{シュアン}朱闇の間』。」

アイズ「この『鍊』…! 待て!」

天満「どうしたアイズ?」

アイズ「この部屋にいる奴は僕一人で戦う。」

天満「まさか…!」

アイズ「ああ…奴がいる。頼む、僕一人にやらせてくれ。」

天満「でもアイズの強さは…。」

アイズ「頼む…!」

シャウト「天満、分かってやれ。これはアイズの戦いなんだ。手を出してはいけない。」

天満「でも…。」

シャウト「私達は一刻も早くネオスを止めなければならない。」

アイズ「天満……お前はお前のなすべきことを。そして、僕には僕のもの。」

天満「…分かった。絶対死ぬなよ…アイズ。」

アイズ「感謝する。」

シャウト「では行くぞ！」

？「大当たりや…アイズ。」

アイズ「行け。」

天満「ああ…。」

アイズ「止めないんだな、サイガ。」

サイガ「かまへん、お前を倒して、奴らを追い倒す。そんでしまいや。」

アイズ「ではやろうか？殺し合いを…。」

サイガ「せやな…一瞬で終らせたるわ。行くで…。」

（その頃フィアンは）

フィアン「…は！指輪が光って！アイズ…！」

？「初めましてフィアン姫。」

フィアン「え！貴方は…？」

？「僕は『ゼロ』と申します。あなたに知らせたいことがあるんですが。」

フィアン「何でしょうか…？」

ゼロ「今ちょうどこの部屋の下で、あなたの大切な方々が争っています。」

フィアン「まさか！アイズ……サイガ？」

ゼロ「気になりますか？」

フィアン「そんな…どうして？」

ゼロ「…行きたいですか？」

フィアン「え？で、ですが…貴方は…？」

ゼロ「なになに、僕のことには気にしないで下さい。もう一度聞きます。行きたいですか？」

フィアン「もちろんです！」

ゼロ「ではどうぞ。さあ、あの階段を降りて………というかその指輪

が導いてくれますか。」

フィアン「あ、ありがとうございます…。」

ゼロ「おれなんていいですよ。そんなことより早く行った方がいいですよ?。」

フィアン「ありがとうございます!。」

ゼロ「ふふ…行ってらっしゃい…。」

(アイズは)

アイズ「貴様だけは許さない!必ずこの手で報いを与える!。」

サイガ「結局はこうなるんやな…ええやろ!『闇狼^{ヤミロウ}』と呼ばれしワイの力、見してやるで。」

アイズ「行くぞ!『裂光曼華^{レツコウバンカ}』!。」

サイガ「盾や『ネスゲイト』。」

ネスゲイト「ああ…。」

アイズ「くっ!そいつが貴様の!。」

サイガ「せや、これがワイの霊神『闇のネスゲイト』や。お前の剣も霊神やろ?。」

アイズ「レイゼクス！」

レイゼクス「はい。」

サイガ「綺麗な霊神やな。光と闇か……お前とワイ……因果やな……」

アイズ「行くぞ！」

サイガ「ああ……」

アイズ「はあああっつ！」

サイガ「そんなんくらわへんわ！」

アイズ「ならこれでどうだっ！」
ホウコウセンカ
『蓬光千華』！

サイガ「くっ！」

アイズ「今だ！」

サイガ「……終わりや……」
ヤミロウシュウ
『闇狼襲』……」

アイズ「ぐっ……！」

サイガ「アイズ……」

アイズ「どこを見てる？」

サイガ「な！じゃああれは！そうか、光で分身を……！」

アイズ「そうだ。貴様が闇で作った狼で後ろから攻撃をすることは分かってたからな。天満のバンダナを奪ったのも闇で作った狼を利用したんだろう？さすがは『闇狼』だな。」

サイガ「あのたった一回で気付くやなんてな。やるやないか。」

アイズ「いつまでも貴様を追っていると思うなよ。」

サイガ「本当に強うなりおったな……。」

アイズ「そろそろ決着をつけようか？」

サイガ「ええで。これ以上チマチマした攻撃してもしやあないしな。互いに全力で！ネスゲイトツ！」

アイズ「レイゼクスツ！」

サイガ「『超霊化』までできるやなんてな。」

アイズ「言っただろ！いつまでも貴様を追っている僕じゃないと！これが僕之力『ファイナルフェンサー』だ！」

サイガ「ワイのはこれや……『ラストブリンガー』。ワイも『超霊化』して戦うのは初めてや。せやし体がいつまでもつか。」

アイズ「そうだな。全てを込めた一撃を互いにぶつける。勝負だサイガ！」

サイガ「互いに全力を……。」

アイズ「互いに全力を…。」

サイガ「闇よ集結せよっ！『ヤミノマタキ闇瞬』っっ！」

アイズ「光よ集結せよっ！『ヒカリノマタキ光瞬』っっ！」

サイガ「アイズウウー………っっっ！」

アイズ「サイガアア………っっっ！」

二人「うわあああっっっ！」

サイガ「く………うっ。」

アイズ「く………うっ。」

サイガ「はあはあはあ……。」

アイズ「はあはあはあ……。」

サイガ「ま…まさか…互角…やなんてな…。」

アイズ「くっ………はあはあはあ………まだだ…まだやれる！」

サイガ「ぐっ………はあはあはあ………負けられへん………負けたら………
全て終わってしまうんや！」

アイズ「どういうことだ？な！『闇狼』が！ぐっ！」

サイガ「はあはあはあ……しまいや…アイズ…。」

アイズ「レ、レイゼクスッ！」

サイガ「まだそないな力が残つとるんかい！く……くそっ！ワイは…ワイは負けられへんのやあっつ！頼むアイズ！さっさと寝てくれっ！これ以上時間は！」

アイズ「く……体が…！くそっ！」

？「うつ！」

サイガ「な！何やて…！」

アイズ「あ…ああ…！」

？「も…うつ…やめ…て…二人…とも…。」

アイズ「ああ……あ…ああ……ね…姉さああああ――――
ーんっっっ！」

次回に続く

第二十六劇『三人』

サイガ「フィ…フィアン…何で…ここに？」

アイズ「サイガアアツツ！」

フィアン「止めて！」

アイズ「姉さん…！」

フィアン「もう…兄弟…争う…のは…。」

アイズ「姉さん！」

フィアン「はあはあはあ…。」

アイズ「どうして？どうしてアイツをかばうんですか！僕達を裏切り、国を…姉さんを捨てたアイツを！」

サイガ「そうや。何でかばったんや？お前がかばわなかったら、あん時死んどったんはワイの方やった。」

アイズ「気付いてたのか？」

サイガ「ああ…お前がレイゼクスで背後を狙ってたんは分かってた…。」

フィアン「だからこそです…。」

サイガ「フィアン…。」

アイズ「姉さん。」

フィアン「大丈夫です。大した傷では無いです。かすっただけですから、ありがとうアイズ。少し楽になりました。」

サイガ「どういうことや？」

フィアン「このまま誤解し続けたままでは…悲し過ぎます…。」

サイガ「フィアン！お前…！」

アイズ「誤解？ど、どういうこと？姉さん！」

フィアン「これを…。」

アイズ「これは？……『メモリーキューブ』！」

フィアン「そこに全てが…真実が…あります。」

サイガ「…………。」

（『メモリーキューブ』の記録）

ラフォール王「サイガよ、アイズに『エーテル国』に行ってもらっ

」

サイガ「え？どういうことですか？」

ラフォール王「聞き返すな。お前は言われたとおりにしておればよい。」

サイガ「納得できません！何故！アイズはどうなるんですか！」

ラフォール王「アイズか……可哀想だが、我が国のための糧となつてもらう。」

サイガ「い、意味がわからへんわ！」

ラフォール王「話は終わりだ。」

サイガ「待てや！王！何でや！」

（ラフォール王とエーテル王の密会）

サイガ「確かここや。真実を見つけたるわ！」

ラフォール王「ではエーテル王よ、我が国のアイズを…送る。」

エーテル王「承知した。これでまた、駒が増えましたな。真実を知っている者達を葬り、かつてない平穩を手にいれますな。もうあのような手段を持ちいずとも、済みますまい。」

ラフォール王「う…うむ…。」

エーテル王「あの『アーミア』のように、ボロボロになるまで、生体実験体として使ってやるわ。」

ラフォール王「……エーテル王よ……やはり……。」

エーテル王「我らは共犯者だ。今更引くことは出来ぬぞ。」

ラフォール王「しかし……生体実験は……。」

エーテル王「我々は王なのだよ？全てを握り、全てを知る義務がある。いいですかラフォール王よ、そのアイズという者は『特別』なのであるう？なぐに、死ぬような無理はせんよ。ただ勝手に自殺する分は知らんがな。あーはっはっはっは！」

ラフォール王「頼む！酷いことはもう……。」

エーテル王「『アーミア』の時は率先して、実験をしておったではないか。もう一度言うぞ。我々は共犯者なのだよ。ふふ……楽しみだ。」

サイガ「ヤバイ！アイズを……アイズを……！」

エーテル王「誰だ！」

サイガ「あかん、見つかったもった！」

エーテル王「追えっ！殺してしまえ！」

ラフォール王「サイガ……！」

サイガ「はあはあはあ……ここもか…何でアイズばかりこないな目に……折角逃げてきたのに……アイズは……アイズはワイが守るんや！」

（現代へ）

アイズ「どういうことだ！何故僕が…？何を隠してるんだサイガ！」

サイガ「知らん方がええ。」

フィアン「違いますサイガ…。アイズは……アイズはそんな弱くないですわ。……貴方がいなくなつてアイズが泣いていたのを知っています。」

アイズ「ね、姉さん！」

フィアン「それでも国のために気丈にふるまつて、国を…私を助けてくれました。アイズは強い子です。」

サイガ「フィアン……お前はもう知つとるんやな…。」

フィアン「ええ…父に以前…。」

サイガ「さよか。アイズ……話したる。お前にとっては辛い話やけどな。」

アイズ「…………。」

サイガ「お前は……世界で最初の……『クローン』なんや。」

アイズ「え？」

サイガ「ワイ達の親は科学者やった。霊神を研究したりしとったな。ある日、父親がワイを研究所に連れて行きよった。そこでワイは……これ見てみい。」

アイズ「な！目が取れ……義眼？」

サイガ「ワイはそこで左眼を繰り抜かれた。父親は世界のためやって言った。ワイにとって親が全てやった。せやから親が喜ぶならと文句言わなかった。」

アイズ「じ、じゃあまさか！」

サイガ「せや……アイズ……お前は……ワイの『クローン』や。」

アイズ「そ……そんな……。」

サイガ「ワイの眼から様々な情報をくみとり、ワイの血液と皮膚を取って、お前がつくられた。何度も何度も失敗しとった。完全にエルフの形をつくれたのはお前で最初やった。最後の細胞でようやく全てが上手く適合し、お前が生まれたんや。」

アイズ「な……何のために……僕……を……？」

サイガ「王や……エーテル王が命令しとったんや。自分に従順な機械のような駒が欲しかったんや。親はエーテル王から多額の資金をもらい『クローン』をつくってたんや。せやけど何度も失敗して、

とうとうエーテル王が痺れをきらし『次失敗すると死んでもらう』
と言ったんや。追い込まれた両親は自分の息子を利用することを決
心した…。」

アイズ「じゃあ僕は…！」

サイガ「お前が誕生してまもなくや。弟ができたみたいで嬉しかっ
たワイは、お前と一緒によう遊んどった。ある日両親に呼ばれお前
と一緒に研究所に行った。……両親がお前の体を解剖して、お前か
ら新しい『クローン』をつくろうとした。ワイは……親を……殺
した。見てられへんかった。」

アイズ「サイガ…！それじゃ孤児院での出来事も！」

サイガ「せや、お前が体が弱かったのは、まだ体が完全に慣れてな
かったからや。…イジメを受けてたのも、あそこにいた先公どもの
せいやった。どこからアイズのことを知ったのか知らんけど……許
せんかった。」

アイズ「何故そこまで僕を…？」

サイガ「さっきも言ったやろ？嬉しかったんや。それに…ワイは親
が全てやと言ったやろ？ワイは地のエルフや。天の国に住んでたワ
イは友達なんて出来るわけない。せやからずうつと独りやった…。
お前が生まれた時、たとえ『クローン』でも嬉しかった……本当に
嬉しかった。初めて触れた親以外の温もり……温かったわ…。お前
がワイのすることで笑ってくれる。その笑顔が好きやったんや。」

アイズ「サイガ…。」

フィアン「それで、アイズのために自分が天の国に行き、エーテル王を監視していた。アイズを守るために。」

サイガ「せや…。」

アイズ「何故だ！何故今更そんなことを！いつもそうだ！僕はお前の後を追ってばかり……あまりにカッコ悪いじゃないか！勝手に恨んで、ずっと守ってきてくれたサイガを……殺そうと……。」

サイガ「ええんや。お前が生まれたのはワイのせいでもあるんや。親のすることを止めなかったんやからな。」

アイズ「違う！僕は生まれてきて良かったと思ってる！姉さんに出会えた！サイガにも！」

サイガ「アイズ……お前はとうにワイを越えとったんやな。」

アイズ「でも何故ネオスと一緒にいるんだ？」

サイガ「それは……。」

？「ふふ……やはりこういう結果になっちゃったか。」

アイズ「『ネオス』！何しに来た！」

ネオス「ゼロ……勝手なことを。」

サイガ「ネオス？」

ネオス「君達には用は無い！はっ！」

二人「うわあああっ！」

ネオス「やはり君が持ってたんだね。」

アイズ「姉さんに何をする！」

ネオス「君が素直に渡してくれれば良かったのに……。力ずくは本意じゃ無いって言ったのにね。仕方無いね……。じゃあもらつよ。」

ファイアン「くうう……。っつ！あああああっつっ！」

サイガ「ファイアンツ！」

アイズ「姉さんっ！」

ネオス「まさか体の中に隠してたなんてね。『神器・真惺輝^{シンセイキ}』。へえ、こんな小さなモノなんだね。」

アイズ「貴様あああっつっ！」

ネオス「今は君に構ってる暇は無いんだ。それじゃ。」

サイガ「ネオス！」

ネオス「ん？何？」

サイガ「二人を傷つけないって言ったやろ？それに、あの『約束』も！」

ネオス「ああ、そういえばしたねえ。」

サイガ「破る気なんか！」

ネオス「違うよ。破る気もなにも最初から守る気は…無い。」

サイガ「なんやて！」

ネオス「まあ君は役に立った方だよ。ありがとうね。それじゃ。」

サイガ「嘘や……はは……ワイは……アホや……意味わからへん……」

フィアン「サ…イガ…。」

アイズ「姉さん！サイガ、姉さんが！」

サイガ「は！フィアン！」

フィアン「こ…れを…。」

サイガ「これは……指輪……『誓い石』か！あの時捨てたはずや。まだ持つててくれてたんか…？」

フィアン「貴方のために作ったのです…。でも私は最初貴方を…信じることはできませんでした。ごめんなさい…。」

サイガ「謝ることあらへん！ワイが勝手にしたことや！お前を悲しませることやと知ってたのに、やったんや！だから…。」

フィアン「私は貴方のことが好きでした。強く遅く、でも時折寂しいお顔をする貴方を……私は支えてあげたいと……側にいたいと思っていました。」

アイズ「姉さん！」

フィアン「アイズ……貴方にも迷惑かけて……ごめんなさい……。いつも私のことを思ってくれていたのは……気付いていました……。ありがとう。アイズのこと……。本当に弟が出来たみたいで嬉しかった……。三人でいることが幸せでした。楽しかった……私の全て……。貴方達と一緒に……。」

サイガ「フィアン！あかん！逝ったらあかん！」

フィアン「私は……役に立てまし……たか？二人が幸せに……。二人の全てを……。」

アイズ「お願い姉さん！死なないで！死んじゃ嫌だよ！」

フィアン「あら……あら、男の……子が泣くなんて……駄目よ……。サイ……ガ……貴方の想いを……聞けて……良かった……。」

サイガ「ワイはまだお前を幸せにしてへん！これ以上約束を破んのは嫌や！」

フィアン「幸せ……ですよ。こうやって……また三人で仲良く……。あの……尊い日々をまた……。感じる……ことが……。出来ました。ありが……。とても幸せ……。」

アイズ「嫌だ！嫌だよ姉さん！せっかく三人揃ったのに！僕は……」

僕は！」

フィアン「アイズ……サイガ……私は願いますか……どこにいても……どうなっても……私の魂は……いつも二人の幸せを……」

サイガ「くっ……うっ……ワイは……アホや……」

フィアン「ただ願うは……二人の幸せを……アイズ……サイガ……ありがとう……愛して……ます……」

アイズ「姉さん？嘘でしょ……姉さん……うわあああつつつ……」

サイガ「くっそおおおつつつ！」

アイズ「うっ……うわあ……」

サイガ「許さへん！ネオス！」

アイズ「ネオス！僕も許さない！」

サイガ「フィアン……お前の願い……ワイは守る……約束や。」

アイズ「サイガ……」

サイガ「ああ、アイズ……二人でフィアンの仇を討つんや！ワイがフィアンに出来ることはこれしか思いつかへん。一緒に行ってもええか？」

アイズ「…サイガ。僕は…やっぱりまだ完全には許せない。姉さんを悲しませたアンタを。」

サイガ「それでええ。ワイはワイの出来ることをする。」

アイズ「ああ、行こう!」

サイガ「ああ!」

(琴花は)

琴花「さっきの爆発音…剣斗…」

ユズキ「次の部屋に着きました。…琴花さん？」

琴花「え？あ、ははは！え」と…『オウバク黄爆の間』か…。うう……何か寒気がする…。」

ユズキ「では開けますよ。」

？「ヒトは言う、美しき僕様のことを『美の魔術師ラーハイド』とさ。そう！これは罪！ああ！エクスタシ。」

琴花「さて…帰るか…。」

次回に続く

第二十七劇『麗花』

ラーハイド「おおゝ待ってたさゝ！また会えて嬉しいさゝ！これで
確実さゝ！君と僕は赤い糸で美しく結ばれているさゝ！マイハニ
ゝ！」

琴花「はあ……コイツか……」

ユズキ「お知り合いですか？」

琴花「ただのストーカーだよ。」

ユズキ「え？ストーカー？」

琴花「アイツの相手は……私なんだろうなあ……凄く憂鬱……」

ユズキ「そんなに嫌でしたら私が……」

琴花「ううん。コイツには私も用があつたんだ。あの時、子供を傷
つけようとしたこと……キツチリ後悔させてやらなきゃ！だからユ
ズキさんは先に。」

ユズキ「分かりました。ですが無茶はしないで下さいね。剣斗さん
が悲しみます。」

琴花「な、何で剣斗が出てくんのっ！もうっ！ユズキさんは早く行
つて！」

ユズキ「ふふ……分かりました。……気を付けて。」

琴花「止めないんだ？」

ラーハイド「僕様の瞳には君しか写らないさー！そう！僕様とマイハニーの二人だけの世界……か・い・か・ん！」

琴花「私だけ……貧乏クジじゃん……。」

ラーハイド「さあ！愛を語り合おうさー！」

琴花「はいはい、勝手に語るときなさい……。」

ラーハイド「では……『バーストナイフ』。」

琴花「な！いきなり何すんのさ！」

ラーハイド「語り合おうって言ったさー！」

琴花「はあ？」

ラーハイド「さあ！聞かせてくれさー、美しき悲鳴を……。僕様の愛の爆撃で……。」

琴花「コイツ……！アンタね、愛の意味分かってんの！」

ラーハイド「もちろんさー！愛する者が僕様の爆撃で悲鳴をあげ散っていく……ゾクゾクするさ……。」

琴花「コイツ……ヤバイ！」

ラーハイド「さあ！鳴いておくれさ〜！『ドロップボム』！」

琴花「くそお！やつぱり貧乏クジじゃんか！あんな変態を相手しなきゃいけないなんて！」

ラーハイド「その顔…いい…さ。もつと魅せてくれさ〜！」

琴花「このっ！『クールブラスト』！」

ラーハイド「素晴らしい…美しい…君を…壊したい…」

琴花「全く！あんな危ない奴信じらんないよ！フーちゃん！」

フーデイン「災難だね…。でも強さはズバ抜けてるみたいだね。」

ラーハイド「それが君の霊神さ〜？それでは僕様も魅せるのが礼儀さ〜！『スノウビィ』。」

スノウビィ「やつほい！アタシ『爆のスノウビィ』よお！よろしくねい！あ、好きなモノはあつ〜いミルクなお！今度一緒に飲まない？あ、でも敵同士だから無理だよねい！失敗失敗！でもよろしくねい！」

琴花「う…うるさい…。」

フーデイン「き…きつい…。」

ラーハイド「ふふ…スノウビィ、紹介するさ〜！あの女神は僕様のフィアンセさ〜！」

スノウビィ「ラーハイドおめでと〜う！アタシも早く好きな殿方を見つけて……キャハ、もうっ！言わせないでよぉ！」

ラーハイド「アハハ！このて・れ・や・さ・ん！」

スノウビィ「いゃんもうっ！ラーハイドのいけずう〜！」

ラーハイド「アハハ！」

琴花「ほ、本当に帰ろうかな…。」

ラーハイド「さあ！僕様の女神を輝かせるさ〜！『エキスプロージョン』！」

琴花「『ストルムレジスト』！はあああ…『ハリケーンカッター』！」

ラーハイド「ち、ちよつとマズイさ〜！くっ！」

琴花「アンタのしたことは絶対許さない！たたみかけるよフーちゃん！『エアログラビティ』！」

ラーハイド「ぐうううつつっ！」

琴花「や、やった？」

フーデイン「まだまだよ！凄まじい『鍊』が！」

ラーハイド「さすがは女神さ…。僕様をここまで…。」

琴花「あれは『超霊化』！」

ラーハイド「はっ！」

琴花「きやあああつつ！」

ラーハイド「ふふ……いい悲鳴さ……。さあ……君はどんなふうに散ってくれるさ……。」

琴花「くっ……悪いけどアンタになんかに負けらんないのよ！以前の私だったら諦めてたんだろうけど、残念だったね……今の私は力を手に入れた……諦めないっていう力を！フーちゃん！」

フーデイン「うん！」

ラーハイド「う……美しい……！」

琴花「これが私の決断の力『桜麟オウリンの鍵』よ！」

ラーハイド「いい……いい……本当にいいよ……マイハニー琴花！」

琴花「アンタに教えてあげる。本当に綺麗なモノを！」

ラーハイド「はは……勝負さ！」

琴花「はああ……。」

ラーハイド「銀河より降りたもう無数の星団よ……。」

琴花「紅き風、白き風、蒼き風、三者相応混じりし力よ……。」

ラーハイド「大気に漂いし越えんなる鮮血で染め…。」

琴花「高き旋空から轟く力となり、風雅と共に…。」

ラーハイド「大きくはばたき爆炎となせっ!」

琴花「全てを切り裂き殲滅せよっ!」

ラーハイド「『メテオバーニア』!」

琴花「『ゴッドサイクロン』!」

二人「はあああー!ー!ー!ー!っ!」

ラーハイド「くっ!」

琴花「負けてらんないのよっ!こんちきしょおおっ!」

ラーハイド「な!ぐわああっ!」

琴花「はあはあはあ…ぐうっ!」

フリーデイン「はあはあはあ…琴…花!大丈夫…?」

琴花「全身が痛い…くっ…!」

ラーハイド「く…!」

琴花「どう?痛いでしょう?これがアンタがしてきたことなんだよ

！」

ラーハイド「痛み……分かってるさ……だからこそ僕は……。」

(ラーハイドの過去)

？「ラーハイド！」

ラーハイド「『フラウ』！どうしたさ？」

フラウ「どうしたじゃないって！今日は『ハツハナマツリ発花祭』よ！」

ラーハイドの語り「フラウは僕様の幼馴染みで、僕様の唯一の理解者だったさ。僕様の住んでた村には『発花祭』と呼ばれる花火大会があったさ。」

フラウ「ラーハイド、アンタは将来どうすんの？」

ラーハイド「まだ決めてないさ。」

フラウ「じゃあ…さ、もし良かったら、私と一緒に植物研究家にならない？と言っても花専門だけだね。」

ラーハイド「え？」

フラウ「この世界には、まだ見たこともない綺麗な花がたくさんあると思うんだ。私は世界を回って、素敵な花達と出会いたい！ラーハイド、私と一緒に美しい花を見つけない？」

ラーハイド「それもいいさ……フラウと一緒にならさ。」

フラウ「ラーハイド……。」

ラーハイドの語り「幸せだったさ。今この瞬間が僕様の全てだったさ。フラウとの時間が一番美しい時間だったさ。だけどさ……。」

ラーハイド「フラウ！フラウ！」

フラウ「み……見ないで……！」

ラーハイド「誰か！医者を！医者を呼んでくれさ！フラウが！」

ラーハイドの語り「祭の最中に発射機が暴走して、それにフラウと僕は巻きこまれたさ。僕様達は命こそ別状は無かったさ……でもフラウは顔に直撃し、大火傷を負ったさ。美しかったフラウの顔が、一瞬で踏みにじられたさ。」

ラーハイド「ん？ああ……寝てしまったさ……フラウ？どこさ、フラウ！」

フラウ「ラーハイド……ごめんなさい。」

ラーハイド「フラウの声！屋上さ！……はあはあ……フラウ！」

フラウ「私は……綺麗な花になりたかった……。ラーハイド、ごめんなさい。」

ラーハイド「何言ってるさ！フラウは綺麗さ！」

フラウ「言わないでっ！」

ラーハイド「フラウ…！」

フラウ「こんな姿になった私の思いなんて誰にも分かんないよ！ラーハイドにも迷惑かけて…私はラーハイドの枷になりたくないの。私の花は…枯れてしまったの…。」

ラーハイド「違う！僕は君が君だから好きになったださ！」

フラウ「これ以上…私を困らせないで。私のせいでラーハイドにも迷惑がかかる…。ごめんね…ラーハイド。」

ラーハイド「フラウッ！」

フラウ「次はきつと素敵な花に…ありがとう…大好き…ラーハイド…。」

ラーハイド「あ…ああ…フ…フラアアアーウッッ！」

（現代へ）

ラーハイド「あとで分かったさ。暴走したのは子供のイタズラ…。だけど大人達は叱りもしなかったさ。フラウが死んだことも、仕方がない…。汚いさ…。あんなに美しかったフラウの顔を！僕様のフラウを！だからこの世界の醜いものを全て破壊するさ！せめてフラウが好きだった綺麗なモノだけを残すことが、僕様にできる唯一の

ことさ！」

琴花「確かに汚いね。」

ラーハイド「おお、君もそう思うだろ？さすがは僕様の…。」

琴花「今のアンタがね。」

ラーハイド「え？」

琴花「アンタが怒る理由は分かる。でも今のアンタは一番汚い！」

ラーハイド「僕様が…汚い…？」

琴花「アンタ言ってたよね。フラウがフラウだから好きになったって。だけど今のアンタはフラウへの思いを理由に、いや、フラウのせいにして好き勝手に他人を傷つけてるだけよ！行き場の無い怒りを他人にぶつけてるだけだよ！」

ラーハイド「あ…。」

琴花「アンタが本当にフラウのことを思ってたんなら、もっと他に出て来ることがあるだろ！フラウの思い、夢をもう一度よく思い出しなさいよ！」

ラーハイド「琴花…。」

琴花「言ってたじゃんか…。フラウとの時間が本当に全てだったって！今のアンタはその時間をも否定していることになるんだよ！そんなの…フラウが可哀想だよ！フラウを醜くしてるのはアンタ自身

よ！ラーハイド！」

ラーハイド「フラウを…僕様が…？」

琴花「本当に美しいモノはね。思いやる心なんだよ。心にある花を綺麗に咲かせることが出来て、初めて人は美しくなるんだよ！アンタに咲かせる自信ある？儂く、それでも必死に生きようと輝く花を！」

ラーハイド「フラウ…！」

琴花「だけどフラウも死ぬべきじゃなかった。そこは責めるよ。だけどアンタはまだ生きてる。まだ綺麗に咲かせることができるんだよ！」

ラーハイド「琴花…。」

琴花「咲かせてみなよ！アンタだけの美しい花を…！」

ラーハイド「…僕様は…間違っていたんだね…ありがとう琴花…。君は…。」

琴花「似てんでしょ？」

ラーハイド「え？」

琴花「フラウに似てる私だから、愛しいと想う反面、憎かったんでしょ？自分を置いて死んだフラウに似てるから。」

ラーハイド「君には負けるさ…。…こんな僕様にも心の花を咲かせ

ることができるのか…。」

琴花「今のアンタなら出来るよ!」

ラーハイド「あ…………ふ…………行きなよ。」

琴花「…うん。ラーハイド、今のアンタなら嫌いじゃないかもね!」

ラーハイド「琴花…………ありがとうさ…………フラウ…………僕様も咲かせるよ…………君に負けない美しい花を…………。」

琴花「うう…………体が…………ぐうつ!」

フリーデイン「琴花!」

琴花「ごめん…………みんな…………剣斗…………。」

(天満は)

天満「ここが次の部屋か!『^{エイケツ}影血の間』…………アイツか…………。」

シャウト「天満…………。」

天満「開けるぞ。」

?「ようやく来たな。ディークの後継者よ。」

天満「『アスフォート』!」

シャウト「天満、我々は！」

アスフォート「シャウトよ！お前に会いたいという奴がいる。そして君…ミリアにも。きっと懐かしいだろう。」

ミリア「え？アタシにも？」

アスフォート「その部屋の奥だ。」

シャウト「懐かしい…？ミリア、行くぞ！」

ミリア「う、うん。」

天満「アスフォート、『ポンコロ』達の仇とらせてもらっぞ！」

アスフォート「ゴミのか？」

にゆう「ゴミじゃないにゅっ！」

天満「にゆう！お前ついてきたのか！はあ……まあいいや、危ないから下がってな。」

にゆう「にゆう。。。」

（シャウトは）

シャウト「ここか……『死鏡の間』か。」

ミリア「一体誰だろ？まあいいや。開けるよ！」

シャウト「な……バカな……。」

？「殺す……。」

次回に続く

第二十八劇『悪病』

シャウト「な…ありえない…何故お前が…？」

ミリア「誰…？」

シャウト「何故お前がここにいるんだ！お前は…お前は死んだはずだ！『水鏡司郎』！」

ミリア「え…嘘…お…父さん…？」

司郎「殺す…。」

？「いやあ…お久しぶりですね、ミリアさん。」

ミリア「『ゼロ』！」

シャウト「お前は！そうか…お前のことだったのか。」

ミリア「知ってるの？」

シャウト「奴は『瞬迅のゼロ』と呼ばれた男だ。」

ゼロ「さすがはシャウトさん！」

シャウト「なるほど…ユズキの探している『氷の悪魔』とはお前のことだな。」

ゼロ「本当に察しのいい方ですね。」

ミリア「え？どういうこと？」

シャウト「奴はネオスの仲間だ。お前達に近づいたのは情報収集と
いったところだろう。それに奴は…。」

ミリア「アタシ達を騙してたの！そうなの、ゼロ！」

ゼロ「…。」

シャウト「『アーミア』と母親の仇か？お前がネオスについたのは
」

ゼロ「さあ…。」

ミリア「え？でも『氷の悪魔』は『法術』を使っただけ…。じゃあ
ゼロは！」

ゼロ「いかにも…僕はあなたと同じ人間ですよ。」

ミリア「！」

シャウト「お前のことは今はいい！司郎！何故答えない！」

ゼロ「無駄ですよ。」

シャウト「無駄だと？」

ゼロ「彼はネオス様のお力で蘇った、忠実なる『死人兵士^{シレットヘイ}』なので
すから。」

シャウト「何だと！くっ…奴は死者をも愚弄するのか！そんなに人の心をもて遊んで何が面白いんだ！」

ミリア「酷いよ……お父さんが可哀想だよ…。」

ゼロ「そんなに情に絡め取られててよろしいんですか？これから殺し合うのに。」

シャウト「何！」

司郎「殺す！」

ミリア「そんな！お父さんと戦うなんて出来ないよ！」

ゼロ「ふふ…では楽しんで下さい。機会があればまたお会いしましょう。ではご機嫌よう…。」

シャウト「待てゼロ！」

司郎「『爪牙・十連針』！」

シャウト「ぐうっ！」

ミリア「シャウトッ！」

シャウト「死んでも腕は落ちてないのか…。さすがは『千針チバリの司郎』だな。」

ミリア「シャウト……お父さん…。」

シャウト「ミリア！お前は手を出すな！わざわざ悲しい戦いなんてしないでいい！」

ミリア「でも…。」

司郎「『時雨・百連針』！」

シャウト「手加減無しか！『ハルカガミ春鏡の楯』！暖かき春は穏やかに支え守る！」

司郎「殺す！」

シャウト「司郎…目を覚ませ！頼むっ！私にお前を殺らせないでくれ！」

司郎「殺す！『流星・三百連針』！」

シャウト「司郎っ！くそっ！『夏鏡の襲』！激しき夏は全てを断ずる！」

司郎「ちい…ツムジカゼ『旋風・五百連針』！」

シャウト「ぐわあああつつ！」

ミリア「シャウトッ！」

シャウト「攻撃スピードが速すぎる…。くっ……動きを止めてやる！『秋鏡の繭』！寂しき秋は巻きつき縛る！」

司郎「ぬっ…！」

ミリア「やったー！」

シャウト「何とか…はっ！この『鍊』は！」

司郎「殺すっ！」

ミリア「そんなあ！あれって『超霊化』！霊神も持っていないのに何で！」

シャウト「そうか！ネオスは霊神を創造できるのか！」

司郎「こ…殺…せ…。」

ミリア「え？今何て！」

司郎「俺を…殺せ…シャウト…。」

シャウト「司郎…お前…正気が！」

司郎「くっ…お前の想像通り…ネオスは…霊神を創り…俺の意識…を入れた…。これは…俺じゃ…ない…。今のうちに…殺せ…。」

シャウト「…分かった。」

ミリア「え！ちょっと待ってよシャウト！お父さんを殺さないで！」

シャウト「あれはただの霊神だ。司郎ではない。」

ミリア「お父さんだよ！」

シャウト「ミリア！」

ミリア「何とかならないの？アタシは嫌だあ！せつかくお父さんに会えたのに！いっぱい話したいことがあるのに！」

司郎「『^{スズネ}鈴音』……いや……今はミリアか……。シャウトを困らせるんじゃない。」

ミリア「お父さん……。だって……もう一人は嫌だよ！」

司郎「一人ではないだろう……お前の側には……いつも……我が友が……いてくれたはずだ……。」

ミリア「アタシにとってのお父さんはお父さんしかいないよ！」

司郎「ありがとう……でも俺は……一度死んだんだ。ここ……にいてはいけな……いんだ。」

ミリア「そんなの嫌だよ！」

シャウト「ミリア。」

ミリア「シャウトは冷酷だよ！お父さんと親友だったのに、そんな簡単に割り切れるなんて信じられないよ！」

シャウト「もう……言わないで……くれ……。」

ミリア「シャウト!」

司郎「……。」

シャウト「悲しくないわけないだろ? 苦しくないわけないだろ? 辛いわけないだろう? アイツは私の親友なんだぞ……。」

司郎「俺には……分かってるよ……シャウト……。俺のことを常に考えてくれ……た。……辛い役目を押し付けて……悪い。」

シャウト「ああ……ミリアは……見るな。」

ミリア「う……うえ……お父さん……。」

シャウト「『冬鏡の棺^{ヒツギ}』……冷たい死の訪れ……優しい冬は誘い（イザナイ）包む……。」

司郎「ぐっ……シャウト……こ……殺すっ!」

シャウト「司郎……。」

司郎「……『渦巻・七百連針』!」

シャウト「何! うわあああああつっ!」

ミリア「シャウト! お父さん……!」

シャウト「く……司郎……ミリア……逃げ……る……。」

ミリア「そんなこと……。」

司郎「殺す…。」

ミリア「お父さん……アタシ……お父さんに出来ることは……。」

シャウト「ミリア…早く…。」

ミリア「お父さん………チェア…。」

チェア「…いいの？ミリア…？」

ミリア「今一番辛いのはきっと……お父さんなんだよ……この悲しい『鍊』が教えてくれてる…だから…。」

チェア「チェアはミリアが思った通りにすればいいと思うの。」

ミリア「うん。」

司郎「！」

シャウト「ミリア…お前！」

ミリア「ごめんねシャウト。アタシ逃げた。シャウトにだけ辛い思いさせて。」

シャウト「でもお前に司郎を…。」

ミリア「大丈夫だよ。この新しい力『導きの星筆^{ホシフデ}』が導いてくれるよ。それに見せてあげたいんだ！お父さんにアタシの力を！」

シャウト「ミリア…。」

司郎「はああああ……大海より姿を現し…。」

シャウト「あれは！司郎の奥義！逃げるんだミリア！」

ミリア「アタシは逃げない……アタシがお父さんを救うんだ！……生きとし生けるものを紅く染めし魂よ…。」

司郎「大いなる力で全てを飲み込め！」

ミリア「十字に交わり煉獄と化せ！」

司郎「『大津波・一千連針』つつつ！」

ミリア「『クルスノヴァ』つつつ！」

シャウト「ミリアアアアツツツ！……どうなったんだ？」

ミリア「つつ…！」

シャウト「ミリア！」

司郎「はあはあはあ…。」

シャウト「司郎！くそっ！ミリア！」

司郎「大きくなったものだな…。」

シャウト「司郎…！」

司郎「子は……親の知らぬところで成長していく。とんでもないス
ピードでな……。寂しくも嬉しいものだな、シャウト。」

シャウト「司郎……お前……。」

司郎「……『鈴音』は？」

シャウト「……大丈夫だ……。」

司郎「そうか……良かった。こうやって三人でいると思い出すな……。
この子が生まれて……守るためにお前の試練を受けて……。結局俺は
……死んじまつたけどな。」

シャウト「あの時は仕方なかった……ミリアのためだったんだ……。」

ミリア「……！」

司郎「そんな顔すんなシャウト。俺にとって『鈴音』が全てだった。
『美鈴』……この子の母親が死んだその時から、俺にとっての命はこ
の子のモノになったんだ。この子の笑顔を守りたい。ずっと幸せに
生きてほしい……。そう思った……絆だから……。」

シャウト「あの時からだったな……。」

（司郎の過去）

司郎「『美鈴』……！」

美鈴「司郎さん…ごめんなさい。あなたと生きられなくて…」

司郎「どうして！どうしてお前が……シャウト！」

シャウト「駄目だ…もう…。『「カッピョウ」枯渴病』……かかったら全身の水分が急激に減り……死んでしまう。」

司郎「何とかならないのか！」

シャウト「治す方法は……無い。」

司郎「そ…そんな…何故君が……こんな不幸な目に！」

美鈴「いいえ…私は……幸せです…。」

司郎「美鈴…！」

美鈴「司郎さんに出会えました。司郎さんと過ごした時間……普通では経験できないことも体験できました。偶然でしたけれど…『オルテナ』に来たことも…本当にいい思い出になりました。それに…かけがえのない宝物も授かりました。『鈴音』……可愛い名前をありがとございます。あの子もきつと気に入ってくれます。」

司郎「美鈴…。」

美鈴「悔いが無いと言えば嘘になります。でも…私は精一杯生きました。だから…幸せです。心からそう…思います…。」

司郎「『鈴音』は君がいなければ駄目だ！」

司郎「あはは！俺より歳上なんだ！その経験で鈴音を楽しませてくれよ！」

シャウト「何い！痛い痛い！くそっ！覚えてろよ司郎！」

司郎「アハハ！」

鈴音「きゃきゃーき……！」

シャウト「痛い……ん？どうした鈴音？おい……おい！鈴音！あ……司郎！」

司郎「どうしたどうした？もうギブアップか？情けないぞ！」

シャウト「違うっ！鈴音の様子がおかしいっ！」

司郎「何だって！鈴音っ！」

ラリア「これは！」

（部屋へ）

医者「この急激な衰弱に体重の減少……間違いありませんね。」

司郎「う……嘘だ……！」

シャウト「そんな馬鹿なっ！」

医者「『枯渴病』です。幸い発見が早かったのですぐにどうということは無いのですが……………」

司郎「あ…ああ…！」

医者「あともって……………一ヶ月でしょう。」

ララア「そんな……………どうして…！」

シャウト「鈴音までが美鈴と同じ病に…！」

司郎「くそつたれっ！」

シャウト「司郎っ！」

司郎「くっ……………」

シャウト「司郎…。」

司郎「…何でだ？」

シャウト「え？」

司郎「運命なのか？」

シャウト「司郎…。」

司郎「何でもこうも運命に命を……………俺の大切な命を奪われなきゃならないんだっ！まだ……………まだ生まれて一年もたってないんだぞっ！」

シャウト「だが…。」

司郎「だがなんだ？仕方がないっていうのか？冗談じゃないっ！鈴音には…まだ見せたいモノや、やらせたいコトがたくさんあるんだ！美鈴が好きだった『虹色蝶』にも会わせてやりたい…。なのに…くそっ！」

シャウト「司郎！待てっ！」

（その日の夜）

鈴音「はあはあはあ…。」

司郎「鈴音…安心しろよ？父ちゃんがすぐに治してやるからなあ。そしたらまた…にかーって笑ってくれな？」

鈴音「はあはあはあ…うっ…。」

司郎「美鈴…君との絆の約束…絶対守るから…。この子の未来…俺の命で守るから！必ず！」

次回に続く

第二十九劇『笑顔』

シャウト「な…何だって？」

司郎「以前言ってただろ？『法術』を習得する試練があるって。それを受けさせて欲しい。」

シャウト「急に何だ！鈴音が大変な時に何を考えてるんだ！」

司郎「『法術』っていうのは、あらゆるものを強化する術なんだろう？。」

シャウト「そうだが…まさかお前！」

司郎「ああ、そのまさかだ。『法術』でこの子の治癒力を高める。」

シャウト「だ、駄目だ！『法術』というのは、あくまでも習得した者を強化する術だ！他人の…しかも治癒力を高めるなんてできない！」

司郎「……シャウト。」

シャウト「お…お前……まさか！」

司郎「頼む！」

シャウト「『反転法術』を使っつもりか…？」

司郎「ああ…。」

ララア「駄目です！そんなことをしたら貴方は！」

司郎「分かってる…。『反転法術』：自分の生命力を『法術』と混合させ、相手の体に直接送り込む。」

シャウト「言っただろ！それを使った者は…必ず死ぬ。」

司郎「ああ、理解してる。その術は術者の命を与える術だ。」

シャウト「そこまで分かってて何故！」

司郎「約束したんだ。この子の笑顔を未来に繋げると…。」

シャウト「お前は何も分かってない！たとえ助かってもお前がいなければ意味がない！親のいない悲しみを背負わせる気か！そんなので本当に鈴音が笑えると思ってるのか！」

司郎「お前がいる。」

シャウト「う…。」

司郎「それにララアもいる。お前達がいてくれれば、きっと大丈夫だ。」

シャウト「お前が育てろよ！責任持ってお前が！」

司郎「俺だってそうしたいさっ！だけど…。」

ララア「シャウト…。」

司郎「救いたいんだ！もう……この方法しか無いんだ……。頼むシャウト……鈴音の未来をお前に任せたい。」

シャウト「く……馬鹿……野郎……。」

司郎「ありがとう……友よ……。」

（司郎は試練を受け『法術』を得る）

シャウト「さすがだな。この試練を受けて、しかもこんなに早く習得するとはな。」

司郎「早く……早く鈴音を助けてやりたいからな。ぐずぐずしてられないんだ！」

シャウト「司郎……。」

司郎「何も言っな。」

シャウト「…分かったよ。」

司郎「ありがとう……。」

シャウト「ラリアが用意してくれている。」

司郎「ああ……。」

シャウト「ララア。」

ララア「用意できました。」

司郎「ありがとうララア。はぁ……ふう……ではこれより『反転法術』を開始する。」

シャウト「私達は『法術』は使えない。私達が手伝えれば、少しは違うんだが……。」

司郎「いいんだ。この子の命を救うのは、父である俺の役目だ。」

鈴音「スウ……スウ……。」

司郎「ふふ……よく寝てやがる。鈴音……父ちゃんがお前を守ってやるからなあ。」

シャウト「司郎……。」

司郎「よしっ！気合い入った！行くぜ！」

ララア「司郎さん……。」

司郎「全てに漂いし命々よ……我に呼応し……儚き者に……そのありし子を守りし御力で……再び生の光を与えたまへ……その光を持って……我の光を届けよ！『リ・バイバル』！」

シャウト「ぐっ！何て光だ！」

ララア「司郎さん！鈴音！」

司郎「ぜ…全身の力が抜けていきやがる！くそつたれっ！俺の力はこんなもんなのかよ！」

鈴音「スウ……。」

司郎「鈴…音……待ってろ……父ちゃん……頑張るかな……！」

シャウト「……！」

司郎「シャウト！ララア！」

シャウト「お前の体を支えるくらいはできる。」

ララア「私もです！」

司郎「へへ……俺はいい友を持った！鈴音！父ちゃんは幸せ者だぞ！お前にもこの幸せ……感じてもらいたい！いや、感じる義務があるんだ！だから生きてくれっ！」

シャウト「ぐわっ！」

ララア「きゃあっ！」

シャウト「う……ララア……大丈夫か？」

ララア「ええ……はっ！司郎さんは！」

司郎「はは……。」

シャウト「司郎！」

司郎「見てくれ…我が友よ…。」

シャウト「これは！体の色が元の肌色に！」

ララア「良かった…鈴音…。」

シャウト「やったぞっ！司郎！……司郎？お前！その体は！」

司郎「ああ……どうやら『反転法術』ってのは、相手の傷や病を自分に移す術だったようだな。」

シャウト「あ…。」

司郎「…でもこれで鈴音は大丈夫だ。美鈴……君との絆…守れたよ…ぐっ…！」

ララア「司郎さん！」

司郎「はあはあはあ……俺はもう……駄目だな……でも悔いは無い…。」

シャウト「司郎！くそっ！『反転法術』を使ったせいにか！病の進行が速い！」

司郎「あとは…頼む…。二人とも…鈴音を…俺達の…未来を…頼む…。」

シャウト「くっ……司郎……。あ…ああ…安心して…休め…。」

」

司郎「世話……かけ……るな……。」

ラレア「ゆつくり休んで下さい……。」

司郎「いつまでも……笑顔……を……それ……を……あの子……に……。」

シャウト「司郎……馬鹿野郎……。」

（現代へ）

司郎「懐かしいな。こうやって再びお前と話せるなんてな。その分じゃネオスに感謝だな。」

シャウト「……司郎。」

司郎「ずっと……お前に謝りたかった……。鈴音にも……。」

シャウト「みくびるな！お前の言いたいことくらい分かるさ……。」

司郎「シャウト……！ああ……本当にすまなかった。それと……ありがとうな。……鈴音……起きてるだろ？」

シャウト「え？」

ミリア「ア、アタシ……。」

司郎「ごめんな鈴音。」

ミリア「何で謝るの？アタシのせいでお父さん死んじゃったのに…」

司郎「娘を助けるのは、父として当たり前だろ？父ちゃんはお前が生きてくれて嬉しいぜ！」

ミリア「お父さああー……ん！」

司郎「おうおう……元気だったか、鈴音？」

ミリア「う…うん…シャウトや…ヒック…ラアが…ヒック…いて…くれた…から…」

司郎「そうか…良かったな。」

ミリア「お父さん！お父さん！お父さん！お父さん！」

司郎「お前をもう一度抱きしめることができる日があるなんてな…。父ちゃん嬉しいぞ！」

ミリア「いっぱいいっぱい話したいことがあるんだよ！」

司郎「分かってるよ。」

ミリア「あのね、あのね！いっぱい友達ができたの！それでね！」

司郎「鈴音…。」

ミリア「え？」

司郎「笑ってくれ。」

ミリア「え…？はっ！お父さん！」

司郎「く…体が維持できなくなってきたな。もうすぐ俺は消える。」

ミリア「嫌だ！せつかくお父さんに会えたのに！また……離れちゃうの！」

司郎「鈴音……俺はいつでもお前の側にいる。母さんと一緒にな。」

ミリア「う…う…。」

司郎「ミリア……いい名前だ。ラリアが付けてくれたのか？」

ミリア「う…うん。」

司郎「そうか……でも……鈴音……この名前も覚えてほしい。母美鈴から取った…美鈴が気に入った名前だ。」

ミリア「どっちもアタシだもん！忘れるわけないよ！」

司郎「鈴音…生きていて良かったか？」

ミリア「うん！楽しいよ…凄く！」

司郎「その笑顔だ。俺はその笑顔を守ったんだな。」

ミリア「お父さん……。」

司郎「幸せに育ちな。もっともつと幸せにな。……ちきしょう……もう時間だ……。」

ミリア「お父さん!」

司郎「泣くのか?」

ミリア「……ううん!エヘヘ、またねお父さん!」

司郎「よろしい。シャウト……ありがとな。お前は俺の親友だよ。永遠にな。」

シャウト「ああ……分かってるよ。この馬鹿野郎……。」

ミリア「お父さん!元気でね!」

司郎「アハハ!鈴音……愛してるよ……ずっと見守ってるぜ。」

ミリア「じゃあね……。」

司郎「友達を大切に。それと……もう泣くなよ……ミリア……。」

シャウト「司郎……やっぱり馬鹿野郎だよ、お前は。」

ミリア「これは……お父さんの『針』。お父さん……。」

シャウト「ミリア……。」

ミリア「よぉーしっ！」

シャウト「ミ、ミリアー！」

ミリア「さあ行くよ、シャウト！ネオスのやることを止めなきゃ！」

シャウト「…ああ！」

（ユズキは）

ユズキ「はあはあはあ……皆さん大丈夫でしょうか？」

？「『アイスニードル』……。」

ユズキ「はっ！くっ……！これは！ま……まさか……！」

？「おや？海の国の方なのに、戦闘能力が高いんですね。」

ユズキ「お前は！」

？「ふふ……。」

ユズキ「やっと……やっと見つけた……『氷の悪魔』！」

？「『ゼロ』と申します。」

ユズキ「ゼロ……！」

ゼロ「あなたが僕を探していたのは知っています。」

ユズキ「そうだ！我が同胞の仇、とらせてもらっ！」

ゼロ「いやいや、無理なことを口にしない方がいいですよ？」

ユズキ「シズマッ！」

シズマ「あいよ！オレツチの出番かい！」

ゼロ「『レイダー』…。」

レイダー「さつさと片付けてしまえ。ネオスが呼んでるぞ。」

ゼロ「はいはい、分かってますよ。」

ユズキ「『超霊化』です！シズマッ！」

シズマ「任せろい！」

ユズキ「うっ……そんな……悪……魔……。」

ゼロ「どんな力も出させずに倒せば怖くないですよ。ふふ……あなたでは僕は殺れませんよ。ではご機嫌よう。」

ユズキ「くっ……まだ……。」

シズマ「ユズキ！くそっ！しっかりしろい！」

(シャウトは)

シャウト「もう天満はアイツを…。」

ミリア「大丈夫だよ！天満は強いもん！」

シャウト「ああ…よし！ここだ！天…満…！」

？「ふ…この程度か？つまらないな。」

シャウト「『アスフォート』！」

天満「はあはあはあ…くっ…！」

ミリア「天満…嘘…！」

にゆう「ミリア！天満が…にゆう…。」

ミリア「にゆう！天満…どうして？一方的に傷受け過ぎだよ！」

アスフォート「ほう…『千針』を倒したのか、シャウトよ。」

天満「シャウト！良かった…無事か。」

シャウト「何を言ってるんだ！お前の方こそボロボロじゃないか！」

アスフォート「そうだシャウト、お前の方からも言ってくれ。コイツ…他の奴らに気を取られ、全力で戦おうとしない。」

ミリア「そんなっ！」

シャウト「天満！気持ちは分かる！だが、お前は皆を信じたんじゃないのか！」

天満「分かつてる！分かつてるけど…。」

ミリア「見損なっ たよ天満！」

天満「ミリア？」

ミリア「今の天満…凄くカッコ悪いよ！」

天満「え？」

ミリア「みんな天満のこと信じて精一杯戦ってる…！それなのに…今のあなたは何！」

天満「あ…！」

シンセーテン「ちえ…僕のセリフ取られちゃったな。そうだよ天満！みんな必死に戦ってるんだよ。リーダーの君がそんなのでどうすんのさ！」

天満「シンセーテン…ミリア…シャウト…みんな…。うおおおおおー…。」

ミリア「て、天満！」

天満「ふう…ごめん…みんな。」

ミリア「天満！」

シャウト「うむ！」

シンセーテン「それでこそ天満だよ！」

アスフォート「これからが本番というわけか……。ふふ……礼を言うぞ、ミリアとやら。」

ミリア「アンタなんか感謝されても嬉しくないよーだ！それに後悔するよ！天満を本気にさせたことをね！」

アスフォート「させてみる。」

天満「させてやるさ！本気で来い！じゃなければ一瞬で終わるぞ！」

アスフォート「小僧が…凶に乗るな！」

ミリア「いつけえっ！天満あつ！」

シャウト「アイツの目を覚ましてやれ！力だけが全てじゃないということをな。」

アスフォート「弱きは罪だっ！」

天満「罪なのはお前だっ！お前の心の弱さだっ！見せてやる！本当の強さをなっ！行くぞっ！アスフォートッ！」

次回に続く

第三十劇『月影』

アスフォート「まずは先程からしていた攻撃だ。『シャドウシックル』！」

天満「はあっ！」

アスフォート「何！『鍊』だけで弾いただと！」

天満「本気で来い！」

アスフォート「集中するところも違うのか…。面白い！『ブラックデストレイ』！」

天満「『爆燕斬』！」

アスフォート「くっ……なるほど…。さすがはディークの後継者といったところか…。」

ミリア「スゴイスゴイ！アスフォートを圧してるよ！」

シャウト「今はな…。」

ミリア「え？」

シャウト「奴の力はこんなものではない。」

ミリア「どっぴうこつとっ。」

シャウト「今アスフォートはどういう戦い方をしている？」

ミリア「どういうって……。『錬術』で遠距離から攻撃して、天満に全て避けられてる……。さすがは天満だね！」

にゅう「さすがにゆ〜！天満強いにゆ〜！」

シャウト「アスフォートはな……。ミリアと同じ遠距離タイプじゃないんだ。」

ミリア「でもアタシと同じように『錬術』使って戦ってるよ？」

シャウト「あんなのは奴の力の、ほんの一部だ。」

にゅう「どういふことにゆ〜？」

シャウト「奴は……。『剣術士』…天満と同じタイプだ。」

ミリア「え！じゃあ今は…！」

シャウト「そう…手加減している。」

ミリア「そんなんっ！」

シャウト「アスフォートが剣を握ったら……。本当の戦いが始まる。」

にゅう「天満……にゅ……。」

アスフォート「では次の段階に行くか…。」

天満「何！」

アスフォート「ふふ…。」

天満「本が剣に！そうか！その本は霊神だったな！」

アスフォート「行くぞ…。『月影の舞い・三日月の太刀』！」

天満「な！くっ！コイツ！」

ミリア「あれが『剣術』なの？何か踊りながら…！」

シャウト「奴はな…『剣術』を極め、剣に飽きてた。だがディークに出会い…ディークと共に『月影の舞い』と呼ばれる新しい『剣術』を編み出したんだ。」

ミリア「それじゃあ！」

シャウト「そうだ。『月影の舞い』は、ディークの『剣術』でもある。ディークの力は『月』だ。そしてアスフォートは『影』。『月影の舞い』とは、二人だけの『剣術』なんだ。」

アスフォート「さあ…お前は最後の『月』を味わえるかな？」

天満「動きが変則過ぎて…！」

アスフォート「『月影の舞い・更待月の太刀』！」
フケマチツキ

天満「くそっ！迎え討つ！」
シュンテンザン
「瞬天斬」！」

アスフォート「ほう…かなりの速さだ。ではこちら速さの『月』
で…『月影の舞い・十六夜月イザヨイツキの太刀』！」

天満「何！ぐわあああつつつ！」

シャウト「強い……あの頃よりも。」

アスフォート「終わりか？」

天満「ふざけるな！シンセーテン！」

シンセーテン「分かったよ。だけど無理は駄目だよ？」

天満「ああ！」

アスフォート「『超霊化』か……。ならばこちらも……。」

天満「俺の新しい力『スカイジオブレード』だ！」

アスフォート「私はこれだ…『アビスレイピア』……。」

天満「行くぞっ！」

アスフォート「来い！」

天満「はあっ！」

アスフォート「ぐっ！やはり霊神の差は出るか！」

天満「はあはあはあ……。」

シンセーテン「大丈夫天満？」

天満「ああ！絶対負けない！アイツに本当の力が何なのか教えてやらなきゃ！…来る！」

アスフォート「消えろ…『月影の舞い・満月の太刀』！」

天満「消えるか！『ハクオウテンリュウジン白皇天竜刃』つつつ！」

二人「うおおおおおー！ー！ー！ー！ー！つつつ！」

天満「絶対勝つんだつつつ！うおらあつつつ！」

アスフォート「何い！ぐっ…ぐわああつつつ！」

天満「はあはあはあ…どうだ…アスフォート…。」

ミリア「やったあ！」

にゅう「やったにゅー！やったにゅー！にゅー！にゅー！」

シャウト「何だ…？何か嫌な感じが…！」

アスフォート「くくく…。」

天満「！」

シャウト「このおぞましい『鍊』は…！」

アスフォート「くははは……あーははははっっ！」

天満「何！」

アスフォート「素晴らしい！これだ……これを待ってた……お前を待ってたぞ！」

ミリア「あれって！」

シャウト「『血のサクリファイス』！」

アスフォート「さあ！トコトンやろう！命を懸けて！そうすれば近づけるんだっ！高みになっ！」

天満「ぐっ！体が……！」

シンセーテン「天満！」

アスフォート「最終戦開始だっ！」

天満「体が……！」

アスフォート「くらえ……ぐわっ！」

ミリア「天満！」

シャウト「違う！あれは！」

？「よくやった天満……。あとは俺がやる！コイツとは決着つけなきゃいけないえからな！」

アスフォート「『ジラス』だと！」

ジラス「おうおう、随分人相が変わったなあ、アスフォートさんよ。お。」

サクリファイ「何してるうううつ！早く…早く血を吸わせろお
おおっつ！」

アスフォート「ああ…吸え…。」

シャウト「アスフォート…まだ気付かないのか…お前のしていることがどれだけ間違ってるかを…。」

ジラス「へっ、そんなことしなきゃ強くなれねえのかよ！」

アスフォート「黙れ…。」

ジラス「悲しい野郎だな…。デイクが見たら泣くぜ。」

アスフォート「貴様に何が分かる！ふ…あの時くらわせそこなつた
技だ！『^{センケツジン}旋血刃』！」

ジラス「お前は分かってねえ！」

アスフォート「消えた？くそっ！どこだ！」

ジラス「ここだ…『^{ジトウボウゲキ}地倒暴撃』！」

アスフォート「ぐわあああつつ！くそっ！ついていけん！何故だ

！ぐ……『エイシトウケツザン鋭刺刀血斬』つつつ！」

ジラス「あたるかつ！……天満との戦いで傷ついたその体で、しかもサクリファイスに血を与えてる。そんな戦い方で俺に勝てると思ってるのか？」

アスフォート「どういう意味だ？」

ジラス「まだ分かってねえんだな。今のお前は自分で動いてねえんだよ！霊神に体を操られてるにすぎねえんだよ！」

アスフォート「私は私の意思で戦っている！」

ジラス「それがそもそも間違ってるって言うてんだよ！」

アスフォート「何だと……？」

ジラス「いいぜ……ディークの代わりに教えてやるぜアスフォート！全力で来やがれ！」

アスフォート「サクリファイス！」

ジラス「二度続けて『超霊化』……本当に分かってねえな……。そんなのはディークの教えじゃねえ！」

アスフォート「全て消えろっ！」

サクリファイス「ヒヤーツハツハツハ！死ねっ！死ねっ！死ねっ！死ねっ！死ねっ！」

アスフォート「終^{ツイ}の舞いだ！『月影の舞い・新月の太刀』つつつ！」

ジラス「曇^{チリユウセンゲキハ}ったな…そんな月も映せない剣じゃ、俺は殺れねえよ。
『地竜閃撃破』つつつ！」

アスフォート「うおおおおおつつつ！」

ジラス「おらあああつつつ！」

アスフォート「ぐぐつ……もつとだ！もつと力を出せサクリファイ
ス！」

サクリファイ「血が……血が……！」

ジラス「分かってねえんだよつつつ！」

アスフォート「ぐわあっ！」

サクリファイ「血が足り……ぎゃあああつつつつつ！」

アスフォート「馬鹿な……ぐわああつつつ！」

ジラス「ふう……。」

アスフォート「ぐ……ま……まだ……私……は……強……く……。」

シャウト「もうよせ。」

アスフォート「シャウト……。」

シャウト「これ以上は…。」

アスフォート「黙れ！お前らに……何が分かる！」

ジラス「分かってねえのはテメエなんだよ！」

アスフォート「何だと！」

ジラス「本当の強さってのがな。」

アスフォート「馬鹿にするなっ！強さっていうのは他者を寄せつけず、何事においても決して負けない勝つための力だ！」

シャウト「そんなところに……傷つける先に本当の強さなんて無い。」

アスフォート「だったら力とは何だ！何のためにある！」

天満「大切なモノを守るためだ。」

シャウト「天満！」

アスフォート「ふ……くだらない……。守るための力だ？力とは攻めるためのモノだ！」

天満「だったら今のお前は何だ！何に負けてるんだ！」

アスフォート「く……。」

天満「ディークもそうだった。大切なモノを守るために戦った。」

アスフォート「ああそうだ！だから死んだ！くだらない弱きモノを守ってたから死んだ！私を置いて死んだんだ！」

シャウト「アスフォート！お前…そうか…お前が強さのみを異常に追いかけるようになったのは…。」

アスフォート「ああそうだ！私に何も告げずに、勝手に死んだ！しかも…お前達を守るために命を落としたって言うではないか！」

シャウト「アスフォート…。」

アスフォート「お前達がもつと強かったら…ディークがもつと強かったら死ななくてもすんだんだ！」

シャウト「ああ…私達は弱かった…。」

アスフォート「強さが全てなんだ…力が無ければ何もできないのだ！」

天満「そうだな…でもお前は間違ってる。」

アスフォート「何を！」

天満「他者を傷つけ…自分を傷つけ…力ってそういうモノなのか？危険な霊神まで使い、自分の命を削りながら戦う。それが本当の強さか？」

アスフォート「う…。」

天満「デイクは何て教えてくれた？自分を傷つけながら戦うことを教えてくれたのか？」

アスフォート「デイク……デイクは……。」

（アスフォートの過去）

アスフォート「よしっ！『月影の舞い』の完成だ！これでまた一歩強くなったんだな！」

デイク「アスフォート……この『月影の舞い』は今から『禁術』とする。」

アスフォート「はあ？何だよ？この力があれば誰にも負けない！使って使って使いまくって俺の強さを見せてやるんだ！」

デイク「そんなことのために編み出した『剣術』ではないぞ。」

アスフォート「さっきから何言ってるんだ？使わなければ意味ないじゃないか！」

デイク「この『剣術』は強力過ぎる。他者にも…自分にもな。」

アスフォート「それだけ強いってことじゃないか！」

デイク「いいかいアスフォート。本当の強さというものを履き違っては駄目だ。」

アスフォート「え？」

ディーク「本当の強さというものは他者を守るために使わなければならない。私達の力はね、大切なモノを守りたいと思った時に、本当に強くなるものなんだ。だからむやみに力を誇示するものじゃない。自分の…大切なモノ達を助ける強さとして使った。そのために与えた力だよアスフォート。『月影の舞い』はな。」

アスフォート「うう…。」

ディーク「ふふ…いつか君にも分かる時がくる。自分の力は何なのか…何のために使うのか…。君ならきつと…。」

（現代へ）

アスフォート「そ…うだった…ディークは…。」

天満「アスフォートを信じたんだろ？」

アスフォート「私は…ディークが死んで…ディークの言う力に裏切られたと…。でも…ディークが言ってた力は…私のために…思っ…。」

天満「確かに力が必要だよ。でも力だけじゃ意味がないんだ。それに想いが合わさって、初めて強さになるから。」

アスフォート「私は…全然分かってなかったのだな…。」

天満「それに…デイクは死んでないよ。」

アスフォート「え？」

天満「デイクは生きてる。俺やシャウト、ジラス、シンセーテン…それにアスフォート…君の中で。皆が生きてることが、デイクの生きてる証だよ。デイクが守った証。本当の力の証なんだよ！」

アスフォート「私が生きてることが…デイクの証…。」

天満「大切なモノの証。」

アスフォート「証…そうか…そうだったのだな。」

天満「そして俺の中のデイクが言ってるよ。『アスフォートは強い』…って。」

アスフォート「……天満。」

天満「何？」

アスフォート「……私の…負けだ…。」

次回に続く

第三十一劇『治癒』

天満「ふう…でもさすがアスフォートだよ……疲れたあ…。」

アスフォート「ふ…君がこんなに強くなってるとはな。正直驚いたな。」

シャウト「ところでアスフォート。お前がネオスについたのはやはり…。」

アスフォート「ああ…ネオス様…いや、ネオスは『血の霊神』を与えてくれた。それに、ついてくればもつと強くなれると言ったんだ。」

シャウト「だが実際はそうではなかったのだろうか？」

アスフォート「そうだな…私が間違ってた。ぐっ…！」

天満「アスフォート！」

シャウト「いかん！サクリファイスに『血』と『生命力』を吸いとられてる上に、連続しての『超霊化』！アスフォートの体の限界を越えてしまったんだ！」

アスフォート「やつ…と…見つけた…の…に…死ぬ…のか…。」

天満「どうすればいいんだ！」

シャウト「くそっ！ただ単に『錬』が減っているだけなら何とかあるんだが、『血』や『生命力』なんてどうすれば…！」

アスフォート「デイク……すま……ない……。」

天満「諦めるなっ！」

アスフォート「天…満…。」

天満「デイクを裏切るのはもう許さないぞ！お前は生きてやる」とがあるだろ！」

アスフォート「…うう……そ…うだ……私は…生きたい…。」

シンセーテン「シャウト！何か手は無いの！」

シャウト「く…どうすれば…！」

にゆう「にゆうに任せるにゆ〜！」

天満「え？に…にゆう？」

シャウト「…そうか！『レストピア聖錬金』か！」

にゆう「そくにゆ〜！治すにゆ〜！」

ミリア「にゆうつてばすっごいっ！」

天満「え？でもにゆうの力って物だけを直すんじゃないのか？」

にゆう「何でも治すにゅー！人でもエルフでもにゅー！治すにゅー！」

シャウト「頼んでもいいか？」

にゆう「頑張るにゅー！にゅうううう……！」

シンセーテン「にゅうの体から光が！」

天満「頑張ってくれ、にゅう！」

ミリア「にゅうからすごい『鍊』を感じるよ！」

にゆう「にゅうチャージ終わったにゅー！まずは『生命力』を戻すにゅー！にゅっ！」

シャウト「なるほど…『レストピア』とは創り出す能力なんだな。」

天満「創り出す能力？」

ミリア「新しく創るってこと？」

シャウト「ああ、自分の『鍊』を対象物に注入し、『生命力』なら『生命力』に自分の『鍊』を変換させて治すんだ。つまりにゅう達『ポンコロ』は自由に『鍊』を変化させることができる種族なんだ。」

天満「ちょっと待って！自分の『鍊』で……それって…！」

シャウト「ああ…にゅうにとっても危険が伴う力なんだ。言ってみ

れば『鍊』は『生命力』みたいなものだ。使い過ぎると危険だ。我々が『超霊化』すると、後遺症として体に痛みが走り、急激に『気力』『体力』が衰える。それは体内の『鍊』が激減するからだ。言ってみれば『鍊』は『精神の力』なんだ。」

天満「じゃあにゆう達はそんな辛い思いをしてまで、俺達のために舟を直してくれてたのか…。」

シャウト「そうだ…そして今…私達の仲間を助けるために頑張ってくれているんだ。」

にゆう「にゆうううう……！」

天満「くそっ！」

にゆう「にゅ！天満！」

天満「残り少ないけど、俺の力も使ってくれ！」

にゆう「天満……ありがとうにゅ…。」

シンセーテン「僕の力もね。」

シャウト「私もだ。」

ミリア「アタシだって！」

にゆう「シンセーテン…シャウト…ミリア……頑張るにゅっ！」

アスフォート「…ありがとう…。」

(剣斗は)

剣斗「う……うっ。」

？「目が覚めましたか？」

剣斗「はっ！お前は誰……ぐっ！」

？「まだ動かない方がいいですよ。」

剣斗「お前……いや、アンタが助けてくれたのか？」

？「助けない方が良かったですか？」

剣斗「え、いや……ありがとう。」

？「ふふ……素直な方ですね。ああそうそう、これを渡しておきましょう。」

剣斗「何だコレ？」

？「それはあなたに飲ませた薬です。また使う時もあるでしょう。」

剣斗「薬？……俺を助けてくれたっていうことは、味方なのか？」

？「味方……まあ、今あなた達に敵意は無いですよ。」

剣斗「一体アンタ何者なんだ？」

？「いずれ分かりますよ。この戦いの果てに何があるのか……その先で……またお会いしましょう。新垣剣斗くん……。」

剣斗「な！消えた！……一体何なんだよ……。ん？あれ？体の痛みがとれてる！アイツの薬のお陰……なのか？まあいいや、琴花達を追わなきゃな！」

（琴花は）

フーデイン「どうしよう……？どうすればいい……？琴花あ……。」

剣斗「あれは！琴花！」

フーデイン「剣斗！琴花が！」

剣斗「おい琴花！しっかりしろっ！」

フーデイン「『超霊化』の反動だよ！」

剣斗「俺と同じか……はっ！さっきもらった薬！本当に効くのか……く……悩んでも仕方ねえ！琴花、これを飲め！」

琴花「う……うっ……。」

フーデイン「琴花あ……。」

剣斗「頼む！効いてくれ！」

琴花「あ…け…剣斗…？」

剣斗「琴花！大丈夫か！」

琴花「アンタ…どうして…？」

剣斗「お前を追いかけてきたんだよ！」

琴花「勝ったん…だね…。」

剣斗「お前もな！」

琴花「はは…ちょっと無理しちゃったかも…。」

剣斗「あはは…俺も死にそうだったよ…。」

琴花「やっぱり…お互いバカだね…。」

フーディン「琴花あ…。」

琴花「フーちゃん…心配かけてごめんね。」

フーディン「良かったよ…。」

剣斗「顔色が良くなってきた…。あの薬…良かった…。」

琴花「剣斗？」

剣斗「え…ああ。立てるか？」

琴花「うん。何か体の痛みも引いたみたい。ありがとう剣斗。」

剣斗「ああ。ユズキさんは先に？」

琴花「うん。大丈夫かな？」

剣斗「よし！行こう！」

琴花「うん！行くよフーちゃん！」

フーデイン「うん！」

（ユズキは）

シズマ「くそう……ゼロって言いやがったなアイツウ！オレツチのユズキをよくもう！」

ユズキ「シ…ズマ…。」

シズマ「ユズキィ！」

ユズキ「うつ…。」

シズマ「無理すんなよユズキィ！」

ユズキ「大丈夫です。さしたるケガありません。どうやらただ気

絶させられただけのようですね。はあ…。」

シズマ「ユズキ…。」

ユズキ「私は…全然敵わなかった…何もできなかった…。」

シズマ「つ、次はイけるさあ！オレツチだってまだ全力出してないぜえ！だから次は！」

ユズキ「……。」

シズマ「……。」

剣斗「ユズキさあーん！」

ユズキ「剣斗さん？琴花さんも！」

琴花「大丈夫？」

ユズキ「え、ええ…。」

シズマ「ユズキ…。」

剣斗「ケガは無いようだけど……何かあったんですか？元気無いみたいだけど…。それにこんなとこで何を？」

ユズキ「それは…。」

シズマ「ユズキ……二人とも、オレツチが説明するぜ。」

（シズマは説明をする）

剣斗「そうか…『氷の悪魔』が見つかったのか…。」

琴花「でもユズキさんが一撃でやられるなんて…。人間だよね…。そんなに強いのか…？」

シズマ「本当に『悪魔』だぜ！何をされたかも分からなかった…。くそっ！オレッチがもつとしっかりしてればユズキを…！」

ユズキ「ありがとうシズマ。貴方には本当に感謝しています。」

シズマ「へへ…オレッチはユズキが大好きだからな！次は必ず守るぜ！」

剣斗「でもどんな奴なんだ？やっぱり冷たくて怖い奴なのか？」

ユズキ「いいえ。」

シズマ「ユズキ！」

ユズキ「もう大丈夫です。くじけてても仕方ありません。…ここからは私が説明します。」

シズマ「ユズキ…。」

ユズキ「外見は怖くありません。それどころかずっと微笑んでいました。長い杖を持っていて、『氷』の霊神を…。確か名前は…レイ

ダーと言っていました。」

剣斗と琴花「えっ!」

ユズキ「ど、どうされたんですか?」

剣斗「ユ、ユズキさんに一つ聞くね...。」

ユズキ「はい...。」

剣斗「ゼ...ゼロっていいませんでしたか?そいつの名前...。」

ユズキ「ご存知だったのですか?」

琴花「私達の仲間よ...。」

ユズキ「どういうことですか?」

(ゼロのことを説明)

ユズキ「そうだったのですか...。」

剣斗「アイツ...俺達のことを騙してたのか...。くそつたれ!」

琴花「ゼロ...何で...?」

ユズキ「さっき微笑んでいたと言いましたが、ゾツとするような笑顔でした。冷たく...ただ冷たい笑顔でした。」

剣斗「急ごう！」

琴花「剣斗？」

剣斗「今は考えてもしようがない！俺達のすることは一つ！前に進むだけだっ！」

琴花「剣斗！」

ユズキ「そうですね。後悔している暇があれば、とにかく動く。それが一番ですね！」

剣斗「行きましょう！」

琴花「うん！」

ユズキ「はい！シズマ！」

シズマ「おう！」

ユズキ「次は負けない！絶対！」

剣斗「今は前に！そうだろ、天満！」

（天満は）

天満「はあはあはあ……にゅう。」

にゆう「もう大丈夫にゅー！天満達のお陰だにゅー！」

天満「違つよ。全部にゆうのお陰だよ。本当にありがとう。君がいてくれて本当に良かったよ。」

にゆう「嬉しいにゅー！嬉しいにゅー！天満のためならにゅーにゅーにゅー！」

シャウト「本当に感謝するよ。」

ミリア「疲れたあ…もう空っぽだよお…。」

天満「アスフォート？」

アスフォート「にゆう……すまなかった…。」

にゆう「にゅー？」

アスフォート「君の家族を傷つけ、ゴミだとも言った…。それなのに私を…。」

にゆう「分かってくれたらいいにゅー！間違いは誰でもやるにゅー！次にしなければいいにゅー！にゅー！」

アスフォート「ありがとう……本当にすまなかった……ありがとう…。」

にゆう「にゅー！」

天満「アスフォート、これからどうするんだ？」

アスフォート「私は…旅に出る…。」

シャウト「探しものか？」

アスフォート「ああ…。」

シャウト「そうか…。」

アスフォート「この先にネオスがいる。行け。」

天満「ああ。アスフォート…また会えるかな？」

アスフォート「分からない…だが…そう願う。」

天満「俺もだ。」

アスフォート「ふ…天満。」

天満「何？」

アスフォート「気を付けろよ。」

天満「…。」

アスフォート「ネオスの持つ闇は、私とは比較にならない。奴は本当に恐ろしい。そして本当に…強い。闇に飲まれるな。」

天満「ああ、ありがとう。」

シャウト「では行こうか！」

天満「ああ！じゃあまたな、アスフォート！」

アスフォート「気を付けろ天満……信じてるぞ……。」

天満「はあはあはあ……はあ……はあ……。」

ミリア「はあはあはあ……はあ……はあ……。」

シャウト「二人とも！」

天満「くそっ……体が……。」

ミリア「アタシも……。」

シャウト「天満達は私達霊神と違って、自然の力を取り込めない……このままでは……。」

剣斗「天満！」

天満「剣斗……！」

剣斗「良かった、無事か！……大丈夫か？」

シャウト「お前達は随分元気だな？」

剣斗「説明は後だ。これを飲め！」

天満「え？」

剣斗「いいから！ほら、ミリアも！」

ミリア「う…うん。」

シャウト「…あれは！」

天満「ふう…何か随分楽になったぞ。」

ミリア「アタシも…スゴイ！」

シャウト「剣斗、それは？」

（剣斗説明）

シャウト「やはり…。」

剣斗「シャウト？」

シャウト「『ユウレンガン湧錬丸』だ。」

次回に続く

第三十二劇『神話』

剣斗「『湧錬丸』って言うのか…。」

シャウト「その丸薬にはな、見た目と違って『錬』を増幅する成分が大量に凝縮されている。服用すると、体内で『錬』が爆発的に増幅する。だが何故そんなものを……剣斗。」

剣斗「何だ？」

シャウト「それを渡されたって言ったな。どんな奴だった？」

剣斗「うゝん、それがさあ、男だとは思っただけだなあ。なにしろ、白いコートみたいな服着て、フードで顔も見えなかったからなあ…。」

シャウト「そうか…。」

天満「シャウト？」

シャウト「ふう…今はそいつのことはいいな。とにかくネオスを止めるんだ！優先すべきは先ずそっちだ！」

天満「ああ！その薬のお陰で、体はバッチリだ！」

ミリア「ミリアちゃんもバッチリバッチリ！」

シャウト「よしっ！行こう！」

天満「……ここは…『黒皇の間』！この先にネオスが…。行くぞみんな！」

？「やあ！」

天満「言われたとおり来たぞ！『ネオス』！」

ネオス「思ったより早かったね。そうか…『五真将』は全滅か…。ふふ…本当に頼りにならないよねえ。」

天満「真雪を返せっ！」

ネオス「真雪？ああ…彼女ならここだよ。」

真雪「…。」

天満「あ！真雪いいーっ！」

シャウト「真雪が入っているあの機械は何だ？」

ネオス「ふふ…これはね、『醒鍊導機』と呼ばれる、『覚醒機』だよ。」

シャウト「覚醒…まさかつ！」

ネオス「そのまさかさ。」

シャウト「天満！早く真雪を助けるんだ！」

天満「え？」

シャウト「奴は真雪の人格を破壊するつもりだ！」

天満「な…何だって…！」

シャウト「真雪の人格を破壊して、真雪の中にある『アーミア』の人格を完全に覚醒させる気だ！」

天満「そ、そんなことさせるかよっ！」

ネオス「ふふ…もう遅い…。さあ…我が創世時代の始まりだ！」

天満「ぐわっ！機械が爆発した？真雪…真雪いいーっ！」

剣斗「何だよ急に！」

琴花「真雪は無事なの！」

天満「真雪っ！真雪っ！真雪いいーっ！」

？「…。」

天満「ま…真雪…無事…。」

？「なんてことを…。」

天満「真…雪？」

ネオス「やっと会えたね…『アーミア』！」

アーミア「『アオス』…。」

ネオス「あは…やっと会えた…僕がどれだけ待ったか…。」

アーミア「なんて馬鹿なことをしたの！」

ネオス「え？ア、アーミア？どうしたんだい？」

アーミア「真雪さんの中でずっと見てた。…あなたのしたことは間違ってるって言ってるのよ！」

ネオス「な、何を言ってるんだい？僕は君のために…！」

アーミア「世界を滅ぼす気なの？」

ネオス「違うつて！『回帰』だよ！新しい世界を創るんだよ！僕と君で…！」

剣斗「どうなってんだ？あれは真雪じゃないのか？何かもめてるみたいだけど…。」

シャウト「あれはアーミアだ。くそっ！間に合わなかったか！」

天満「そんな…真雪…くっ…。」

琴花「扇くん…アーミアって…王達に殺されたっていう？」

シャウト「…アーミアは『光の民』なんだ。」

ミラア「何それ？」

シャウト「『光の民』はな、神と通じることができる種族なんだ。」

剣斗「神？神って？」

ユズキ「もしかして、『オルフェリア』ですか？」

シャウト「ああそうだ。昔から『光の民』は『オルフェリア』を崇め、意思を交し生きてきたんだ。何故意思を交すなんてことが出来たと思う？」

剣斗「え？うう分かんねえ。」

シャウト「『光の民』は『伝心の光』と呼ばれる光を放ち、自らの想いを伝え、また想いを受け取ることが出来たんだ。『オルフェリア』は思った、自らの意思を世に伝え、正しく世界を導く者が必要だと。だから神は『光の民』と呼ばれる種族を生み出した。故に『光の民』は、神の意思を皆に伝える『神の代弁者』……『神代』^{カミノ}と呼ばれたんだ。そして神の意思をディークに伝え、ディークが皆を導いたんだ。」

剣斗「じゃあ真雪がそうだって言うのか？」

シャウト「真雪自身は普通の人間だろうな。だがおそらく真雪は……アーミアの生まれ変わりだ。」

琴花「生まれ変わいい！」

シャウト「ああ。だからこの世界……『オルテナ』に来なければ、ネオスの目にも止まらず、普通の人間として過ごしていただろうな。」

天満「……せいなのか？」

剣斗「天満？」

天満「俺のせいなのか？俺が連れてこなければ真雪は…。」

皆「…。」

シャウト「誰のせいでもない。これは真雪自身が選んだ道なんだ。」

ミリア「でもさでもさ、何で『光の民』は今はいないの？」

シャウト「分からないか…？」

天満「…王か…？」

シャウト「そのとおりだ。」

剣斗「へ？どゆこと？」

琴花「アンタはもう黙れ！」

剣斗「のうつつ！」

シャウト「王達はな、自分達が世界の支配者と考えた。なら自分達にとって邪魔なモノは排除する…そう考えた。」

剣斗「邪魔なモノ？何だ？」

琴花「だ・か・らああ、黙れっ！」

剣斗「んいいつっ！」

シャウト「王達は思った。『我々が神なのだ。故に今、空にいる神気取りのバケモノは必要ない。その意思を継ぐ愚かな種族も我々にとって邪魔でしかない。』と…。そして…『ハンター』と呼ばれる組織が作られ、狩りが始まった。」

ミリア「ひ、酷いよ！」

琴花「自分達の上で起ることが愚かじゃないか！」

剣斗「腐ってんな！」

天満「だから母さんは城を捨て、父さんと人間界に…。」

ミリア「でもやっぱり信じられないよ！王がそんな酷いことを…。」

？「本当だ。」

天満「…『アイズ』！無事だったのか！良か…はっ！『サイガ』！」

アイズ「大丈夫だ。サイガは敵じゃない。」

天満「そ、そうなのか？…アイズがそう言うなら…。」

ミリア「あのさあ、本当だって言ったよね？」

アイズ「ああ、これを…。それは『メモリーキューブ』。それを観

れば全てが分かる。サイガのことや王達のことや……僕のことも……」

天満「アイズ……？」

サイガ「ええんか、アイズ？あの中にはお前の……」

アイズ「いいんだ。皆には知っていてもらいたい。」

（『メモリーキューブ』を観る）

皆「……。」

天満「アイズ……お前……」

アイズ「まあ、そういうことだ。でも今は僕のことよりも！」

天満「……分かった……」

シャウト「皆聞いてくれ。」

天満「どうした？」

シャウト「こんなところで話すことでは無いかもしれないが、聞いてくれ。知っておいてほしいんだ。」

天満「……ああ。真雪……」

シャウト「『アオス』の話：覚えているか？」

剣斗「『ドリューマ』が『アオス』を創って、『アオス』が好き勝手してたから、『オルフェリア』がデイクを創って、そのデイクが『アオス』を封印したんだよな？」

シャウト「その後は？」

剣斗「え…と…。」

天満「『アオス』を失った『ドリューマ』は、『オルフェリア』に對抗して……！」

シャウト「気付いたか？」

琴花「そういえば、前に聞いた話は確か……。」

アイズ「デイクは『三霊神』と『八闘士』を従い、人間界とエルフ界を守った。だがその話では、もうエルフ達が存在している。」

ミラア「確かエルフが生み出されたのは、『アオス』が封印された後だよな？あれ？おかしくない？」

シャウト「おかしくはない。全部真実なんだ。」

ミラア「でも…矛盾してない？」

シャウト「全てを話そう。」

皆「……。」

シャウト「実はな…私達が戦った『アオス』は二代目…なんだ。」

ミラア「はい？」

アイズ「なるほどな。」

シャウト「二代目という言い方は正しくないかもしれないな。」

天満「最初の『アオス』がディークに封印されて、時が経って、何かの原因で封印が解け、『アオス』が復活。その『アオス』をディークが再び封印した。今度は命を懸けて…。そういうことかい？」

シャウト「そのとおりだ。理由は分からないが、復活した『アオス』は、封印する前の『アオス』より、格段に強くなっていたんだ。だからディークは私達を生み出し、仲間を集い戦った。」

天満「だがディークは何故最初の『アオス』を封印したんだ？二回目は分かる！封印しか手が無かったって…。だけど最初の『アオス』はディーク一人でも戦えたんだろう？だったら何故倒さずに封印を…？」

シャウト「私達も聞いたよ、ディークに。そしてディークは言った。『アオスを信じたから』と…。」

天満「どういうことだ？」

シャウト「言っただろ？『アオス』も初めは優しき霊神を統べる王だったと。長き年月が過ぎ、『アオス』が変わっていった。『優しき王』から『破壊の王』に。ディークは戦っている時に『アオス』

に言われたらしいんだ。『頼む…僕を封印してくれ』と…。」

アイズ「『アオス』が自分でそう言ったということは、自分が間違ってたと気付いたのか？」

シャウト「デイクは言ったよ。『初めから悪い者などいない。だが生きてる以上間違いを犯してしまうのも事実。それを悔やめるかどうかで、その者の本当の心が分かる。アオスにはまだそれがあつた。だから私はアオスの意思を尊重したんだよ』とな。事実、復活した当初は違ってた。『優しき王』の言葉が似合う、本当に優しい奴だったそうだ。」

天満「じゃあ何故再び戦うことになったんだ？」

シャウト「ある時、『アオス』は一人の少女と出会ったんだ。」

天満「まさか…その子が！」

シャウト「ああ、あそこにいるアーミアだ。『アオス』はアーミアと出会い、恋に落ちた。そして子供が生まれた。その子供の名前は『ミーフア』…『希望』の意味を持つ女の子だった。」

天満「その時デイクは？」

シャウト「『アオス』と二人で良き指導者となり、世界を導いていた。デイクは『アオス』と親友同士になっていった。デイクにとっては初めての友達だ。その時の話を嬉しそうに語ってくれたよ。だが…エルフ達がどんどん増え、国を作り、王というシステムが誕生した。そして、さつき話した狩りが行われたんだ。アーミアも王達に捕えられ、アイズに見せてもらった『メモリーキューブ』に映

った王達が言うように、生体実験が行われた。神を封印するために、利用された結果死ぬことになった。それを知った『アオス』は……」

剣斗「何故デイクや『アオス』はそれを止めなかったんだ？」

シャウト「『ドリューマ』と『オルフェリア』の争いを止めていたんだ。」

ミリア「そういえば、何で争ってたんの？」

シャウト「『ドリューマ』と『オルフェリア』はな、生物ではないんだ。」

天満「どういう意味だ？」

シャウト「あれらは、『鍊』の集合体なんだ。理性も何もない、ただの物体なんだ。最初はそうでは無かったがな。」

アイズ「どういうことなんだ？話が見えないぞ！」

シャウト「『アオス』とデイク、この二人を生み出したその時から『ドリューマ』と『オルフェリア』は理性をなくした。特に『ドリューマ』は、全てを『アオス』に過ぎ過ぎたんだ。理性も心もな。本当に力だけの物体。大災害のようなものだ。争ったと言ったが、『ドリューマ』の暴走を『オルフェリア』が止めてたんだ。『オルフェリア』には理性や心が残っていたんだよ。」

アイズ「なるほどな……『ドリューマ』と『アオス』は二つで一つの存在だったのか……。そしてデイクと『オルフェリア』も……。じゃあネオスが『ドリューマ』を復活させようとしているのは、再び一

つになるためなのか！」

シャウト「そうだろうな。いわば『ドリューマ』は力の集合体だ。
一つに…そんなことになれば、本当にネオスを止められなくなる。」

ネオス「止めてくれっ！」

皆「！」

次回に続く

第三十三劇『黒皇』

天満「今のは…ネオス？」

ネオス「何故そんなことを言うんだ！」

アーミア「私はもう死んだのよ？ここにはもう戻れないわ。」

ネオス「だから言ってるじゃないか！その娘の体を利用すれば君は再び生きることができる！」

アーミア「本気で…言ってるの？」

ネオス「もちろんさ！この世界のエルフを滅ぼし、そして創るんだ！僕達だけの世界…！」

（アーミア、ネオスの頬を叩く）

ネオス「ア…アーミア…？」

アーミア「あなたは本当に『アオス』なの？私が知っている……私の好きな『アオス』は誰よりも優しい…。」

ネオス「な…何故…何故君はそうなんだ！王達に家族を狩られ、散々利用されて、最後には君を殺したんだぞ！なのに……そんな理不尽に君を殺した奴らを……そんな奴らが生きている世界を何故かばうんだよ！」

アーミア「じゃああなたがしていることは何？『アオス』…あなたがしていることは、王達がしたと同じよ。」

ネオス「ぼ…僕がああ愚かな王と同じだと…。」

アーミア「そうよ。だから…。」

ネオス「もういい！」

アーミア「うつ…アオ…ス…。」

ネオス「君は少し混乱してるんだよ。今は眠りについていてくれ。全てが終わった時…僕が正しかったと分かるはずだ。」

アーミア「…。」

天満「アイツ！真雪に何を！ネオス！真雪に何をしたあつ！」

ネオス「何だ…まだいたのか…。今僕は機嫌が悪い…話しかけるな。さて…やるか…。」

シャウト「あれは『神器』！まさかここで復活を！」

剣斗「『アオス』をか？」

ネオス「ふふ…何を言ってるんだい？『アオス』の復活？」

剣斗「え？違うのか？」

ネオス「何か…勘違いをしていないかい？」

シャウト「…あ！」

ネオス「気付いたかい？そう…：僕が『アオス』だよ。」

天満「何だって！奴は後継者じゃなかったのか？俺や真雪みたいに！」

ネオス「後継者…：ふふ…。」

シャウト「そうか…！」

天満「シャウト？」

シャウト「ディークは死んだから天満に、アーミアも死んだから真雪に…：いわゆる生まれ変わったんだ。だけど『アオス』は死んでいない！封印はされたが、生きているんだ！後継者が出来るわけがない！」

ネオス「やっと分かったようだね。」

シャウト「だが二度も…何故だ！何故ディークの封印が二度も解けたんだ！」

ネオス「簡単さ…：一度目はディーク自身が解いたのさ。」

シャウト「馬鹿なっ！…いや…ありえなくはない…か…。ディークはお前のことを信じた。だから解いた。だが今度は、ディークはいない！何故封印が解けたんだ！」

ネオス「デイクの力は『月』…その力で僕を封印した。」

シャウト「そうだ！『月』の力はデイクだけの力だ！封印を解くには、再び『月』の力を使わなければならない！」

ネオス「そうだよ。そのとおりさ。」

シャウト「だったら何故だ！」

ネオス「詳しくは僕にも分からない。だが封印を解いてくれた者がいた。」

シャウト「そんな奴がいるわけない！」

ネオス「僕も驚いたさ。だがそいつは言った、『好きにしろ』と。奴が何者なのかは分からない…顔も隠していたしね。だがそんなことはどうでもいい。この醜い世界を再び僕の手で…！ふふ…今はそいつに感謝している。こうして僕はここに立てた！」

シャウト「くっ…！」

ネオス「君達も僕にとってはいらない存在だ。消えてもらう。新しい世界には、僕とアーミアだけがいればいい。他は…いらない。」

アイズ「勝手なことを！」

シャウト「……一つ聞いてもいいか？」

ネオス「何だい？命ごいは受け付けないよ。」

シャウト「何故『アオス』と名乗らない？」

ネオス「ふふ…知っているかい？『アオス』の意味を。」

シャウト「『始まりのエルフ』だ。」

ネオス「じゃあネオスは…？」

シャウト「…？」

ネオス「くく…分からないかい？」

シャウト「ネオス……そうか…。」

剣斗「何だ何だ？」

琴花「一体どういう意味なのさ？」

ネオス「くく…。」

シャウト「『終わりのエルフ』だ…。」

皆「！」

ネオス「そう…これからはそうなる。全てのエルフを殲滅し、僕だけが残る！まあ、アーミアは特別だけどね。だから君達も…もうすぐ死ぬ…。」

天満「そんなことはさせないっ！ぐっ！何だ？壁？」

シャウト「これは？シールドか？」

ネオス「そこで見ていい。『破壊神』の誕生を。」

シャウト「いかんつ！『ドリューマ』か！」

ミラア「嘘でしょう…。」

ユズキ「…何故…ゼロ…『悪魔』はどこに…？」

アイズ「この壁……『鍊』で出来ている…。」

サイガ「アイズ！」

アイズ「サイガ…。」

サイガ「ワイと同じことを考えとるみたいやなあ。」

アイズ「力を…貸してくれるか？」

サイガ「当たり前や！」

アイズ「ふ……天満！」

天満「何だ？」

アイズ「今からこの壁に穴を開ける。おそらく開いている間は一瞬だ。その間に抜ける！」

天満「え？どういう…？」

ネオス「ごちゃごちゃ煩いなあ。仕方ない……『アイツ』を使うか…。」

アイズ「今からこの壁に、ありったけの『鍊』をぶつける。いいか、一瞬だからな！」

シャウト「なるほどな。だがアイズだけでは駄目だ。私もやる。」

ミラア「アタシだって頑張っちゃうよ！」

琴花「よおし！扇くんはネオスを倒すことだけを考えて！」

ユズキ「そうですね。天満さんならきつとネオスを討てます。」

アイズ「本当は僕がネオスを討ちたかったんだがな…。」

天満「アイズ…。」

アイズ「姉さんの仇……天満……僕の分…頼む…。」

サイガ「ワイの分もや。」

天満「…ああ。分かったよ！」

剣斗「天満…。」

天満「剣斗…。」

剣斗「一緒に帰ろうぜ！俺達の世界にな！」

天満「…剣斗……ああ、約束だ！」

？「ぐおおおおつつ！」

アイズ「何だ？」

シャウト「『アイツ』は！」

？「へ、久しぶりじゃねえか！」

シャウト「『ジ阿斯』！」

ジ阿斯「もういいだろうデイク……俺を天満から解放しやがれ！
この時のために、俺を天満に閉じ込めてたんだろ！」

シャウト「デイクの羽が光って！」

ミリア「ま、眩しいっ！」

シャウト「お前……！」

ジ阿斯「ふう……やっと解放されたぜ。お前が持ってたんだなシャウト……デイクの羽……。」

天満「ジ阿斯……。」

ジ阿斯「天満、お前はお前のやるべきことをやれ。真雪を……助けんだろ？」

天満「分かった！」

ジラス「お前らはさっさと道を作りな！『アイツ』の足止めは俺がする！」

シャウト「ふ…あの時と同じだな、ジラスよ。」

シンセーテン「僕は天満と行くよ！」

ジラス「ああ。」

にゆう「にゆうも行くにゆう！」

ジラス「テメエは残るんだ！」

にゆう「嫌にゆう！嫌にゆう！」

天満「頼む、にゆう。ここで待っててくれ…な？」

にゆう「にゆう…分かったにゆう…。」

ジラス「よおしっ！じゃあさっさと天満を送れ！俺は『アイツ』を！」

シャウト「よしっ！始めるぞ！」

ジラス「天満あっ！」

天満「え？」

ジラス「死ぬなよ…。」

天満「君もね…。」

ジラス「ふ…行けっ！」

シャウト「みんなっ！全てを出せっ！」

琴花「開けえっ！」

ミリア「このっ！」

ユズキ「くうっ！」

アイズ「はあああっ！」

サイガ「開けやあっ！」

剣斗「開きやがれええっ！」

皆「うおおおーーーーーっっっ！」

天満「開いた！」

剣斗「行けっ！天満っ！」

天満「よしっ！行ってくる！ありがとうみんなっ！」

皆「はあはあはあ…。」

シャウト「頼んだぞ……天満……。」

天満「はあはあはあ………ネオスッ!」

ネオス「ん?へえ……『ディーノ』か……。」

天満「ネオス!真雪はどこだ!」

ネオス「もう真雪じゃないんだよ?それに……もう遅い………全てがね……。」

天満「真雪は真雪だ!必ず真雪を救い出す!」

ネオス「やれるものならやってみるといい。ふふ……。」

天満「何だ?この地響きは!」

ネオス「さあ!我が『黒皇』ネオスの名の下に降臨せよ!」

天満「ま、まさかつ!」

ネオス「言っただろ?もう遅いと……。」

(シャウトは)

シャウト「さあ、私達もジアスのところへ。ジ阿斯一人では『アイツ』はキツイ!」

ミリア「でも一体『アイツ』って？」

シャウト「前にディークが命を懸け封印した時に、ジアスが一人で足止めをしてくれていた相手だ！」

琴花「確かめちゃくちや強いんだよね？」

シャウト「強いなんてもんじゃない。まあ、戦ってみれば分かる。」

剣斗「あ！あそこだ！で…でけえ…へ…蛇か？」

ジアス「よお、遅かったな！ぐっ…！」

シャウト「ジアス！相変わらずの強さらしいな。」

ジアス「あの時より強くなってやがる…。」

ミリア「バ、バケモノ！」

ユズキ「ん？あれは！」

？「いやあゝお久しぶりですねえ。皆さん。」

ユズキ「『ゼロ』！」

剣斗「テメエ！よくも俺達を騙してくれたな！」

シャウト「お前は一体何がしたいんだ！『アーミア』と母親の仇でネオスについたんじゃないのか？」

ミリア「前にもそう言ってたよね？ゼロって何者なの？」

シャウト「『アオス』とアーミアの子を覚えているか？」

琴花「確か…『ミーファ』だよね！」

シャウト「その子供なんだ。ゼロは…。」

皆「！」

剣斗「嘘だろ…？」

ゼロ「ふふ…。」

琴花「でもゼロは、自分の母親はアーミアと友達だって言ってた…
…あつ！嘘ついてたなあつ！」

ゼロ「本当のことは言えないでしょう？」

シャウト「ではやはりお前も憎んでいるのか？この世界を…。」

ゼロ「そうですね…憎んでいないと言えば嘘になりますね。母は
アーミアのことを殺した奴らを憎んでいましたから。母を悲しませ
た奴らは許せませんね。まあ、もうネオス様が全て殺してしまいま
したが…。」

シャウト「ではお前がネオスについているのは何故だ！」

ゼロ「一応僕の祖父にあたるわけですからね。僕の唯一の身内です

シャウト「そうか…分かった…。ならもう私達の敵なんだな…？」

ゼロ「嫌ですね…最初から味方ではないですよ。」

シャウト「覚悟しろ！」

ゼロ「先ずは『コイツ』を相手して下さい。もし倒せたその時は…僕があなたの方のお相手をさせて頂きます。さあ行けっ！ネオス様の忠実なる『双頭の霊蛇・メリユクオス』！」

メリユクオス「ぐぎややああつつっ！」

ゼロ「ではご機嫌よう…。」

ユズキ「必ず引っ張り出します！『氷の悪魔』！」

ジラス「やるぜえっ！」

次回に続く

第三十四劇『正義』

天満「『ドリユーマ』の復活なんて絶対させないぞネオス！お前のしていることは、お前の大切なモノを奪った王達と同じだ！」

ネオス「うるさい……。」

天満「自分達のために罪のない者達を次々と殺した王達と全く同じだ！」

ネオス「黙れっ！『カオスエンド』ッ！」

天満「ぐわあああつ！」

ネオス「僕は天地を統べる神だ！『天神地祇』は我が『黒皇』だけだ！偽りの国や王など、この世界には必要ない！」

天神「ぐ……そこで必死に暮らしている者達がいる。ただ明日のために毎日を生きてる。それを踏みにじるお前の行いを許すことはできない！」

ネオス「ふ……我が一部が降臨するまで相手をしてやるよ！」

天神「俺は……俺はお前を倒す！」

ネオス「……分からないな。何故命を懸けてまで戦おうとする？」

天満「確かに……この『オルテナ』に来て、まだそんなに経ってない……。そんなに思い入れもないかもしれない……。」

ネオス「…。」

天満「だけど！」

ネオス「！」

天満「死なせたくない人達がいるから！」

ネオス「くだらな…。」

天満「くだらないなんて言わせないぞ！」

ネオス「な！」

天満「お前にも守りたい大切なモノがあつた…いや…あるはずだ！」

ネオス「ぐ…。」

天満「お前の怒りは理解はできる…。だがお前のやろつとしてることは多くの人達を不幸にする！」

ネオス「理解は出来ても納得出来ないということか…。」

天満「俺はこの世界に来て、たくさんのエルフと知り合った。みんな自分達の世界を守ろうと必死に戦ってる。」

ネオス「この醜い世界をかい？」

天満「エルフも人間も成長できる生き物だ！そして変われる生き物

だ！」

ネオス「変われなどしない！」

天満「いいや！変わる！そして変われば、世界も変わるんだ！」

ネオス「幻想だ！」

天満「俺達一人一人の想い…世界を変えたいと想う心…それがあれば大丈夫だ！」

ネオス「そんなのは理想でしかない！」

天満「最初は小さな理想でも……その想いを持つ者が増えれば、世界は変わるんだ！理想は現実になるんだ！」

ネオス「エルフや人間はそんなに綺麗じゃない！」

天満「それでも俺達は生きてるんだ！自分の生きてる世界が好きだから！だから守る！生きたいから！」

ネオス「変わること……など……出来るかつ！」

天満「お互いに譲れない願いがある。だがお前の思想は間違ってる！」

ネオス「力もない、ただ群れることと、争いを生む手しか持っていない者達に未来なんてあるものかつ！」

天満「なら見せてやるよ！俺達の想いの力を！未来がある証拠を！」

ネオス「僕が正しいんだっ！」

天満「皆の想いと一緒に戦う！俺は俺の全身を持って、お前を止める！」

ネオス「なら僕は僕の全霊を込めて、お前を討つ！」

天満「行くぞ！ネオス！」

ネオス「来い！『デイーノ』！」

天満「『バクエンテンザン爆燕天斬』！」

ネオス「『ダークネスゲイル』！」

天満「くっ……互角か！なら『シュウソウテンシヨウ襲双天翔』！」

ネオス「ちい……『カオスレイン』！」

天満「負けるかっ！」

ネオス「負けだっ！」

天満「ぐわああっっっ！」

ネオス「こんなもんかっ！情けないね、後継者！」

天満「まだまだ……。」

ネオス「ん？」

天満「間違ってるお前なんかに負けるかつ！」

ネオス「デーノオオオーっっっ！」

天満「はああああああっっっ！」

ネオス「はああああああっっっ！」

天満「『クウガテンセイハ空牙天星破』！」

ネオス「『グランド・デス』！」

二人「うわああああっっっ！」

天満「はあああああ……。」

ネオス「はあああああ……馬鹿な……これほど……。」

天満「はあああ……この世界では……想いの強さが力になる。」

ネオス「僕の想いがお前に劣っているというのか！」

天満「確かに……お前の想いは強いだろうさ……。だがお前は一人だ……。俺には……皆がついてる。俺は一人じゃない！」

ネオス「ござかしいわああああっっっ！」

天満「シンセーテン！」

シンセーテン「うん！アイツを倒すよ！」

天満「『超霊化』だ！」

ネオス「何！その体でまだ！」

天満「言っただろ？俺は皆と一緒に戦ってる。皆の思いが俺を支えてくれる！」

ネオス「くっ！」

天満「『白皇天竜刃』つつっ！」

ネオス「ぐっ……『クリムゾンデルタ』！」

天満「ぐうっ！」

ネオス「ははは！僕は負けない！不滅だ！」

天満「お…俺は……か…勝つ…んだ……勝つんだああ……
……っつつっ！」

ネオス「何だと！ぐ…ぐわああ……っつつっ！」

天満「はああああ……ぐうっ！」

シンセーテン「天満！」

天満「さ…すがに……二度目は……き…きつ…いな…。」

シンセーテン「よくやったよ天満！本当に…。」

天満「そう…だ…真雪は…。」

シンセーテン「あそこだよ！」

天満「真雪！ぐ…真雪…。シンセーテン？」

シンセーテン「へへ…僕も体が…天満は真雪のところに…行ってあげて。」

天満「君も一緒だよ。ぐうつ！」

シンセーテン「天満！……ありがとう。」

天満「真雪！真雪！」

シンセーテン「でも確か今はアーミアのほすだけど…。」

アーミア「う…。」

天満「真雪！」

アーミア「あなたは…天満さんですね。」

天満「！」

シンセーテン「アーミアか…。」

天満「くそ…。」

アーミア「そんな悲しい顔をしないで下さい。大丈夫です。真雪さんはまだ消えていません。」

天満「本当に!」

アーミア「はい。私はもともと生きているわけじゃありません。真雪さんの中に残留思念として存在していただけですから。今はネオスの手によって一時的に強く出ているだけです。ですから安心して下さい。」

天満「よ…良かったあ…。」

にゆう「本当に良かったにゅ〜!」

天満「に、にゆうっ!何で!残ったはずじゃ!」

にゆう「天満が心配でついてきたにゅ〜!」

天満「はあ…全く…にゆう…君には負けるよ…はは…。」

にゆう「にゅ〜!にゅ〜!にゅ〜!にゅ〜!にゅ〜!」

アーミア「かわいい…。」

天満「何か言った?」

アーミア「な、何でもないです!」

天満「そう？ならいいけど。」

シンセーテン「みんなは大丈夫かな？」

天満「大丈夫さ。みんなは強いから。」

アーミア「あの…『アオス』はやはり…。」

シンセーテン「うん…天満が倒したよ。」

アーミア「そう…ですか…。」

天満「君にとっては複雑だろうけど…でも…。」

アーミア「いえ、いいんです。…彼は…昔の『アオス』は本当に優しい人でした。」

天満「うん…デークも『アオス』を信じてた。いや…もしかしたらデークは今も…。」

アーミア「あの二人が争うなんて、本当に考えられませんでした。お互いを信じ、助け合い、本当に親友同士と呼ぶにふさわしい二人でした。」

天満「でも王達に君を殺され、『アオス』は『破壊神』として再びデークと対峙した。」

にゅう「でもにゅ…アーミアは何でイジメられてたにゅ？」

アーミア「王達にですか？」

にゆう「そくにゆう！」

アーミア「私は『光の民』の中でも、『特別』だったからです。」

天満「『特別』？」

アーミア「はい。『オルフェリア』の声を直接受け取っていたのは私なんです。」

天満「え？『光の民』なら、全員聞けるんじゃないのかい？」

アーミア「正しくは、私一人で声を聞けたんです。」

シンセーテン「…そうか…一人一人が声を聞けるなら、わざわざ『光の民』を何人も作る必要はないもんね。」

天満「あ、そうか！『光の民』が皆で集まって、初めて声を聞けるのか！」

アーミア「はい。一人一人の『伝心の光』は弱いんです。ですから神の声を聞くために、皆の光を集めるのが普通だったんです。」

シンセーテン「だけど、アーミアだけが、一人でも声を聞いた。」

にゆう「アーミアすごいにゆう！」

天満「ということは…アーミアさんの『伝心の光』は、『光の民』の中でも、極めて強かったんだね。」

アーミア「はい。」

シンセーテン「その『特別』が王達の目に止まり、調べるために、君は捕えられたんだね。」

アーミア「はい…。」

天満「それでその結果、『ドリューマ』を封印するために、君の命が使われた。」

シンセーテン「もとは『ドリューマ』と相對する『オルフェリア』から生まれた種族だからね。相反する力だからこそ、封印するのはもってこいだっただね。しかもアーミアは其中でも強力。デイクが命を使い、相對するアオスを封印したように、君も命を封印に使われた。」

アーミア「少し…違います。」

天満「何が違うの？」

アーミア「私は自ら、この身を差し出したんです。」

天満「え！どういうこと？」

アーミア「確かに、王達に捕まり、色々な実験もされました。特にエーテル王には…。」

にゅう「ひどいにゅ…。」

アーミア「だけど…ラファール王は…私を助けてくれたんです。」

（アーミアの過去）

ディーク「では行こうか『アオス』。」

アオス「ああ。じゃあアーミア…。」

アーミア「どうか気を付けて…アオス…ディークも…。」

アオス「君が好きなこの世界…僕が守る。それが…かつて世界を支配して、霊神達を苦しめていた僕の償いだから…。」

アーミア「アオス…。」

ディーク「我々を生み出した親を止められるのは、やはり我々だけだからな。」

アオス「ああ。行こう！アーミアも気を付けて…。安全なところへ避難していて。『ミーフア』と一緒に。」

アーミア「うん…。」

アオス「行こうディーク！」

アーミア「気を付けて…アオス…。」

（数日後）

光の民1「うわああっ！」

アーミア「ん？何かあったのかしら？…あれは！何故王軍の兵士が！」

兵士1「一人残らず捕えるんだ！我がエーテル王の命令だ！抵抗する者はかまわん、殺せっ！」

光の民2「やめ……ぐわああつつ！」

アーミア「嘘……はっ！」

兵士2「さあ、お前も来い！」

アーミア「嫌……！」

？「ママ……？」

アーミア「『ミーファ』！来ちゃ駄目！」

ミーファ「え？」

兵士2「何だガキか。お前も来い！」

ミーファ「あんた誰？」

兵士2「黙って従え！」

ミーファ「は？あんた何言ってるの？」

兵士2「いいから黙れ！」

ミーファ「意味分らないんだけど？」

兵士2「ええいつ、うるさいっ！…なっ！」

？「へ、女の子に手をあげんなよ！」

ミーファ「『レイダー』！」

兵士2「霊神だと？」

アーミア「二人とも、止めなさい！静かにしてなさい…。」

ミーファ「何だよママ！」

レイダー「そうだぜ！コイツら程度…俺が！」

アーミア「駄目っ！お願い…。」

ミーファ「ママ…分かった…。」

レイダー「ちっ…。」

兵士2「よ…よし、ついてい！」

アーミア「行きましょう。」

ミーファ「ママ…何でなの？レイダーなら…」

アーミア「そんなことをすれば、私達が助かってても他の者が…殺されるかもしれない。大丈夫よ……アオスがきつと来てくれるわ。」

ミーファ「…うん…分かった。」

(アーミア達は『エーテル城』へ)

兵士1「連行完遂致しました！」

エーテル王「ご苦労。ほう…これが『光の民』か…。」

ミーファ「あれが王…？嫌な顔…。」

アーミア「しっ！黙ってなさい！」

エーテル王「ところでアーミアという者は誰か？」

アーミア「え？」

エーテル王「ほう…お前か？なら他の者にはもう用は無い。『錬』を取り……殺せ…。」

アーミア「！」

エーテル王「本当の神を履き違えてる種族など……生きる価値は無い。」

アーミア「これが王なの……？」

エーテル王「意外か？これが王だ……世を統べる神なのだよ！さあ、我を崇めよ！ふふ……。」

次回に続く

第三十五劇『汚国』

アーミア「あなたには、心というものが無いんですか！」

エーテル王「王というシステムに心など不要。あるのはたった一つだ。」

アーミア「一つ…?」

エーテル王「…欲だ。」

アーミア「な！」

エーテル王「明朝から始める。それまで牢に入れておけ。」

兵士1「はっ！」

ミーファ「あんなのが王でいいわけないよ！間違ってる！最低よ！」

アーミア「アオス…。」

(牢の中)

ミーファ「ママ！どつするの！…このままじゃ殺されちゃうよ！…」

アーミア「…。」

レイダー「仕方ねえな…俺が！」

アーミア「駄目よ！」

レイダー「またかよ！」

ミーファ「ママ！何で止めるの？」

アーミア「捕まっているのは私達だけじゃないのよ？」

ミーファ「それは…。」

アーミア「大丈夫よ。アオスがきつと来てくれるわ。」

ミーファ「パパが…分かった…。」

レイダー「とりあえず待つしかないか…。」

（明朝）

兵士1「さあ、一人ずつ出ろ！」

光の民1「嫌だ！殺さないでくれ！」

兵士1「やれ！」

光の民1「うわあああーーーーっっっ！」

ミーファ「か…体がミイラみたいになつてくよ!」

レイダー「『鍊』を吸い取ってやがる!マズイぞアーミア!このままじゃ!」

アーミア「…。」

レイダー「アーミア!」

アーミア「…ミーファ…。」

ミーファ「何…ママ?」

アーミア「ミーファ!」

ミーファ「ど、どうしたの?ママ?」

アーミア「あなただけは…守る…。」

ミーファ「え?」

レイダー「アーミア…お前…。」

アーミア「レイダー…。」

レイダー「…ああ…ミーファは俺が守ってやるよ。」

アーミア「ありがとう…。」

ミーファ「な、何言ってるの?二人とも…?」

アーミア「ごめんね…。」

ミーファ「え？う……マ……マ…。」

アーミア「一緒に行きたいけど……一人の道しか開けないの……。ごめんね……ミーファ…。」

レイダー「今の俺の力じゃ一人か……くそっ！」

アーミア「レイダー……ミーファを……アオスと私の子を……お願いします。」

レイダー「……ああ…。」

光の民2「うわあああーっ！」

アーミア「早く！開いて！」

レイダー「ああ……よし、開いた！……じゃあ行ってくるぜ。」

アーミア「あなたにも迷惑かけてごめんなさい。」

レイダー「アーミア…。」

アーミア「何？」

レイダー「……何でもね…。」

アーミア「気を付けて……。ミーファを……頼みます。」

レイダー「それじゃあな…。」

アーミア「ミーファ……ごめんね…。アオス……ごめんなさい…。」

兵士2「最後はお前だ！」

兵士1「待て！そいつは例の場所に連れて行く。」

アーミア「…アオス…。」

兵士1「連れて参りました！」

エーテル王「うむ。」

アーミア「ここは…？」

エーテル王「どうか？ここは『ハクウェル研究所』。さあ、調べさせてもらっぞ！『特別種』よ！」

アーミア「嫌ああー……っ！」

（数日後）

エーテル王「あれが『特別種』だ。ラフォール王よ。」

ラフォール王「な…なんという…！」

エーテル王「奴は素晴らしいぞ！『伝心の光』とやらは、ほぼ解析できた！奴の光は他の者と違い、あの『オルフェリア』に近い光を持っている、強力だ！ふふふ……もっともつと調べてやる。隅々まで、ボロボロになるまでな！」

ラフォール王「……その役目……私に渡して頂けないかな？」

エーテル王「さすがに興味がありかな？よいですが……研究報告はしてもらいますぞ。なあと、我々は王だ。全てを知る義務がある。ラフォール王よ……これからよろしく頼みますな……」

ラフォール王「……では……あの者は任せてくれ。」

エーテル王「では、私は次の『特別』でも探しますかな？ふふふ……楽しみですね……。それではラフォール王よ……また……」

ラフォール王「ああ……」

アーミア「……あ……う……」

ラフォール王「く……ひ……酷い……」

アーミア「……あ……あなた……は……？」

ラフォール王「私はラフォール王だ。アーミア……と言ったね……」

アーミア「もう……嫌……」

ラフォール王「大丈夫だ……もう辛い思いはしなくてもよい。」

アーミア「え…？」

ラフォール王「これから君の担当になったのだよ。エーテル王は酷い…酷過ぎる…。君を自由にすることはできないが…私が側にいる限り、生体実験なんてさせない。」

アーミア「それでは…あなたが…。」

ラフォール王「なあと、研究データなんて、どうとでもなる。エーテル王のしていることは、生きている者がすることではない。大丈夫だ…ワシに任せておきなさい。」

アーミア「…ありがとうございます…。」

ラフォール王「礼などよい。ワシにも娘がいるのだよ…見て見ぬふりなどできない。それに…生きている限り…幸せになる権利は誰もが持っている。」

アーミア「…本当に…ありがとうございます…。」

ラフォール王「だから礼はよい…。」

（アオスは）

アオス「くそっ！暴走した力が、こんなに強いなんて！」

デイク「さすがはお前を生み出した親だけはあるな！」

アオス「そつちはどうなんだい？『オルフェリア』も危険なんじゃないのかい？」

デイク「確かに、残ってた理性が、無くなりつつあるみたいだ！『オルフェリア』は任せてくれ！」

アオス「…ねえデイク！」

デイク「何だ？」

アオス「いつそのこと、一つになればどうだろう？元は一つだったんだから、そうすれば！」

デイク「駄目だ！いくら生み出した親だとしても、今の『ドリユーマ』と一つになるのは危険過ぎる！膨大な力の塊なんだぞ！お前の意識は全て、力に負け、アオスという意味は消えてしまうぞ！」

アオス「じゃあどうすればいいんだい？」

デイク「できる限り奴の力を分散させるんだ！そうすれば、再び理性に戻るかもしれない！」

アオス「そうか…今の奴は、力が理性を抑えつけてる！力を分散させれば、理性が力に勝って、おとなしくなるかも！」

デイク「そういうことだ！」

アオス「よし！行くぞ！」

デイク「馬鹿っ！近づき過ぎだ！」

ドリユーマ「ぐがあああーっ！っ！」

アオス「しまったっ！」

ディーク「いけないっ！『エーテル城』に！」

アオス「くそっ！はあっ！」

ディーク「よし！何とか少しずらせたか！」

（エーテル王は）

エーテル王「うおおおっ！……くそっ！空のバケモノが！もう我慢
できん！我が平和を脅かす者め！倒せないまでも……ふふ……覚え
ておれ……。『ハクウエル研究所』に向かうぞ！」

（『ハクウエル研究所』に到着）

ラフォール王「今……何と言った……？」

エーテル王「ですから、封印するのですよ。『神器』ならもう揃っ
ておる。海の者は、平和を維持するためだと言つと心良く、この『
クリアソウル』を預けてくれたのだな。」

ラフォール王「違う！その前に言ったことだ！」

エーテル王「ですから、その『光の民』を使うのですよ。そやつの光があれば、あの黒い獣を封じることが可能なだよ。」

ラフォール王「そんなことをすれば命に関わる！」

エーテル王「今更何を言つとるんだね。これで邪魔者は全ていなくなる。それに、そやつのデータは、もう十分に取れた。ふふ…願ったり叶ったりだわ！」

ラフォール王「エーテル王！」

エーテル王「気付かぬとでも思っておったか？」

ラフォール王「は？」

エーテル王「データを…改竄しておったであろう？」

ラフォール王「な…何を…！」

エーテル王「今更隠す必要は無いと思うがね。」

ラフォール王「…何故それを…？」

エーテル王「ハッキリ言っておこう。どんなことも保険をかけようとするのは、当たり前だと思うが？」

ラフォール王「まさか…スパイか…？」

エーテル王「ふふ…それにあなたに担当を譲った時、もうすでにデ

「タは完璧に取れていたのだよ。まあ、一応保険として、スパイを送りこんだがな。」

ラフォール王「くっ………だったらなおさらだ！この娘は渡さぬ！」

エーテル王「ほう……ただ一人の小娘のために、世界を放棄するのかな？それが王が取る平和かな？ラフォール王よ……。」

ラフォール王「しかし……。」

エーテル王「奴を封じるには、大量の『鍊』が必要だ。その娘がいればこと足りるのだがな……。仕方ない……再び民から『鍊』を搾るしがあるまい。さて……何百人犠牲になるかな？まあ、国のためだ……仕方な……。」

アーミア「……やります。」

ラフォール王「アーミア！」

エーテル王「ふ……。」

ラフォール王「何を言っておる！死んでしまふのだぞ！」

アーミア「死ぬのは怖いですが……。ですが今……私の愛する人は……命を懸けて戦っています。だから私も……。」

ラフォール王「命を懸けると、命を引き換えにするのでは意味が違う！」

アーミア「私には……もう時間が無いようなんです。」

ラフォール王「何だと…！まさか…エーテル王！」

エーテル王「くく…様々な薬物実験も無論しましたからなあ。今頃
体中の細胞が死滅し始めているだろう。もうすぐ…死ぬ…くく…」

ラフォール王「キサマ！」

アーミア「いいんです、ラフォール王。…どうせ死ぬなら、この命
を無駄にたくありません。どうか……皆の平和のために…私の命
を役立てて下さい…。」

ラフォール王「お前はそれでいいのか？理不尽過ぎるではないか！」

アーミア「ありがとうございます。今まで…私を守って頂いて…
本当に感謝しています。」

ラフォール王「何故礼を言うんだ…。」

アーミア「この世界には、私の大切な人達があります。それを守って
死ねるんです。」

ラフォール王「だから何故お前がそんなことをしなければならない
っ！」

アーミア「しなければならぬ義務ではありません…私はしたい
んです。ラフォール王…あなたならきっと世界を導けます…あの
人と共に…。」

ラフォール王「ぐ…王とは…王とは何だ…！」

エーテル王「さて、茶番は終わりましたかな？では用意をしますな？」

ラフォール王「エーテル王っ！」

エーテル王「王に感情は邪魔ですぞ。ふふ……。」

アーミア「ありがとう……ラフォール王……。」

（アオスは）

アオス「ん？」

デイク「どうした？来るぞアオス！」

アオス「……アーミア……？」

デイク「アオス！どこに行くんだ！」

アオス「何か……何か……嫌な予感がする……アーミア！」

デイク「アイツ！一体どうしたっていうんだ！くそっ！我が『月の力よ！はあっ！よしっ！これで一時的だが動けまい！アオスを追うか！』」

アオス「はっ！アーミアの気配！……あっちか！」

ディーク「待てアオス！一体どうしたんだ！」

アオス「な！あれは…アーミア！何であんなところに！」

ディーク「アオス！どうした…あれはアーミア！それに、ラフォール王にエーテル王？何をするつもりだ？」

エーテル王「さて、始めてもらおう。」

アーミア「……ミーフア……レイダー……ディーク……アオス……ごめんなさい……。」

アオス「あれは！」

ディーク「まさか！アーミアを！」

アオス「させるかああ………つつ！アーミアアアア………ツツ！」

エーテル王「何だ…あれは！ええい、邪魔をさせるな！撃ち落とせ！」

兵士1「はっ！撃てっ！」

アオス「何！ぐっ！くそっ！アーミアッ！」

アーミア「ラフォール王……。」

ラフォール王「な、何だね？」

アーミア「ありがとうとあの人に…。」

ラフォール王「わ…分かった…。」

アーミア「アオス…世界をどうか…あなたの手で…アオス…
ありがとう…。」

次回に続く

第三十六劇『靈蛇』

ドリューマ「ぐぎゃああー………っっっ！」

エーテル王「あはははは！闇に帰れっ！偽りの神よ！あーっはっはっはー！」

ディーク「『ドリューマ』が…消えていく…！いや…『神器』に封印されているのか…。」

アオス「アーミア！ぐっ…！」

ディーク「大丈夫かアオス！」

アオス「ディーク！アーミアは！アーミアはどうした！」

ディーク「それは…。」

アオス「嘘…だ…！くっ！」

ディーク「アオス！」

エーテル王「さてと…ようやく静かになりましたなあ。」

ラフォール王「アーミア…。」

エーテル王「ほう…共に消えなかったのか…。まあよい…ラフォール王よ…。そやつの処分は任せたぞ。」

ラフォール王「エーテル王よ……お前という奴は……！」

エーテル王「ん？」

アオス「はあはあはあ……アーミア……アーミア！」

ラフォール王「お前は？もしかして、アーミアの言ってた……？」

アオス「アーミアに触るなあぁー……っっっ！」

ラフォール王「うわぁぁっっっ！」

アオス「アーミア！アーミア！アーミア！アーミア……？」

エーテル王「何度呼んでも意味は無いぞ。とっくに……廃人だわ！」

アオス「……らか……？」

エーテル王「は？何かな？」

アオス「キサマらかぁぁー……っっっ！」

デイク「いかん！くっ！」

アオス「はあはあはあ……はっ！デイク……邪魔するな！」

デイク「アオス……。」

アオス「許さない……こんなボロボロになって……許さない……絶対許さないからなあぁー……っっっ！」

ディーク「くっ！王よ！早く避難しろっ！死にたいのかっ！」

エーテル王「ひいっ！」

ラフォール王「だが…彼の怒りを受ける義務がある…。」

ディーク「それ以上喋るなっ！私をも怒らせたいかっ！さっさと行けっ！」

ラフォール王「あ…！」

兵士1「さあ、ラフォール王！」

ラフォール王「ぐ……す…すまぬ…。」

アオス「こんな…こんな醜い奴らだったのか……エルフは…！」

ディーク「いけないな……『ドリューマ』の意思が再び蘇るかもしれない！せつかく…アオスの意思が勝っていたものを！」

アオス「どけディーク！奴らを殺してやるっ！」

ディーク「それは駄目だっ！アーミアもそんなことは！」

アオス「どけえーーーーーっっっ！」

ディーク「ぐわあああっっっ！」

アオス「汚い…醜い…奴らを……殺すっ！」

ディーク「くそっ！アオス！」

アオス「こんな奴らの住む世界を…何故守るっ！」

ディーク「それじゃ、昔と同じだぞ！『破壊神』の時と！二人で約束しただろ！世界を平和に導くと！」

アオス「許せないんだ…。」

ディーク「アオス？」

アオス「アーミアを…僕の愛した人なのに…僕は…アーミアを…愛してたんだああー…っつつ！」

ディーク「私は…私はこの世界を守るっ！そこに生きている者達を守るっ！それが私の誇りだっ！」

アオス「邪魔…するのか？」

ディーク「殺させるわけにはいかない！誰も！」

アオス「ふふ…。」

ディーク「アオス？」

アオス「やっぱり僕達はこうなる運命なんだね…。ふふ…所詮相対する者から生まれた者同士…今までの…偽りの絆だったんだ…。」

デイク「アオス！」

アオス「もういい……僕は……独りだ……もう……分かった……僕は独りなんだ……」

デイク「アオス……？」

アオス「全てをゼロに戻してやるっ！僕はアオス……永遠の孤独者だっ！デイク！邪魔をするなら、殺すっ！皆殺しだっ！」

デイク「くそ……アオス！くっそおおー……っっ！」

（現代へ）

天満「アオスにも……自分の信念があっただな……」

アーミア「本当に悲しいことです。」

にゅう「可哀想にゅ。」

天満「アオスの怒りは分かるんだ……痛いくらいに……」

アーミア「天満さん……」

天満「でも……やっぱりアオスの選んだ道は間違ってる！」

にゅう「天満……にゅ……」

天満「アオスは……戻ることはできなかったのかな？」

アーミア「え？」

天満「独りは……悲しいよ……辛いよ……。アオスが手放したものは、本当にアオスが、切ないほど望んだ世界だったんじゃないのかな……？」

？「ふ……さすがディークの後継者だ。綺麗事もそっくりだ……。」

天満「なっ！」

アーミア「『アオス』！」

？「違うよ……今の僕は……『ネオス』だ……。」

天満「生きてたのか……？」

ネオス「ふふ……危うく様子見で死ぬところだったよ……。」

天満「様子見？」

ネオス「ふふ……来た……。」

天満「こ……この凄まじい『鍊』は！うわぁっ！何だ？この地響きはっ！」

ネオス「さあ、来い！我を生み出せし者よ！」

天満「な……あ……あれが……『ドリューマ』！」

にゆう「怖いにゆう！怖いにゆう！危険だにゆう！」

ネオス「僕の本当の力……見せてやるっ！」

天満「みんな……ごめん……！奴を止められなかった！」

（天満と別れた後のシャウト達は）

シャウト「来るぞっ！」

マリユクオス「『^{メイドウ}冥導の牙崩^{ガボウ}』……。」

皆「うわあああっっ！」

琴花「ぐ……ちよっと……どうなってんの？攻撃しても効いてないじゃない！」

シャウト「コイツはな、ネオスが生み出した邪霊なんだ！しかも、ただの邪霊じゃなく、コイツは複数の邪霊の集合体なんだ！」

アイズ「つまりは強敵なんだろう？」

シャウト「まあな……。」

サイガ「せやけど攻撃かましても、すぐに再生しよる！どないしたらええねん！」

剣斗「ジマス！何か手は無いのか？」

ジマス「んなもん知らねえよ！」

剣斗「お前戦ったことあるんだろ！」

ジマス「うるせえな！少しはテメエも考えやがれっ！」

シャウト「よさないか二人とも！言い合っている暇があったら、攻撃しろ！」

剣斗「分かってるよ！」

ジマス「ちい！」

アイズ「ん……待てよ……。」

サイガ「どないしたんや、アイズ！」

アイズ「シャウト！コイツは複数の邪霊の集合体だって言ったな？」

シャウト「そうだが……それがどうかしたのか？」

アイズ「……。」

サイガ「アイズ？」

アイズ「皆、話がある。」

剣斗「何だよこんな時に！」

アイズ「いいから聞け！」

剣斗「わ、分かったよ！」

アイズ「……………分かったか？」

シャウト「…なるほど…。」

ジラス「へっ、やるじゃねえか！」

琴花「剣斗…アンタ分かった？」

剣斗「はは…全然…。」

ミラア「アタシもさっぱり…。」

ユズキ「とにかくやりましょう！」

サイガ「さすがアイズや……………さすがやで。」

アイズ「サイガ……………よしっ！頼む！」

皆「おうっ！」

マリユクオス「『冥導の波閃^{ハセン}』…。」

アイズ「皆、散れっ！」

剣斗「何だかよく分からねえけど、俺はここだなっ！」

アイズ「よし…皆配置に着いたな…。皆、頼むっ！出来るだけ大きい傷をつけてくれっ！」

シャウト「よしっ！まずは動きを止めるっ！『秋鏡の繭』っ！」

マリユクオス「ぐぎゃあっ！」

剣斗「よっしゃっ！『超霊化』！行くぜえ！『九龍の白雷』っつ！」

琴花「行くよっ！少し威力は落ちるけど、詠唱省略！『ゴッドサイクロン』ッッ！」

ミリア「同じく詠唱省略！やっちゃうよっ！『クルスノヴァ』ッッ！」

ユズキ「あなたを倒して、必ず『悪魔』を引き出しますっ！超霊…！」

シズマ「待てユズキィ！」

ユズキ「え？」

シズマ「『超霊化』はとっときなっ！あのゼロによっ！」

ユズキ「…分かりました。では、『モクシサンリユウ木刺散流』っつ！」

サイガ「アイズの策、無駄にせえへんで！ワイの体、もっとつてくれや！『闇瞬』っつ！」

ジラス「ドタマかち割ってやらあつ！『破神地邪裂』^{ハシンチジャレット} つつ！」

マリユクオス「グギアアアー——つつつ！」

アイズ「さあ、見せてみる！」

マリユクオス「グ……ギ……ガ……ギガギ……！」

アイズ「……見えたっ！はあっ！そこだあつ！『光瞬』つつ！」

マリユクオス「ギグガギガギギ……ガギヤアアアー——つつつ！」

アイズ「はあはあはあ……や……やった……。」

剣斗「はあはあはあ……へへ……再生しやがらねえ……。」

琴花「はあはあはあ……もう……限……界……。」

ミリア「はあはあはあ……っ……強か……った……。」

ユズキ「ふう……。」

サイガ「はあはあはあ……し……しんど……。」

ジラス「はあはあはあ……俺は……まだ行けるぜ……。」

シャウト「皆、本当によくやった！アイズも……君のお陰だ。」

アイズ「……いや……皆の力があつたからだ。ありがとう……。」

剣斗と琴花「ええー！ーっ！あのアイズが素直にお礼言っただけだ！」

剣斗「や…やばい…大雪が降る…！」

琴花「そ…それとも…大嵐か…！」

アイズ「ふふ…僕を怒らせたな…。」

剣斗「へ！…い…嫌だなあ、アイズくん、冗談じゃないか！あは…ははは！」

アイズ「やはり…キサマは死ぬ！世のため人のため、死んでしまえっ！」

剣斗「うわあっ！何で俺だけなんだよ！お助けええー！ーっ！」

シャウト「おいおいよさないか…全く…。」

サイガ「ふふ…。」

ユズキ「嬉しそうですね。」

サイガ「え？ああ…アイズが君らと一緒にいる理由が分かったんや。」

ユズキ「はあ…。」

サイガ「見つけたんやなあ…自分の居場所を…。ふふ…アイツが羨ましいわ…こないだいい連中と旅してきたんやなあ。」

ユズキ「あなたですよ。」

サイガ「へ？」

ユズキ「あなたも、もう私達の仲間です。きっと皆もそう思ってるはずですよ。」

サイガ「…へへ……おおきに…。」

シャウト「ほらほら、まだ全てが終わったわけじゃないぞ！遊んでる場合じゃないんだからな！」

？「そのとおりですよ。」

剣斗「『ゼロ』！」

ゼロ「いやあ、皆さんの戦いぶり、感服致しました。とても素晴らしかったですよ！」

琴花「何をぬけぬけと！」

ゼロ「いやあ、でも実際お見事でした。皆で『マリクオス』の、尾や頭やらを分担して攻撃、そしてアイズくんが最も再生が早い所を見つける。そして、そこを攻撃。ふふ…どうやら気付いていらっしやったようですね。」

アイズ「ああ…邪霊の集合体…つまり複数の邪霊を繋ぎ合わせている『核』のようなモノがあると思っただ。そこで皆に奴の体を、隅々まで攻撃してもらい、再生の早い場所を特定したんだ。『核』

に近い所の方が再生力は強いはずだからな。」

ゼロ「ふふ…でも本当にお見事でした。皆さんの団結力と攻撃力、これらのレベルが高くないと不可能な作戦でした。いやあ、お見事お見事！」

シャウト「確か…次はお前が相手をするのだったな？」

ゼロ「はい…おや！でも皆さん…お疲れのようで…。」

ユズキ「はっ！」

ゼロ「な！くっ！おやおや、あなたは元気なんですね…。」

ユズキ「『氷の悪魔』！あなたの相手は私がします！」

ゼロ「おかしいですね…『超霊化』したはずなのに、あの動き…まさか！」

ユズキ「あなたを倒すために取っておいた力です。」

ゼロ「随分強気ですが、あなたは以前、僕に完敗しているんですよ？」

ユズキ「私はまだ生きてます！生きてる限り、あなたに勝ちはありません！」

ゼロ「あなたごとき…僕を倒すことなどできません。」

ユズキ「そのごときの力で…怯えさせてあげます！」

次回に続く

第三十七劇『瞬迅』

ゼロ「それでは、あなたの言う力…見せてもらいましょうか…。」

ユズキ「…。」

シズマ「ユズキ……やってやろうぜい！」

ゼロ「ふふ…『アイスニードル』！」

ユズキ「『モクソウヘキ木層壁』！」

ゼロ「ほう…ではこれではどうです？『アイシクルダスト』！」

剣斗「ユズキさん！」

ユズキ「くっ！」

ゼロ「よく避けられましたねえ。ほら、どんどん行きますよ！」

ユズキ「ぐっ！はあはあはあ……くっ！」

シャウト「おかしい……あまりにも強すぎる…？ユズキが手も足も出せないなんて…。あの『マリユクオス』よりも強いかもしれん！」

ミリア「そんなあ！それじゃ一人で勝てるわけないよ！」

アイズ「だが奴は人間よりのハーフなはずだ！『法術』を使えるエルフだから、強いのは当たり前じゃないのか！」

琴花「それにしても強すぎじゃなか！」

ジラス「…おいシャウト。何か変じゃねえか、アイツの『錬』…。」

シャウト「え？」

ジラス「気付かねえか？」

シャウト「…はっ！何だ…アイツの『錬』…！」

剣斗「どうしたんだ？」

ジラス「奴の『錬』を探ってみろ！」

剣斗「え？……はっ！『錬』なのか…これ？何か感じが…違うよう
な…。」

ジラス「ああ…こいつは『錬』じゃねえな。何だ…？」

シャウト「一体奴は何なんだ？」

ゼロ「ふふ…。」

ユズキ「はあはあはあ……『センモクレンカン尖木連巻』！」

ゼロ「『アイスウォール』…。」

ユズキ「く……そ……！」

ゼロ「もう止めませんか？」

ユズキ「な、何を！」

ゼロ「あなたでは、どうやっても僕には勝てませんよ。」

ユズキ「たとえそうでも、諦めるわけにはいきません！あなたを許すわけにはいかないっ！シズマ！」

シズマ「やるんだな…。よっしいっ！『超霊化』でいっ！」

ユズキ「『忍刀・梅琥珀』…行きますよ！」

ゼロ「やれやれ…言っただけですよ？どんな力も、出さなければ怖くないと…。」

シズマ「来るぜい、ユズキ！あの時、何をされたか分からない攻撃が！」

ゼロ「ふふ…。」

ユズキ「くっ！」

サイガ「ゼロは後ろだっ！」

ゼロ「な！」

ユズキ「くっ！」

ゼロ「避けられちゃいましたね…。忘れてましたよ…サイガさんが

いたんですね。」

サイガ「へ…。」

アイズ「奴が一瞬でユズキの後ろへ…！どういうことだサイガ？」

サイガ「奴はな…『氷の門』を開いたんや。」

アイズ「何だそれは？」

サイガ「ゼロはな、『氷』でマーキングしたところに、瞬間移動で
きるんや。確か『氷紋』と呼ばれる印をつけたところなら、どこでも
や。」

シャウト「そうか…だから『瞬迅のゼロ』か！」

ゼロ「いやはや、バレちゃいましたねえ。まあ、気付いたところで、
どうしようもないですけどね。」

ユズキ「く…！」

剣斗「……頼む。」

ミリア「任せて！」

ゼロ「ふふ…もうあちこちに『氷紋』をつけました。あなたに僕を
捕まえることはできません。」

ユズキ「そ、それでもっ！」

ゼロ「さあ、どこから攻撃が来ますかね？行きますよ！」

ユズキ「このっ！」

ゼロ「静かなる暗い蒼から…その果てなき世界に…あまたに降りそそぐ千刃となれ…。」

ユズキ「くそっ！どこから！」

ミリア「真っ直ぐだよ！正面から来るよ！」

ユズキ「え？」

ミリア「お願い！信じて！」

ユズキ「ミリアさん…。」

ミリア「お願い！」

ユズキ「分かりました！行きますよ！シズマ！」

シズマ「おうよお！」

ゼロ「ふ…残念でしたね。」

ユズキ「はああああっっ！」

ゼロ「ふふ…『サウザンドダイヤモンド』……………ん？何！移動できない…まさかっ！」

ミリア「えへへ！やっちゃえっ！」

ユズキ「ありがとうございます！後悔しなさい！『ゼツカイジュトウセン絶界樹刀穿』っ
つつー！」

ゼロ「く、間に合わない……う……うわああー……つつっ！」

ユズキ「はあはあはあ……。」

ミリア「やったねっ！」

シャウト「ミリア……お前一体……？」

ミリア「えへへ、実はね、ゼロの『氷紋』は私が消したんだよね！」

アイズ「なるほどな……『火』の力で、奴の『氷紋』を消したのか。」

ミリア「そうなのだあ！ゼロの『氷紋』は『氷』で出来ているからね。でもアタシだけじゃないよ！」

琴花「そういえば剣斗は？」

剣斗「ここだよ。」

琴花「アンタ、そんなとこで何してんの？」

ミリア「実はこの作戦は剣斗が考えたんだよ！」

ユズキ「剣斗さん……。」

剣斗「へへ…俺の『雷』の力を地面に流して、『氷紋』の位置を把握したんだ。もしかして俺の力なら『氷』に反応してくれると思うたからな。元は水だしな…。」

琴花「剣斗…アンタ…馬鹿なのによくそんな!」

アイズ「ふ…野生の勘だな。」

剣斗「ちえ、言いたいこと言ってくれちゃってな…。」

ユズキ「剣斗さん…ミリアさん…ありがとうございます…。」

剣斗「へへ…でも…もう動けねえ…。」

ミリア「はは…アタシも…空っぽだあ…。」

ジラス「少しはやるじゃねえか。」

シャウト「ああ…こんなに成長してくれているなんて…。」

サイガ「へ…。」

ユズキ「サイガさんも…ありがとうございます。」

サイガ「え?て…照れるやないか!礼なんてええって!」

琴花「ちよつと剣斗!アンタ大丈夫?」

剣斗「はは…でもこれで…。」

ゼロ「これで…何ですか？」

皆「！」

ユズキ「そんな！」

ミリア「効いてないの？」

ゼロ「いえいえ、さすがに僕も死にそうです。」

琴花「ちつとも死にそうじゃないけど…。」

ゼロ「いやいや、もう体中痛くて痛くて…いたた…。」

アイズ「嘘くさいぞ…。」

ユズキ「このっ！もう一度！」

ゼロ「参りました。」

皆「へ…？」

ミリア「い…今何て？」

ゼロ「ですから、負けました。もう完敗です。」

ユズキ「ふ、ふざけるなっ！そんなので許すと思っているのか！お前がしたことは！」

ゼロ「もしかして…『海の者』達にしたことですか？」

ユズキ「そうだっ！ほとんどの者が『氷漬け』にされて…。許すと思うのかっ！」

ゼロ「ああ！それなら、もう解けているはずですよ！」

ユズキ「え？」

ゼロ「いえ、ですから、僕の『氷』はもう住人達を解放しているはずです。」

ユズキ「そ、そんな話信じられるものかっ！」

ゼロ「本当ですよ。第一僕には、あなた方『海の者』に恨みはありませんし、殺しても何の得もないですし。」

ユズキ「じ、じゃあ何故『氷漬け』になんかに！」

ゼロ「まあ、下手に動かれるとやっかいましたからね。ただ動きを止めただけですよ。」

ユズキ「だったら、何故すぐに解放してくれなかったんですか！」

ゼロ「あなたを…この戦いに巻き込むためですよ。」

ユズキ「はい？」

ゼロ「あなたには力がありましたからね。」

ユズキ「どういうことですか？」

ゼロ「彼を…ネオス様を止めてほしいからです。だから…止める力として、必要だったんです。強い力を持っている者が一人でも多くね。」

ユズキ「だったらあなたが止めれば良かったんじゃないんですか？」

ゼロ「僕じゃ駄目なんですよ。ネオス様の血を引いている僕は…体が拒否してしまうんです。」

ユズキ「…。」

剣斗「ゼロ…お前…。」

琴花「むゝ納得し難いんだけど…。」

ミリア「何か複雑だね…。」

ゼロ「…というような話をすると信じて下さいますか？」

剣斗と琴花とミリア「は？」

アイズ「ふん…。」

サイガ「ああいう奴やからなあ…。」

シャウト「はあ…。」

ジラス「くだらねえな…。」

剣斗「ゼエエロオーーっ！」

琴花「ま、まままった嘘かぁいつ！」

ミリア「ちよつとコラアアーーっつっ！」

ゼロ「アハハ！」

ユズキ「…。」

ゼロ「アハハ！でも『海の者』は無事ですよ！それは約束しますよ！」

琴花「コラアアアーーっ！どこに行くんだ！この嘘つき野郎！」

ゼロ「ああ、そうそう。サイガさん！」

サイガ「…何や？」

ゼロ「あなたがネオス様と約束していた『例のモノ』……『ハクウエル研究所』にヒントがあります…行ってみたらいいですよ！」

サイガ「ホンマか！」

アイズ「サイガ？」

ゼロ「そろそろヤバイ雰囲気なんで、僕はこれで失礼します！では皆さん、ご機嫌よう…。」

ミリア「待てコラアアアーーっ！」

サイガ「『ハクウエル研究所』…か…。」

アイズ「…サイガ…。」

シャウト「ふう…ゼロの真意は分らないが、一応一段落だな。」

ジラス「でも野郎…妙なこと言ってやがったな。」

剣斗「ああ…何かヤバイ雰囲気はどうのって?」

ユズキ「…。」

ミリア「ユズキさん!」

ユズキ「ミリアさん…。」

ミリア「ゼロが言ってたことが本当かどうか分らない…でもさ! 信じるまではいかないけど、期待してみようよ!」

ユズキ「ミリアさん…!」

ミリア「ね!」

ユズキ「ありがとうございます。」

サイガ「…。」

アイズ「な、なあ…。」

サイガ「悪いアイズ……今は何も聞かんといてくれ。」

アイズ「え？」

サイガ「いつか話すから……絶対……。」

アイズ「……ああ。」

（地響きが起こる）

剣斗「な、何だ！」

シャウト「この感じ……まさかっ！」

ジラス「天満の野郎！失敗しやがったのかっ！」

シャウト「皆！急いで天満の所に向かうぞ！」

ミリア「どうしたの！」

シャウト「『ドリューマ』が……復活する！」

皆「……！」

剣斗「天満はどうしたんだ！」

シャウト「分からん！とにかく行くぞ！」

琴花「でも確か『壁』があるんじゃない！」

シャウト「おそらくもう無い！『ドリューマ』が復活するんだ…。
足止めのための『壁』は…もう無いだろう。」

琴花「そうか…。」

ジラス「さつさとあのバカのトコに行くぞ！」

剣斗「天満…無事でいろよ！」

（皆は天満の所へ）

ゼロ「おやおや…皆さんハリキってますねえ。ねえ『レイダー』？」

レイダー「本当にいいのか？」

ゼロ「そうですね…それが母ミーファの望み…ですからね。」

レイダー「ネオスを止めることがか？まあ、ミーファは『パパを助けてあげて』とは言ってたけどな。」

ゼロ「レイダー、あなたこそいいんですか？」

レイダー「俺はただ主人に従っただけだ。今の主人はお前だ。だって俺はお前のやることに、ついていくだけだ。」

ゼロ「苦勞しますよ？」

レイダー「もうしてるぜ。」

ゼロ「アハハ！レイダー……ありがとうございます……。」

レイダー「ふん……。」

ゼロ「彼らなら……ネオス様をきつと……。」

レイダー「本当に苦労するぜ……。」

ゼロ「それにあの『組織』も動き始めたみたいです。……期待しますよ……皆さん……。」

（天満は）

天満「くそっ！」

ネオス「さあ……我と共に歩め……『ドリューマ』よ！」

にゅう「ひ、一つになっていくにゅー！」

天満「ネオスの中に『ドリューマ』が入っていく！融合していく……！」

アーミア「アオス……あなたはもう……。」

ネオス「くく……。」

天満「ネオス！」

ネオス「くく……あーっはっはっは！素晴らしい力だっ！」

天満「二人とも、離れてて！」

にゅう「危険にゅー！」

ネオス「これで全てが終わる……。『デイナー』……お前もな……。」

天満「くそっ！」

アーミア「アオスの馬鹿……。」

ネオス「まずは……さっきのお返しだああーっつつっ！」

天満「くっ！」

次回に続く

第三十八劇『終戦』

天満「ぐわあああつつ！」

アーミア「天満さんっ！」

ネオス「あはははは！いいぞ！実に気分がいい！」

アーミア「もう止めて！アオス！」

ネオス「アーミア……危険だからこの中に……！」

アーミア「何？きゃあああつつ！」

にゆう「アーミアがネオスの『鍊』に囲まれたにゅー！」

天満「ぐ……何だって……！くそっ！真雪を放せっ！」

ネオス「かなり強引な手だが……仕方ない……僕の『鍊』で、完全にアーミアを覚醒させ、真雪という人格を破壊してやる！」

天満「くそおおーっつつっ！」

ネオス「『デビルズジャッジ』！」

天満「あ、剣がつ！ぐ……ぐううわあああつつっ！」

シンセーテン「天満！」

ネオス「あはははは！弱い弱い！」

天満「く…そ…。」

ネオス「トドメだああーっ！」

にゆう「にゅーっ！」

シンセーテン「天満あつ！」

天満「くそ……ここまでか……真雪……！」

ネオス「あはははは！終わったぞ！終わったぞおっ！あはははは！」

？「何を高笑いしてんだ？あ？ネオスよお！」

ネオス「何だと…！」

天満「『ジラス』……みんな…！」

ジラス「へっ！やっぱりまだまだな天満よお！そんなんじゃディークに笑われるぜ！」

シャウト「素直じゃないなジラス。天満のことが心配で、一番急いでたくせにな。」

ジラス「うるせえっ！そんなんじゃねえよ！今のコイツじゃ、あのネオスはキツイだろうが！」

シンセーテン「それが心配って言うんだよ…。」

ジラス「コイツは何もかも一人でしょうとしやがるから、俺がこつやって…！」

シンセーテン「はいはい、分かった分かった。君は他人のこと言えないでしょ…（ボソ）」

ジラス「デメエな！」

シャウト「よさないか二人とも！」

ミリア「そうそう、そんなことしてる場合じゃないじゃんか！大丈夫、天満？」

天満「ミリア…。」

ユズキ「あまり一人で無茶をなさらないで下さいね。」

琴花「でもまあ、ネオスを扇くんに押し付けたのは、私らだけどね…。」

天満「ユズキさん…琴花…。」

剣斗「おいおい、ボロボロじゃねえかよ！」

アイズ「全くだ！もしかして、お前はもう諦めるのか？」

天満「剣斗…アイズも…みんな…無事だったのか…。」

剣斗「またお前の悪いクセが出てるぞ！今は自分のことを考えるべ

きだろうか！」

アイズ「僕は自分を信じてる天満に、ネオスを任せたはずなんだがな！」

天満「あ……ごめん……。」

剣斗「他人を気にしすぎて、自分のことを無関心になる！本当に悪いクセだつつうの！」

天満「ごめん……。」

剣斗「なぐんてな！まあ、そこがお前のいいトコでもあんだけどな！」

天満「剣斗……。」

アイズ「だからといって、諦めるとは許せることじゃないぞ！」

天満「…アイズ。」

アイズ「僕はお前に託した。何故だと思う？」

天満「え？」

アイズ「信じたからだ。天満なら必ず、命を諦めずに、生きていてくれる。そう信じたから、僕はお前に託した……いや…僕だけじゃない、ここにいる奴ら、お前が今まで触れてきた者が、お前に託したんだ！天満になら、全てを託せるとな！」

天満「アイズ……みんな……」

シャウト「そのとおりだ！私は天満を信じているぞ。」

ミリア「アタシはずうーつと信じてるもんね！天満ならやれるって！」

ユズキ「ええ……ここにいないですが、ノアさんも、そして私も、もちろん信じています。」

ジラス「昔のように、何もできねえ、守れねえ馬鹿じゃ、もうねえだろうが！根性見せやがれ！」

琴花「中途半端は駄目だよ！真雪を助けんでしょ！」

剣斗「そうだぜ！真雪を助けられんのは、天満だけなんだからな！」

にゅう「そうにゅー！そうにゅー！天満だけにゅー！」

天満「……みんな……」

アイズ「……もう一度聞くぞ。」

天満「アイズ……」

アイズ「もう諦めるのか？」

天満「……ごめん……みんな……」

剣斗「天満……」

天満「馬鹿だよ俺……俺にはみんながいるのに……。」

シャウト「うむ。」

天満「俺は……諦めない！」

剣斗「天満！」

天満「俺は真雪を救う！もう諦めたりするもんか！真雪を救う！そのために、ここまで来たんだ！」

サイガ「これが『ディーノ』なんか……。」

ジラス「へっ！」

シンセーテン「『翡翠眼』になったね。」

ネオス「いつまでそうしているんだい？退屈だよ……『ディーノ』……。」

天満「みんなが俺を支えていてくれる……信じてくれる……。俺はもう……負けないっ！行くぞ、ネオス！」

ミリア「いつけーっ！」

ネオス「お前らは存在してはいけないんだっ！」

天満「誰もが必死で生きてる！明日があるから、そう信じて、必死になれるんだっ！」

ネオス「それを踏みにじったのは誰だっ！」

天満「……確かに……酷いことをする人達はあるよ！それは俺自身分かっている！」

ネオス「そうだっ！生きる価値など無いんだっ！」

天満「命はただそこにあるだけで、素晴らしいモノなんだ！」

ネオス「くっ！だが僕は奪われたんだぞ！」

天満「ぐわっ！……確かに……お前が奪われたモノは……もう取り戻せない。」

ネオス「取り戻せるさっ！この娘の体を使えばなっ！」

天満「いいや！取り戻させない！俺の大切な人は、奪わせないっ！」

ネオス「黙れっ！正しいのは僕だっ！」

天満「お前は間違ってるんだっ！」

ネオス「ぐ……『ドリューマ』よ！我に力を！」

天満「デイク！俺に力を貸してくれっ！アイツを、お前の親友を止めたいんだっ！」

ネオス「デイクは死んだ！僕に負けたんだっ！僕の正しさに負けたから死んだっ！」

天満「ディークは負けてない！お前が生きてることが、ディークの信念が勝っている証だっ！」

ネオス「くっ！何を！」

天満「ディークはお前を信じた！だから生きてるんじゃないのか！お前は！」

ネオス「だ、黙れっ！」

天満「ディークは……ディークは最後までお前を信じた！」

ネオス「ぐっ……！」

天満「もう分かってるだろ……親友のお前なら……。」

ネオス「う……うるさい……！」

天満「ディークはお前を殺しはしなかった。一度だけじゃなく、二度目の時も殺しはしなかった。」

ネオス「それは奴が弱かったからだ！」

天満「違っっ！」

ネオス「う……。」

天満「この『翡翠眼』が全てを覚えてくれたよ。ディークは……お前を殺せなかった……。殺したくなかった……。だから再び封印した。」

もう…お前と戦いたくないから、自分の命と引き換えにして…。お前がいつか…再び…エルフ達を信じられる日が来ることを願って…。」

ネオス「……。」

天満「はあ……でもディークも卑怯だよな…。自分は親友と戦いたくないから、俺を創って…他人任せにした…でも…それだけネオスが好きだったんだ。大切な友だったから…。」

ネオス「……もういい…。」

天満「…。」

ネオス「…アイツは馬鹿だよ…戦っている時も…涙なんか流して…。馬鹿みたいに…僕のことを信じて疑わなかった…。僕を殺せただったのに…。」

天満「そこまで分かってて、何故戦わなきゃならないんだ？」

ネオス「…もう…戻れないんだよ…。僕の心は憎悪でいっぱいだ。もう引き返せないんだよ。」

天満「何でだ！」

ネオス「僕はもう決めたんだっ！僕は僕の信じた道を進む！」

天満「く……そうか…。」

ネオス「僕は『破壊神』としてここに立つ。それを止めたいなら、

止めてみるっ！ディークの後継者『ディーノ』……いや…扇天満！」

天満「ディークの想いと一緒に……お前を止める！互いに譲れないモノがある！それを懸けて決着をつけるっ！」

ネオス「ああ…これで全てが…。僕は勝つ！アーミアと一緒に生きるんだっ！」

天満「真雪は渡さないっ！俺の全てで絶対勝つ！」

ネオス「……………」

天満「……………」

ミリア「何で二人とも動かないの？」

シャウト「お互いに次が最後だからだ。一撃に全てを込めてるんだ！」

ジラス「気付いてるかシャウト。」

シャウト「ああ…ネオスの奴…。」

ジラス「『ドリューマ』の意識に勝ってやがる！」

琴花「ちよつとちよつと！それって！」

ジラス「今の奴は強えぜ。手がつけられないくらいにな。」

ユズキ「勝てるのでしょうか？」

剣斗「勝つ！天満は負けないって！なあ、アイズ。」

アイズ「僕は天満に任せたんだ。勝たなきゃ許さない。」

サイガ「せやな…お前が信じてる男なんや…ワイも信じるで。」

にゅう「頑張れにゅ〜！応援するにゅ〜！」

ネオス「……………」

天満「……………」

ネオス「…最後だっ！」

天満「最後だっ！」

ネオス「『ファイナリティ・カオスエンド』 ツツツ！」

天満「行くぞシンセーテン！ふんばってくれっ！」

シンセーテン「全部ぶつけるよっ！」

天満「ネオスッ！これで…終わりだっ！ディーク…『ゲッテンオウブ月天^{ゲッテン}皇舞』
っ
っっ！」

ネオス「なっ！それはディークの技っ！くっ！」

二人「うおおおー……………っっっ！」

ネオス「僕は…僕はああーっっっ！」

天満「人は変わる！人が変われば、世界だって変わるんだああーっっっっ！」

皆「いけえええーっっっっ！」

天満「うおおおーっっっっ！」

ネオス「…ふ…。」

天満「はあはあはあ…う…。」

剣斗「天満！大丈夫か！天満！」

天満「…真…雪…は…？」

ネオス「…こ…ここだよ…。」

アイズ「ネオスッ！」

天満「真雪…ぐ…真雪…。」

真雪「う…。」

天満「真雪！」

真雪「て…天…く…ん…。」

天満「ま…真雪…良かった！」

真雪「ありがとう……天くん……会いたかった……」

天満「真雪！」

ネオス「アーミア……君は……」

シャウト「ネオス……お前……」

ネオス「負けたよ……僕が守れなかったモノを……君は守った……完全に……僕の負けだ……」

天満「ネオス……ネオス！体が！」

ネオス「これが……『ドリューマ』を取り込んだ報いなんだよ……力を完全に制御できなかった……もうすぐ……自然に還るんだ……」

シャウト「ネオス……ディークは……」

ネオス「分かってる……分かってるよ……ディーク……それでも僕は……この道を選んでしまったから……」

天満「……ネオス……」

ネオス「天満……強かったよ……」

天満「ネオスもね……」

真雪「あ、あの……」

ネオス「ん？」

真雪「アーミアさんが……ごめんねアオス……だそうです。」

ネオス「そうか……ありがとう。はあ……これで僕は完全に一人だな……。」

？「そんなことは無いぞアオス。」

？「そうよアオス。」

？「パパには私達がいるでしょ！」

ネオス「『ディーク』！『アーミア』！『ミーフア』！」

ディーク「世話がやけるな、全く……。」

アーミア「そうね……。」

ミーフア「本当だよ！」

ネオス「そうか……迎えに来てくれたんだね……ありがとう……。」

天満「ネオス……。」

ネオス「死は……優しいな……こんなに優しくかったんだね……。」

ディーク「では行こうか。」

アーミア「行きましょう。」

ミーファ「行こうよ！」

ネオス「ああ…行こう…案内してくれ…僕は…もう一人じゃ…無いんだね…嬉しいなあ…」

天満「ネオス…さよなら。」

(ゼロは)

ゼロ「また…いつかお会いしましょう。…ご機嫌よう…ネオス様…。」

次回に続く

第三十九劇『祝宴』

真雪「みんな…。」

シャウト「無事のようだな。」

ジラス「みたいだな。」

ミリア「でもホント良かったよ！」

真雪「ありがとう、シャウトさんに、ミリアちゃんに、地門くん。」

ジラス「違いよ、今の俺はジラスだ。天満の中にいた時の地門はもういねえよ。だからジラスだ。」

真雪「…うん。」

琴花「真雪…。」

真雪「琴花…：琴花あ！」

琴花「怖かったよね！待たせてごめんね！真雪い！」

真雪「ううん！信じてたもん！絶対皆が助けてくれるって！怖かったけど…信じてたから！」

剣斗「真雪。」

真雪「剣ちゃん…。」

剣斗「ほらほら、お前の旦那が待ってるぜ！」

琴花「そつだよ真雪！扇くん、本当に頑張ったんだから！」

真雪「剣ちゃん…琴花………天くん……。」

天満「…真雪……。」

真雪「あ…あの……。」

天満「…おかえり、真雪。」

真雪「…た…だい…ま………天くん。」

天満「真雪！」

琴花「うわちゃあ……。」

剣斗「おうおう、熱い熱い！」

ミリア「はは……。」

シャウト「ミリア？」

ミリア「あの二人には割って入る隙なんて無かったんだね……。強い絆で繋がってんだもん……。はは…敵わないや……。」

シャウト「ミリア………本当に大きくなったものだな。体も…心もな。」

天満「真雪…俺…。」

真雪「え…!」

琴花「お!もしかして告白か!」

剣斗「マジで!」

真雪の心「え…ちょっと天くん…こんなところで…皆が見て…」

天満「俺…いっぱい話したいことがあるんだ!」

真雪「え…?」

剣斗と琴花「はい?」

天満「仲間もいっぱいできたんだよ!」

真雪「え、あ、うん…良かったね!…天くんの馬鹿…」

天満「ん?何か言った?」

真雪「別に!」

琴花「はあ…扇くんで…天然…」

剣斗「アハハ!まあ、あれが天満だけだな!」

サイガ「へえ、あれが天満の姫さんなんか?」

アイズ「そのようだな。」

サイガ「何やアイズ、知らなかったんか？」

アイズ「一回しか見たことが無かったからな。」

シャウト「本当に終わったのだな…。」

ジラス「これで安心して眠れるだろうよ、デイクもな。」

シンセーテン「本当に長かったね…。」

ジラス「へっ、俺達ができなかったことを、あんなガキがやるとはな。」

シャウト「今回のことで、再認識させられたよ。」

シンセーテン「何を？」

シャウト「一人じゃ、無理だったことさ。」

シンセーテン「そうだね…その通りだよ。」

ジラス「俺は一人でも全然大丈夫だけどな。」

シンセーテン「はいはい、ジラスは強い強い。」

ジラス「デメエ！」

シャウト「はあ…変わらないな…本当に…。」

ミリア「アハハ！」

天満「それじゃ『マドラド』に戻ろう！」

にゆう「戻るにゅー！戻るにゅー！」

（舟に戻る）

天満「あ、『ノア』！無事だったんだ！良かった！『ウエルカ』も…良かった。」

ウエルカ「ほっほっほ。お主らも無事で何よりじゃ。」

ノア「本当に良かったです。」

アイズ「ケガしているのか？」

？「それは私のせいなんです。」

ノア「違うよ『イリス』姉さん！」

天満「姉さん！姉さんだったのか？」

ノア「そうです。僕の大切な家族です。」

イリス「ノア…。」

ウェルカ「いやでも、本当に無事で良かったわい。天満……終わったのじゃな？」

天満「うん……終わったよ。」

シャウト「よしっ！『マドラド』に向かうか！」

ユズキ「あの……もしよろしかったら『メイルーン』に私を降ろして頂けませんか？」

シャウト「あ、そうだな。他はどうする？」

ノア「僕達も『バルガレア宮殿』までお願いします。」

シャウト「分かった。ではまず『メイルーン』に行くぞ！」

（『メイルーン』に到着）

ユズキ「長っ！」

海の国の長「ユズキ！」

ユズキ「皆さんの具合は！」

海の国の長「よくやってくれたなユズキよ！皆が氷から解放されたぞ！」

ユズキ「…そ…そうですか…良かった…ゼロは嘘をついていなかった…。」

ミリア「どうやら、ゼロの言ったとおりだったみたいだね。」

剣斗「みたいだな。」

ユズキ「長、天満さん達です。」

天満「天満です。」

海の国の長「ほう…いい目してるのう。なるほどの…。」

天満「あの…これを…。」

海の国の長「『クリアソウル』！そうか…『ドリーユーマ』を止めてくれたんですね。」

天満「これは、長さんが預かっておいて下さい。」

海の国の長「わかりました。天満殿、剣斗殿、ありがとうございます。すな。」

天満「いえ、じゃユズキさん。」

ユズキ「はい、ありがとうございました。今日は皆の側にいたいんで、明日『マドラド』に行きます。」

天満「うん。」

剣斗「じゃ待ってるよ!」

ユズキ「はい!」

(『バルガレア宮殿』へ)

ノア「ただいま…『サンゼバル』様。」

サンゼバル「待っておったぞ。ノア…イリス…。」

イリス「私は…。」

サンゼバル「これから汗水垂らして働いてもらつぞ!宮殿を立て直すのを。覚悟するんじゃぞ!」

イリス「…ありがとう…義父さん…。」

ノア「あは!」

ウェルカ「ワシを忘れとりやせんか?」

サンゼバル「忘れとつたわい。」

ウェルカ「ふん…。」

ノア「ウェルカがすねてる……似合いませんね…。」

サンゼバル「全くじゃ!」

イリス「ふふ…。」

ノア「天満…僕も明日『マドラド』に行きます。」

天満「待ってるよ！」

（『マドラド』に到着）

天満「『ソリッド』さん！」

ソリッド「待ってたぞ天満！とうとうやってくれたな！」

剣斗「しんどかったけどな！」

ミリア「何かここも久しぶりだなあ…。」

？「おかえり…ミリア。」

ミリア「あ…ラ…ララァーっ！」

ララァ「ふふ、たくましくなったじゃない！ミリア……おかえり…
…シャウト…。」

シャウト「終わったよ。君にも色々話すことがあるよ。」

ララァ「時間はたっぷりあるわ。」

シャウト「そうだな…。」

ソリッド「でも本当に君達が無事で良かった!」

天満「ありがとうございます。」

ソリッド「……変わったな…天満…。」

天満「え?」

ソリッド「天満だけじゃない。剣斗も琴花も……皆…でかくなったな…。真雪も無事で良かった。」

真雪「はい!」

ララア「天満さん…。」

天満「ララアさん!あなたに教えてもらったこと、本当に僕を助けてくれました!ありがとうございます!」

ララア「私は何もしていません。ただ戦い方を教えて差し上げただけです。」

天満「そんなことないです!僕は本当に感謝しています!」

ララア「ふふ、ミリア…貴方もよく頑張ったね。」

ミリア「ララア…えへへ!」

ソリッド「さあ、今日は宴だ!思う存分楽しんでくれっ!」

（宴の最中）

ラリア「そう…司郎さんが…」

シャウト「ああ…相変わらずの馬鹿だったよ。」

ラリア「ミリア…今まで言えなくてごめんね。」

ミリア「ううん…アタシの事を思ってたことだもん。」

ラリア「ミリア…。」

ミリア「アタシ、天満達と旅ができて本当に良かった！前よりずっと強くなった気がするもん！」

シャウト「ふふ…。」

ラリア「おかえり…ミリア…。」

ミリア「ただいま…お母さん！」

（アイズは）

アイズ「これからどうするんだ？」

サイガ「ワイにはやらなあかんことがある。」

「
アイズ「ゼロが言ってたことだろ？確か…『ハクウエル研究所』…。」

サイガ「…。」

アイズ「話してくれ…サイガ。」

サイガ「…お前のためや…。」

アイズ「え？」

サイガ「それは…。」

（ジアスは）

ジアス「ふう…。」

シンセーテン「何しんみりしてるの？似合わないよ？」

ジアス「うるせえ！」

シンセーテン「月か…綺麗だね。ディークのことを考えてるんでしょ？」

ジアス「アイツは…幸せだったかな？」

シンセーテン「幸せだった。」

ジラス「なんでだ？」

シンセーテン「僕達が生きてるからだよ。ディークの幸せは、僕達が幸せに生きることだもの。」

ジラス「そう…だったな…。」

シンセーテン「だからきつと笑ってるよ！」

ジラス「イヤミな笑いでな！」

シンセーテン「アハハ！月に…ディークに乾杯だよ！」

ジラス「ああ…。」

（剣斗は）

剣斗「やっと終わったって感じたな。」

琴花「お互い生きてて良かったね。」

剣斗「全くだ！………琴花。」

琴花「何よ。」

剣斗「生きていてありがとうな。」

琴花「剣斗……私こそ。」

剣斗「お前がいてくれたから頑張れた。サンキュ！」

琴花「私だつて…。」

剣斗「お前のツツコミあつての俺だからな！」

琴花「何それ！それだけの存在かい！」

剣斗「アハハ！冗談だつて……ありがとうな。」

琴花「こちらこそ…。」

（天満は）

天満「というわけだよ。」

真雪「本当に色々あったのね。」

天満「…真雪…ごめんな。」

真雪「え？」

天満「俺が連れてきたせいで、真雪にこんな…。」

真雪「でも…助けてくれたでしょ？」

天満「真雪…。」

真雪「ずっと信じて待ってたもの。天くんが助けに来てくれるって。」

天満「真雪！」

真雪「え！て、天くん！」

天満「本当に無事で良かった！大好きだよ…真雪…。」

真雪「私も…好き…天くんが大好き！」

天満「真雪…。」

真雪「天くん…。」

にゅう「何してるにゅ？」

天満「のわあっ！にゅ、にゅう！」

にゅう「何してたにゅ？にゅゝにゅゝ、何してたにゅゝ？」

天満「な、何もしてないよ！な、なあ真雪！」

真雪「かわいい…。」

天満「へ？」

真雪「にゆう…だっけ？私真雪、よろしくね！」

にゆう「真雪…天満の恋人にゆ〜？」

真雪「へ？」

天満「な、何を！違うって！」

剣斗「そう違う！恋人なんて小さなものではないのだ、この二人はもう夫婦なのだ！」

にゆう「にゆうっ！凄いにゆうっ！」

真雪「ちよつと剣ちゃん！」

天満「おい剣斗……覗いてたな？」

剣斗「覗くなんて……ただ俺は温かく見守ってただけさ！」

天満「そ、それを覗きというんだよ！あ、こら、逃げるな！」

琴花「あゝあ、いいトコだったのになあ。」

真雪「琴花まで！もうっ！馬鹿ああーっ！っ！」

（翌日）

天満「もうすぐノア達が来るかな？」

ノア「天満！」

天満「ノア！あれ？イリスさんは？」

ノア「姉さんは宮殿だよ。」

天満「そうか。」

剣斗「ユズキさんも来たぜ！」

ユズキ「皆さん！」

シャウト「これで全員揃ったな。」

？「そうですねえ。揃いましたね。」

天満「『ゼロ』！」

ゼロ「お久しぶりです皆さん。」

剣斗「何しに来やった！」

ゼロ「いえ、ただ挨拶をしておこうかなと。戻られるんでしょ？人間界に。」

天満「ああ…。」

ゼロ「ネオス様を救って頂きありがとうございました。」

天満「…アンタは帰らないのか？」

ゼロ「僕にはこの世界の方が合ってますからね。」

天満「そうか…。」

ゼロ「ふふ…では皆さん…ご機嫌よう…。あ、でももしかしたら、また近いうちに会えるかも！」

ミリア「行っちゃった…。」

剣斗「アイツだけはホント分からね。」

天満「じゃあミリア、『あそこ』に案内してくれるかい？」

ミリア「うん！」

次回に続く

終劇『明日』

ミリア「ここだよ！ここが『アステカの丘』だよ！みんなで来たかったんだよ！ね、ララア！」

ララア「ええ。」

琴花「うう～～～ん、いい天気～～！」

ユズキ「本当に、気持ちがいいですね。」

にゆう「にゅ～～～～！」

真雪「風も気持ちいい……。」

アイズ「……。」

サイガ「アイズ……。」

天満「アイズ……どうかしたのか？」

アイズ「いや……。」

天満「そうか……。」

剣斗「ところでミリア、何でここに来たかったんだ？」

ミリア「もう少しで分かるよ……！」

サイガ「アイズ…。」

アイズ「大丈夫だ…。」

ノア「気持ちいいですねえ、ウエルカ。」

ウエルカ「眺めも最高じゃなあ！」

シャウト「そろそろだな。」

ララア「はい。」

ミラア「みんなあ！上見て！」

天満「上？うわあ…！」

剣斗「へえ、虹が架ってんじゃん！」

琴花「ホントだ！ひゃ〜サイコ〜！」

ミラア「えへへ！三、二、一、それえっ！」

天満「な！虹が別れていく！」

真雪「どうして！」

ユズキ「これは…『虹色蝶』じゃないですか？」

ミラア「アッタリイ！」

ラアラ「『虹色蝶』は体の色を自由に変化させることができるんです。そして、あぁやって虹の形に群れをなしているんです。三分程で、また別れて、別の虹の形になるんです。」

真雪「なんて綺麗なの…。」

ユズキ「素晴らしいですね。」

琴花「うつとりするじゃない!」

ノア「凄い数の蝶達ですね。」

ウエルカ「数億匹と言われとるからなあ。」

剣斗「スゲエな!数億匹かあ…。」

にゆう「心地いいにゅ〜!」

ラアラ「『虹色蝶』から発せられる、微量な匂いは、疲れを癒してくれる効果があるんです。」

ジラス「デークも好きだったよな…。」

シンセーテン「うん…そうだね。確か『虹色蝶』は『幸せの蝶』とも呼ばれているんだよね。」

ラアラ「はい、『虹色蝶』は願いを運ぶ蝶だと言われています。皆の願いを届け、幸せを呼ぶことから、そう言われていますね。」

アイズ「願い…か…。」

サイガ「お前は…ワイが守る…必ずや。」

アイズ「サイガ……僕も諦めないさ。天満が…見せてくれたから。諦めなければ、運命を変えられると。だから戦うさ。恐れずに…。」

サイガ「せや、ワイも諦めへん。よっしゃ！こんだけぎょーさんおんねや！ワイの願いも運んだってや！」

剣斗「俺だつて！」

ミリア「みんなあ！願っちゃおう！」

ララア「ふふ。」

シャウト「アハハ！」

天満「……この『オルテナ』は素晴らしい世界だよ！本当に来て良かった！ミリア、ありがとうね。」

ミリア「うん！」

にゅう「にゅー！にゅー！にゅ、にゅ、にゅ、にゅー！」

ララア「この世界はまだまだこれからですね。」

ノア「そのとおりですね。」

剣斗「俺達も負けてられないよな、天満！」

天満「いやいや、人間だって成長できるよ！」

琴花「そうだよね！負けられるかつ！あは！」

真雪「私もそう思う！人間もエルフもきつと変わるよ！」

シンセーテン「あ、蝶達が飛んで行くよ！」

ジラス「願いをどこに運ぶのやら。」

シャウト「きつと皆の願いを世界に運んでくれるさ。必要としてくれる者達へな。」

天満「凄く気持ち良かったよ！ミリア、本当にありがとう。」

ミリア「イエーイ！」

シャウト「それでは戻るか。」

（『マドラド』に戻る）

シャウト「では道を開くぞ！」

天満「頼むよ。」

ミリア「天満…。」

天満「また来るよ…必ずね。」

ミリア「絶対だからね！絶対だよ！」

天満「うん。」

ミリア「真雪……天満と仲良くしなきゃダメだよ！」

真雪「うん、ありがとうミリアちゃん。」

ソリッド「君達には感謝してもしきれないな！」

天満「ソリッドさん……。」

ソリッド「君達は『オルテナ』の英雄だ！いつでも遊びに来てく
れよ！」

天満「はい！」

剣斗「もちろんだぜ！」

ラリア「どうか体に気を付けて。」

天満「はい。ラリアさんもお元気で。」

真雪「ありがとうございました。」

ユズキ「剣斗さんも無茶は駄目ですよ！それと琴花さんを悲しませ
たら駄目ですよ！」

剣斗「たはは……ユズキさん……。」

琴花「強い味方誕生だ！はは…ユズキさん…またね…」

ユズキ「…はい…」

ノア「天満…必ず…また来て下さいね。」

ウエルカ「待っておるぞ！」

天満「ノアも…『禁忌』を救う何かが見つかることを祈ってるよ！
ノアなら、必ず見つけることができる！俺はそう信じてるよ！」

ノア「ありがとうございます。」

天満「ウエルカも元気で。」

ウエルカ「お主ものお。」

天満「…ん？ジラス…。」

ジラス「まあ、楽しくやれ…。」

シンセーテン「ふふ、寂しくせに。」

ジラス「んなわけねえだろっ！俺は何年も一緒だったんだぞ！もう
うんざりなんだよ！」

シンセーテン「本当にジラスは素直じゃないなあ。天満…アイツは
ああ言ってるけど…。」

天満「分かってるよ。ジラス…本当に今までありがとう。本当に感謝してるよ。もう君が俺の中にいないっていうのは、変な感じだけだね。」

ジラス「ふん…。」

天満「シンセーテン…最後まで一緒に戦ってくれてありがとう。君にも感謝してる。」

シンセーテン「う…ディークならこう言っかな…気にするな…へへ…またね天満！」

アイズ「天満…。」

天満「アイズ…君には色々教えられたね。どっちが年上なんだか分からないよな！」

アイズ「…また会おう。約束だ。」

サイガ「…アイズ。」

天満「ああ、約束だ。サイガも、今度来た時ツツコミとか教えてくれ！」

サイガ「任しときい任ときしい！キッチリ叩っこんでやるわ！そんなわり約束や。次は一緒に旅しような！」

天満「うん。」

にゅう「にゅ…。」

天満「にゆう…君にも助けられたよ。ありがとう。」

にゆう「嫌にゅ〜！嫌にゅ〜！天満〜！真雪〜！琴花〜！にゅ〜」

剣斗「俺は…？」

琴花「アハハ！忘れられてやんの！」

真雪「にゆう…これで最後じゃないよ。必ずまた会えるからね。」

天満「にゆう…だからさよならは言わないよ！絶対また来るしね。」

にゆう「すぐ来てにゅ〜！絶対にゅ〜！」

天満「大好きなにゆうに必ず会いに来るよ！」

にゆう「天満ああーっ！にゅ〜〜〜〜！」

シャウト「よし、では行こうか。」

天満「ああ。じゃあみんな！行つて来るっ！」

ミリア「絶対だよ！天満あ！」

ソリッド「待ってるぞ！」

ララア「お元気で。」

ユズキ「気を付けて下さいね！」

ノア「必ずまた来て下さいよ！」

ウェルカ「きつとじゃぞ！」

ジラス「ふん…。」

シンセーテン「はは…天満あ！またね！」

アイズ「約束だからな！」

サイガ「せやで！笑いを極めよなあ！」

にゆう「またにゅー！またにゅー！天満ー！真雪ー！琴花ー！にゅー
~~~~~！」

剣斗「いや、だから俺はあああ—————……………」

ミリア「バイバイ…みんな…。」

（空に謎の人物）

？「行つたみたいですね。」

？「『ユナイマ』……本当にあんなのがマジ『資格者』なのかよ？」

ユナイマ「さあ…どうですかね。まあ、そのうち分かります」

よ。」

？「『あの方』が…呼びだ…だらだら話しないで…行くぞ二人とも…そうでなくても…時間が足りないんだ…。」

？「マジ分かってるよ！」

ユナイマ「ふふ…もうすぐですね。ふふ…。」

（天満は）

天満「何か久しぶりだあ…でも夜だ…。」

剣斗「くそう…にゆうの奴…最後まで忘れやがって…次会ったら覚えてろよ…くそう…。」

真雪「剣ちゃん…はは…。」

琴花「でも学校とかどうしよう？何ヶ月も…親にも…ああ…。」

シャウト「心配無い。時間はあの時から数時間くらいしか経っていない。」

琴花「ホントに！良かったあ…。」

剣斗「でも何でだ？」

シャウト「これだ。」



天満「デイクの羽？」

シャウト「ああ、これで時間を移動したんだ。」

真雪「便利ですね。」

シャウト「そうでもない。」

天満「羽が！灰になっていく！」

シャウト「役目を終えたんだ。」

剣斗「そうだったのか…。」

天満「またデイクに助けられたんだな…。」

シャウト「アハハ！……では剣斗に琴花…霊神具を預かるつか。」

剣斗「ああ…元気だな…ギルティ…。」

ギルティ「ああ…お前の信念…大したもんだったぜ剣斗！また来いよ！」

剣斗「へへ、じゃあ、ありがとうな！」

琴花「フーちゃん……今までありがとうね。」

フーディン「うん。僕こそ…楽しかったよ…ありがとう琴花。絶対また会いに来てね…。」

琴花「あは！約束するする！」

真雪「あの…シルフィアは？」

シャウト「大丈夫だ…ほら。」

シルフィア「貴方を守れなくてすみませんでした。」

真雪「ううん。あなたが無事で良かった。ネオスに捕まった時…あなたを取り上げられ、ずっと心配してたから。本当に無事で良かった…。」

シルフィア「ありがとうございます真雪。また会いましょうね。」

真雪「はい…必ず…。」

シャウト「…では天満。」

天満「ああ…シャウトも元気で。」

真雪「皆さん、お体に気を付けて下さいね。」

剣斗「またシャウトからも、会いに来てくれよな！ギルティもな！」

琴花「凄く楽しかったよ！フーちゃんも元気でね！」

シャウト「私も楽しかった。お前達は…私の大切な仲間だ。また会おう…必ず。」

天満「本当にありがとう。シャウト……俺……シャウトに会えて良かった！」

シャウト「天満……。」

天満「いろんなことを教えてもらったし、シャウトのお陰で、強くなれたよ！」

剣斗「そうだぜ！」

琴花「うんうん！」

真雪「その通りですよ！」

シャウト「ふふ……お前達……ではな……。」

剣斗「シャウト……サンキュ……。」

琴花「シャウト……それじゃね……。」

真雪「シャウトさん……ありがとうございました……。」

天満「シャウト……皆によろしく……ありがとう……。」

シャウト「ふふ……。」

剣斗「行っ た な……。」

天満「ああ……あ、朝日だ！」

琴花「綺麗じゃん！」

剣斗「俺達の世界も捨てたもんじゃないな！」

真雪「そうね。これからだよ！私達の世界も！」

天満「ああ……さて！帰るか！俺達にはやることが多いよ！」

琴花「そだね！それじゃ行くよ剣斗！」

剣斗「ああ！天満、真雪、また明日な！早く帰って寝たいぜ！」

琴花「あはは！それじゃ明日ね！」

天満「ああ！学校でな！」

真雪「学校でね！」

天満「じゃ行こう真雪！」

真雪「うん！」

（真雪の家に到着）

天満「じゃ真雪、今日はしっかり休めよ。」

真雪「うん……天くん！私達は…変われるよね？」

天満「当たり前だろ！俺達には明日があるんだ！必死で生きれば、  
変わるさ！」

真雪「そうだね……そうだね！天くんありがとう！また明日学校で  
ね！おやすみ天くん！」

天満「ああ！」

天満の語り「俺達は完璧じゃない。間違いを犯す。でも償える、や  
り直せる。大切な人を守りたい、その想いがあればきっと……いい  
明日を見つけることができるはずだ！だって、俺達は生きてるか  
ら、命が輝いているから！必ず成長できる明日を掴めるんだ！」

天満「ただいまっ！」

第一部・完

## 終劇『明日』（後書き）

これで『天と地』が終わりました。ですが、まだ解明されていない謎があつたり、怪しげな人物も出て来たりと、何やらまだ完結ではなさそうです。ということ、次は第二部として、全ての謎を明らかにするつもりです。どうかまだ続く天満達の物語を応援してやって下さい。天満の真実、アイズとサイガの苦悩、新たなキャラクタ―の想い、それぞれが絡みあつて、はつきり言つて泣けたりする物語になつてます。悲劇にも似た物語ですが、その中で必死に戦う天満達を楽しみにしてて下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6156d/>

---

『天と地』

2010年10月11日18時12分発行